

2016年度

加賀家文書における
アイヌ語の文献学的研究

千葉大学大学院
人文社会科学研究所
博士後期課程
深澤美香

はじめに

北海道の古いアイヌ語資料として加賀家文書の研究を始めたのは、筆者が北海道教育大学大学院の修士課程に在籍中のときであった。すぐ目移りしてしまう筆者のような学生が、それまであまり研究されてこなかったアイヌ語の文字資料とじっくり向き合えたのは、時代の流れと言ってよいのだと思う。筆者よりひとまわり上の世代くらいまでは、まだアイヌ語のインフォーマントから直接アイヌ語を聞き出し、それを記録・記述していくのが最優先であったかもしれない。しかし、今やもうアイヌ語の（言語学的な意味での）フィールドワークは極めて困難である。

アイヌ語の研究をしていると、アイヌ語の現状についてよく質問をされる。アイヌ語の研究者は、今もかろうじて古老から単語や短文を拾っていくことができること、先祖から伝えられていながらも記述されていないような言語情報が、比較的若い世代の人々にも残されていることがあるという点で、「(完全に) 不可能」とは言わない。実際、先祖の言葉を古記録から復元し伝承しようとするアイヌ子弟の、その内側から沸き起こる力を感じる時、「不可能」という否定的な言葉を出すことよりも、むしろ言語復興の可能性に視点を移すことが本質的な意味での言語状況なのではないかと感じることもある。

このような状況を外部の言語学者に説明すれば、アイヌ語のフィールドワークはもはや不可能と言うべきレベルだとみなされる。そのとき筆者は、アイヌ語やそれをとりまく様々な環境に感情移入しすぎていることを自戒し、一方で、「不可能」と言うことが誰に対する誰のための答えなのかと自問する。ユネスコが指定した「消滅の危機に瀕する言語」というタームを引用することも、フィールドワークは「極めて困難である」という文言に落ち着いてしまうことも、デリケートな状況に対する慎重な姿勢の現れであり、一種の弁解になってしまうがここで述べておきたい。

そのうえで確かに言えることは、アイヌ語の研究が、これまでに記録されたものの保存・整備・公開を考えていく時代へと変化しつつあるということである。日本語が文字資料に恵まれているのと同じように、アイヌ語は早い時期から録音機械が手に入りやすい環境にあったため音声資料が豊富に残っている希有な言語である。資料の保存・整備・公開にあたって、今なお実地調査は重要な位置を占めており、当時のことを知る人々によって記録にない部分を埋めていく作業、例えば、単語や短文を覚えている話者に対し、記録されている資料の調査確認を行うことは現在も続いている。

筆者が在籍する千葉大学では「アイヌ語の文献学的研究」というプロジェクト研究を2012年から行っており、2014年と2016年に報告書を刊行した。プロジェクト報告書の「序文」（中川 2014）にあるように、このプロジェクトの文献資料は文字資料だけを対象にしているわけではなく、音声資料をも合わせて「文献資料」としている。

本研究は近世の文字資料を主な研究対象としているが、この近世資料のアイヌ語を読み

解くためには、これまでに記録された現代アイヌ語の音声・文字資料とその研究が必要不可欠である。本論文の第 1 部は、加賀家文書を中心に据えた狭義の文献学的研究、第 2 部は現代アイヌ語の方言資料に加賀家文書の情報を入れた広義の文献学的研究となっている。

最後に少しだけ筆者が加賀家文書研究に至った背景と、関係する方々へ謝辞を述べたいと思う。筆者がアイヌ語を本格的に学び始めたのは、北海道教育大学旭川校の学部 4 年生だった頃である。当時の指導教官であった井筒勝信先生には、認知言語学の基礎と他言語の学び方を教わった。井筒研究室には筆者が所属する英語学ゼミと、アイヌ語を学ぶ談話語用論ゼミの二つがあり、学内にはアイヌ語教育に重心をおいたアイヌ語の学生サークルがあった。ゼミ生たちとは英語に加え、いわゆる「第二外国語」として様々な言語の自主的な勉強会を単発的に行っていたが、いつしか学生たちが横断的にアイヌ語の勉強会を行うようになり、そこに参加したのが筆者のアイヌ語学習の始まりである。

同大学の大学院修士課程に進学してからは、様々な理由により学内での自主的な勉強会やアイヌ語学習に対する風当たりが厳しくなっていたことから、アイヌ語勉強会の仲間と旭川アイヌ語研究会という市民サークルをたちあげて、学外でアイヌ語の研究を始めた。小樽教育地図研究会の平山裕人氏から加賀家文書の存在を教えてもらい、右も左もわからぬまま取り組んだ研究が幸いにも認められて千葉大学大学院に進学することを決意した。博士後期課程の院生としてアイヌ語研究を志した当初は、自らの実力のなさに落ち込むこともあったが、いつも遠くから応援してくれる旭川の古い仲間と、そこで積み重ねてきた経験が心の支えだった。本当に感謝している。

千葉大学大学院では、指導教官の中川裕先生に迎え入れていただき、中川研究室の OB・OG を含む諸先輩方にお世話になり、後輩にも恵まれ、アイヌ語を学び研究するのに最高の環境で、最高に贅沢な日々を過ごせた。ここで得た人との繋がりには大きな財産だと思う。学外でも、青山学院大学の遠藤光暁先生が主催する言語地理学の研究会において、そこに参加する諸先生方からよくご指導いただき、国立国語研究所のアイヌ語の研究会等では、アイヌ語研究の第一線で活躍する研究者の方々にご助言いただいた。本論文の第 2 部は、学外で得られた知見が強く反映されており、ここで一人ひとりお名前をあげて謝意を示したいが、きりがなくなってしまうので留めておくことをどうかお許し願いたい。

加賀家文書研究のなかでは、別海町郷土資料館の石渡一人氏に情報提供、資料閲覧等でお世話になった。加賀家文書の大部分の翻刻を担った故・秋葉実氏には、翻刻資料の使用を許可していただき、史料の読み方を教わった。秋葉氏がお元気なうちに博士論文にまとめられなかったことは悔やまれるが、この先もそのご功績に敬意を示しつつ加賀家文書の研究を進めていくことを誓いたい。

そして最後に、筆者が中学校教員になる道を外れ、アイヌ語研究のために北海道を離れることを理解してくれた父と母、我が子のように愛情を注いで育ててくれた亡き祖母、筆者の歩む道に対して一言も批判せず見守ってくれた弟と妹に心から感謝したい。

目次

はじめに	i
目次	iii
略号	vii
第1部	2
第1章 序論	3
1. 1. 研究背景	3
1. 2. 研究課題	3
1. 2. 1. 資料整備上の問題	3
1. 2. 2. 音素表記への取り組み	4
1. 2. 3. テキストの内容・由来に関する調査	4
1. 2. 4. アイヌ語の方言・歴史的研究	4
1. 3. 研究方法	5
1. 4. 本論文の構成	6
第2章 加賀伝蔵と加賀家文書について	7
2. 1. 加賀家文書について	7
2. 1. 1. 加賀家文書とは	7
2. 1. 2. アイヌ語資料に関する書誌情報	8
2. 1. 3. 先行研究	10
2. 2. 加賀家系譜と3代目伝蔵の生い立ち	11
2. 3. 蝦夷通辞とアイヌ語運用	14
2. 3. 1. 蝦夷通辞とは	14
2. 3. 2. 蝦夷通辞の心得とアイヌ語力	16
2. 4. 加賀家文書の方言的位置づけ	19
2. 4. 1. アイヌ語の方言について	19
2. 4. 2. 「アイヌ語根室方言」について	23
2. 4. 3. 先行研究	24
2. 4. 4. 言語地理学的研究からみた加賀家文書の特徴	25
2. 5. まとめ	28
第3章 加賀家文書のアイヌ語表記法	29
3. 1. アイヌ語表記と諸問題	29
3. 2. 先行研究	31
3. 3. ローマ字表記法	33

3. 3. 1. アイヌ語の音素と音節.....	33
3. 3. 2. 母音といわゆる半母音.....	34
3. 3. 3. 開音節：子音＋母音【CV】	38
3. 3. 4. 閉音節：母音＋子音【VC】／子音＋母音＋子音【CVC】	42
3. 3. 5. その他.....	46
3. 4. 伝蔵による表記の傾向.....	49
3. 4. 1. /tu/ や /to/ の表記.....	50
3. 4. 2. /ci/ の表記	52
3. 4. 3. 子音 /y/ およびアクセント核のない母音 /e/ や /i/ の表記.....	53
3. 4. 4. 長音の表記.....	55
3. 4. 5. 半濁点・濁点の表記.....	57
3. 4. 6. 音節末の子音の表記.....	63
3. 4. 7. 母音の /u/ と /o/ に関する表記	66
3. 4. 8. /cu/、/su/ および /sa/ の表記	67
3. 4. 9. その他.....	69
3. 5. まとめ	70
第4章 写本・類本の位置づけ.....	75
4. 1. 『藻汐草』	75
4. 2. 先行研究	77
4. 2. 1. 加賀家文書の『藻汐草』関連資料について.....	77
4. 2. 2. 金沢家文書の『藻汐草』関連資料について.....	78
4. 3. 部門の対応関係.....	80
4. 4. 語彙の対応関係.....	82
4. 4. 1. 三つのグループ.....	82
4. 4. 2. 第一グループの語彙.....	84
4. 4. 3. 第二グループの語彙.....	88
4. 4. 4. 第三グループの語彙.....	92
4. 4. 5. 写本と類本の判断基準に関する考察.....	95
4. 5. 方言的な特徴.....	98
4. 5. 1. 「父」と「母」	98
4. 5. 2. 「星」	99
4. 5. 3. 「寒い」	101
4. 6. まとめ：方言資料として活用するために.....	103
第5章 翻訳と実態	105
5. 1. アイヌ語と日本語.....	105
5. 1. 1. 音韻.....	105

5. 1. 2. 文法.....	107
5. 2. 歌詞のアイヌ語翻訳：音数を合わせる工夫.....	111
5. 2. 1. 「菊のかんざしみだれ髪」について.....	111
5. 2. 2. 「お吉清三」口説との関連.....	112
5. 2. 3. アイヌ語訳への音数意識.....	115
5. 3. 翻訳に関わる造語・借用語について.....	118
5. 3. 1. 先行研究と調査資料.....	118
5. 3. 2. 音訳・混種借用.....	125
5. 3. 3. 翻訳借用・造語.....	129
5. 3. 4. 助詞の借用・エラー.....	130
5. 4. 翻訳と推敲：直訳から意識へ.....	131
5. 4. 1. 「学校往来夷解書」について.....	131
5. 4. 2. テキスト変遷.....	132
5. 5. まとめ.....	140
第6章 加賀伝蔵のアイヌ語文法観.....	143
6. 1. はじめに.....	143
6. 2. 「現代アイヌ語」の人称表現.....	143
6. 3. 加賀家文書のアイヌ語語彙集における人称表現.....	145
6. 4. 加賀家文書のアイヌ語テキストにおける人称表現.....	146
6. 4. 1. ku系、ci系：一人称表現.....	147
6. 4. 2. e系、eci系：二人称表現.....	152
6. 4. 3. an系：いわゆる「四人称」形式.....	154
6. 5. まとめ.....	162
第7章 まとめ.....	164
第2部.....	167
第8章 親族語彙.....	169
8. 1. はじめに.....	169
8. 2. 先行研究.....	169
8. 3. 調査方法・資料.....	173
8. 4. 「父」と「母」を表す親族語彙.....	176
8. 4. 1. 近世文書にみる「父」と「母」.....	176
8. 4. 2. 「父」に関する呼称語と言及語.....	178
8. 4. 3. 「母」に関する呼称語と言及語.....	179
8. 5. まとめ.....	183
地図.....	184
第9章 疑問詞と不定代名詞.....	189

9. 1. はじめに	189
9. 2. アイヌ語の疑問詞および疑問詞疑問文について	189
9. 2. 1. 疑問詞の基準形	189
9. 2. 2. 疑問詞および疑問詞疑問文の統語的特徴	190
9. 2. 3. 沙流グループとそれ以外にわかれる疑問詞の地理的分布	191
9. 3. 疑問詞と不定表現	192
9. 3. 1. 疑問詞と不定表現の方言差	192
9. 3. 2. 類型論的な不定代名詞のタイプ	194
9. 3. 3. 問題の所在	196
9. 4. 通時的考察	197
9. 4. 1. 疑問詞語根 <i>hVm, hVn</i>	197
9. 4. 2. 疑問詞は無標か?	199
9. 4. 3. 残された問題—疑問詞疑問文に見られる結びの <i>an</i> との関係—	202
9. 5. まとめ	204
地図	205
第10章 疑似的な音対応	211
10. 1. はじめに	211
10. 2. 先行研究	211
10. 2. 1. <i>pa > ca</i>	211
10. 2. 2. <i>*Xa > ca/pa</i>	212
10. 2. 3. <i>ca > pa</i>	214
10. 2. 4. <i>*ca/ *pa</i> (弁別的な「口」を意味する形態素) <i>> ca/ pa</i>	216
10. 3. 「口」の意味拡張：メタファーとメトニミー	217
10. 4. / <i>ca/</i> と / <i>pa/</i> の地理的分布	219
10. 4. 1. 「口」と「からい」	220
10. 4. 2. 「唇」と「舌」	221
10. 4. 3. 「口」という概念の外側?	226
10. 5. まとめ	232
地図	234
付記	242
第11章 総括	247
図版目録	249
初出一覧	250
参考文献	252

略号

-	形態素境界
=	接語および人称接辞境界
[]	推定形
1/2/3/4	1/2/3/4 人称
A	他動詞主語標示
ABL	奪格
ABB	変格
ADV	副詞化辞
ALL	向格
APPL	充当態
C	子音
CAUS	使役
CLF	類別詞
COMP	補文標識
COP	コピュラ
DCM	談話標識
DESID	願望
DIM	指小辞
EMP	強調
EP	挿入子音
ERROR	書き誤り等のエラー
EXIST	存在動詞
IMP	命令
INDF	不定
INTR	自動詞 (0~1 項動詞)
IR	疑問
LOC	場所格
LOCR	位置名詞① [位置名詞]
LOCN	位置名詞② [場所名詞]
MID	中間態
NEG	否定副詞
O	目的語標示
P	被動作主
PART	位置名詞①の長形
PL	複数
POSS	所属形

PROH	禁止
Q	疑問（助詞）
REC	相互
REFL	再帰
S	自動詞主語標示
SELF	客体的自己
SG	単数
TR	他動詞（2~4 項動詞）
V	母音
VR	動詞化辞

《出典略称》

- 『萱野辞典』：萱野（2002）
- 『久保寺辞典稿』：久保寺（編）（1992）
- 『沙流方言辞典』：田村（1996）
- 『千歳方言辞典』：中川（1995）
- 『知里人間編』：知里（1975）
- 『知里動物編』：知里（1976）
- 『バチエラー辞典』：バチエラー（1938）
- 『方言辞典』：服部（編）（1960）

第 1 部

文献学的研究

—加賀家文書のアイヌ語を研究する—

第1章 序論

1. 1. 研究背景

本研究は、近世アイヌ語資料をアイヌ語の方言および歴史的研究として用いるための実践研究である。主な資料として、北海道別海町郷土資料館・加賀家文書館に保管されている「加賀家文書」（かがけもんじょ）を用いる。加賀家文書の執筆者は18世紀末および19世紀初頭より根室などで蝦夷通辞（アイヌ語通訳）として勤務していた加賀家の人々であり、この資料に記録されるアイヌ語はその地域の方言である可能性が指摘されてきた。根室地方のアイヌ語は現代アイヌ語の記録が皆無に等しく、加賀家文書がこの方言を解明する鍵となっている。

そもそもアイヌ語の「古文献」は日本語のそれに比べてはるかに新しいものを指し、主に17世紀～19世紀の江戸時代のアイヌ語資料が「古文献」と呼ばれている。例えば、現在知られる最古の日本語・アイヌ語語彙集は推定17世紀前半の『松前の言』である。これらは日本社会に伝わる文書類であることから、本研究では日本語の時代区分に従って「近世アイヌ語」という言葉を用いる。

近世アイヌ語の研究はアイヌ語の古文献研究とほぼ同義でありながら、学問的分野としては未だ確立されていない。古文献はアイヌ語の歴史を考える上で重要な情報源であるが、アイヌ語の非母語話者によって書かれたものであり、母語干渉をはじめ様々なノイズを取り除くという点で困難を極めるからである。今なお、アイヌ語研究といえば現代アイヌ語研究が主流であり、古文献によるアイヌ語研究は、これまで佐藤（2004, 2009b など）が単独で進めてきたような状況である。

1. 2. 研究課題

1. 2. 1. 資料整備上の問題

近世アイヌ語研究は基礎的な段階にあり、アイヌ語で書かれた資料は概して翻刻（くずし字を現代でも読めるように活字化する作業）がなされておらず、言語テキストとして活用するための整備方法が定まっていない。アイヌ語学では、ほとんど近世資料が活用されてこなかったために、それに関する知識や経験の少なさが学問的研究の困難さをまねいている。こうした問題に取り組むというのが、本研究の第一段階となる。

1. 2. 2. 音素表記への取り組み

翻刻（活字化）を終えてからの第二段階は、音素表記への取り組みを行うことである。アイヌ語は、北海道・樺太南部・千島列島に広がる言語であり、これらを三大方言とする。北海道方言は南西方言と北東方言に分かれ、沙流方言を代表とした南西方言に関する現代アイヌ語の記録が絶大な量を誇り、研究も進んでいる。しかし、一方の北東方言は相対的に不明な点が多い。加賀家文書のアイヌ語は、近世の頃のアイヌ語であり、未解明であるアイヌ語東部方言の形式を反映していると考えられる。さらに、アイヌ語非母語話者（日本語秋田方言話者）が独自のカタカナ表記で記録したものであって、例えば、アイヌ語の /ci/ という音素を表すのに「ツ」と「チ」のどちらのカタカナ表記も用いられるということがある。音素表記化にあたっては、カタカナ表記の傾向と現代アイヌ語において隣接する方言の音価、さらに日本語秋田方言の母語干渉を考慮し、慎重かつ大胆に進めていく必要がある。

1. 2. 3. テキストの内容・由来に関する調査

加賀家文書のアイヌ語資料に関しては翻刻や現代語訳が進められずにいたため、テキストの中身に関する研究も遅れていた。アイヌ語資料のなかには日本語をアイヌ語訳したテキストも多く含まれているのだが、アイヌ語訳をされた大元の文章が何であり、どのような経緯で訳されているのかという情報は大概が欠落している。実際にどのような文脈でこのアイヌ語が書かれているのかということを理解するためには、内容や由来に関わる文献研究も必要となり、これが研究の第三段階である。

1. 2. 4. アイヌ語の方言・歴史的研究

加賀家文書が、どこの方言を採録しているか、どこの方言と言えるのか、ということはいまでも何度か論じられてきた。池上 (1969 [2004: 195]) は、「いくつかの地方の方言は絶滅した。根室の方言もその一例である。しかし少なくとも三代にわたってその地でアイヌ語を使った和人加賀家には十八、九世紀にかけてのアイヌ語記録が保存されており、その記録にはその地方の方言がおそらく反映しているであろう」と述べ、佐藤 (2012a: 205-206) もこの池上の見解に同意を示している。とはいえ、加賀家文書の資料を総体的に研究したものというのではなく、実質的な研究がなされぬまま可能性だけが提示されてきたような状況である。加賀家文書の方言的特徴と、それをもとしたアイヌ語全体の歴史的变化に関する研究が最終的な研究課題である。

1. 3. 研究方法

本論文は、加賀家文書という資料に焦点をあてることで近世アイヌ語研究のひとつの実践例として、その方法論を提示するものである。上述した研究の第一段階において整備した資料をもとに、第二段階から第四段階までの研究について具体的な事例とともに提示し、論じていく。

具体的には、加賀家文書のアイヌ語資料中におけるアイヌ語カタカナ表記法の規則をまとめ、カタカナ表記から音素として推定される形式を提示する。本論文ではこれを「推定形」とし、いくつかの可能性が見られる場合は、方言差や語彙の歴史を踏まえた上でアイヌ語の事実に最も近い形を限りなく模索し、その形式に説明を与えようとする。これは佐藤 (2009b) が「古文獻に現れる形式に当たるものを現代のアイヌ語辞書類から探して引き当てる」ことを「既存の研究を無批判に寄せ集めているにすぎない」と指摘していることとは異なる立場である。また、本論文では、アイヌ語の方言的・歴史的な特徴について明らかにするために、中川 (1996) をはじめとする言語地理学的研究の手法を用いて分析を行う。

以下は本論文で対象としたテキストおよび語彙集の一覧である。本論文では調査・研究の目的ごとに対象とするテキストを定めており、その割り当ては本章 1.4 節で述べる。書誌の全体像は第 2 章に示し、テキストの詳細はそれらを扱った章ごとに再掲する。

底本 No.	テキスト名	写本数	底本丁数 ¹	テキスト内容	種別	備考	本論文で扱う章
51	蝦夷風俗図絵蝦夷語解説②	2	64 (1冊)	和人民間伝承	テキスト	※1	3章
31	菊のかんざしみだれ髪	2	12.5	和人口承文芸	テキスト		3, 5, 6, 8章
28	西松おその	1	20.5	和人口承文芸	テキスト		3章
28	囃子言葉	1	2	和人口承文芸	テキスト	※2	5章
31	野狐和歌	2	0.5	和歌 (伝蔵作)	テキスト		5章
40	学校往来夷解書	5	12.5 (1冊)	和人教訓書	テキスト	※3	3, 5, 6章
31	チャコルベ	2	12.5	アイヌ口承文芸	テキスト		3, 6章
49	藻汐草 [写]	1	105	日本語・アイヌ語辞典	語彙集	※4	3, 4, 6, 8章

¹ 0.5 は半丁分 (一ページ) を表す。

49	蝦夷語和解	1	20	日本語・アイヌ語辞典	語彙集	※5	3, 4, 6, 8章
95	アイヌ語解の歌	3	6.5	学習歌 (作者不明)	語彙集		6章
計		20	256				

表 1-1：本論文が研究対象としたアイヌ語資料一覧

※1:類本として2種確認されており、写本のひとつは函館市中央図書館に保管されている。

共紙表紙であり、丁数は表紙も含めたもの。

※2：この囃子言葉は「西松おその」の後に記載されている。

※3：共紙表紙であり、丁数は表紙も含めたもの。

※4：田中・佐々木 (1985 [佐々木 2013: 276]) によると、弘化二年の年記を持つ某氏本と、加賀家本の二本があるとされている。筆者（深澤）は某氏本について未見。

※5：「藻汐草 [写]」の前半から一部の語彙を抜き出し和解をつけたもの。

1. 4. 本論文の構成

本論文は第1部と第2部に分かれている。第1部は加賀家文書のアイヌ語資料に関する文献学的研究であり、第2部は、第1部の加賀家文書研究から得られた根室地方のアイヌ語を言語地理学研究に用いた事例研究である。

第1部の構成は、第2章で、先行研究をもとに執筆者である加賀伝蔵の生い立ちと加賀家文書中のアイヌ語資料や特徴に関して紹介する。第3章で、加賀家文書のアイヌ語カタカナ表記を音素表記化（ローマ字化）するための基礎的な研究を行う。第4章では、上原熊次郎が著した日本語・アイヌ語辞典『藻汐草』と、加賀家文書に見られる写本と類本、さらに根室の金沢家文書に見られる類本を比較し、加賀家文書や金沢家文書のような資料を方言資料として活用するための判断や方法を提示する。第5章では加賀伝蔵が翻訳したテキストを中心に、第6章は、語彙集とテキストの両面から加賀伝蔵の文法観について分析し、加賀伝蔵のアイヌ語に見られる日本語の母語干渉と当時のアイヌ語の実態について検討する。

第2部の事例研究は、第8章で「父」と「母」、第9章で疑問詞と不定代名詞、第10章で ca と pa の疑似的な音対応について、語彙の地理的な分布によってその歴史的変遷を考察する。

第2章 加賀伝蔵と加賀家文書について

—研究小史

本章では、加賀家文書のアイヌ語資料とその研究史を概観し、執筆者である加賀伝蔵の生い立ちやそこから見た資料の方言的特徴等についてまとめる。

2. 1. 加賀家文書について

2. 1. 1. 加賀家文書とは

加賀家文書とは、蝦夷地の場所請負人の用人として働いていた秋田県（八峰町）八森の加賀家の人々が記録し、代々受け継がれてきた資料のことである。この文書の殆どは、ノツケ（現在の北海道別海町）などで蝦夷通辞として活躍した3代目加賀伝蔵（かがでんぞう）が書き残したものとされている。日本語とアイヌ語の通訳や翻訳をするのが蝦夷通辞の仕事であることから、彼が書き残したアイヌ語は当時の北海道東部方言の記録として大変貴重なものと考えられている（詳しくは後の節で述べる）。

この文書は、1964年に北海道史編集所編集員の永田富智氏が目録を作成し、それをもとに、1974年、北海道立図書館がマイクロフィルムに収録。1980年には、別海町教育委員会によってマイクロフィルムの複製が行われ、その後の1998年に、加賀家7代目の加賀実留男氏によって、別海町に加賀家文書の原資料が寄贈・寄託されることとなる。そして、その2年後の2000年7月、このような重要な資料を保管・研究・展示・公開するために、「加賀家文書館」が別海町郷土資料館の附属施設として誕生。現在はこの施設が加賀家文書研究の拠点となっている（別海町郷土資料館 2001a, 2012, 2014, 2015a など）。

前述のマイクロフィルム化された資料については、その殆ど全てが秋葉実氏の手によって翻刻され、翻刻活字版『加賀家文書』（別海町教育委員会 1989）と『北方史料集成 第二巻』（秋葉（編）1989）に収められている。発行元は異なるが、内容は同一である。現代語訳では、戸田峰雄氏による『加賀家文書現代語訳版（全5巻）』（別海町教育委員会 2001b, 2002-2005）と石渡一人氏による『加賀家文書二』（2015b）が既に刊行されている。しかし、公刊されたものはいずれもアイヌ語資料を一部の掲載に留めており、未だ多くの人が加賀家文書のアイヌ語資料にアクセスし難い状況となっている。

2. 1. 2. アイヌ語資料に関する書誌情報

別海町へ寄託された文書資料 2,537 件中、「K3-アイヌ語関係」に分類されている資料は 16 件（数字は、別海町郷土資料館 2012, 2014）、写真枚数にして 839 枚（見開きで 1 枚、表紙込み。遊び紙は除く）を数える。表 2-1 は、「K3-アイヌ語関係」に分類されている 16 件および、「K4-日記・紀行・物語」1 件（資料番号 51）の書誌情報をリスト化したものである。内容に関しては全てを載せていないが、本論文が研究対象としたテキストに関しては記してある（第 1 章の表 1-1 を参照）。

資料番号	資料名	作成者	年代：西暦	数量	計測値(cm)	写真枚数 ¹
21	五倫名義解	伝蔵	(文久二年～慶応三年：1862-1867)	1冊	24×17	22
26	[和文・アイヌ語解] 内容： [野狐和歌] [学校往来夷解書]	伝蔵	(安政元年～：1854-)	1冊	24.8 ×17.8	36
28	[蝦夷風俗図絵蝦夷語解説①] 内容： 菊のかんざしみだれ髪 チャコルベ [酉松おその] [囃子言葉]	伝蔵	?	1冊	24.7 ×17.3	75
31	御手本 内容： [野狐和歌] [アイヌ語解の歌] 菊のかんざしみだれ髪 チャコルベ	伝蔵	弘化年間～文久三年八月：1844-1863	1冊	25 ×17.5	132
32	[蝦夷地諸申渡]	?	?	1冊	24.5 ×17.3	35

¹ 筆者（深澤）が原本と照らし合わせて撮り忘れや重複を確認した後の枚数。ただし、資料番号 39 番のみ原本不明のため未確認。

33	蛮貊邦人言	?	天保四歳巳二月： 1833	1冊	24.7 ×18.1	58
34	御通行蝦夷語 内容： [学校往来夷解書]	伝蔵	?	1冊	24.5 ×16.6	19
35	[シベツ名主宅蔵申 口] 内容： [学校往来夷解書]	伝蔵	?	1冊	24.5 ×17	17
38	イロハ蝦夷言 内容： [アイヌ語解の歌]	?	文化年間	1冊	24.5 ×17.2	125
39	役土人申上和解書扣 上	伝蔵	安政七申年閏三 月：1860	1冊	24.5 ×17	22
40	学校往来夷解書上 内容： 学校往来夷解書	伝蔵	(万延元年～： 1860-)	1冊	14.5 ×19.5	13
48	天保十五年辰口六月 来 商売コラウユケ トバ往来	伝蔵	慶応元年～慶応四 年：1865-1868	1冊	14 ×19.5	52
49	蝦夷方言 藻汐草 [写] 内容： 藻汐草 [写] [蝦夷語和解]	伝蔵	?	1冊	14×19	138
51	蝦夷風俗図絵蝦夷語 解説② 内容： 蝦夷風俗図絵蝦夷 語解説②	伝蔵	?	1冊	14.5×21	65
95	土人イタツチャラル カン 内容：	?	?	1冊	24.5 ×17.4	79

	[アイヌ語解の歌]					
371	[学校往来夷解書 上] 内容： [学校往来夷解書]	伝蔵	?	1冊	29 ×18.5	10
372	[本家親父方へ書簡 外]	?	?	1冊	14.5 ×19.5	7

表 2-1：加賀家文書のアイヌ語資料に関する書誌情報²

これら 17 件の作成者のうち 5 件は不明であるが、筆跡から判断する限り伝蔵である可能性は高い。ただし、書簡の写しなどについて言えば、その多くが伝蔵に宛てられたものであるから、著者（＝差出人）は別にいることも勿論ある。例えば北海道の名付け親として知られる探検家・松浦武四郎と交友があったのは有名で、松浦武四郎が伝蔵に宛てたものは「松浦武四郎往返書簡」として秋葉（2001, 2003, 2004a, b, 2005a, b）が翻刻したものが数点ある。内容は、語彙集、地名解、アイヌの口承文芸、申渡、書簡、教訓書、和人の民間伝承、和人の口説節や和歌などをアイヌ語訳したもの等と多岐にわたっており、概ねアイヌ語と和文が併記されている。

2. 1. 3. 先行研究

加賀家文書が初めて紹介されたのは、1931年9月10日の小樽新聞「北海道の研究資料古文献（庁立小樽商業学校阿部勘之助）」であると言われている。しかし、実はそのわずか3ヶ月前の6月1日に、『秋田叢書』の編纂に従事した深澤多市が『蝦夷往来』という雑誌に短報を載せている。深澤多市（1931 [1972]: 35）は、「アイヌ文献及遺物を観るの記」という題で加賀家文書を紹介した。その評価は高く、伝蔵を「此の人は長寿者であり且書及画を能くして又非凡の勉強家であったから其の記録の豊富なること蒐集の多量なることも当然である」と称え、加賀家文書について「まさに現代アイヌ研究者にとりて稀有の参考たるべきことは保証して差支えない所である」とも述べている。

歴史研究者の間では以前から注目されてきた史料であったようで、次のように高く評価されている。

同時代の記録としては、松浦武四郎の日記類は非常に詳しく、数度の調査によっているのでその場所場所における変化をみる場合など大変参考になる。しかし、この『加賀家文書』は伝蔵が現地に通辞として住んでいたという点では、何にも代えがたい貴重な記録類である。【中略】場所場所にこのような通辞はいたのであるが、これほど史

² 別海町郷土資料館（2012）を元に深澤が作成した。

料を残した通辞の例は、今のところ知られていない。その意味では、ネモロ場所周辺の文書というにとどまらず、蝦夷通辞の役割を考える上でも、このうえない史料と位置づけることができよう。(川上 1991: 53-54)

加賀家文書のアイヌ語資料に焦点を当てた研究としては、

- ・加賀康三 (1932) 「おきつ清三戀の夜嵐」について『蝦夷往来』第8号.
- ・浅井亨 (1972) 「加賀屋文書の中のチャコルベ」『北方文化研究』第6号.
- ・佐藤知己 (2005) 「申渡」のアイヌ語訳文に関する一考察『北海道立アイヌ民族研究センター研究紀要』第11号.
- ・旭川アイヌ語研究会 (編) (2011) 『アイヌ語別海地方資料集成』小樽教育地図研究会.

などが挙げられる (出版年順)。金田一京助は加賀家文書を見に秋田まで足を運んだそうだが、研究には至らなかった。浅井亨も、「チャコルベ」というアイヌの口承文芸に関する資料を取り上げたきりで、加賀家文書のアイヌ語研究はやめてしまっている。

加賀家文書に限ったことではないが、近世のアイヌ語に関する言語学的な研究というのは全体数が少ない。近世のアイヌ語資料は、日本語の母語干渉を強く受けたアイヌ語の記録であるから色々と不完全な記述もあり、アイヌ語をカタカナで表記することに付随する問題も生じている (詳しくは第3章 3.1 節「アイヌ語表記と諸問題」で述べる)。読み解くための労力や時間に見合った価値が見出せなければ、とりあえず後回しにされてしまうということもあったろう。

近年に入り、成田 (1977a, b, 1985b, 1986, 1988b, 1991) によって『近世の蝦夷語彙』シリーズ (I~VI) が私家版で刊行され、近世の語彙集類が活字となり、五十音順で参照できるようになった。さらに田中・佐々木 (1985)、田中 (1989a, b)、成田 (1985a, 1988a) によって近世アイヌ語の音素表記の整理が試みられ、また佐藤 (2004, 2009b など) によって近世アイヌ語資料が言語学的に検討されるようになった。以上のような翻刻や分析は、筆者の加賀家文書研究の土台となっている。

2. 2. 加賀家系譜と3代目伝蔵の生い立ち

加賀家口伝では、加賀家の初代徳兵衛は加賀の国 (現、石川県) の出身で、蝦夷地を目指して船出したが途中で時化に遭い、八森 (現、秋田県八峰町八森) の海岸に漂着し、宮崎長八に助けられた。その後、宮崎長八の娘と結婚し、八森に居を構え再び蝦夷地を目指したということである。初代徳兵衛が加賀の国の出身なので、加賀姓を名乗ったと言われている。加賀家系譜については、表 2-2 にまとめる。

初代	徳兵衛 <small>とくべゑ</small>	-1835	詳細は不明。
二代	鉄蔵 <small>てつぞう</small>	1792-1880	初代徳兵衛の長男。根室場所の支配人代、通辞などを務める。万延年間頃まで蝦夷地で務めたようであるが詳細は不明。
三代	伝蔵 <small>でんぞう</small>	1804-1874	徳兵衛の次男。加賀家文書の大部分を執筆。
四代	常蔵 <small>つねぞう</small>	1833-1914	伝蔵の長男。子モロ場所で勤務。
五代	恒吉 <small>つねきち</small>	1859-1924	常蔵の次男。秋田県の八森で農業を営む。
六代	康三 <small>こうぞう</small>	1905-1985	恒吉の四男。秋田県で勤務。
七代	實留男 <small>みゑるお</small>	1930-	康三の長男。秋田県で勤務。

表 2-2 : 加賀家系譜³

加賀伝蔵は、1804年に秋田の八森で生まれ、加賀家の三代目として蝦夷通辞などとして働き、加賀家文書の大部分を執筆した重要人物である。伝蔵については、会津藩士である一ノ瀬紀一郎が『北邊要話』に書き留めた有名な一節がある。

畑は全て番屋近辺に開き、和人の食料に充てている。中でも、野付の土地では野菜が多くとれる。この地は砂浜で地力はあまりよくないが、伝蔵という番人（伝蔵は秋田の生まれで、藤野喜兵衛のお抱え番人のひとりであり、蝦夷通辞である。この者がいつも人に語るには「我、蝦夷全州墾關の祖とならん」と。一奇人なり。）が開墾に努め、近年は野付湾内の近辺から土を運び、畑を開いた⁴。

また、加賀家文書のなかには、伝蔵が自身の略歴を書いたものも残されている。

…私は文政元寅（1818）に釧路場所へ参るや否や会所の飯炊きを言い付けられて勤めて居た頃、その時はメンカクシ・ムンケケの両人はおよそ26、7歳⁵の年頃でした。しかし、メンカクシはもっと年増にみえました。又、並小使のイラトカ、アイヌのコリタこの二人とも私の親しい者たちでした。中でもメンカクシ・ムンケケの二人は会所定詰の小使であったので、最初から3年間は和夷の差別もなく親しく日々を過ごしましたので、先ずアイヌ語の稽古の為、彼らなりの按配を聞き覚え、特にチャランケでの掛け合いことば等に一通り心に掛け、幾つかの言い伝えを聞きましたが、西別川並びにその上流のことで、釧路と根室のアイヌたちがごたごたしたことは一切聞きま

³ 別海町郷土資料館（2001a, 2012, 2014）を元に深澤が作成した。

⁴ 翻刻は秋葉（1989: 13）、現代語訳は別海町郷土資料館（2001b: 26-27）を参考にし、筆者（深澤）が再び現代語訳化した。

⁵ 『加賀家文書現代語訳版第四巻』（別海町郷土資料館 2004: 267）の注によれば、この時メンカクシは11歳、ムンケケは15歳とある。

せんでした。

【中略】

尚又、飯炊きから蔵回り、帳場手伝いを兼ねたり、あるいは仙鳳趾番屋守、又は尺別止宿守になるまで彼は 9 か年かかり、それから吉蔵支配人の時に会所へ引き上げられ、仮帳役を勤めました。

「五十二、[ニシベツ一件に付申上] (伝蔵略歴)」⁶

伝蔵が習ったとされるメンカクシやムンケケは釧路アイヌであったことから、伝蔵はアイヌ語釧路方言を最初に習ったということになる。親しかったとされるイラトカについては不明だが、コリタはメンカクシの兄でやはり釧路アイヌであった。伝蔵が釧路にいた頃は、兄の鉄蔵が根室場所で蝦夷通辞をしていたが、天保年間 (1830-1843) には、伝蔵は根室場所へ移り、野付に住んで兄の代わりに蝦夷通辞として活躍することになる。シベツ (標津) が会津藩の領地になってからは、1860 年に大通辞の称号が与えられ、1862 年には支配人に取り立てられて、開拓使時代まで勤務した後、1874 年八森で亡くなったということである。

表 2-3 と図 2-1 は伝蔵の略歴と勤務地の地点である。表 2-1 の書誌情報と照らし合わせてみると、釧路場所時代のもので推定される資料 1 件 (『イロハ蝦夷言』) を除いてほぼ全てが、野付や標津で勤務していた時代に書かれたものと考えられる。特に申渡の類は、野付で通辞として働いていた時の写しが多いようである。従って、資料の成立時期から推測すれば、加賀家文書のアイヌ語は、野付半島を中心とする近隣諸方言に影響を受けているということになるだろう。これについては後の節で再び検討する。

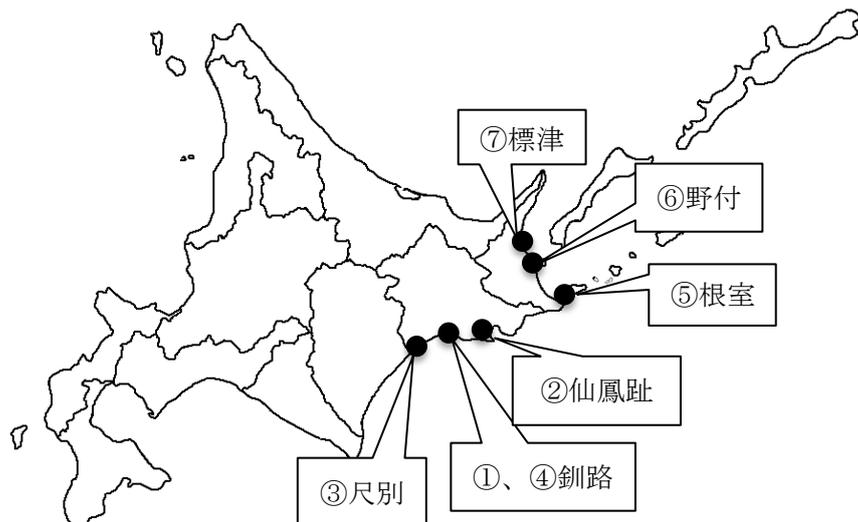


図 2-1 : 伝蔵の勤務地 (数字は移動順)

⁶ 別海町郷土資料館 (2004: 267) より引用。

文化元年 (1804)	羽後八森で生まれる
文政元年 (1818)	蝦夷地へ下る (15 歳) 釧路場所で飯炊き・蔵回り・帳場手伝い 仙鳳趾番屋守 尺別止宿守
文政十年 (1827)	釧路場所会所仮帳役 (24 歳)
天保年間 (1830-1843)	根室場所に移る (27 歳) 野付に住まいし通辞役
万延元年 (1860)	標津場所大通辞 (57 歳)
文久二年 (1862)	標津場所支配人 (59 歳) 明治初期まで標津にて勤務
明治七年 (1874)	秋田県八森村で死去 (71 歳)

表 2-3 : 伝蔵略歴⁷

2. 3. 蝦夷通辞とアイヌ語運用

2. 3. 1. 蝦夷通辞とは

江戸時代、日本には「四つの口」として長崎（オランダと中国）、対馬（朝鮮）、薩摩（琉球）、松前（蝦夷地）があった。そこで活躍したのが通詞（通辞）という役職である。木村 (2012: 2) は、「通詞とは、文字通り「詞を通じる」ために必要な人々である。だが、彼らは決して、「通訳」ではなかった。確かに、通訳という仕事もしたが、彼らはある時は翻訳者であり、ある時は商人であり、ある時は学者でもあるという多彩な側面を有していた。今日のプロの通訳と比べると、扱う範囲が大きかったと言える」と述べているが、彼らの仕事の多彩さには驚くものがある。

阿蘭陀通詞（おらんだつうじ）の研究は比較的進んでおり、蝦夷地で働く「蝦夷通辞」（えぞつうじ）にも類似する面がある。例えば、阿蘭陀通詞が置かれた背景には、「キリスト教の布教と密貿易を未然に防ぐために、オランダ商館長カピタンの一年交替を厳命、他の商館員の滞在も短期間に抑え、オランダ人に日本語を習得させない方策がとられることとなった」（片桐 2016: 22）とあるが、これと同様に松前藩の支配政策では、アイヌの人々に日本語の習得を制限し、蝦夷通辞を介してのみその声を幕府に直接伝えられるようにしていた（佐々木 1990）。松方 (2010: 245) も「通詞を含む長崎の当局が、自らの独占的な権益を守るために日本語を教えなかった」ことや、「公式の場面での日本語の使用阻止は、通詞を介さないオランダ人からの訴願を不可能にし、あらゆる場面での競争原理の排除による、長崎当局からの独占価格の押し付けを意味していた」ことは、蝦夷通辞と類似点が強く興

⁷ 別海町郷土資料館 (2012: 26) から体裁を一部変更して引用した。

味深いと指摘する。

「蝦夷通辞」については、佐々木 (1989 [2013]) の「蝦夷通詞について」という論考が詳しいので、これに沿って見ていくことにする。尚、本論文では別海町郷土資料館 (2001a, 2012, 2014 など) に従い基本的には「蝦夷通辞」という用語を使用するが、これは佐々木が「蝦夷通詞」と書くものと同一である。史料中では「通事」や「訳人」等と書かれている場合もあり、佐々木 (1989 [2013: 226]) はこれらの用語について「蝦夷地に関する史料中で「蝦夷通詞」の語が用いられる例は多くはなく、【中略】本来通訳を指す言葉であるからどれを用いても差し支えないが、上述のオランダ通詞や唐通詞などとの混乱を避けるためにも「蝦夷」の語を冠して用いるのが好ましい」と整理しており、筆者もこの立場に同意を示すものとする。

「蝦夷通辞」に関する研究は非常に少なく、未だその全貌は明らかとなっていないが、以下の①や②のように理解されてきた。

- ①「蝦夷地にあつて、交易もしくは支配の目的で、アイヌとシャモとの間をアイヌ語を用いて通訳の業を行うもの」 (佐々木 1989 [2013: 226])
- ②「北海道では武士階級の支配政策上アイヌが日本語を使用することを禁じていたので、奉公所や場所請負制の下での商人たちの雇った通訳が通辞と呼ばれていた」 (『北海道大百科事典下巻』1981: 115)⁸

ただし、一口に片付けられるような話ではなく、佐々木 (1989 [2013: 230-232]) が指摘していることを取り上げるなら、上記のほかに③や④のような記録もある。

- ③通辞にも上通辞、下通辞、通辞見習などの別があつたらしいこと⁹
- ④支配が通辞を兼ねる場合も間々あり、請負人が支配と通辞をも兼ねるといふこともあつた

④でいうところの「通辞」に関して、佐々木 (1989 [2013: 233]) は「オムシャの際の申渡書朗読のような公式の場合のみの存在ではなかつたろうか。日常の雑事には番人などが対応していたのであろう」とも述べており、いわゆる専門職ではない通辞の存在を指摘している。

アイヌ語と日本語は異なる言語体系をもっており、それぞれが孤立言語でもある。阿蘭陀通詞には、かつてポルトガル語の通詞だった人達が、ポルトガル船の来航禁止によって

⁸ 見出しは「通辞」で、執筆担当者は浅井享である。

⁹ 佐々木 (1989 [2013: 230]) は『寛政蝦夷乱取調日記』の記録から、「乙名との正式な交渉事には通辞(上通辞)があたり、下交渉には下通辞が担当していたものと思われる」、「しかし、この下通辞が「通辞見習」と同義であるとは考えられず、松前藩にとってこれらはいくまでも臨時の職であつたとみえ……」などという見解を述べている。

阿蘭陀通詞に編入されたということもあった。移行期には「ポルトガル語で通訳するオランダ通詞」もかなりいたと想定されている（木村 2012: 8-10）。さらに、文化5年（1808）のフェートン号事件の後、阿蘭陀通詞にロシア語や英語を修行するよう幕府から命令が出たという例もあり（木村 2012: 36-37）、これらは同じインド・ヨーロッパ語族であるという点で、ある程度対応が可能だったからであろうと推察される。しかし、蝦夷通辞に関して、語学に長けているなど個人レベルではそのようなことがあったかもしれないが、阿蘭陀通詞のように全体として大きな動きがあったとは今のところ考えられない。

また、阿蘭陀通詞や唐通詞には家業試験があり、また学習の順序や教材もある程度確立されていたようであるので（木村 2012: 25-32）、そこそこのレベルが保証されていたらしいということもわかっている。一方の蝦夷通辞はというと、家業試験があったという記録はいまのところ加賀家文書にはなく、学習教材も（後で触れる『藻汐草』という日本語・アイヌ語辞典以外）それほど確立されていなかったように見える。それに加えて、佐々木（1989 [2013: 233]）が指摘するように場所の請負人や番人までもが通辞役を兼ねるということもあって、阿蘭陀通詞と比較すれば、まさに「尋常ではない」状態だったろうと考えられる。

2. 3. 2. 蝦夷通辞の心得とアイヌ語力

佐々木（1989 [2013]）は、加賀家文書の「[宮内喜太右衛門書簡]」という資料を引用して、蝦夷通辞のアイヌ語に対する心構えについても検証している。この書簡は蝦夷通辞の心境や人間関係が見える資料でもあるので、佐々木が翻刻した『蛮貊邦人言』（資料番号 33）所収の写しではなく、より年代が古い『イロハ蝦夷言』（資料番号 38）¹⁰ を底本とし、本論文でもう一度取り上げることにする。

蝦夷言の義、全定無之ものなり。

（アイヌ語は、総て定められているわけではないのである。）

天地草木魚虫、其名東西海浜山中、所々皆別々也。

（天地、草木、魚虫の名は東西、海浜、山中によって、それぞれ皆違いがある。）

勿論男女の言ニおみてをや。

（勿論、男女の言葉においては云うまでもなく、）

皆異也故ニ書記ニ不及。

（皆異なるが故に書き記すことができない。）

藻塩草ト云先生の秘書ニも誤り間々見得候。

（『藻塩草』という先生の秘書にも誤りが時々見られる。）

必々自慢の心を発べからず。

¹⁰ 『イロハ蝦夷言』記載のものについては、翻刻が秋葉（1989: 229）、現代語訳が別海町郷土資料館（2003: 14-15）に収録されているため、これらを参考に筆者（深澤）が編集した。

(決して自慢しようと思わないように。)

時宜ニ応し手真似足真似之拙者、笑事なかれ。

(その時に応じて手真似足真似の私を笑ってはいけない。)

乍併、任望不能詞退ニ平言ニて申伸候。①

(しかしながら、望みに任せて言葉が不適切にならないよう日常語で述べます。)

第一、申渡は大切之儀故、

(第一、「申渡」は大切なことなので、)

制札表之通諸人之見得安如くいろは書ニて、

(「制札」の通り多くの人が見やすいように「いろは書き」で、)

蝦夷言も其如く(平言)、端々のもの迄も聞得ルよふに

(アイヌ語もそのように(日常語・簡単なことばで)、端々の人までも分かるように、)
通弁肝要と御心得可被成候。

(通訳することとお心得くださいませ。)

是は光年広瀬何某より伝授。②

(これは先年、広瀬何某から伝授されました。)

【中略】

九月廿七日

宮内喜太右衛門

米屋 伝蔵様¹¹

(『イロハ蝦夷言』16丁表 - 17丁表；下線部は筆者(深澤)による)

『蛮貊邦人言』記載の文章は下線部①と②の部分が異なるため、次も参照してほしい。

①乍併、唯口先而已ニてハ、三度が三度に言葉違ひまゝ有し故、

(しかしながら、ただ口先のみでは三度が三度言葉が違う状態であるので、)

世人のあざけるをもちひり見ず、

(世間の人々が嘲るのも恥じらわず、)

任我気ニ之ヲ書記申候。

(自らに任せる気持ちでこれを書き記し申すのです。)

扱、此内ニいろ／＼の申渡の真似などを加ひし候得とも

(さて、このうちに色々な申渡の真似などを加えましたが)

(『蛮貊邦人言』5丁表、裏)

¹¹ 米屋の屋号については、別海町郷土資料館(2003:13)で次のように説明されている。「米屋というのは米屋孫兵衛のことで、寛政年中から釧路・白糠の両場所を請け負っていた請負人である。文政年間に入り、二年、四年、六年、八年と釧路場所を請け負い、文政五年、天保年間には更に漁場を開いていった」。

②是は先年宮内何某大先生より伝授しとなん。

(これは先年、宮内何某大先生から伝授されたと言う。)

(『蛮貊邦人言』5丁裏)

『蛮貊邦人言』の場合、この「[宮内喜太右衛門書簡]」に関する文章の直後にアイヌ語の文章が40丁以上にわたって記載されている。つまり、①がこのように書き換えられているのは、この心得が『蛮貊邦人言』の序文のような性質を兼ねているためであり、いわば体裁の問題であろう。

さて、この書簡の大まかな内容をまとめると次のようになる。

1. 天地、草木、魚虫の名はところによって方言差があること。
2. 言葉に男女差があること。
3. 上原熊次郎の『藻汐草』¹²にも誤りが時々見られること。
4. 申渡は特に重要なので、日本語・アイヌ語ともに平言(日常語・簡単なことば)で誰にでもわかるように書き、また通訳すること。

『イロハ蝦夷言』の②に見られる広瀬何某というのは、広瀬三右衛門のこのようで、彼と宮内喜太右衛門は、能登屋円吉の『蝦夷記』に名前が見つかる。この二人は上原熊次郎を筆頭として、その時代に活躍していた通辞であって、伝蔵から見れば先輩通辞にあたると思われる。『蛮貊邦人言』の著者が伝蔵であるという確証はないが、少なくとも広瀬三右衛門→宮内喜太右衛門→加賀伝蔵と伝承されてきたということまでは言えるだろう。

この心得には幾分通辞としてのプライドのようなものが滲み出ていると筆者は考えている。モンベツ場所の円吉は番人であり通辞ではなかったけれども、彼も同じく著書である『蝦夷記』の中でオショロやシャコタンの通辞批判をしている¹³。彼らのプライドというのは、アイヌ語の正確さを期することから始まっているはずである。とはいえ、批判する側のほうがアイヌ語に長けていたかというのは(仮にそれが的を射た批判であったとしても)、我々はそこだけを切り取って見ることしかできていないのであり、とどのつまり誰もわからない。

浅井亨は、加賀家文書のアイヌ語解読を試みた言語学者の一人であるが、『北海道大百科事典下巻』の「通辞 つうじ」という見出しには、それによる氏の見解が盛り込まれている。

著名な通辞として文化年間に松前奉行所にいた上原熊次郎や山田久右衛門などがいる

¹² 『藻汐草』は最古の日本語・アイヌ語辞典である。

¹³ 坂田(2003)、佐々木(1989[2013])によって取り上げられている。

が語学力には疑問がある。むしろ能登屋円吉や根室会所で土地改良も手がけていた加賀屋伝蔵などの方が評価できそうである。

(『北海道大百科事典下巻』1981:115)

佐々木 (1989 [2013: 236]) も「浅井氏のこの指摘は重要である」と述べ、同様に伝蔵のアイヌ語に評価を下している。前述したように、蝦夷通辞には家業試験があったというわけではなさそうなので、加賀家の人々の専門職としての意識が、アイヌ語の運用能力という面でも比較的信頼がおけるものとなっていた可能性はある。

また、蝦夷地を探検した松浦武四郎が、伝蔵を役人として高く評価していたことも知られている。

武四郎は弘化2年シレット岬への往復に【伝蔵と】遭っていたと思われるが、日誌に記述はない。この安政5年野帳『午十五手控』の中で、全場所三役の五段階評価を行っているが、伝蔵は14人を数えるだけの「上」に評価しており、武四郎が帰府してからも、場所三役の中では只一人伝蔵との交誼が続くことになる。

(秋葉 2001:7)

広瀬と宮内も含めて、ここで名前が挙げられているような通辞たちの「語学力」はそう簡単に比較できるようなものではないが、高木は風に妬まれるという意味でひとつ確実に言えるのは、上原熊次郎は通辞のなかでも別格で、他の腕利きの通辞たちも熊次郎を無視できなかったということである。伝蔵が自らの言葉で熊次郎を批判したものを筆者はまだ見ないが、彼もまた『藻汐草』を写した者の一人である(資料番号49)。先行研究があるのと無いのでは話が違ふのであり、たとえ伝蔵の評価が高まろうとも、熊次郎が非凡な人であったということは変わらない。

2. 4. 加賀家文書の方言的位置づけ

2. 4. 1. アイヌ語の方言について

アイヌ語は、樺太(サハリン)島の南部、千島列島および日本列島の北海道と本州北部に広がる言語である(図2-2)。本州のアイヌ語については地名が残っている程度で詳しいことがよくわかっておらず、アイヌ語の方言は、樺太、北千島、北海道の三つの方言に大別されるということで、金田一(1932)の頃から示唆されてきた。これは現在も一般的な理解として定着している。また、北海道では南西と北東で方言差があるということもよく知られており、南西方言や北東方言などと呼ばれることがある。しかし、アイヌ語の特に北海道方言に関する方言区分は未だ不明な点も多く、様々な議論がなされているのも事実で

ある。これについては Nakagawa & Fukazawa (近刊) で広く詳細に論じたのでここでは深入りしないが、加賀家文書がアイヌ語の方言研究に与える可能性とその位置づけについてごく簡単に紹介する。

アイヌ語の方言研究は、1955年～1956年における服部四郎と知里真志保をはじめとする大規模な調査が始まりであった。1955年4月の調査は、Swadesh の基礎語彙調査票¹⁴ を中心としたもので、アイヌ語諸方言の「言語年代学」的調査を目的としていた。服部と知里が北海道を約25日間(14方言)で調査し、その後『アイヌ語方言辞典』編纂をめざすべく、1955年夏からは田村すず子などの協力者を増やして分担して各地を巡った(服部 1999)。結果として19の方言¹⁵ の調査を行い、その結果をまとめた論文が服部・知里(1960)の「アイヌ語諸方言の基礎統計学的研究」である。これは、質的にも量的にも優れたものであり、後にも先にもないほどの貴重な方言資料となっている。さらに1964年には、服部が編者となって『アイヌ語方言辞典』が編纂された。この辞典に収録された方言は、19方言から10方言¹⁶ に絞られ、そのうち「千島方言」のデータとして鳥居(1903)の『千島アイヌ』を引用している。



図 2-2 : 北海道、樺太、千島列島の位置

¹⁴ 服部・知里(1960)の基礎語彙は Swadesh のリストに凡そ従っており、Swadesh が重要とした 100 語は全て含まれている。しかし、それを除く 107 語のうち以下の 17 語は省かれている: some, animal, forest, stick, to spit, to breathe, to laugh, to fight, to hunt, to scratch, to turn, to wipe, to count, to play, to float, and, because。不足分の 10 語として加えられたのは次のとおり: arm, lip, fur, navel, saliva, milk, dark, down, up, ripe (Nakagawa & Fukazawa 近刊)。

¹⁵ 後に示す図 2-3 の地図番号では、北海道 (1-13)、樺太 (19-24) にあたる。

¹⁶ 後に示す図 2-3 の地図番号では、北海道 (1, 3, 4, 8, 10-13)、樺太 (23)、北千島 (25) にあたる。

Asai (1974) の「アイヌ語諸方言のクラスター分析」は、アイヌ語の方言区分論の研究として今なお権威ある論文である。データは基本的に服部・知里 (1960) の研究をベースにしているが、Asai は個人的に数人のインフォーマントから語彙を得ており、北海道の千歳方言を1地点加えたほか、旭川と帯広、釧路の3方言に関するデータも自ら修正している。服部・知里 (1960) のデータを補完するものとして重要な資料である。そのほか、必要に応じて、知里真志保の『分類アイヌ語辞典』の植物編と人間編を参照し、北千島方言についてはありったけの資料を集めて分析の対象としている。樺太、北千島、北海道の方言を三大方言 (Asai の用語では "major division" (p.100)) として科学的に実証したことが、Asai (1974) の貢献であろう。

それより細かい区分になると研究者によっても様々な立場がある。中川 (1996) で基礎語彙に関するパターン分類が試みられているが、北海道方言では静内方言や石狩 (旭川) 方言を境に北東と南西にわける区分や、沙流・千歳方言とそれ以外という区分をとるのが通例である。Nakagawa & Fukazawa (近刊) では、語彙だけでなく音韻や文法も視野に入れたうえで北海道の方言区分を再提案している。

樺太は、東海岸と西海岸で分けられると考えられている (知里 1955[1973], 小野 2015a, 2015b)。また、知里 (1955 [1973: 233]) では「それよりも東海岸北部のタライカ方言がその他の地方の言語と大きな開きを示し、しかもそれが北海道の南部方言に近似しているのは不思議である」とも指摘される。

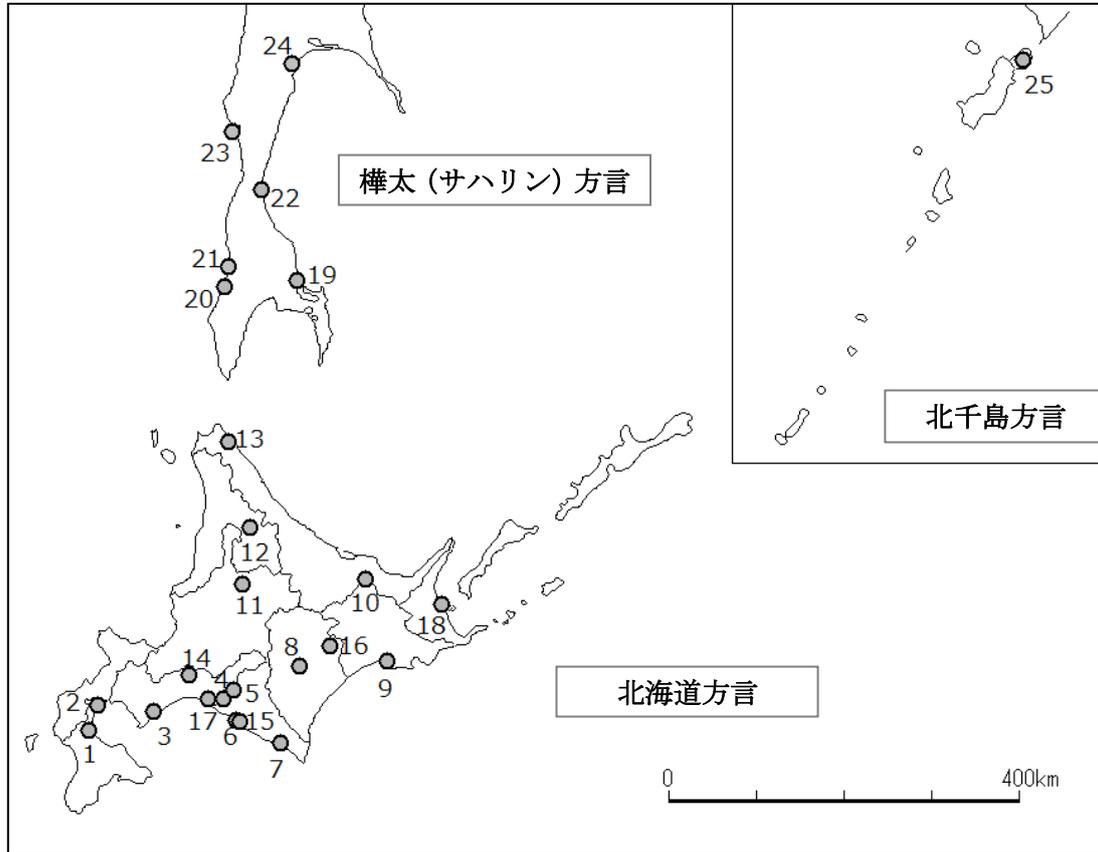
北千島方言に関しては、鳥居 (1903) に加えて、村山 (1971) の文献学的な研究が代表的である。村山 (1971) には、S. P. クラッシュェニンニコフ、G. W. シュテレル、B. ディボフスキらの語彙集や鳥居 (1903) をアルファベット順に並べたものが収録されている。日本語の文献ではないものについては和訳が付けられ、資料の詳細についても丁寧に記述されていることから、利便性の高い一冊である。前述の Asai (1974) の研究においても、鳥居 (1903) と村山 (1971) が参照されている。また、Asai (1974) は同論文で A. L. ピナールの語彙集を翻刻し、これもまた北千島方言として分析の対象としている。しかしながら、浅井自身も述べているように、ピナールのインフォーマントであった P. ウイアイがアイヌ語の非母語話者であったというから、間違いが多く含まれているということも考慮せざるを得ない扱いの難しい資料である。

南千島方言は、北海道方言とさほど変わらないという報告や僅かな語彙が文献資料に残っており、慣例的に北海道方言とみなされている (林 1973)。そのいっぽうで、18 世紀前半に北千島出身のアイヌであるリパガが、「北千島 (パラムシル島) のアイヌ語は南千島 (国後島) の言葉とさほど変わらない」とシパンベルグ艦長へ報告したという話も残っている¹⁷。千島の文献は北と南どちらも極めて少なく、不明な点が多い。

特に服部・知里 (1960) に記載のない語彙については、25 地点全ての情報を取得するのが

¹⁷ 村山 (1971) によって Крашенинников Степан Петрович (1755-56) Описание Земли Камчатки. СПб. の p. 120 に記述されていることが指摘されている。

困難であるため、必ずしも 25 地点の語形が揃うとは限らない。図 2-3 は、筆者が言語地理学的な研究をする際に基本としている 25 地点の地図である。



- 北海道** 1. 八雲、 2. 長万部、 3. 幌別、 4. 福満、 5. 貫気別、 6. 新冠、 7. 様似、 8. 帯広、
9. 釧路、 10. 美幌、 11. 旭川、 12. 名寄、 13. 宗谷、 14. 千歳、 15. 静内、 16. 本別、
17. 鶴川、 18. 根室 (野付)
- 樺太** 19. 落帆、 20. タラントマリ、 21. 真岡、 22. 白浦、 23. ライチシカ、 24. 内路
- 北千島** 25. シュムシュ

図 2-3 : アイヌ語の方言 25 地点

北海道方言のうち 14 番から 18 番については、次のような資料を参考にすることが多い：
14. 中川裕 (2005) 『アイヌ語千歳方言辞典』、15. 奥田統己 (1999) 『アイヌ語静内方言文脈
つき語彙集』、16. 澤井春美 (2006) 『アイヌ語十勝方言の基礎語彙集』、17. 中川裕 (編)
(2014-2016) 『アイヌ語鶴川方言 日本語-アイヌ語辞典』¹⁸、18. 加賀家文書。また、必要に

¹⁸ 中川 (編) (2014-2016) としてオンライン上で公開されている。このデータのもとになっているのは、故・片山龍峯氏が、日本語-アイヌ語辞典作成を目的として、1996 から 2002 年までの間に鶴川町 (現むかわ町) の新井田セイノ氏および吉村冬子氏に対してアイヌ語の聞き取り調査

応じて知里真志保 (1975, 1976)『分類アイヌ語辞典』や吉田巖 (1989)『北海道あいぬ方言語彙集成』、松本成美他 (2004)『アイヌ語釧路方言語彙集』、小松和弘 (編)『アイヌ語様似方言辞典』、太田満 (2005)『旭川アイヌ語辞典』などの辞典・語彙集類や、北海道教育委員会が1982年から毎年発行している『アイヌ民俗文化財調査報告書』等のデータを参考にして

2. 4. 2. 「アイヌ語根室方言」について

加賀家文書が、どこの方言を採録しているか、どこの方言と言えるのか、ということはこれまでも何度か論じられてきた。池上 (1969 [2004: 195]) は、「いくつかの地方の方言は絶滅した。根室の方言もその一例である。しかし少なくとも三代にわたってその地でアイヌ語を使った和人加賀家には十八、九世紀にかけてのアイヌ語記録が保存されており、その記録にはその地方の方言がおそらく反映しているであろう」と述べている。

本章2.2節で確認した通り、伝蔵は一所で勤務していたわけではない。釧路場所から東に向かって根室場所へと勤務地を移し、さらに野付、標津へと太平洋岸を北上していった。伝蔵が最初に覚えたアイヌ語は釧路方言であったと思われるが、根室や野付、標津等でアイヌ人と接するなかでその周辺の方言語彙が増えていったということは考えられる。特に野付や標津には長く勤務していたのであり、現在の別海町や標津町のあたりの語形を含んでいる可能性は非常に高い。

そもそも、地域的にどこからどこまでを「～方言」と呼ぶかというのは難しい問題である。アイヌ語の方言名というのは旧行政区分によって定められており、一人二人の話者のことばを「方言」として呼んでいることも珍しくない。とりあえずは旧行政区分のなかで捉えられるものを、その名称でもって呼んでいるという節がある。



図 2-4 : 根室国の位置 (旧行政区分)

を行った資料 (テープ 66 本、録音時間合計約 150 時間) である。
(URL: <http://cas-chiba.net/Ainu-archives/index.html> ; 2016/9/1 閲覧)

後にも述べるが、加賀家文書には北海道周縁部に見られる特徴的な語彙が採録されており、近隣諸言語とも非常に近い語彙の特徴が観察される。このような状況から、本論文では加賀家文書すなわち根室国地域において記録されたアイヌ語を「根室方言」と呼ぶことにする。具体的な地域は図 2-4 のとおりである。網掛けをしている地域は、かつて根室国と呼ばれ、現在は根室振興局管内（伝蔵の勤務地である標津町、別海町、根室市などを含む）と呼ばれている¹⁹。

2. 4. 3. 先行研究

佐藤 (2012a) は、前述の池上 (1969 [2004]) の見解に同意を示し、具体例をあげて根室方言の特徴を示している。佐藤 (2012a: 205-206) はまず、豊原他 (1996) によって翻刻が紹介された伊藤初太郎 (1883-1976) の著作『根室蝦夷の博物語遺集 (ママ)』(私家版) を「確実に「根室方言」であると断定できる資料」と述べ、それを前提とした上で、

1. 伊藤の著作に見られる「レタンケツプ」と加賀家文書の申渡の中に見られる「レタシケツプ 作物」はどちらも *retaskep* という形式に相当し、一致関係にあること
2. さらに、*retaskep* は美幌方言 (服部 1964) や塘路方言 (知里 1976: 136) という根室周辺の道東方言にも報告のある形式であること

これら 2 点を根拠に、「やはり加賀家文書の少なくともあるものが根室地方の方言を含むという予測を裏付けるものと言えるであろう」と述べている。

また佐藤 (1999a) は、北海道立アイヌ民族文化研究センター発行「アイヌ民族文化研究センターだより」(第 11 号) において、加賀家文書資料中の「御親料 根室花咲根室郡惣土人江」と題された文書について分析し、次の 2 点に着目している。

1. 第一音節が長く発音されたことを示すバアセ *pase* 「重い」のような形があり、アクセントの存在を窺わせるが²⁰、服部・知里 (1960) で釧路方言にはアクセントの対立がないと報告があること
2. また、同文書に「アヌカラ」が二例あり、*a-nukar* (我々が／一般に人が、見る) に相当するものであろうが、春採、美幌、網走のような他の道東地方の資料では *a-* ではなく *an-* という形式を用いること

そして、これらの点について「いずれも沙流方言のような北海道南西方言と共通の特徴を

¹⁹ 「根室場所」に限ると年代によって標津の扱いが異なってくるため、ひとまず「国」という括りでもらえておく。また、南千島については一端保留にしておく。

²⁰ 括弧付きで「(母音の長短の対立の可能性はしばらく置く)」とある。

示しているようにも見える。根室方言がもしそのような特徴を持っていたとすれば、他の道東方言と共通の特徴を持っていただろうという一般的予測に反することになり、東西両アイヌ語方言の違いがどのようにしてできたか、というアイヌ語学上の大問題の行方にも大きく影響を与える可能性がある（もしそうでないとすれば、今度は加賀家文書全体の性格を考え直す必要が出てくるだろう）」と結んでいる。

浅井 (1972) では、加賀家文書に含まれる語彙が美幌方言に類似することを早くに指摘している。根室は美幌や釧路よりも東にあり、千島列島に最も近い方言であるという点で北海道と千島列島を結ぶ重要な地点であることは間違いない。北海道の周縁部に位置する宗谷や八雲などと同じ語形を持つということも珍しくなく、言語地理学的研究にも興味深い視点を与えてくれる可能性がある（本章 2.4.4 節を参照）。

なお、佐藤 (1999a) が確実に根室方言であると言える資料として提示しているのは、豊原他 (1996) や佐藤正彦・本田克代 (1998) であり、このほかに確認できるものとして、地域性はやや不明であるが大沼他 (2004) や木村謙次 (1798-1799) の『蝦夷日記』、東 (2012) において紹介された金沢家文書がある。『蝦夷日記』には別海の乙名ホロヤ²¹ に求めて得たとされる語彙が記載されており、金沢家文書には根室方言の特徴が見られる語彙集が存在する（深澤 (2015a)、および本研究の第4章で概観する）。

2. 4. 4. 言語地理学的研究からみた加賀家文書の特徴

言語地理学はジリエロン (J. Gilliéron) とエドモン (E. Edomont) によって 1902-1910 年に『フランス言語地図』(Atlas linguistique de la France) が刊行されてからというもの、日本においても、1902 年に発足した国語調査委員会において 1905 年および 1906 年に『音韻調査報告書』と『口語法調査報告書』2 冊、『口語法分布図』(彩色図 37 枚) が刊行されている。これらの報告書は、ヴェンカー (G. Wenker) のドイツ全土の方言通信調査に刺激を受けた上田万年が監督した。その後、ドーザ (A. Dauzat) の『言語地理学』等を読んで啓発された柳田国男 (1930 [1980]) によって「方言圏論」が提唱され、さらに国立国語研究所編『日本言語地図』全 6 巻が刊行される。柴田武・W. A. グロータース・徳川宗賢による新潟県糸魚川市の調査資料をもとにした柴田武 (1969) 『言語地理学の方法』は、日本の言語地理学においてその方法論を提示したものである。このように日本の言語地理学は発展を遂げてきた²²。

中川 (1996) は、服部・知里 (1960) と服部 (編) (1964)、さらに自身の千歳方言のデータをもとに、アイヌ語の言語地理学的な研究を行ったものである。そこで挙げられている 6 つのタイプ分けをもとに、筆者もまたアイヌ語の言語地理学的な研究を進めてきた（詳し

²¹ クナシリ・メナシの戦いの時に和人側についたアイヌとして『夷酋列像』に描かれた 12 人のうちの 1 人。「ポロヤ」とも言われる。加賀家文書でも度々名前が挙がる人で、ノツカマフ（現ノッカマップ）から別海に移住してきたということが記されている。

²² 馬瀬 (2002: 16-51) の「20 世紀における日本の方言地理学研究」による。

くは第2部で述べる)。例えば、図2-5は服部・知里(1960)には収録されていない「朝」という語彙の分布図(17地点)である。

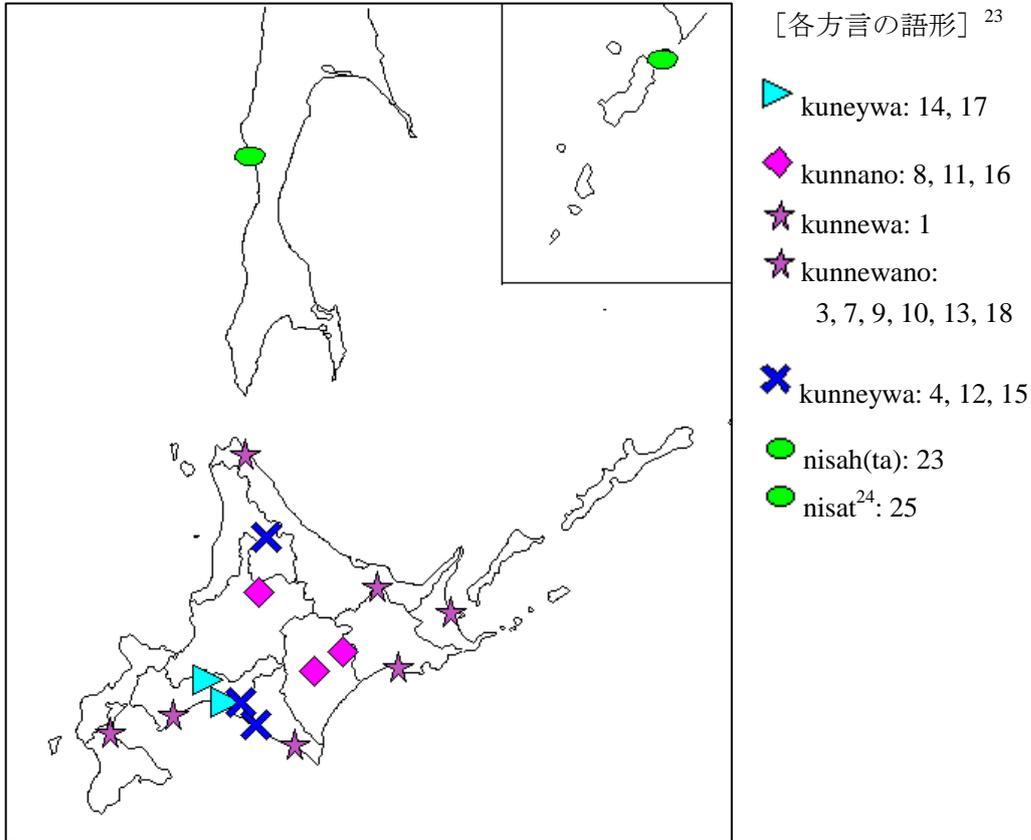


図2-5:「朝」

樺太と千島については明らかに情報量が不足していることから²⁵、ひとまず北海道だけに焦点を絞って見てみることにする。まず、北海道の周縁部には *kunnewa(no)* (★) という語形が確認できる。言語地理学では、このような分布を「ABA 分布」や「圏論的分布」などと呼び、A という語形のあとに B という語形が広がったことによって、A の語形が追いやられるように周縁部に残ったと考える。つまり、周縁にある語形 (A) が古く、中央にあ

²³ 引用文献と対応する方言番号は以下の通り：

服部 (1964)/ 1, 3, 4, 8, 10-13, 23；北海道教育庁社会教育部文化課 (編) (1985)/ 7；松本他 (編) (2004)/ 9；中川 (1995)/ 14；奥田 (1999)/ 15；澤井 (2006)/ 16；中川 (2014-2016)/ 17；加賀家文書 (「学校往来夷解書」等) / 18；村山(1971)/ 25。

²⁴ 村山(1971) にて参考にした資料および語形は以下の通り：

nisiät 早朝 (クラッシュェニンニコフ (1738)「ラテン・クリル語彙」)
nÿssat 朝やけ (シュテレル (クラブロート) (1823)「アジア・ポリグロッタ」)
nisat 朝 (ディボフスキ (1879-1883)「シムシユ島アイヌ語小辞典」)。

²⁵ 樺太や北千島の *nisah* や *nisat* は、*kunnewa(no)* 系よりも古い可能性がある。北海道でも *nisat* は「早朝」や「夜明け前」という意味で用いられており、*kunnewa(no)* というのは時間を細分化して表現するために後からつくられた語形かもしれない。

味の類推で過分に挿入されたものか、あるいは、単なる音の問題で、*kunne* と *wa(no)* の間に一種のわたり音として *y* が挿入されたと考えることになるだろう。そして何よりも分布図を素直に解釈するなら、*kunnewa(no)* (★) のほうが古いと考えるのが適当である。

鶴川や千歳に見られる *kuneywa* (△) は、語形から明らかに *kunneywa* (×) の縮約形であり、語形の分布から見ても間違いなさそうである。また、十勝の帯広と本別、および旭川には *kunnano* (◇) という語形があるが、これも *kuneywa* (△) と同様、もはや分析的に解釈するのが困難な語の形となっており、*kunnewano* (★) から別系統で派生した縮約形と考えるのが適当と見られる。これらをまとめると図2-6のようになる。

このように加賀家文書を根室方言の一資料として用いることができれば、アイヌ語の言語地理学的な研究にも大きな寄与をもたらすものと考えられる。また同時に、この加賀家文書の資料がどのような方言的特徴を有しているのかということも、分布を見ながら検討していくことができる。

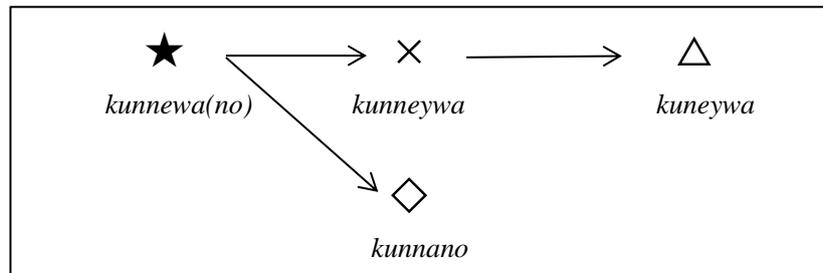


図 2-6 : 「朝」の語形に関する史的変遷

2. 5. まとめ

本章では、2.1 節において加賀家文書について主に別海町郷土資料館が整理してきた書誌を概観し、なかでもアイヌ語資料に関する研究史を見た。さらに、2.2 節で執筆者である加賀伝蔵の生い立ちについて紹介し、2.3 節で蝦夷通辞が記録したアイヌ語資料がどの程度アイヌ語として信頼がおけるものであるか、その専門性について触れた。そして、2.4 節では言語地理学的研究によって加賀家文書の方言的特徴やその可能性について例示し、加賀家文書が「根室方言」を含む貴重な資料であるということを確認した。

第3章 加賀家文書のアイヌ語表記法

本章では、加賀家文書の大部分を執筆した3代目伝蔵(1804-1874)のアイヌ語表記について試験的にまとめる。

3. 1. アイヌ語表記と諸問題

アイヌ語は、日本のなかにあって「無文字言語である」などと言われることがある。しかしながら、アイヌ語の表記に関わる取り組みの歴史は決して短くはない。少なくとも江戸時代に蝦夷通辞らがカタカナで表記したアイヌ語は、公的な文書として日本国内に残されており、その後の文字獲得の過程においても大きな意味をなすところである。現在は表記の習慣が定着している言語であると言えるまでに、アイヌ語はアイヌ語を表記するための方法を発達させてきた。

もちろん、アイヌ語が文字を獲得する過程において日本語の存在を無視することはできない。塩原(2006: 322)は、表記の習慣を持たない言語に対する文字種の選択として、「多くの場合文字の選択は、言語的な動機によってではなく、社会的な動機によって行われる。つまり、多くの言語は話者になじみが深く、学校教育などで慣れ親しんでいる地域の優勢言語の文字を用いることになる」と述べている。もし言語的な動機で文字を選べるのであれば、音節末子音を表記できるハングルのほうが表記しやすかったに違いないのである。

また、児玉(2006: 315)は、言語の表記法の獲得について、獲得された文字体系とそのもととなった文字体系との間の関係を以下のようにまとめている。

1. 複数の既存の文字体系から、新たに表記法を必要とする言語の音体系に適合する文字を得る。
2. ひとつの既存の文字体系に、新たに表記法を必要とする言語の音体系に適合するように必要な改変を加える。
3. ひとつの既存の文字体系をモデルとしながら、全く新たに字体を発明して、表記法を獲得する。

アイヌ語の表記は、基本的に上記の2番が選択され、日本の優勢言語である日本語のカタカナとローマン・アルファベット(以下、「ローマ字」と言う)の二つの文字が使用されている¹。カタカナとローマ字の表記のどちらに対しても、研究者やアイヌ自身が「必要な

¹ アイヌ人である山本多助は、『アイヌ・モシリ』(1957-1965)という雑誌でカタカナをモデルにして「アイヌ文字」を新たに作り出しており、歴史的には3番が試みられた例もあると言える。

改変」を行いながら、アイヌ語を必要十分に表記しようとしてきた。その変遷過程は中川(2006)によって詳細に報告されている。

アイヌ語の正書法というのは明確に定められておらず、北海道ウタリ協会(1994)の『アコロ イタク AKOR ITAK アイヌ語テキスト1』で大部分の方針が確立され、現在刊行されているアイヌ語の辞書や教科書、教材類の多くは、これに則った形で表記することが慣習となりつつある(以下、「アコロ イタク式」と呼ぶ)。

カナ表記で最も厄介な問題となっているのが、日本語には無い閉音節の音節末の子音に対する表記法である。「アコロ イタク式」で小書きのカナ(「プ(-p)」、「ツ(-t)」、「ク(-k)」、「シ(-s)」、「ム(-m)」など)が採用されるようになり、いくぶん正確さを期する表記となったとはいえ、その方法に異論が無いわけではない。

例えば、田村(1999)が新たに提案した「カタカナ音声簡略表記」や「カタカナ音声精密表記」では、「アコロ イタク式」で *hotke* も *hokke* も「ホッケ」と表記されることに対し、前者を「ホトケ」、後者を「ホッケ」と表記する方針をとっている。田村(2000: 67-68)のこのような試みは「母語話者であった人までが、カタカナを読んで覚えた異様な発音をしているのに気がついた」ことに端を発しており、「テープを丁寧に聞いて、一つ一つの音を表すのに最も近いカナ文字を選ぶようにしている。これには莫大な時間がかかる。【中略】しかも、そのようにしたところで、発音を完全に表すことは不可能だから、むなしいとえばむなしい仕事である」と述べている。

もちろん、音節文字であるカナで表記する限り、どうあがいても子音に母音が付きまとうわけであって、音素結合や音韻交替によっては、カナ表記がかえって語形の特定を難しくしてしまう恐れもある。そのため、論文や研究書に関して言えば、今なおアイヌ語はローマ字で表記されるというのが常である。また、ローマン・アルファベットの識字率からしても、ローマ字で書かれることは、かつてほど躊躇されなくなっているようにも見える。

このようにアイヌ語の表記法の問題は昨今も議論されているほどであるので、特にカナ表記の問題に関しては、それ以前の江戸時代の書物にも大きな影を落としている。この時代に大量に記録されたアイヌ語が難解で、ことごとく不正確だと思われてしまう原因は、カタカナによる表記の問題として指摘される。金田一(1917 [1993: 9])が、探検家や旅行家の書き留めたアイヌ語に対し「殊に表わし方の不完全な仮名を以てし、しかも仮名遣いなどにはとんと無関心な旧幕府時代の人のエエへ、キイヒを相通にし、長く引く所には、ウフの類を勝手に書いたのは、無邪気なものではあるが恐ろしい」と述べたことは有名な話であろう。

『藻汐草』を記録した上原熊次郎、さらにそれを筆写した加賀伝蔵は、探検家や旅行家ではなく蝦夷通辞として実際にアイヌ語を使って仕事をしていた人達であった。もちろん、彼らがカナで記録したアイヌ語の資料には、先ほどから述べているようにカナ表記の限界からくる不精密さがある。それに、日本語の母語干渉によってアイヌ語の音素特定に欠落

しかしながら、普及には至らなかった。

が生じ、その不精密さを煽るような状況にもなっている。それであってもなお、近世のアイヌ語を知るには一級品の資料であり、従って、このような資料を現代のアイヌ語学の土俵に上げるためには、カナ表記からアイヌ語の音価を推定してローマ字化するということが必須のプロセスとなるわけである。

3. 2. 先行研究

江戸時代のアイヌ語資料に関するカナ表記とローマン・アルファベットを用いた音素表記の対応に関しては、いくつかの重要な先行研究があり、その多くが、日本語・アイヌ語の語彙集や辞典に関するものである。田中・佐々木(1985 [佐々木 2013: 275])と成田(1985a)を基盤とし、ローマ字化やもとのアイヌ語の推定に関わる主要な研究を表 3-1 に記載する(影印や翻刻のみの研究は割愛した)。研究が写本を底本としている場合にもその欄に記載している。

文献名	成立年	作者	先行研究
松前ノ言	1630-40 (?)	未詳	金田一(1924)、田中(1989a)、佐藤(1998, 1999b, 2008a)、平山(2013)
狄言葉	1704	空念	平山(2013)、佐藤(2014, 1015)
蝦夷談筆記	1710	松宮観山	田中(1989a)、佐藤(2009a)、平山(2013)
狄島夜話記	1734	天嶺性空	佐藤(2009a)
蝦夷壽那子	1736	菅俊仍縷	佐藤(2009a)
和漢三才図絵	1713	寺島良安	—
蝦夷地風俗書 上	1715	松前志摩守	—
津軽一統志	1731	津軽藩士某	平山(2013)
北海随筆	1737	板倉源次郎	田中(1989a)、平山(2013)
蝦夷拾遺	1786	佐藤玄六郎	田中(1989a)、平山(2013)
蝦夷風土記	1789	新山質	—
蝦夷草紙	1790	最上徳内	成田(1985a)、田中(1989a)
藻汐草	1792	上原熊次郎	田中・佐々木(1985)、田中(1989a)
蝦夷島奇観	1799	秦憶麿	田中(1989a)、平山(2013)
蝦夷地里程数 書	1810	根諸勤番某	—
蝦夷語集	不明	上原熊次郎	成田(1985a, 1988a)
蝦夷ヶ島言語	1818-1830	最上徳内	—

蝦夷語箋	1854	上原熊次郎	田中 (1989a)
蝦夷言いろは引	1848	糸屋喜左衛門 (?)	佐藤 (1995)
蝦夷語	1850	松浦武四郎	成田 (1985a)、佐藤 (1990)
南北蝦夷地魯西亜国話通言	1854	依田治郎助	—
蝦夷語集録	1864	能登屋円吉	田中 (1989a)
イロハ番付阿異野事葉	1866	岩津屋友吉	—
番人円吉蝦夷記	1868	能登屋円吉	成田 (1985a)、田中 (1989a)
蝦夷記	不明	未詳	佐藤 (2003)

表 3-1：近世アイヌ語語彙に関する資料

本章では、蝦夷通辞の上原熊次郎の表記と比較して、加賀伝蔵の表記の特徴を見ることにする。上原の著作については、『藻汐草』、『蝦夷語箋』、『蝦夷語集』²とあり、『蝦夷語箋』が『藻汐草』のポケット版辞書であるのに対し、『蝦夷語集』はアイヌ語の収録語彙が 9380 語と『藻汐草』の 3.4 倍近く増えていることが特徴である。アイヌ語表記に関しても『藻汐草』で使用の無かった「井」という文字を /ye/ や /we/ という音価を表すのに用いるようになっており³、成立年は不明だが『藻汐草』以降のものと考えられる。

『藻汐草』のアイヌ語表記については、日本語にはないアイヌ語の /tu/ を「ヅ」という文字で記録した点について金田一 (1917 [1993: 12]) が評価している。しかし、田中・佐々木 (1985 [佐々木 2013: 278]) は「徹底されているわけではなく、ツもトも併用される」と指摘し、『藻汐草』の表記を体系的に説明した。さらに、加賀家文書の『蝦夷方言 藻汐草[写]』の表記についても田中・佐々木 (1985 [佐々木 2013: 276]) によって若干の言及があり、「伝蔵自身の書き癖によって、ヅをトに、チをツに、二重母音の y にあたるイをエに直したり、長音符号を省いたりなどの訂正もなされている」としている。

なお、先行研究においては、どれもアイヌ語の音韻体系（ローマ字音素表記）に対してどのカタカナが当てられているかという視点で整理されているが、本論文における筆者の視点はアイヌ語のカタカナ表記からどの音素が推定されるかということであるので、次節では加賀家文書のカタカナ表記をベースに整理を試みる。

² このほかにアイヌ語地名解の書として『蝦夷地地名考并里程記』(1824)がある。

³ 「井」については、成田 (1985a, 1988a) が詳しい。

3. 3. ローマ字表記法

本節における主な使用テキストについては、以下の通りである。語彙集や公的な申渡の類に関しては、別の人が書いたものを伝蔵が写したという性質が強く、底本に表記が引きずられてしまうことがあるのでそれらは除き、できる限り加賀家がオリジナルの資料であるものを選んだ。(『[蝦夷風俗図絵蝦夷語解説②]』のみ加賀家文書外の資料を参考に書かれていることがわかっている。) 書誌情報は第1章の1.3節を参照のこと。

- ・「菊のかんざしみだれ髪」『御手本』(資料番号 31) : 略号「菊」
- ・「チャコルベ」『御手本』(資料番号 31) : 略号「チャ」
- ・『学校往来夷解書上』(資料番号 40) : 略号「学」
- ・『[蝦夷風俗図絵蝦夷語解説②]』(資料番号 51) 略号 : 「風」
- ・「酉松おその」『[蝦夷風俗図絵蝦夷語解説①]』(資料番号 28) : 略号「酉」

例の後に続く番号は、先頭が資料略号、次の数字 3 桁が丁数で、オは表、ウは裏を示し、最後の 2 桁は行数を表す。

アイヌ語のローマ字化に関する参考資料として、『[蝦夷風俗図絵蝦夷語解説②]』は旭川アイヌ語研究会 (2011) を、「菊のかんざしみだれ髪」は深澤 (2013)、『学校往来蝦夷解決書上』は深澤 (2014c)、「チャコルベ」は深澤 (2016b) を使用した。本文に出している推定形は、北海道東部方言の語形や分析的な形をもとに、もっとも適切と考えられるものをしめた。註に「《他》」として記載している形は、カタカナから推定されうる形をいくつか提示したものである。

3. 3. 1. アイヌ語の音素と音節

アイヌ語の表記法を見るにあたり、アイヌ語の音素と音節について確認しておくことにする。アイヌ語の音素は、5つの母音と11の子音(声門閉鎖音を入れると12の子音)⁴から成り立っている。

母音 : a, e, i, o, u

子音 : p, t, k, c, s, r, m, n, w, y, h, (')

子音の /y/ [j] と /w/ [w] は半母音であるが、音節の副音としてしか用いられない⁵。 /p, t, k,

⁴ 声門閉鎖音の '([ʔ]) については本章 3.3.5.2 節および第5章 5.1.1 節も参照。

⁵ /y/ と /w/ を明確に「子音」として扱ったのは、知里 (1942: 406-462) であり、「いわゆる重母音」という項目で、アイヌ語の重母音がウを副音とする系列とイを副音とする系列とにわかれる

c/ には無声・有声、無気・有気の対立がない。

アイヌ語の音節は、次の4種類である（V：母音、C：子音）。

V、CV、VC、CVC

ただし、/c/ と /h/ の子音は音節末に立つことができないという制限がある⁶。子音が連続するのは二つまでであり、子音が連続した場合は必ずその間で音節が切れる。また、VCV という音素配列であれば、通常、一つ目の V の後ろで音節が切れる（ピリオドは音節の切れ目を表す）。

例) *i.ku* 「酒を飲む」、*ay.nu* 「人間」、*po.ron.no* 「たくさん」、*tan.to* 「今日」

3. 3. 2. 母音といわゆる半母音

加賀家文書における単母音の表記は、「ア」、「イ（まれに𐰇）」、「ウ」、「エ」、「ヲ」のおよそ5つで成り立っている。江戸時代のアイヌ語資料全般に見られる特徴として「エ」は「エ」、「オ」は「ヲ」で表記されるということが言われているが⁷、加賀家文書も例外ではない。また、資料によっては、「イ」が「𐰇」と表記されている場合もあるが、数はごく僅かであって、主に「イ」が使用される。音価を推定した際、以下のような可能性が考えられる。

原則1 母音【V】

ア：a
イ：i/e
ウ：u
エ：e/i
ヲ：o/u

加賀家が秋田の八森の出身であることを考慮すると、音素特定の際に障害となるのが、「イ」と「エ」の区別である。日本語の東北方言では /i/ と /e/ を音韻的に区別しないこと

ということを指摘している。これ以前にも Pilsudski (1912) が、*j*(=y) と *w* は *i* と *u* が子音化したものと指摘しているが、その時点では音声的にしか扱っておらず、これらを母音の範疇としていた。

⁶ 樺太方言では /h/ が音節末にも立つことができる。

⁷ 田中・佐々木 (1985)、成田 (1988a) などが指摘している。日本語は江戸時代まで、/ye/ [je] と /wo/ [wo] が使われていたので、「エ」や「オ」が使用されないのは当時の日本語の状況とも考えあわせる必要がある。第5章 5.1.1 節の日本語とアイヌ語の音韻体系についても参照。

が知られており、秋田県の八森あたりの方言でも、これらの母音を副音とする場合には区別なく [e] と発音される。副音ではない場合も、例えば「息」、「苺」、「井戸」、「鯉」などの「い」は [e] と発音される⁸。このことがアイヌ語表記にも影響しているようで、加賀家文書では「イ」と「エ」のカナが、アイヌ語の /i/ と /e/ のどちらの音素を表すのにも使われている。

さらに、日本語母語話者による誤りとしてよく知られているのが、アイヌ語の /u/ と /o/ の音韻的な区別である。このことは、金田一 (1960 [1993: 133]) によって「日本語の特に東北人の u の発音は平唇で、アイヌの u を聞くと、o のように聞く」と指摘されている。時代や地域、個人によって音声も少しずつ異なるが、アイヌ語の /u/ は、唇の丸めが強く、唇を前に突出すようにして口の奥のほうで調音されるなどと言われており、加賀家文書でも、「ヲ」が /u/ を表すのに使用される。

また、少々変則的ではあるが、アクセントの無い母音については「ユ」や「ヨ」で書かれることがある。

原則2 アクセントの無い母音【V(C)】

ユー : i-

ヨー : o-

例)	ユルシカ	: <i>iruska</i> ⁹	「立腹する」(菊 037 ウ 05)
	ユワトベニ	: <i>iwatopeni</i> ¹⁰	「紅葉」(菊 035 オ 03)
	ヨカ	: <i>oka</i> ¹¹	「～の後ろ」(菊 042 オ 09)
	アイヨッヘ	: <i>ayoppe</i> (< <i>ayokpe</i>) ¹²	「鎧」(風 032 ウ 12)

アイヌ語で /y/ [j] と /w/ [w] という二つの音素は子音として位置づけられる。同じ母音が連続する場合は、音素間に声門閉鎖音が入るのが基本だが、違う母音が続く場合に限り、/i/ や /u/ にアクセントが無ければ /Vi/ や /Vu/ という音連続は /Vy/ や /Vw/ に半母音化(子音化)する。そうでなければ、声門閉鎖音か、わたり音の [j] や [w] が挿入されるこ

⁸ ただし、佐藤喜代治 (1963 [1994: 18]) によれば、「東北方言では一般に「イ」を [e] と発音する傾向があり、そのため /i/ のモーラを欠くことになるが、米代川流域の各地点では、[i] が広く用いられており、/i/ のモーラを欠くことにはならない。しかし、「イ」が /e/ である例もかなり多く見いだされる」としている。八森では「胃」や「胆(い)」を [ji]、「糸」を [i] で発音するということがわかっており、/i/ と /e/ の音韻的な区別が全く無いということではないそうである。

⁹ 《他》 *yurusika, yursika, yuruska, irusika, eyrusika, eyruska* など。

¹⁰ 《他》 *yuwatopeni, yuwatupeni, iwatupeni* など。

¹¹ 《他》 *yoka, yuka* など。

¹² 《他》 *ayyoppe, ayyokpe, ayuppe, ayukpe* など。

とがある¹³。わたり音に関しては、ローマ字音素表記の際に示す立場と示さない立場があり、本論文では示さないことにする。

原則3 (母音+) 半母音【(V)C】

—イ／—エ : -y

—ウ／—ヲ : -w

例)	アイヨッヘ	: <i>ayoppe</i> (< <i>ayokpe</i>) ¹⁴	「鎧」(風 032 ウ 12)
	アエ子	: <i>ayne</i> ¹⁵	「～あげく」(菊 040 オ 07)
	カモイ／カモエ	: <i>kamuy</i> ¹⁶	「神」(菊 041 ウ 07, 菊 041 オ 05)
	ウコイタク	: <i>ukoytak</i> ¹⁷	「互いに話をする」(菊 036 オ 07)
	ヲエラ	: <i>oyra</i> ¹⁸	「～を忘れる」(菊 036 オ 05)
	パウツ	: <i>pawci</i> ¹⁹	「淫魔」(菊 035 ウ 09)
	サヲレ	: <i>sawre</i> ²⁰	「ゆるい」(菊 039 オ 01)
	ニウケシ	: <i>niwkes</i> ²¹	「～をしかねる」(風 039 オ 04)
	ケウトモ	: <i>kewtumu</i> ²²	「～の心」(菊 036 ウ 07)

アイヌ語に /-iy/ や /-uw/ という音素配列は認められていないので例としては提示しなかった。/-iw/ や /-ew/ を一音節とする際の /w/ は「ヲ」よりも「ウ」で表す傾向にあるようで、主にここで対象とした資料には見つからない。論理的な可能性としてはあってもおかしくはないので、用例が出てくるのを待ちたい。/-ey/ や /-ow/ に関しては原則4のように「エ」や「ヲ」などの一文字で表される。

原則4 母音+半母音【VC】

イ／エ／ユ : ey

ヲ : ow

¹³ アクセント音節と半母音化の関係については、白石 (1998) が詳しい。また、奥田 (1998) によって、静内方言でわたり音挿入と声門閉鎖音挿入がそれぞれ対立していることが報告されている。

¹⁴ 註 12 を参照。

¹⁵ 《他》 *ayene, aene, aine* など。

¹⁶ 《他》 *kamuye, kamoye, kamuye* など。

¹⁷ 《他》 *ukuytak, ukoitak, ukoetak, ukoytaku, ukoytako* など。

¹⁸ 《他》 *uyra, oyera, uyera, owera* など。

¹⁹ 《他》 *pawt, pauci* など。

²⁰ 《他》 *sawri, saur, saor* など。

²¹ 《他》 *niwkesi, newkes, newkesi* など。

²² 《他》 *kewtomo, kewtum, kewtom* など。

例)	イコエサンバ	: <i>eykoysampa</i> ²³	「～を真似る」(学 008 オ 08)
	エコイサンバ	: <i>eykoysampa</i> ²⁴	「～を真似る」(学 005 ウ 04)
	ユワンケ	: <i>eywanke</i> ²⁵	「～を使う」(学 004 オ 08)
	ヲベカ	: <i>owpeka</i> ²⁶	「まっすぐに」(菊 035 ウ 07)

/-iy/, /-uw/ のほかに、アイヌ語には /wi/ を一音節とする音素配列が無いことや、-yi-、-wu- という音連続は形態素間でのみ生じるという制限がある。

次の原則5に関して、例えば「ウエ」という表記は /wi/ とはならず、/we/ か /ue/ などを実現することになる。「ウ」一文字で /wu/ になることは(形態素間でのみ生じるという制限上) まず無いが、「エ」と「イ」はそれぞれ一文字で /ye/ もしくは /we/ を、「ヲ」は一文字で /wo/ を表すことはある。

原則5 半母音+母音【CV】(ヤ行とワ行)

ヤ	: ya
イ	: ye
ユ	: yu
エ	: ye
ヨ	: yo/ yu
ワ	: wa
(ウ) イ	: we
(ウ) エ	: we
ヲ	: wo

例)	マツヤ	: <i>maciya</i>	「町」(菊 033 オ 03)
	ユク	: <i>yuk</i> ²⁷	「鹿」(風 025 ウ 08)
	ノエ/ノイ	: <i>nuye</i> ²⁸	「～を書く」(菊 036 ウ 09, 菊 036 オ 09)
	ヨブケ	: <i>yupke</i> ²⁹	「強い」(菊 042 ウ 05)
	バヨカイ	: <i>payokay</i> ³⁰	「行き来する」(学 009 ウ 08)
	ヲロワ	: <i>orowa</i> ³¹	「それから」(菊 038 オ 09)

²³ 《他》 *ikoysampa, ekoysampa, ekuysampa* など。

²⁴ 註 23 を参照。

²⁵ 《他》 *yuwanke, iwanke, iwanki, eywanki* など。

²⁶ 《他》 *opeka, upeka, owpika* など。

²⁷ 《他》 *yuku, eyku, ik* など。

²⁸ 《他》 *noye, noy, nuy* など。

²⁹ 《他》 *yopke, yopuke, yupuke, yupuki* など。

³⁰ 《他》 *payokaye, payukaye, payukay* など。

³¹ 《他》 *orwa, worowa, owrowa* など。

ハウエ	: <i>hawe</i> ³²	「～の声」(菊 037 オ 09)
ルエ/ルイ	: <i>ruwe</i> ³³	「こと、の」(学 011 ウ 02, 学 002 オ 06)
ワヲ	: <i>wawo</i> ³⁴	「アオバト」(菊 033 ウ 05)

3. 3. 3. 開音節：子音＋母音【CV】

3. 3. 3. 1. 基本形

「子音＋母音【CV】」の場合も原則1に準じるので、カナ表記上、i、e、o 列の母音で表される場合は、幾つかの実現可能なレパートリーを持つことになる。副音が /u/ であっても o 列のカナで書かれたり（例：モ /mu/）、副音が i であっても e 列のカナで書かれたり（例：キ /ke/）ということは普通にある。また、加賀家文書では、「ネ」は常に「子」と表記される。

原則6 子音 (k, s, r, m, n, h)＋母音【CV】(タ、ヤ、ワ行を除く)

カ : ka	キ : ki/ke	ク : ku	ケ : ke/ki	コ : ko/ku
サ : sa	シ : si/se	ス : su	セ : se/si	ソ : so/su
ナ : na	ニ : ni/ne	ヌ : nu	子 : ne/ni	ノ : no/nu
ハ : ha	ヒ : hi/he	フ : hu	ヘ : he/hi	ホ : ho/hu
マ : ma	ミ : mi/me	ム : mu	メ : me/mi	モ : mo/mu
ラ : ra	リ : ri/re	ル : ru	レ : re/ri	ロ : ro/ru

原則6のほか、①ハ行は語末や語中ではこれらが濁音・半濁音を示している可能性が非常に高いということ（「濁音・半濁音」を参照）や、②同様の表記であっても母音が後続しない単独の子音を表していることもある（「音節末の子音」を参照）ので注意しなければならない。

タ行についてはカナ表記からローマ字表記に変換する際に特殊なふるまいをするため、原則7として別記する。

原則7 子音 (t, c)＋母音【CV】(タ行)

タ	: ta
チ	: ci
ツ	: ci

³² 《他》 *hauy, hauye* など。

³³ 《他》 *rue, ruy, ruye* など。

³⁴ 《他》 *wao, waw* など。

テ : te
ト : to/ tu

例)	タン子	: <i>tanne</i> ³⁵	「長い」(菊 041 オ 07)
	チセ/ツセ	: <i>cise</i> ³⁶	「家」(菊 044 オ 03, 菊 034 オ 03)
	テキ	: <i>teke</i> ³⁷	「～の手」(菊 041 オ 03)
	コトモ	: <i>kotom</i> ³⁸	「～かのように見える」(菊 042 ウ 09)
	カト	: <i>katu</i> ³⁹	「～の様子、～のふり」(菊 040 ウ 03)

アイヌ語には /ti/ が無く、/ci/ を表すために「チ」と「ツ」の二つの表記を使用する。これは日本語秋田方言で「チ」と「ツ」が両者ともに [tsi] /ci/ であるとする事実に反さないものである⁴⁰。アイヌ語の /tu/ という音は、上原熊次郎の『藻汐草』で「ヅ」という表記が採用されたことでよく知られているが、加賀家文書ではこれを「ト」や「ド」で表すことが多い。「ツ」や「ヅ」で表されていることもあるが、『藻汐草』の表記に引っ張られている可能性が高く、本意では無いように見える（詳しくは本章 3.4 節で見る）。

3. 3. 3. 2. 濁音・半濁音【CV】

アイヌ語は音韻的に清濁の区別（無声音と有声音の区別）が無い言語である⁴¹。よって、現在のアイヌ語表記では、全て無声破裂音のローマ字表記で表され、それに従うと以下のようなになる。なお、加賀家文書のなかで半濁点は殆ど使用されない。

原則 8 濁音と半濁音【CV】(ガ行、バ行、パ行)

ガ : ka	ギ : ki/ ke	グ : ku	ゲ : ke/ ki	ゴ : ko/ ku
バ : pa	ビ : pi/ pe	ブ : pu	ベ : pe/ pi	ボ : po/ pu
(ハ : pa	ヒ : pi/ pe	プ : pu	ヘ : pe/ pi	ポ : po/ pu)

ザ行とダ行についてはアイヌ語と日本語の音価の違いが明確に現れる。「ズ」と「ヅ」につ

³⁵ 《他》 *tanni* など。

³⁶ 《他》 *cisi* など。

³⁷ 《他》 *tek, teki* など。

³⁸ 《他》 *kotomo, kotumu, kotum* など。

³⁹ 《他》 *kato* など。

⁴⁰ 例えば、「土」と「乳」が [tsitsi] /cici/、「靴」と「口」が [kütsi] /kuci/ になるなど。(佐藤喜代治 1963: 11 ; アクセント記号は便宜上省略した。)

⁴¹ 清濁の区別が無いことは、Pilsudski (1912) が有聲の g, d, b を異音とし、それに同意を示す形で金田一 (1913 [1993: 82]) が「破裂音に於ては、清んで無声に呼んでも濁って有聲に呼んでも、やはりアイヌ語には同じ音韻だった」と指摘している。

いては実例が確認できていないため未詳である。日本語秋田方言で「ズ」は「ジ」([dzi] /zi/) と区別せず、「ヅ」が /ci/ や /tu/ の音価を表すことから考えても、「ズ」が見つければ /ci/ や /tu/ (さらなる可能性としては /cu/) を表すことが予想される⁴²。「ゾ」が /co/ を表すことができるかどうかは不明である。ダ行はタ行が表すものと音韻的な区別はない。

原則9 濁音と半濁音【CV】(ザ行、ダ行)

ザ : ca	ジ : ci	ズ : ?	ゼ : ci/ce	ゾ : ?
ダ : ta	ヂ : ci	ヅ : ci/ tu	デ : te	ド : to/tu

半濁音は何かの写本である場合に突如として現れる程度のもので、基本的には濁音表記が使用される。濁音表記の用例としてはバ行が最も多く、その他については用例がぐんと低くなるが、ガ行とダ行がテキスト中に散見される。ザ行に関しては殆どない。

濁点の有無に関しては写本同士で異なることも多く、今後量的に調べていく必要があるので検討課題として残しておくことにするが、本章 3.4.5 節で表記の傾向だけ概観する。なお、「ブ」については、/pu/ ではなく、音節末の /-p/ である可能性が極めて高く、これについては本章 3.3.4.1 節で詳しく述べる。

3. 3. 3. 3. 拗音【CV】

アイヌ語にはそもそも拗音が無く、「キャ」、「ニャ」、「ヒャ」、「ミャ」、「リャ」等という音は存在しない。「アコロ イタク式」で「チャ、(チ、) チュ、チェ、チョ」は ca, (ci,) cu, ce, co にあたる。「シャ」と「サ」は音声的には存在するけれども音韻的な区別が無いため、sa, (si,) su, se, so を表す際、「アコロ イタク式」では「サ、(シ、) ス、セ、ソ」に統一している。尚、加賀家文書が執筆された時代の日本語は、拗音に小書きが採用されていないためアイヌ語のカタカナも小書きではなく、ここでもそのまま小書きにせず書き表すことにする⁴³。

原則10 拗音【CV】(シャ行、チャ行)

シャ : sa	シユ : su	シエ : ?	シヨ : so/ su
チャ : ca	チウ : cu	チェ : ce	チヨ : co/ cu

例)	シャハ	: sapa ⁴⁴	「頭」(菊 033 オ 01)
	クシユ	: kusu ⁴⁵	「~ので」(菊 034 オ 05)

⁴² 例えば、「地図」と「知事」は [tsĩ~dzi] /cizi/、「くじ」と「屑」は [kür~dzi] /kuzi/ など。(佐藤喜代治 (1963 [1994: 11]) ; アクセント記号は便宜上省略した。)

⁴³ ただし、田中 (1989a: 370) が上原熊次郎の表記として指摘するように「チャ、チュ、チョとヤ行の仮名を小さく右下に添える表記」らしいものというのは加賀家文書にもある。

⁴⁴ 《他》 siyapa など。

シヨモ	: <i>somo</i> ⁴⁶	「～(し/で)ない」(菊 036 ウ 03)
アシヨロ	: <i>asur</i> ⁴⁷	「噂」(学 11 ウ 08)
アチャボ	: <i>acapo</i> ⁴⁸	「父親」(菊 043 ウ 03)
チウツク	: <i>cuk</i> ⁴⁹	「秋」(菊 035 オ 03)
チエツプ	: <i>cep</i> ⁵⁰	「魚」(風 039 オ 11)
カッチヨ	: <i>katco</i> ⁵¹	「太鼓」(酉 048 ウ 05)
チヨク	: <i>cuk</i> ⁵²	「秋」(風 037 オ 01)

加賀家文書では「チウ」が /cu/ に対応するので、「チユ」が /cu/ に対応する例はまず見つからない⁵³。『藻汐草』の写しである資料番号 49 には「チユ」という表記が多く見られる。また、「チエ」が /ce/ にあたるの対し、「シエ」が /se/ にあたる例は見つかっていない⁵⁴。

/ci/ は「ツ」で表すことができるが、/ca/、/cu/、/ce/、/co/ が「ツア」、「ツウ」、「ツエ」、「ツヲ」と表記される例は今のところ見つかっていない。「ツイ」の例も殆ど無いが、/ci/ に対応する例が現段階で一件見つかっている。

原則 11 拗音【CV】(ツイ)

ツイ : ci

例) ツイシ : *cis*⁵⁵ 「泣く」(菊 041 ウ 05)

加賀家文書『イロハ蝦夷言』(資料番号 38)に「ツイ」が /tu/ を表す例として「ツイナシノ (tunasno)」という例がある。これは「早く」という意味のアイヌ語であるが、もし伝蔵が書けば「トナシノ (tunasno)」(菊 039 ウ 07)と表記されていそうなものである。何かを写したのか、筆者が伝蔵ではなく別にいるなどという恐れもあり検討を要する(/tu/ の主な表記法については、原則 7 と原則 9 を参照)。

また、/ka/ や /ga/ が、日本語秋田方言では合拗音の /kwa/ や /gwa/ で発音されることが

⁴⁵ 《他》 *kusiyu* など。

⁴⁶ 《他》 *siyomo, siyumo, somu, som* など。

⁴⁷ 《他》 *asiyoro, asiyor, asoro, asor* など。

⁴⁸ 《他》 *aciyapo, acapu* など。

⁴⁹ 《他》 *ciukku, ciuk* など。

⁵⁰ 《他》 *cieppu, ciep, ceppu* など。

⁵¹ 《他》 *katciyo* など。

⁵² 《他》 *ciyoku, cok, coku, cuku* など。

⁵³ シイチュク : *sicuk* 「仲秋」という例がかるうじて見つかる。(「九月御節句被下物申渡」資料番号 31 『御手本』)

⁵⁴ シエベ : *siipe* 「鮭」という例があるが、これは「シ」/si/ 「エ」/i/ 「ペ」/pe/ であり、「シエ」が /se/ を表しているわけではない。(「[アイヌ語解の歌]」(資料番号 31) の例である)。

⁵⁵ 《他》 *ciisi, ciis* など。

ある⁵⁶。これは、日本語からの借用語やカナ書き（一時的な借用を含む）の場合に見られる。

原則 12 合拗音【CV】（クワ）

クワ : ka

例)	クワナツ	: <i>kanaci</i> ⁵⁷	「少女、娘（＜雁の字）」（菊 044 ウ 07）
	クワンノン	: <i>kannon</i> ⁵⁸	「観音」（風 022 オ 05）

『役土人申上和解書扣上』（資料番号 39）などには「会所」のことをアイヌ語文中で「クワエシヨ (*kayso*)」と書いている例も見つかっている。

3. 3. 4. 閉音節：母音＋子音【VC】／子音＋母音＋子音【CVC】

3. 3. 4. 1. 基本形

アイヌ語は閉音節の使用が珍しくない言語であり、日本語の撥音便や拗音にあたるもの以外に音節末の子音 (-p, -t, -k, -s, -r, -m, -n, -w, -y) が存在する。ここでは促音や撥音 (-t, -m, -n)、半母音 (-w, -y) で表されるもの以外を扱う。

どの母音が副音となる可能性も考えられるのであるが、/u/ と /i/ を副音とするものが最も多く、/a/ と /o/ を副音とするものはごく僅かである。その傾向を示すために頻出するものを原則 13 に記載する。

原則 13 音節末の子音【-C】

ーキ／ーク	: -k
ーシ	: -s
ーヌ／ーノ	: -n
ーフ／ーブ	: -p
ーム／ーマ／ーモ	: -m
ーラ／ーリ／ール／ーレ／ーロ	: -r

佐藤喜代治 (1963 [1994: 13]) によると、秋田の多くの地点（八森も含む）では /k/ 列の

⁵⁶ 秋田県八森の話者で、/kwa/ や /gwa/ という合拗音をもつ語彙例は、「火事」、「西瓜」、「懐中時計」、「外国」、「菓罐（やかん）」、「元旦」、「正月」、「桑」、「鋤」などである。（佐藤喜代治 1963 [1994: 23]）

⁵⁷ 《他》 *kuwanaci, kuwanat, kanat* など。

⁵⁸ 《他》 *kuwannon, kannun* など。

子音のうち、「/ki/の子音は硬口蓋の強い摩擦音⁵⁹【中略】であり、有気音であることが多い。【中略】相対的に母音が弱く発音されるせいか、共通語のキよりむしろクに近く聞えるようなこともある」ということである。

例)	バテキ	: <i>patek</i> ⁶⁰	「(ただ) ~だけ」(菊 034 オ 05)
	キマテク	: <i>kimatek</i> ⁶¹	「あわてる」(菊 037 オ 05)

音節末の子音 /s/ については「シ」が採用される⁶²。これに関しては、「アコロ イタク式」のアイヌ語カナ表記でも小文字カタカナの「ス」ではなく「シ」を一律に用いるぐらいであって、日本語母語話者には「シ」に響くことが多い。もっとも、田村 (1998 :42) は「発話の末尾やポーズの前では、シの子音が出ることが多く、そのためカタカナ表記でも小さいシを書くことになっているが、いつもシに似た音色を持つわけではない」としたうえで、母音 u の後や、p、k の前、w の前に s が置かれた時には、スのような音色をもつことがあるとの見方を示している。確かに、上原熊次郎の『藻汐草』には「イスカグル (iskakur)「盗人」」のような例もあるわけで、伝蔵がこのような環境においても一律に「シ」で表そうとした点⁶³ は注目すべきかもしれない。

例)	ヲロシベ	: <i>oruspe</i> ⁶⁴	「話」(菊 037 ウ 05)
	ニシハ	: <i>nispa</i> ⁶⁵	「旦那」(菊 033 オ 03)
	セシケ	: <i>seske</i> ⁶⁶	「~を閉める」(菊 042 オ 09)

/n/ は本章 3.3.4.2 節の撥音で表されることが殆どであるが、「ワ」の前の /n/ は「ヌ」と表記されることがあり⁶⁷、そのほかの環境でも「ヌ」や「ノ」で表示されることがある。音節末の子音 -m は「ム」や撥音で表されることが多いが、特定の語に限り「マ」や「モ」でも表される。

⁵⁹ 佐藤喜代治 (1963 [1994: 13]) は「[k'ei]・[kei] など」としている。

⁶⁰ 《他》 *pateki, pateke* など。

⁶¹ 《他》 *kimateku* など。

⁶² 佐藤喜代治 (1963 [1994: 11]) によると、日本語秋田方言のシとスの母音は、両方とも中舌音の [i] であり、音韻的にはこの方言の /i/ 列と解釈されるため、この方言では /zu/・/su/・/cu/ が欠けていると考えられている。

⁶³ /w/ の前に /s/ が置かれた用例は、今回主に対象とした資料に見つからなかった。今後も調査を続ける必要はある。

⁶⁴ 《他》 *orospe, orosipe, orusipe, worospe* など。

⁶⁵ 《他》 *nisipa, nesipa, nespa* など。

⁶⁶ 《他》 *sesike, seski, sesiki,, siske* など。

⁶⁷ 田村他 (1998) が「n の後に wa が続く場合」として詳述している。

例)	アヌワ	: <i>an wa</i> ⁶⁸	「あつて、いて」(菊 042 ウ 01)
	ウエトレヌ	: <i>ueturen</i> ⁶⁹	「～と一緒にになる」(菊 036 オ 01)
	ホコノ	: <i>pokon</i> ⁷⁰	「(まるで) ～のように」(菊 034 オ 09)
	ケム	: <i>kem</i> ⁷¹	「血」(菊 035 ウ 09)
	イシヤマ	: <i>isam</i> ⁷²	「～が無い」(菊 036 オ 07)
	シシヤモ	: <i>sisam</i> ⁷³	「和人」(菊 035 ウ 07)

音節末の子音 /-p/ は「フ」や「ブ」で表されるが、促音を用いることでも表示される(詳しくは本章 3.3.4.3 節で述べる)。

例)	ツラマンテフ	: <i>ciramantep</i> ⁷⁴	「獲物」(風 025 ウ 05)
	ウセブ	: <i>usep</i> ⁷⁵	「反物」(菊 033 オ 07)

ラ行の子音末尾音は、次に響く母音の音が多様に聞こえることで有名であって、「アコロイタク式」のアイヌ語カナ表記でも、前に来る母音に合わせて「ラ、リ、ル、レ、ロ」を使用することになっている。加賀家文書でも全てが使用される。

例)	ウヌカラ	: <i>unukar</i> ⁷⁶	「互いを見合わす」(菊 042 オ 07)
	モシリ	: <i>mosir</i> ⁷⁷	「国」(菊 033 オ 01)
	ウムレクル	: <i>umurekkur</i> ⁷⁸	「夫婦」(菊 034 オ 03)
	ウタレ	: <i>utar</i> ⁷⁹	「人々」(学 002 ウ 10)
	コロ	: <i>kor</i> ⁸⁰	「～を持つ」(菊 034 オ 05)

3. 3. 4. 2. 撥音 [-C]

撥音は n または m で表す。特に両唇韻 (/p/, /m/) の前は音声的に [m] になるのだが、

⁶⁸ 《他》 *anu wa* など。

⁶⁹ 《他》 *uyetorenu, uytoren, uetorenu, uetoren* など。

⁷⁰ 《他》 *pokono, pukun, pukuno* など。

⁷¹ 《他》 *kemu, kim, kimu* など。

⁷² 《他》 *isama, esama, eysama* など。

⁷³ 《他》 *sisamo, sisamu* など。

⁷⁴ 《他》 *ciramantepu* など。

⁷⁵ 《他》 *usepu, usip, usipu* など。

⁷⁶ 《他》 *unukara* など。

⁷⁷ 《他》 *mosiri, musir, musiri* など。

⁷⁸ 《他》 *umurekuru, umurekur* など。

⁷⁹ 《他》 *utare, utari* など。

⁸⁰ 《他》 *koro, kur, kuru* など。

その形態素や語源にまで遡って表記分けされる傾向がある。ここでは、そのような状況も認めつつ、以下のようにまとめる。

原則 14 撥音 **[-C]** (ン)

—ン : -n
 —ン (+バ/パ/マ行音) : -m

例)	コタン	: <i>kotan</i> ⁸¹	「集落」(菊 033 オ 01)
	シヤランベ	: <i>saranpe</i> ⁸²	「絹織物」(菊 033 オ 07)
	カンビ	: <i>kampi</i> ⁸³	「紙」(菊 036 オ 09)
	テンコロ	: <i>temkor</i> ⁸⁴	「～を抱く」(菊 045 オ 01)

3. 3. 4. 3. 促音 **[-C]**

促音の「ツ」は小書きになっていることがあるが、もとは区別なく書いていたものである。ここでは小書きになっていない「ツ」も含めてまとめる。現段階で得られた情報を基にまとめると、原則 15 から原則 17 の三種類に分けられる。

原則 15 語中音節末の p, t, k を表す促音 **[-C]** (ツ/ッ)

—ツ/—ッ : -p/ -t/ -k

例)	ホシツバ	: <i>hosippa</i> ⁸⁵	「帰る (複数形)」(チャ 049 オ 01)
	アツバケ	: <i>appake</i> (< <i>atpake</i>) ⁸⁶	「最初」(学 002 ウ 08)
	カッチヤマ	: <i>katcama</i> ⁸⁷	「～の様子」(菊 040 オ 01)
	テツテレケレ	: <i>tetterekere</i> ⁸⁸	「～を飛び跳ねさせる」(菊 045 オ 01)
	ラツケ	: <i>rakki</i> (< <i>ratki</i>) ⁸⁹	「垂れ下がる」(菊 041 オ 01)
	エタッテ	: <i>itakte</i> ⁹⁰	「～に話させる」(風 040 オ 04)

⁸¹ 《他》 *kutan* など。

⁸² 《他》 *siyaranpe* など。

⁸³ 《他》 *kampe* など。

⁸⁴ 《他》 *temkoro*, *tenkor*, *tenkur* など。

⁸⁵ 《他》 *hositpa*, *hosikpa*, *hosicipa* など。

⁸⁶ 《他》 *acipake*, *akpake*, *appaki* など。

⁸⁷ 《他》 *katcam* など。

⁸⁸ 《他》 *tetterkere*, *tetterker*, *tekterekare* など。

⁸⁹ 《他》 *rakke*, *racike*, *raciki* など。

⁹⁰ 《他》 *etatte*, *itatte*, *etakte* など。

ウムレツクル : *umurekkur*⁹¹ 「夫婦」(菊 043 ウ 07)

原則 16 語末⁹² の t や k を表す促音 【-C】(ツ/ッ)

—ツ/—ッ : -t/-k

例) ヲワツ : *owat*⁹³ 「蛙」(菊 039 オ 09)
 ウムレツ : *umurek*⁹⁴ 「夫婦」(菊 039 オ 07)

原則 17 語末の p や k を導く促音 【-C】(ック/ッフ)

—ック : -k

—ッフ/—ッブ : -p

例) チウック : *cuk*⁹⁵ 「秋」(菊 035 オ 03)
 チウッフ : *cup*⁹⁶ 「月」(風 037 オ 01)

アイヌ語(北海道方言)の音節末には、*/-c/*、*/-h/* が立たないため、「—ツツ」が *-c*、「—ッフ」が */-h/* になることはない。*/-k/* を表す場合は原則 17 か原則 13 が主に使用されるため、原則 16 は */-k/* よりも */-t/* を表す場合が多い。

3. 3. 5. その他

3. 3. 5. 1. 長音【V/VC/V(h)V/V'V】

長音は、長音符で表される場合と、母音で表す場合二通りがある。直前の母音が */a/* であれば「ア」、直前の母音が */e/* 列や */i/* 列の場合には、「エ」と「イ」のどちらの母音がかかることもできる。なお、直前の母音が */o/* 列の場合は、「ヲ」ではなく「ウ」が入る例しか今のところ確認できていない。

アイヌ語北海道方言は主に高低アクセント(ピッチ)であって、通例、第二音節の母音にアクセントがおかれる。いっぽう、母音の長短(音節の長短)は区別しない⁹⁷ので、ロ

⁹¹ 《他》*umurekkuru, umuretkur, umurecikur* など。

⁹² 原則 16 と 原則 17 でいう「語末」は「音韻語の語末」を指す(「音韻語」は Dixon (2010: 3) より)。

⁹³ 《他》*owaci, owak* など。

⁹⁴ 《他》*umureci, umrek, umreku* など。

⁹⁵ 《他》*ciuk, ciukku, cukku* など。

⁹⁶ 《他》*ciup, ciuppu, cuppu* など。

⁹⁷ 母音の長短が無いことは、Batchelor (1887) の頃から指摘されていたが、金田一 (1931) で改めて説明が施されている。

一マ字表記では母音の長短を無視する。

原則 18 長音【V/VC/V(h)V/VV】

ー/ア/イ/ウ/エ/ヲ : 例外アクセント、所属形 (V(h)V)⁹⁸、
音節末の半母音 (VC)、母音連続 (VV)

例)	ヲウ/ヲー	: <i>o</i> ⁹⁹	「～を～に入れる」(学 09 ウ 04/風 036 ウ 12)
	キー	: <i>ki</i> ¹⁰⁰	「～をする」(学 009 ウ 02、チヤ 046 ウ 03)
	グー/クー	: <i>ku</i> ¹⁰¹	「弓」(チヤ 051 オ 05/チヤ 051 ウ 01)
	ナー/ナア	: <i>na</i> ¹⁰²	「まだ」(風 039 オ 04/チヤ 054 オ 01)
	ニイ	: <i>ni</i> ¹⁰³	「木」(学 002 ウ 02)
	トウ	: <i>to</i> ¹⁰⁴	「沼」(チヤ 046 ウ 03)
	ヤー	: <i>ya</i>	「陸」(風 037 オ 11)
	リエ	: <i>ri</i> ¹⁰⁵	「高い」(風 036 ウ 16)
	ルウ	: <i>ru</i> ¹⁰⁶	「道」(学 009 ウ 08)
	子ー	: <i>ne</i> ¹⁰⁷	「～である」(チヤ 046 オ 07)
	ベー	: <i>pe</i> ¹⁰⁸	「水」(チヤ 049 ウ 01)
	ボウ	: <i>pó(-h)o</i> ¹⁰⁹	「(～の) 子」(風 039 ウ 03)
	レイ	: <i>ré(-h)e</i> ¹¹⁰	「～の名前」(菊 034 オ 07)
	シイシヤク	: <i>sísak</i> ¹¹¹	「熟した」(菊 035 ウ 09)
	ツセー	: <i>cisé(-h)e</i> ¹¹²	「～の家」(菊 044 ウ 01)
	ナア	: <i>néa</i> ¹¹³	「その」(学 007 ウ 04)
	ニイテキ	: <i>nítek</i> ¹¹⁴	「枝」(菊 035 オ 01)

⁹⁸ 北海道東部方言では /h/ が脱落することが多いため、所属形も /h/ が脱落して VV となっている可能性が高い。

⁹⁹ 《他》 *ow, wo, wow* など。

¹⁰⁰ 《他》 *ke, kee* など。

¹⁰¹ 《他》 *ki, kii*

¹⁰² 《他》 *naa* など。

¹⁰³ 《他》 *nii* など。

¹⁰⁴ 《他》 *too, tu, tuu* など。

¹⁰⁵ 《他》 *yaa* など。

¹⁰⁶ 《他》 *riye, rii, rie* など。

¹⁰⁷ 《他》 *ruu* など。

¹⁰⁸ 《他》 *nee, nii, ni* など。

¹⁰⁹ 《他》 *pee, pii, pi* など。

¹¹⁰ 《他》 *pow* など。

¹¹¹ 《他》 *rey, ree* など。

¹¹² 《他》 *siisak, siisaku, sisaku* など。

¹¹³ 《他》 *cisee, cisi, cisii* など。

バアセ	: <i>páse</i> ¹¹⁵	「重い」(学 002 ウ 10)
モーモツベ	: <i>momok pe</i> ¹¹⁶	「小間物」(学 008 ウ 06)
エンカ子ーベカ	: <i>inkaneypeka</i> ¹¹⁷	「決して～するな」(菊 036 ウ 03)

古文献のアイヌ語に関する長音表示については、田中 (1989b) などによって、「アクセント核のある音節が、長音符号「ー」を用いて表記される場合がある」(p. 29) と指摘があるものの、あまり明確なことは言えない。浅井 (1972: 144) も、加賀家文書「チヤコルベ」のアイヌ語表記について、「アクセントのある開音節、特に1音節語では母音が長めに発音されるのでこのように表記されたのであろう」と指摘している。

加賀家文書においても、長音がいれた場合は、ほぼ全てにおいてアクセント核のある位置に用いられる。第一音節の母音にアクセントがくるような例外アクセントの語類には、特に長音が使用される傾向がある。このほか、所属形を持つ語については長音が使われることで所属形を表している可能性があること、音節末の半母音や母音連続を表す場合があること、1モーラの文法語¹¹⁸に長音が使用されやすいことなどがある。

本論文の第5章ではアイヌ語の音韻体系等を概観するが、「根室方言」の韻律構造が高低アクセントであるのか、長短アクセントであるのか、無アクセントであるのか、ということは実のところ明確ではない。しかしながら、ローマ字表記のための指標としては欠かせない情報であるには違いないため、ひとまず例を挙げるに留めて今後の研究に委ねることにする。

3. 3. 5. 2. 声門閉鎖音【(C)】

アイヌ語北海道方言では(一部の方言を除き)長母音と短母音の区別がない。母音が2つ連続し、それらが同一の音韻語に属する場合は、概ねその間に声門閉鎖音 [ʔ] (あるいは、わたり音 [w], [y]) が入る。声門閉鎖音はカタカナでは特記されないが、アイヌ語ローマ字表記では子音に続く母音が連結しないことを示すために声門閉鎖音を表記することがある。

原則 19 声門閉鎖音【(C)】

表記なし : ' ([ʔ])

¹¹⁴ 《他》 *naa, na* など。

¹¹⁵ 《他》 *niiteki, niteki* など。

¹¹⁶ *momok* のアクセント位置について筆者は確認できていないが、藤村久和先生に第一音節にアクセントがくる単語であるとお教えいただいた。《他》 *momoppe* など。

¹¹⁷ 《他》 *enkanepaka, enkaneypeka, yenkanepaka* など。

¹¹⁸ 「文法語 (grammatical word)」とは、文法的な(すなわち形態的・統語的な)原理の全てにおいて規定される語のことを言う。これに対して、音韻的な原理の全てにおいて規定される語を「音韻語 (phonological word)」と言う(詳しくは、Dixon (2010: 3) を参照のこと)。

声門閉鎖音 ([ʔ]) を音素（一つの子音）とみなすかどうかは研究者によって立場が異なる。声門閉鎖音を音素とみなす立場は、母音が連続する場合に声門閉鎖音が入るという特徴をひとつの根拠にしている。これに対して、声門閉鎖音を音素と認めない立場は、声門閉鎖音の有無が（例外はあるものの）意味特徴に影響しないことや、語頭の声門閉鎖音が不規則に脱落することなどが十分に説明できていないことを指摘している

声門閉鎖音は、たとえそれを音素と認める研究者であっても、現れる可能性のある位置が規則的であるため、表記上は省略するのが近年の傾向である。一方、音素と認めない研究者でも、VCV という音素配列において、例外的に¹¹⁹ 子音の後ろで音節が切れ、さらにこれらが同一の文法語内に含まれる場合は、分かりやすいように VC'V と表記するのが慣例となっている。

例) ay'ay 「赤ちゃん」、hioy'oy 「どうも」

声門閉鎖音は音節頭にしか立たないというのもよく言われることであるが、語末（音韻語末）の母音（特に /a, e, o/）の後ろは声門閉鎖音が起こりやすい環境であり、話者によってはかなり規則的に表れることもある。

3. 4. 伝蔵による表記の傾向

加賀家文書には、寛政4(1792)年に成立し、日本で初めて刊行された『藻汐草』という日本語・アイヌ語辞書の写しと、そこから更に見出しを抜き出して語源解をつけた語彙集が存在する（詳しくは第4章に譲る）。ここでは前者を「藻汐草 [写]」、後者を「[蝦夷語和解]」とし、これらを比較対照させることで田中・佐々木(1985)の「伝蔵自身の書き癖によって、ヅをトに、チをツに、二重母音の y にあたるイをエに直したり、長音符号を省いたりなどの訂正もなされている」という点を検証すべく、伝蔵独自の表記法についてまとめることにする。筆者(深澤)の編集上の都合で三点ほど先に述べておく。

- ①本章3.3節のローマ字表記法において示した原則に当てはまらない場合や、音素を特定し兼ねるような場合は、方言差や文法（形態素の結合価）などを考慮し、そこで推定される最も適切な形を箱括弧 ([]) に入れて表記する。これを筆者(深澤)は「推定形」と呼び、今後の検討課題を含む単語として他と区別しておくことにする；例) エシウナ: [esna] 「くしゃみ」。
- ②アイヌ語カナ箇所括弧書きで、例えば「ラルウツ(ド)(トル)」などと記されている箇所は、縦書き本文の「ツ」の横に「ド」と「ト」と並べて書いてあることを示す。
- ③アイヌ語の現代語訳は、『沙流方言辞典』や『千歳方言辞典』を参考にして付けているが、

¹¹⁹ VCV の場合は多くが V.CV となり、VC.V という音節の切れ目をもつ文法語は少数である。

それらに記載がなかったり、他の辞典に適切な訳語があるような場合は以下の略号で示した。

- (B) バチェラー・ジョン (1938) 『アイヌ・英・和辞典』 第四版. 岩波書店.
- (C 人) 知里真志保 (1975) 『知里真志保著作集別巻Ⅱ：分類アイヌ語辞典人間編』 平凡社.
(初出：(1954) 『分類アイヌ語辞典人間編』 日本常民文化研究所.)
- (C 地) 知里真志保 (1956a) 『地名アイヌ語小辞典』 北海道出版企画センター.
- (H) 服部四郎 (編) (1964) 『アイヌ語方言辞典』 岩波書店.
- (Kb) 久保寺逸彦 (編) (1992) 『アイヌ語・日本語辞典稿』 北海道文化財保護協会.
- (Ky) 萱野茂 (2002 [第一版 1996]) 『萱野茂のアイヌ語辞典』 三省堂.
- (S) 末岡外美夫 (1979) 『アイヌの星』 旭川市図書館.
- (Tr) 鳥居龍蔵 (1903) 『千島アイヌ』 吉川弘文館.

3. 4. 1. /tu/ や /to/ の表記

(3-1) から (3-3) は、原典の上原『藻汐草』が「ツ」や「ツ」で表している /tu/ や /to/ に関する変遷である。

(3-1) ツ° (→ツ) → ト

上原藻汐草	藻汐草 [写]	蝦夷語和解	見出し	ローマ字	現代語訳
ツ°	ツ°	ト			
シリウツ° ル	シリウツ° ル	シリウトロ	境	<i>sir'utur(, -u)</i>	二つの地の中間 (C 地)
コタンウツ° ル	コタンウツ° ル	コタンウトロ	境	<i>kotan utur(, -u)</i>	村と村の間
ツ° タン	ツ° タン	トタン	近所	<i>tutan?</i>	次の、第二の (Kb)
メツ°	メツ°	メト	坪	<i>meto?</i>	なぎ(凧)?
シリコツ° ル	シリコツ° ル	シリコトル	坂	<i>sirkotor, -o</i>	山腹の傾斜地 (C 地)
ツ°	ツ	ツ			
イビツ° シル	イビツシル	イヒツノボリ	兀(はげ山)	<i>[epitce?] sir/ nupuri</i>	はげ山
ツ°	ツ/ト	ト			
シリイツ°	シリイツ(ト)	シリエト	崎	<i>sir'etu</i>	みさき (C 地)

ポ子ツ° ンコ ニ	ポ子ツ(ト) ン コニ	ポ子トンコニ	骨痛	<i>pone tom koni</i>	骨の中が痛 む
ツ°	ト	ト			
ケウシユツ°	ケウシト	ケウシト	伯父	<i>kewsut, -u</i>	~のおじ
ツ° レシ	トレシ	トレシボ	妹	<i>tures/ turespo</i>	妹
エツ° ー	エート	エート	鼻	<i>etu(, hu)</i>	(~の)鼻
セツ° ル	セトル	セトル	脊	<i>setur(, -u)</i>	(~の)背
ツ° シユシケ	トシユシケ	トシユシケ	身躰	<i>tususke</i>	ふるえる
イツ° ケム	イトケム	イトケム	鼻血	<i>etukem</i>	鼻血 (C人)
ツ° ムウエ	トムウエ	トモウエン	疾	<i>tomowen</i>	胸中が悪い

(3-2) ツ° (→ ツ) → ト/ド

上原藻汐草	藻汐草 [写]	蝦夷語和解	見出し	ローマ字	現代語訳
ツ°	ド	ド			
ツ° ツク	ドツク	ドツク	癒ゆる	<i>tuk</i>	(傷が盛り 上がって) 治る
ツ°	ヅ	ド			
グツ° ン子	グヅン子	クドン子	岩山	<i>kutunne</i>	岩だらけの (B)
ツ°	ヅ/ト	ト			
アツ° イ	アヅ(ト)イ	アトイ	海	<i>atuy</i>	海

(3-3) ツ → ト

上原藻汐草	藻汐草 [写]	蝦夷語和解	見出し	ローマ字	現代語訳
ツ	ツ	ト			
ツルケシ	ツルケシ	トルケシ	なまず	<i>turkes</i>	ほくろ、癩
ツ	ト	ト			
クツレシボ	クトレシボ	トレシボ	妹	<i>(ku=) turespo</i>	(私の)妹

(3-4) ト → ド

上原藻汐草	藻汐草 [写]	蝦夷語和解	見出し	ローマ字	現代語訳
ト	ド	ド			
子トバケ	子ドバケ	子ドハケ	身	<i>netopa, -ke</i>	身体

(3-1) と (3-2) を見ると、田中・佐々木 (1985) の指摘するように「ツ° をトに」直そうとしていることは間違いないが、ツの半濁点をとったり、濁点に変更するという中間段階が存在する。(3-3) のように上原『藻汐草』の時点で半濁点のない「ツ」が使用されている場合は、そのまま「ト」に変更しようとする力が働く。また、一例だけであるが (3-4) のように元々「ト」が使用されているものが「ド」へ変更された例も見つかっている。

以上のことを考え合わせると、/tu/ や /to/ の表記において「ツ° → ツ → ト → ド」という変遷が確認される。

3. 4. 2. /ci/ の表記

(3-5) と (3-6) は、原典の上原『藻汐草』が「チ」や「ジ」で表している /ci/ に関する表記の変遷である。

(3-5) チ → ツ (→ チ)

上原藻汐草	藻汐草 [写]	蝦夷語和解	見出し	ローマ字	現代語訳
チ	チ	ツ			
マチヤントノ	マチヤントノ	マツアントノ	町奉行	<i>maciya an tono</i>	町にいる役人
チ	ツ	ツ			
シユチ	シユツ	シユツ	母の母	<i>sut(, -i)</i>	(~の)祖母
マチ	マツ	マウツ	婦(つま)	<i>mat(, -i)</i>	(~の)妻
マチ	マツ	マツ	婦(つま)	<i>mat(, -i)</i>	(~の)妻
チセコチカム イ	チセコツカム エ	チセコツカモ イ	蝦夷地上古 の人	<i>cisekot(, -i) kamuy</i>	家の跡の神
チ	ツ	チ			
マチ子ヘカチ	マツ子セカツ	マツ子セカチ	女子	<i>matne hekaci</i>	女の子

(3-6) チ → ゼ → チ

上原藻汐草	藻汐草 [写]	蝦夷語和解	見出し	ローマ字	現代語訳
ヂ	ヂ	チ			
ヲガンヂ	ヲカンヂ	ヲカンチリコ ブ	(星の図) 如此星	<i>okanci</i> (<i>rikop</i>)	オリオン三 星 (S)

(3-7) ジ → ツ

上原藻汐草	藻汐草 [写]	蝦夷語和解	見出し	ローマ字	現代語訳
ジ	ツ				
コンジ	コンツ	—	帽	<i>konci</i>	帽子、頭巾

田中・佐々木 (1985) は「チをツに」直したという指摘しているが、「マツ子セカチ」のように再び「チ」に戻している例も見つかっている。本章 3.3.3.1 節で見たように、加賀家文書では /ci/ を「ツ」で表す例も少なくないが、音節末の子音 /t/ を表している可能性もあり、判然としない状況である。例えば、*sut* は「祖母」の概念形、*suci* は「祖母」の所属形を表すが、「シユツ」がどちらを表したものは明確でない。また、(3-6) のように「ヂ」から「チ」への変更も見つかっており、必ずしも「ツ」に全てを直してしまおうということではなさそうである。

なお、「蝦夷語和解」に対応する例はないが、(3-7) のような「ジ → ツ」という変更も見つかっており、「ジ」という表記をあえて避けようとしたという可能性が考えられる。

3. 4. 3. 子音 /y/ およびアクセント核のない母音 /e/ や /i/ の表記

ここでは、原典の上原『藻汐草』が「イ」と表記している子音の /y/ [j] および、アクセント核のない音節頭の /e/ や /i/ に関する表記の変遷を見る。

(3-8) イ → エ (→イ)

上原藻汐草	藻汐草 [写]	蝦夷語和解	見出し	ローマ字	現代語訳
イ	イ	エ			
バイカル	バイカル	バエカル	春	<i>paykar</i>	春
ヤイゴエゴモ	ヤイゴエゴモ	ヤエコエコモ	兄弟女婦に 成る者	<i>yaykoekomo</i>	夫や妻にな った兄弟姉 妹
ウトクイコロ	ウトクイコロ	ウトクエクル	知縁	<i>utokuyekor</i>	互いに親し く付き合う

シリイツ°	シリイツ(ト)	シリエト	崎	<i>sir'etu</i>	みさき (C地)
イシ子レプ	イシ子レブ	エシン子レフ	幽霊(ばけ物)	<i>isinnerep</i>	化物 (Kb)
イロー	イロゝ	エロゝ	あなた	<i>eror?</i>	あなた?
イ	エ	エ			
ヲコイマ	ヲコエマ	ヲコエマ	小便	<i>okoyma</i>	小便する
トイマ	トエマ	トエマ	遠い	<i>tuyma</i>	遠い
マツコイワク	マツコエワク	マツコエワク	飛星	<i>matkoywak</i>	夜這い星、 流れ星 (Ky)
シユ\／タイ	シユ\／タエ	シユ\／タエ	柳原	<i>susutay</i>	柳原
テイ子トイ	テイ子トエ	テイ子トエ	泥	<i>teynetoy</i>	濡れた土、 泥
クイカイチュ ツプ	クエカエチュ フ	クエカエチュ ブ	十一月	<i>kuykaycup</i>	旧暦の11 月
トイタ	トエタ	トエタ	畠	<i>toyta</i>	耕作する
トイタシシヤ モ	トエタシシヤ モ	トエタシシヤ モ	百姓	<i>toyta sisam</i>	耕作する人
チヨーカイ	チヨカエ	チヨカエ	此方	<i>ciokay</i>	私たち (除外形)
アノカイ	アノカエ	アノカエ	其方	<i>anokay</i>	私たち (包括形)
ヤイキマイバ	ヤエキマエバ	ヤエキマエバ	不孝もの	<i>yaykimaypa</i>	親の言うこ とをきかな い?
イ	エ	イ			
ヲツカイ	ヲツカエ	ヲツカイ	男	<i>okkay</i>	男
ヲツカイポホ	ヲツカエポホ	ヲツカイポ	男子	<i>okkaypo</i>	青年
チュツカモイ	チュツカモエ	チュウツカモ イ	日月	<i>cup kamuy</i>	太陽、月
コタンカラカ モイ	コタンカラカ ムエ	コタンカラカ ムイ	阿弥陀如来	<i>kotan kar kamuy</i>	国創りの神
チセコチカム イ	チセコツカム エ	チセコツカモ イ	蝦夷地上古 の人	<i>cisekot, -i kamuy</i>	家の跡の神

ヘカイ	ヘカエ	ヘカイ	老るもの	<i>hekay(e)</i> ¹²⁰	老いる
-----	-----	-----	------	--------------------------------	-----

田中・佐々木 (1985) は「二重母音の y にあたるイをエに直したり」と述べている。しかし、「シリエト」や「エロハ」、「エシン子レフ」のように、アクセント核のない音節頭の /e/ や /i/ に関しても同様の傾向が確認できた。また、「蝦夷語和解」において再び「イ」に戻る例が *okkay* や *kamuy* などの特定の語彙に見られたことを一言付け加えておきたい。

本章 3.3.2 節で見たように、加賀家文書の表記法として音節末の /y/ は前の母音が /a/, /o/, /u/ のどれであっても「イ」と「エ」で表すことが可能であるが、前の母音が /e/ のものはやはり確認できなかった。このほか、(3-9) のようにアクセント核のない音節頭の /i/ に関しては「イ → ユ」という変更も確認されている。

(3-9) イ → ユ

上原藻汐草	藻汐草 [写]	蝦夷語和解	見出し	ローマ字	現代語訳
イ	イ	ユ			
イワンリコ プ、	イワンリコ プ、	ユワンリコブ	(星の図) 如此星	<i>iwán(rikop)</i>	プレアデス 星団 (S)

3. 4. 4. 長音の表記

ここでは、長音符や母音による長音の表記に関する変遷について見る。なお、本章 3.3.5.1 節で長音とアクセントの対応関係について触れたが、対応関係を見るためにアクセント核があると思われる位置を教科書的に示した。なお複合語に関してはこの限りではない。

(3-10) 有 → 無

上原藻汐草	藻汐草 [写]	蝦夷語和解	見出し	ローマ字	現代語訳
長音符	長音符	無し			
エントーカモ イ	エントーカモ イ	エントカム (モ)イ	公儀	<i>Énto</i> <i>kamúy</i>	江戸の役人
ウーラリ	ウーラリ	ウラリ	霧	<i>úrar</i>	霧
長音符	無し	無し			
バンチヨー	バンチヨ	バンチヨ	大工	<i>páncō</i>	大工
チヨーカイ	チヨカエ	チヨカエ	此方	<i>ciókay</i>	私たち (除外形)

¹²⁰ /ye/ については「イ」でも「エ」でも表せるため、この例のみ /ye/ を表しているかもしれない。樺太や沙流に見られる *hekaye* か、幌別や宗谷に見られる *hekay* のどちらかの語形を表していると考えられる。

イロー	イロゝ	エロゝ	あなた	<i>erór?</i>	あなた?
母音	母音	無し			
レライアバマ カ	レライアバマ カ	レラアバマカ	暈	<i>réraapa maka?</i>	風の戸が開 く?

(3-11) 無 → 有

上原藻汐草	藻汐草 [写]	蝦夷語和解	見出し	ローマ字	現代語訳
無し	無し	長音符			
ル	ル	ルー	道路	<i>rú</i>	道路
無し	無し	母音			
チホグル	チホグル	チホヲグル	船方	<i>cípokur</i>	船乗り
無し	母音	母音			
ルアツケンベ	ルイアツケン へ	ルイアツケン べ	大指	<i>[ruyé- askepet]</i>	親指?

(3-12) 有 → 有 (長音符→母音、長音符位置変更、母音変更)

上原藻汐草	藻汐草 [写]	蝦夷語和解	見出し	ローマ字	現代語訳
長音符	長音符	母音			
チー	チー	チイ	陰茎	<i>cí/ ci, -yé</i>	(~の)陰茎
コタンイーバ キタ	コタンイーバ キタ	コタンエイバ ケタ	郊	<i>kotán eépak(, -i) ta</i>	村のはずれ で
トーケシ	トーケシ	トウケシ	晩方	<i>tókes</i>	晩方
長音符	長音符 (位置)	長音符 (位置)			
エツ [°] ー	エート	エート	鼻	<i>etú, -hu</i>	(~の)鼻
母音 (イ)	母音 (エ)	母音 (エ)			
チュツプリー	チュツフリエ	チュツブリエ	朝四ツ時	<i>cúp rí</i>	日が高い

田中・佐々木 (1985) は「長音符号を省いたりなどの訂正もなされている」と指摘しているが、(3-10) はまさに長音符号や長音を示す母音を省いた例である。また、(3-11) は逆に長音符号や母音をつけた例、(3-12) は長音の表し方を変更した例である。傾向として、田中・佐々木 (1985) の指摘はもっともであるが、それぞれの例において事情は異なる。

例えば、日本語からの借用語である *Ento* (< 江戸) や *panco* (< 番匠) は、上原『藻汐草』において長音符号が用いられているが、これは元々の日本語の影響であると思われる。これらを除き、上原『藻汐草』の長音符号はアクセント核の位置と合致している。一方、加

賀家文書は、一音節語の *ru* に関しては長音符を用いているが、そのほかは母音で代用する傾向がある。*etú* に関しては、アクセントの位置を考えても変更する理由はないはずのものであり一考を要する¹²¹。

なお、*cípokur* についてもアクセント位置と母音挿入の位置が異なるが、あえて「ホヲ」に変更したのは、/p/ の後に母音の /o/ があるということを明確に示すための工夫と考えられる。

3. 4. 5. 半濁点・濁点の表記

以下は、半濁点と濁点の表記変遷である。三種の資料に推定形あるいは形態素上の違いで部分的に一致する語がまたがるものについて可能な限り全てを記載した。

(3-13) 半濁点 → 濁点/無し

上原藻汐草	藻汐草 [写]	蝦夷語和解	見出し	ローマ字	現代語訳
半濁点	半濁点	濁点			
シユツシユツ プ	シユウシユツ プ	シユシユルブ	軽石	<i>sissirup/ sirsirup/ sursirup</i>	軽石 (C 地)
フツプ	フツプ	フツプ	腫	<i>hup</i>	腫れる
フプヲマ	フプヲマ	フッフヲマ	腫物	<i>hupoma</i>	はれもの、 おでき (C 人)
イワンリコ プ、	イワンリコ プ、	ユワンリコブ	(星の図) 如此星	<i>iwanrikop</i>	プレアデス 星団 (S)
ベツプタ	ベツプタ	ベツプタ	川向ふ	<i>petputa?</i>	川向こう?
メノコポホ	メノコポ、	メノコポ	女子	<i>menokopo</i>	女の子
ポ子ツ° ンコ ニ	ポ子ツ(ト) ン コニ	ポ子トンコニ	骨痛	<i>pone tom koni</i>	骨の中が痛 む
ポケシ	ポケシ	ポケシ	痣	<i>pokes, -i</i>	あざ (C 人)
半濁点	濁点	濁点			
ヒカ° タ	ヒガタ	ビガタ	午	<i>pikata</i>	南西 (H)
パシナ	バシナ	バシナ	灰/塵(チ リ)	<i>pasna</i>	ほこり

¹²¹ 例えば、*e=étu* 「お前の鼻」にすると長音符の説明がつくが、この語だけ人称接辞の *e=* (「お前の」) が付くと解釈するのは不自然であろう。

パナ	バナ	バナ	埃(ホコリ)	<i>pana</i>	ちり、 ほこり
アシノピカタ	アシノピカタ	アシノピカタ	未	<i>asnopikata</i>	未の方向?
カンピシシヤム	カンピシシヤム	センピシシヤモ	筆者	<i>kampi sisam</i>	字(を書く) 人
チュツプキ	チュツプキ	チュツプキ	映	<i>cupki</i>	日の光、 輝く (Ky)
チュツプライ	チュツプライ	チュツプライ	交蝕	<i>cupray</i>	月食、日食
シリポプケ	シリポプケ	ボプケ	暑	<i>(sir-)popke</i>	(気候が)暑い
トーカブ	トーカブ	トーカブ	乳	<i>tokap</i>	乳
タブシユス	タブシユス	タブシユス	肩	<i>tapsut, -u</i>	(~の)肩
ウブシヨロ	ウブシヨロ	ウブシヨロ	襟	<i>upsor, -o</i>	(~の)懐
ヲシヨロプイ	ヲシヨロプイ	ヲシヨロプイ	肛門	<i>osorpu, -e</i>	(~の)尻
シリポプケ	シリポプケ	ボプケ	暑	<i>(sir-)popke</i>	(気候が)暑い
クツレシポ	クトレシポ	トレシポ	妹	<i>(ku=) turespo</i>	(私の)妹
ヲツカイポホ	ヲツカエポホ	ヲツカイポ	男子	<i>okkaypo</i>	青年
半濁点	濁点	無し			
チュツプカタ ウタレ	チュブカタウ タレ	チュッフカタ ウタレ	東嶋々の蝦 夷	<i>cupkata utar</i>	東の者
イシ子レプ	イシ子レプ	エシン子レフ	幽霊(ばけ 物)	<i>isinnerep</i>	化物 (Kb)
半濁点	無し	無し			
イビツ ^o シル	イビツシル	イヒツノボリ	兀(はげ山)	<i>[epitce?] sir/ nupuri</i>	はげ山
チウプケ	チウフケ	チウフケ	影	<i>cupki</i>	日の光、 輝く (Ky)
チウルプ	チウルフ	チウイロフ	十二月	<i>cu(y)rup/ cirup</i>	旧暦の12 月
チュツプシカ リ	チツフシカリ	チウツフシカ リ	中旬	<i>cupsikari</i>	満月 (Ky)
チュツプニン	チツフニン	チウツフニン	下旬	<i>cupnin</i>	月が減る
チュツプホ	チュツフホ	チュツフホ	昼八ツ時	<i>cuphonene</i>	日がまわる

子ゝ	子ゝ	子ゝ			
ポイナ	ホイナ	ホイナ	石(中)	<i>poyna</i>	石 (Tr)
ポンチヨ	ホンチヨ	ホンチヨ	子供	<i>ponco</i>	あかんぼ、あかご (C人)
チポグル	チホグル	チホヲグル	船方	<i>cipokur</i>	船乗り
ポンコロメノコ	ホンコロメノコ	ホンコロメノコ	孕み女	<i>honkor menoko</i>	妊娠している女性
半濁点	無し	濁点			
ニシパ	ニシハ	ニシバ	貴人	<i>nispa</i>	旦那
ピシタ	ヒシタ	ビシタ	浜辺	<i>pis ta</i>	浜辺に
アプト	アフト	アプト	雨	<i>apto</i>	雨
レプタ	レフタ	レプタ	沖	<i>repta</i>	沖に
ベボブ	ベボフ	ベボブ	水の湧	<i>pepop</i>	水が湧く
トイタン子チュツプ	トエタン子チュフ	トウタン子チュブ	正月	<i>to(y)tanne cup</i>	旧暦の1月
モキウタチュツプ	モキウタチュフ	モクエタチュブ	三月	<i>mokiwta/ mokuyta cup</i>	旧暦の3月
シキウタチュツプ	シキタチュフ	シユクエタチュブ	四月	<i>sikiwta/ sikuyta cup</i>	旧暦の4月
モハウタチュウツプ	モハウタチュフ	モウタチュウブ	五月	<i>[momawta] cup</i>	旧暦の5月
シマウタチュウツプ	シマウタチュフ	シユマウタチュウブ	六月	<i>simawta/ sumawta cup</i>	旧暦の6月
ウレボケチュウツプ	ウレボケチュフ	ウレボケチュウブ	九月	<i>urepokecup</i>	旧暦の9月
シユナンチュウツプ	シユナンチュフ	シユナンチュウブ	十月	<i>sunancup</i>	旧暦の10月
クイカイチュウツプ	クエカエチュフ	クエカエチュウブ	十一月	<i>kuykaycup</i>	旧暦の11月
チュツプヲホツタラ	チュツフヲホツタラ	チュツプヲホツタラ	朝五ツ時	<i>cup ohottar?</i>	日が深い?

チュツプリイ	チュツフリエ	チュツブリエ	朝四ツ時	<i>cup ri</i>	日が高い
チュツプラン	チュツフラン	チュツブラン	晩七ツ時	<i>cup ran</i>	日が落ちる
シキラツプ	シキラツフ	シキラブ	まつ毛	<i>sikrap(, -u)</i>	(~の)まつげ
ハンカプイ	ハンカファイ	ハンカプイ	臍	<i>hankapuy, -e</i>	(~の)臍の穴
アベプシ	アヘフシ	アベプシ	飛火	<i>aepus</i>	火がはねる (Ky)
コンナリペ	コンナルヘ	コナルベ	伯母	<i>konnarpe</i>	伯母 (C 人)

(3-14) 濁点 → 無し (→濁点)

上原藻汐草	藻汐草 [写]	蝦夷語和解	見出し	ローマ字	現代語訳
濁点	濁点	無し			
グヅン子	グヅン子	クドン子	岩山	<i>kutunne</i>	岩だらけの (B)
シルングル	シルングル	シルンクル	乏者	<i>sirunkur</i>	貧乏者
ヤイゴエゴモ	ヤイゴエゴモ	ヤエコエコモ	兄弟女婦に成る者	<i>yaykoekomo</i>	夫や妻になった兄弟姉妹
ヲガンヂ	ヲカンヂ	ヲカンチリコブ	(星の図)如此星	<i>okanci (rikop)</i>	オリオン三星 (S)
子トバケ	子ドバケ	子ドハケ	身	<i>netopa, -ke</i>	身体
イビツ° シル	イビツシル	イヒツノボリ	兀(はげ山)	<i>[epitce?] sir/ nupuri</i>	はげ山
ヌブリ	ヌブリ	ヌフリ	岳	<i>nupuri</i>	山
ムンベ	ムンベ	ムンヘ	露	<i>munpe</i>	草の露
ハボ	ハボ	ハホ	母	<i>hapo</i>	お母さん
テイ子ボキナシリ	テイ子ボキナシリ	テイ子ホキナシリ	地獄	<i>teyne-poknasir, -i</i>	じめじめした下界 (C 地)
濁点	無し	無し			
ヲガンヂ	ヲカンヂ	ヲカンチリコブ	(星の図)如此星	<i>okanci (rikop)</i>	オリオン三星 (S)
イスカグル	イスカクル	イヌカクル	盗人	<i>iskakur</i>	盗人
ハンゲ	ハンケ	ハンケ	近い	<i>hanke</i>	近い

ビタラ	ヒタラ	ヒタラ	川原	<i>pitara</i>	川原
ベツヲシヨロ	ヘツヲシヨロ	ヘツヲシヨロ	川尻	<i>pet'osor, -o</i>	川尻
濁点	無し	濁点			
バナケ	ハナケ	バナケ	川下	<i>pana, -ke</i>	川下
ルヲコビ ¹²²	ルヲコヒ	ルヲコビ	岐	<i>ruokopi</i>	川の分岐点
ルアンペ	ルアンヘ	ルアンペ	雨	<i>ruanpe</i>	雨
アベ	アヘ	アベ	火	<i>ape</i>	火
ベツ	ヘツ	ベツ	川	<i>pet</i>	川
クルツベ	クルツヘ	クルツベ	霜	<i>kuruppe</i>	霜
ベナタ	ヘナタ	ベナタ	川上	<i>pena ta</i>	川上
ベツブツ	ヘツブツ	ベツブツ	川尻	<i>petput, -u</i>	川尻
ベツチャ	ヘツチャ	ベツチャ	川岸	<i>petca</i>	川岸
ベツシヤム	ヘツシヤム	ベツシヤム	川端	<i>petsam</i>	川端
ベシカンベ	ベシカンヘ	ベシカンベ	刃	<i>peskanpe</i>	東風
アベプシ	アヘフシ	アベプシ	飛火	<i>apepus</i>	火がはねる (Ky)
バルンベ	バルンヘ	バクルヲベ	舌	<i>parunpe</i>	舌

(3-15) 無 → 濁点

上原藻汐草	藻汐草 [写]	蝦夷語和解	見出し	ローマ字	現代語訳
無し	無し	濁点			
ヲタシヤム	ヲタシヤム	ヲダシヤム	浜端た	<i>otasam</i>	砂浜
ハーリ、	ハーリ、	バーリ、	気	<i>pariri</i>	湯気が立ち のぼる
ハシ、	ハシ	バシ	炭	<i>pas(pas)</i>	消し炭
ヒカ、タ	ヒガタ	ビガタ	午	<i>pikata</i>	南西 (H)
キロ、ヒリカ	キロ、ヒリカ	キロ、ビリカ	本腹	<i>kiroropirka</i>	気力が良い？
チカイ子フ	チカイ子フ	チカイ子ブ	戌	<i>cikaynep</i>	北風？
マラフトノカ	マラフトノカ	マラプトヌカ	織女	<i>marapto noka</i>	熊の頭星、 琴座 (S)
シリヌフカヲ ン子	シリヌフカヲ ン子	シリヌブカヲ ン子	曠野	<i>sirrupka- onne</i>	平野が広 い？
アラフ	アラフ	アラブ	にきび	<i>arap?</i>	にきび？

¹²² 濁点はひとつしかついていない。

シキヘンニシ	シキヘンニシ	シキベンニシ	目かしら	<i>sikpennis</i>	目頭?
ホキナチャブ シ	ホキナチャブ シ	ボキナチャブ シ	唇(下)	<i>pokna</i> <i>capus, -i</i>	下唇
無し	濁点	濁点			
子トバケ	子ドバケ	子ドハケ	身	<i>netopa, -ke</i>	身体
ヲヘリ	ヲベリ	ヲベリ	女子	<i>oper</i>	女の子

(3-13) ~ (3-15) についてまとめると以下のようなになる。

No.	(3-13) 半濁点 → 濁点/無し		(3-14) 濁点 → 無し (→濁点)		(3-15) 無 → 濁点	
	語形	延べ 語数	語形	延べ 語数	語形	延べ 語数
1	-p (うち <i>cup</i>)	32 (18)	<i>pe</i> (うち <i>pet</i>)	13 (5)	-p	4
2	<i>po</i>	9	<i>pi, ku</i>	各 3	<i>pa, pi, pe</i>	各 2
3	<i>pu</i>	4	<i>pa, po, ko</i>	各 2	<i>po, ta, to</i>	各 1
4	<i>pa, pi</i>	各 3	<i>pu, ka, ke, ci</i>	各 1		
5	<i>pe, ka, ho, [tce?]</i>	各 1				
総計	9 種 (内訳： <i>p(A): 6, ka:1, ho:</i> <i>1, [tce?]: 1</i>)	55	10 種 (内訳： <i>pA: 5, kA: 4, ci:1</i>)	29	7 種 (内訳： <i>p(A): 5, tA: 2</i>)	13

表 3-2 : 半濁点・濁点表記の変遷

全体的に見て /pa、pi、pu、pe、po、-p/ の音素を表すパ行、ハ行、バ行の間で濁点等の表記変更が生じやすい。(3-13) に見るようにこの種の変更のなかで最も頻度が高いのは、上原『藻汐草』で半濁点だった箇所からの変更である。これは本章 3.3.3.2 節でも一度触れたが、伝蔵が半濁点の使用を好まなかったというひとつの根拠である。音節末の /-p/ に関する表記は、上原『藻汐草』において半濁点で表されることが多く、加賀家文書において表記変更がなされやすい。

(3-14) は濁点が取られたり再び付けられたりしている例である。/pe/ の表記変更は「藻汐草[写]」において一度濁点がとられ、「蝦夷語和解」で新たに付けられるという例が目立つ。また上原『藻汐草』でガ行だったものは濁点がとられてカ行になっている。

(3-15) は濁点が無かったものから、濁点が付けれられるという変更である。(3-13) や (3-14) に比べて全体的な用例数が少ないが、タ行とダ行の間での変更が 13 例中 2 例見られるのは

注目に値する。

3. 4. 6. 音節末の子音の表記

音節末子音 /-p/ の表記変遷は、本章 3.4.5 節の「半濁点・濁点の表記」でも概観しているが、(3-16) では *cup*¹²³ の /-p/ に関する表記について再度まとめる。

(3-16) (ツ) プ → (ツ) ブ/フ

上原藻汐草	藻汐草 [写]	蝦夷語和解	見出し	ローマ字	現代語訳
ツプ	ツブ	ツブ			
チュツプキ	チュツブキ	チュツブキ	映	<i>cupki</i>	日の光、 輝く (Ky)
チュツプライ	チュツブライ	チュツブライ	交蝕	<i>cupray</i>	月食、日食
ツプ	ツフ	ツフ			
チュツプシカリ	チツフシカリ	チウツフシカリ	中旬	<i>cupsikari</i>	満月 (Ky)
チュツプニン	チツフニン	チウツフニン	下旬	<i>cupnin</i>	月が減る
チュツプホ子、	チュツフホ子、	チュツフホ子、	昼八ツ時	<i>cuphonene</i>	日がまわる
ツプ	ツフ	ツブ			
チュツプヲホツタラ	チュツフヲホツタラ	チュツブヲホツタラ	朝五ツ時	<i>cup ohottar?</i>	日が深い?
チュツプリエ	チュツフリエ	チュツブリエ	朝四ツ時	<i>cup ri</i>	日が高い
チュツプラン	チュツフラン	チュツブラン	晩七ツ時	<i>cup ran</i>	日が落ちる
ツプ	ツフ	ブ			
モキウタチュ ツプ	モキウタチュ ツフ	モクエタチウ ブ	三月	<i>mokiwta/ mokuyta cup</i>	旧暦の3月
シキウタチュ ツプ	シキタチュツ フ	シユクエタチ ウブ	四月	<i>sikiwta/ sikuyta cup</i>	旧暦の4月
シマウタチュ ツプ	シマウタチュ ツフ	シユマウタチ ウブ	六月	<i>simawta/ sumawta</i>	旧暦の6月

¹²³ *cup* はアイヌ語で「(天体としての) 月や太陽」を表すとともに、「(時間としての) 月」も表す単語である。

				<i>cup</i>	
シユナンチユ ツプ	シユナンチユ ツフ	シユナンチウ ブ	十月	<i>sunancup</i>	旧暦の10 月
ツプ	ブ	ツフ			
チユツプカタ ウタレ	チユブカタウ タレ	チユッフカタ ウタレ	東嶋々の蝦 夷	<i>cupkata</i> <i>utar</i>	東の者
ツプ	フ	ブ			
トイタン子チ ユツプ	トエタン子チ ウフ	トウタン子チ ウブ	正月	<i>to(y)tanne</i> <i>cup</i>	旧暦の1月
ウレボケチユ ツプ	ウレボケチユ フ	ウレボケチウ ブ	九月	<i>urepokecup</i>	旧暦の9月
クイカイチユ ツプ	クエカエチユ フ	クエカエチウ ブ	十一月	<i>kuykaycup</i>	旧暦の11 月
モハウタチウ ツプ	モハウタチウ フ	モウタチウブ	五月	<i>[momawta]</i> <i>cup</i>	旧暦の5月
プ	フ	ブ			
チウプケ	チウフケ	チウフケ	影	<i>cupki</i>	日の光、 輝く (Ky)

以上のように、半濁点は修正されるが促音の「ツ」は削除されないことも多い。また、(3-17)のような例も見られる。

(3-17) ツ → フ → ブ、ツペ → ツベ → ツブ

上原藻汐草	藻汐草 [写]	蝦夷語和解	見出し	ローマ字	現代語訳
ツ	フ	ブ			
テン子ツ	テン子フ	テン子ブ	童子	<i>tennep</i>	赤ん坊
ツペ	ツベ	ツブ			
ヲトツペ	ヲトツベ	ヲトツブ	髪毛	<i>otop(, -i)</i>	髪の毛

一方、音節末の /u/ に関しては促音の「ツ」が表記されるようになる例が確認できている。

(3-18) 無し → ツ

上原藻汐草	藻汐草 [写]	蝦夷語和解	見出し	ローマ字	現代語訳
無し	無し	ツ			
ベタヌ	ベタヌ	ベツタヌ	川の俣	<i>petanu</i>	川股 (B)

音節末子音 /-k/ に関する表記変更の可能性のあるものとしては (3-19) のようなものがあげられる。ただし、/ki/ を表しているとも捉えられるため注意が必要である。

(3-19) キ → ケ

上原藻汐草	藻汐草 [写]	蝦夷語和解	見出し	ローマ字	現代語訳
キ	キ	ケ			
コタンイーバ キタ	コタンイーバ キタ	コタンエイバ ケタ	郊	<i>kotan eepak(, -i) ta</i>	村のはずれ で
イリワキ	イリワキ	イリワケ	兄弟	<i>irwak(, -i)</i>	兄弟

音節末の /r/ の表記変遷については (3-20) のようなものが確認されている。

(3-20) ル → レ

上原藻汐草	藻汐草 [写]	蝦夷語和解	見出し	ローマ字	現代語訳
レ	レ	リ			
セレマケ	セレマケ	セリマケ	先祖	<i>sermak</i>	守護神
リ	ル	ル			
コンナリペ	コンナルへ	コナルベ	伯母	<i>konnarpe</i>	伯母 (C 人)
ル	レ	レ			
ヲロツコウタ ル	ヲロツコウタ レ	ヲロツコウタ レ	ヲリカタ辺 の者	<i>Orokko utar</i>	オロッコ人
ル	ル	レ			
トーベケル	トーベケル	トーベケレ	暁	<i>topeker</i>	朝 (B)
ル	ル	ロ			
シリウツ°ル	シリウツ°ル	シリウトロ	境	<i>sir'utar(, -u)</i>	二つの地の 中間
コタンウツ° ル	コタンウツ° ル	コタンウトロ	境	<i>kotan utar(, -u)</i>	村と村の間
ロ	ロ	ル			
ウトクイコロ	ウトクイコロ	ウトクエクル	知縁	<i>utokuyekor</i>	互いに親しく 付き合う

音節末の /r/ に関しては、はっきりとした傾向が見いだせない。個別的な事例として、*Orokko*

utar にみられる *utar* 「～たち、～の人々」は、「ウタレ」と表記するように決めているらしく、伝蔵は常にこれを「ウタレ」と書く。

(3-21) は音節末の /n/ および /m/ に関する表記変遷である。

(3-21) 無 → ン

上原藻汐草	藻汐草 [写]	蝦夷語和解	見出し	ローマ字	現代語訳
無し	無し	ン			
ヤ、シヤモ	ヤ、シヤモ	ヤ、ンシヤモ	平人	<i>yayan</i> <i>samo</i>	普通の人
ヅムウエ	トムウエ	トモウエン	疾	<i>tomowen</i>	体内が悪い
シリヲヌマ	シリヲヌマ	シリヲヌマン	夕	<i>sir'onuman</i>	夕方になる
サンダグル	サンダグル	サンダンクル	魯西亜東北 辺の人	<i>Santan kur</i>	山丹人 (C 人)
イシ子レプ	イシ子レプ	エシン子レフ	幽霊(ばけ 物)	<i>isinnerep</i>	化物 (Kb)
ポンシユケン ベ	ホンシユケン ベ	シユンケンベ	薬指	(<i>pon</i>) <i>sumkempe</i>	油をなめる 指、薬指
ン	ン	無し			
コンナリペ	コンナルへ	コナルベ	伯母	<i>konnarpe</i>	伯母 (C 人)

田中 (1989a: 371) において「近世ではンが表記されない場合もある」と指摘されているように、上原の表記では「ン」が表記されていないのに対し、加賀家文書では「ン」が新たに加えられている。「ン」はアイヌ語の音素の /n/ および /m/ と対応しており、伝蔵がより適切な表記へ変更しようとした可能性が高い。ただし、*konnarpe* のように /n/ が連続するような場合は「ン」が削除されるということもある。

3. 4. 7. 母音の /u/ と /o/ に関する表記

(3-22) と (3-23) は、アイヌ語カタカナの副音が /o/ と /u/ の間で交替される例である。

(3-22) モ ⇄ ム

上原藻汐草	藻汐草 [写]	蝦夷語和解	見出し	ローマ字	現代語訳
ム	ム	モ			
チセコチカム イ	チセコツカム エ	チセコツカモ イ	蝦夷地上古 の人	<i>cisekot, -i</i> <i>kamuy</i>	家の跡の神

カムイフミ	カムイフミ	カモイフミ	雷	<i>kamuyhum</i>	雷
ツムウエ	トムウエ	トモウエン	疾	<i>tomowen</i>	体内が悪い
モ	モ	モ/ム			
エントーカモイ	エントーカモイ	エントカム(モ)イ	公儀	<i>Ento kamuy</i>	江戸の役人
モ	ム	ム			
コタンカラカモイ	コタンカラカムエ	コタンカラカムイ	阿弥陀如来	<i>kotan kar kamuy</i>	国創りの神
モ	ム	モ			
ニツ子カモイ	ニツ子カムイ	ニツ子カモイ	閻魔王	<i>nitne kamuy</i>	性悪の神

(3-23) ル → ロ、ノ → ヌ、コ → ク

上原藻汐草	藻汐草 [写]	蝦夷語和解	見出し	ローマ字	現代語訳
ル	ル	ロ			
チウルプ	チウルフ	チウイロフ	十二月	<i>cirup/cu(y)rup</i>	旧暦の12月
ノ	ノ	ヌ			
マラフトノカ	マラフトノカ	マラプトヌカ	織女	<i>marapto noka</i>	熊の頭星、琴座 (S)
コ	コ	ク			
ウトクイコロ	ウトクイコロ	ウトクエクル	知縁	<i>utokuyekor</i>	互いに親しく付き合う

「モ」と「ム」の交替は主に *kamuy* の /mu/ に対するものである。このほかに、「ル」から「ロ」へ、「ノ」から「ヌ」へ、「コ」から「ク」への交替が確認できる。

3. 4. 8. /cu/、/su/ および /sa/ の表記

(3-24) は /cu/ と /su/ に関する表記変遷である。

(3-24) チユ → チ (ウ)、シ → シユ、シヤ → サ

上原藻汐草	藻汐草 [写]	蝦夷語和解	見出し	ローマ字	現代語訳
チユ	チユ	チウ			
チユク	チユク	チウク	秋	<i>cuk</i>	秋

チュツ°カモ イ	チュツカモエ	チュックカモ イ	日月	<i>cup kamuy</i>	太陽、月
モキウタチュ ツプ	モキウタチュ ツフ	モクエタチュ ブ	三月	<i>mokiwta/ mokuyta cup</i>	旧暦の3月
シキウタチュ ツプ	シキタチュツ フ	シクエタチ ウブ	四月	<i>sikiwta/ sikuyta cup</i>	旧暦の4月
シマウタチュ ツプ	シマウタチュ ツフ	シユマウタチ ウブ	六月	<i>simawta/ sumawta cup</i>	旧暦の6月
シユナンチュ ツプ	シユナンチュ ツフ	シユナンチュ ブ	十月	<i>sunancup</i>	旧暦の10 月
ウレボケチュ ツプ	ウレボケチュ フ	ウレボケチュ ブ	九月	<i>urepokecup</i>	旧暦の9月
クイカイチュ ツプ	クエカエチュ フ	クエカエチュ ブ	十一月	<i>kuykaycup</i>	旧暦の11 月
チュ	チウ	チウ			
トイタン子チ ユツプ	トエタン子チ ウフ	トウタン子チ ウブ	正月	<i>to(y)tanne cup</i>	旧暦の1月
チュ	チ	チウ			
チュツプシカ リ	チツフシカリ	チウツフシカ リ	中旬	<i>cupsikari</i>	満月 (Ky)
チュツプニン	チツフニン	チウツフニン	下旬	<i>cupnin</i>	月が減る
シユ	シ	シ			
ケウシユツ°	ケウシト	ケウシト	伯父	<i>kewsutu</i>	~のおじ
シ	シ	シユ			
ヌブレシルウ タレ	ヌブレシルウ タレ	ヌブレシユル ウタレ	僧	<i>nupursur(u) utar</i>	靈力を発揮 する人
シヤ	サ				
ヤハシシヤモ	ヤハシサモ	—	平人	<i>yayan sisam</i>	普通の人

/cu/ を表す場合は、「チュ」から「チウ」や「チ」に変更される傾向にある。「チウ」にした際は、促音の「ツ」が続くことは珍しく、また音節末子音の /p/ は濁音の「ブ」になる

ことが多い。一方「チ」が選択されるときは促音の「ツ」が必ず続く。「チュツフ」と「チウブ」、「チツフ」のモーラ数がどれも3になるという点がこうした変更に関係するかもしれない。

なお、「シヤ」の場合は、「シア」ではなく「サ」になる例が確認できているので補足的に例示した。その他については本章 3.4.5 節の「半濁点・濁点の表記」や、3.4.6 節の「音節末の子音」も比較・参照のこと。

3. 4. 9. その他

最後に上述した項目には当てはまらない特殊な変更について述べておく。

(3-25) へ → セ

上原藻汐草	藻汐草 [写]	蝦夷語和解	見出し	ローマ字	現代語訳
へ	へ	セ			
へカチ	へカチ	セカチ	若いもの	<i>hekaci</i>	男の子
へ	セ	セ			
マチ子へカチ	マツ子セカツ	マツ子セカチ	女子	<i>matne</i> <i>hekaci</i>	女の子
ヲツカイへカチ	ヲッカエセカチ	—	男子	<i>okkay</i> <i>hekaci</i>	男の子

(3-26) カ → セ

上原藻汐草	藻汐草 [写]	蝦夷語和解	見出し	ローマ字	現代語訳
カ	カ	セ			
カンピシシヤム	カンビシシヤム	センビシシヤム	筆者	<i>kampi</i> <i>sisam</i>	字(を書く) 人

(3-25) に関して、金田一 (1938a : 48) が松前、津軽、秋田の人は「へをセに訛」と述べ、佐藤 (1990, 1995a) がこれについて例を挙げるなどして方言の影響について検討している。伝蔵は秋田出身であるので、/he/ を「セ」と書いてしまった可能性はやはりあるだろう。佐藤喜代治 (1963 [1994: 13]) の秋田方言の記述によると「/he/ の場合はかなりはっきりした両唇摩擦音の [ɸ] がきかれ、/he/ の場合には、そのほかに硬口蓋でも摩擦を伴うような音も聞かれる」とあり、「蛇」が「[ɸhe~bi] /hebi/」、「屁」が「[ɸee] /he/」になるのだという。/se/ については「口蓋化子音」になりやすく、「背中」が [ʃɛnaka]、[çɛnaɕa]、「汗」が [aɸɛ] や [aɛɸ] になるという (佐藤喜代治 [1994: 20])。hekaci の /h/ が [ɸ] という両唇摩

擦音に聞こえず、「セ」のほうが適切と判断したのかもしれない¹²⁴。

(3-26) は「カ」が「セ」になっている例であるが、写し間違いの疑いが強い。このような種々の修正・エラーに関しては他にも散見されるのだが、明確なことが言える例が多くないので割愛する。

3. 5. まとめ

本章では、3.1 節において江戸時代から現代に至るまでのアイヌ語表記と諸問題について概略し、特にアイヌ語カタカナ表記の問題点を中心に確認した。3.2 節では江戸時代のアイヌ語・日本語語彙集および辞典における表記法の先行研究を紹介、3.3 節では加賀家文書のアイヌ語表記法に関する原則をまとめた。以下に原則 1~19 を再掲し、表 3-3 に文字と音韻の対応表を示す。

《母音といわゆる半母音》

原則 1 母音 【V】

ア : a
イ : i/e
ウ : u
エ : e/i
ヲ : o/u

原則 2 アクセントの無い母音 【V(C)】

ユー : i-
ヨー : o-

原則 3 (母音+) 半母音 【(V)C】

ーイ/ーエ : -y
ーウ/ーヲ : -w

原則 4 母音+半母音 【VC】

イ/エ/ユ : ey
ヲ : ow

原則 5 半母音+母音 【CV】 (ヤ行とワ行)

ヤ : ya
イ : ye
ユ : yu
エ : ye

¹²⁴ しかし、アイヌ語の /h/ に /s/ が対応するような方言語彙、例えば否定を表す *hem* と *sem* などもあるので、*sekaci* である可能性というのも残しておく必要があるだろう。

ヨ	: yo/ yu
ワ	: wa
(ウ) イ	: we
(ウ) エ	: we
ヲ	: wo

《開音節》

原則6 子音 (k, s, r, m, n, h)+母音【CV】(タ、ヤ、ワ行を除く)

カ : ka	キ : ki/ ke	ク : ku	ケ : ke/ ki	コ : ko/ ku
サ : sa	シ : si/ se	ス : su	セ : se/ si	ソ : so/ su
ナ : na	ニ : ni/ ne	ヌ : nu	子 : ne/ ni	ノ : no/ nu
ハ : ha	ヒ : hi/ he	フ : hu	ヘ : he/ hi	ホ : ho/ hu
マ : ma	ミ : mi/ me	ム : mu	メ : me/ mi	モ : mo/ mu
ラ : ra	リ : ri/ re	ル : ru	レ : re/ ri	ロ : ro/ ru

原則7 子音 (t, c)+母音【CV】(タ行)

タ	: ta
チ	: ci
ツ	: ci
テ	: te
ト	: to/ tu

原則8 濁音と半濁音【CV】(ガ行、バ行、パ行)

ガ : ka	ギ : ki/ ke	グ : ku	ゲ : ke/ ki	ゴ : ko/ ku
バ : pa	ビ : pi/ pe	ブ : pu	ベ : pe/ pi	ボ : po/ pu
(ハ) : pa	ピ : pi/ pe	プ : pu	ペ : pe/ pi	ポ : po/ pu

原則9 濁音と半濁音【CV】(ザ行、ダ行)

ザ : ca	ジ : ci	ズ : ?	ゼ : ci/ ce	ゾ : ?
ダ : ta	ヂ : ci	ヅ : ci/ tu	デ : te	ド : to/ tu

原則10 拗音【CV】(シヤ行、チヤ行)

シヤ : sa	シユ : su	シエ : ?	シヨ : so/ su
チヤ : ca	チウ : cu	チエ : ce	チヨ : co/ cu

原則11 拗音【CV】(ツイ)

ツイ : ci

原則12 合拗音【CV】(クワ)

クワ : ka

《閉音節》

原則13 音節末の子音【-C】

- ーキ／ーク : -k
- ーシ : -s
- ーヌ／ーノ : -n
- ーフ／ーブ : -p
- ーム／ーマ／ーモ : -m
- ーラ／ーリ／ール／ーレ／ーロ : -r

原則14 撥音【-C】(ン)

- ーン : -n
- ーン (+バ／パ／マ行音) : -m

原則15 語中音節末の p, t, k を表す促音【-C】(ツ／ッ)

- ーツ／ーッ : -p/ -t/ -k

原則16 語末の t や k を表す促音【-C】(ツ／ッ)

- ーツ／ーッ : -t/ -k

原則17 語末の p や k を導く促音【-C】(ック／ッフ)

- ーック : -k
- ーッフ／ーッブ : -p

《その他》

原則18 長音【V/VC/VhV/VV】

- ー／ア／イ／ウ／エ／ヲ : 例外アクセント、所属形 (VhV)、
音節末の半母音 (VC)、母音連続 (VV)

原則19 声門閉鎖音【(C)】

- 表記なし : ’ ([?])

ア列		イ列		ウ列		エ列		ヲ列	
ア	a	イ	i/ e/ -y/ ey/ ye	ウ	u/ -w	エ	e/ i/ -y/ ey/ ye	ヲ	o/ u/ -w/ ow/ wo
カ	ka	キ	ki/ ke/ -k	ク	ku/ -k	ケ	ke/ ki	コ	ko/ ku
サ	sa	シ	si/ se/ -s	ス	su	セ	se/ si	ソ	so/ su
タ	ta	チ	ci	ツ	ci/ -p/ -t/ -k	テ	te	ト	to/ tu
ナ	na	ニ	ni/ ne	ヌ	nu/ -n	子	ne/ ni	ノ	no/ nu/ -n
ハ	ha/ pa	ヒ	hi/ he /pi/ pe	フ	hu/ pu/ -p	ヘ	he/ hi/ pe/ pi	ホ	ho/ hu/ po/ pu

マ	ma/ -m	ミ	mi/ me	ム	mu/ -m	メ	me/ mi	モ	mo/ mu/ -m
ヤ	ya	/	/	ユ	i-/ ey/ yu	/	/	ヨ	o-/ yo/ yu
ラ	ra/ -r	リ	ri/ re/ -r	ル	ru/ -r	レ	re/ ri/ -r	ロ	ro/ ru/ -r
ワ	wa	(ウ)イ	we	/	/	(ウ)エ	we	/	/
ガ	ka	ギ	ki/ ke	グ	ku	ゲ	ke/ ki	ゴ	ko/ ku
ザ	ca	ジ	ci	ズ	?	ゼ	ci/ce	ゾ	?
ダ	ta	ヂ	ci	ヅ	ci/ tu	デ	te	ド	to/tu
バ	pa	ビ	pi/ pe	ブ	pu/ -p	ベ	pe/ pi	ボ	po/ pu
シヤ	sa	/	/	シュ	su	シエ	?	シヨ	so/ su
チヤ	ca	/	/	チュ	cu	チエ	ce	チヨ	co/ cu
ツア	?	ツイ	ci	ツ	?	ツエ	?	ツヨ	?
カ	ka	/	/	/	/	/	/	/	/
【上記の他】									
ン					-n/ -m				
ー/ (長音としての) ア、イ、ウ、エ、ヲ					(例外アクセント、所属形 (VhV)、音節末の半母音 (VC)、母音連続 (V'V))				
表記なし					(声門閉鎖音)				

表 3-3 : 文字と音韻の対応表

3.4 節では田中・佐々木 (1985) が論じた加賀家文書の表記法を確認すべく、上原熊次郎の『藻汐草』とその写しである加賀家文書「藻汐草 [写]」、さらに、いくつかの語彙を抜き出して解釈が与えられている加賀家文書「[蝦夷語和解]」の比較を行い、その変遷をたどった。

最後に、加賀家文書の表記法の傾向としていくつか特徴的な点を箇条書きにして記す。3.2 節で紹介したその他の近世資料にも当てはまることと思われるが、それらとの比較研究は今後の研究で明らかにしていきたい。

- ①アイヌ語の /tu/ は、上原熊次郎の『藻汐草』が「ヅ」という表記を採用するのに対し、加賀家文書ではこれを「ト」や「ド」で表すことが多い。
- ②「ジ」という表記は避けられる傾向にあるようである。
- ③二重母音の /y/ に加えて、アクセント核のない音節頭の /e/ や /i/ に関しても「エ」で表されることがある。アクセント核の無い /i/ は「ユ」、/o/ は「ヨ」で書かれることもある。
- ④長音符号を省く方法として、単に削除されるほかに「ナア」のように母音で表されることも多い。

- ⑤半濁点は避けられる傾向にある。濁点が付けられる例はハ行が最も多く、次いでタ行も好まれるようであった（表3-2を参照）。
- ⑥ /cup/ を表す場合は、「チュツフ」のほかに「チウブ」、「チツフ」など表記も用いられるが、これらはカナ表記によるモーラ数がどれも3になる。「チウツブ」になりにくい理由のひとつにはモーラ数が4になってしまうためである可能性が考えられる。
- ⑦ /utar/ は、いつも「ウタレ」と表記される（上原『藻汐草』では「ウタル」とも表記される）。
- ⑧ 「ン」はアイヌ語の音素の /n/ および /m/ と対応しているが、上原『藻汐草』ではこれが表記されない傾向があるのに対し、加賀家文書では表記上現れる。
- ⑨ /sa/ は「シヤ」と表記されるほか、「シア」ではなく「サ」になる。
- ⑩ 「チエ」が /ce/ にあたるの対し、「シエ」が /se/ にあたる例は見つかっていない。必ず「セ」となる。
- ⑪ /ci/ は「ツ」で表すことができるが、/ca/、/cu/、/ce/、/co/ が「ツア」、「ツウ」、「ツエ」、「ツヲ」と表記される例は今のところ見つかっていない。「ツイ」の例も殆ど無い。
- ⑫ /he/ が「セ」として表記されていると思われる例が見られる。

第4章 写本・類本の位置づけ

—日本語・アイヌ語辞典『藻汐草』を中心に

本章では、蝦夷通辞・上原熊次郎が著した1792年成立の『藻汐草』および加賀家文書に残された『藻汐草』の写本・類本の紹介と、その位置づけについて具体例をもとに検討する。

4. 1. 『藻汐草』

江戸時代（寛政期～文政期）に活躍していた蝦夷通辞に上原熊次郎¹という人がいる。彼は、寛政4（1792）年に、日本で初めて『藻汐草』という日本語・アイヌ語辞書を編んだ蝦夷通辞で、後世のアイヌ語学に影響を与えた人でもある。この著作は出版されて出回ったため、類本や写本が各地で発見されることも珍しくない。各地の通辞や番人たちは、この『藻汐草』を自分なりの表記法で写し「写本」をつくった。それに対し「類本」というのは、編者自身が慣れ親しんだアイヌ語方言の語彙を付け足したり、不要な語彙を削ったり、必要な見出しを増やしたりしてつくった「マイ単語帳」のことである。

蝦夷通辞の加賀伝蔵も『蝦夷方言 藻汐草 [写]』（資料番号49）という写本および類本を残している。この書は上下に分れており、『藻汐草』の「写本」が上であるのに対し、下が「類本」にあたる。本論文では、上を「藻汐草 [写]」、下を「[蝦夷語和解]」と区別して呼ぶことにする²。

本章4.2節からは、上原熊次郎の『藻汐草』と加賀家文書の『蝦夷方言 藻汐草 [写]』、さらに根室場所の語彙が含まれていると考えられる金沢家文書のアイヌ語語彙集とを比較し、写本と類本の性質について検討する。以下、それらの書誌情報を簡略的に箇条書きで記載する。なお、本論文では、上原熊次郎の著作である①-1と①-2を合わせて『藻汐草』と呼ぶことにする。また、以下の節で①～④の番号は資料のインデックスとして使用する。

①-1 『もしほ草』³（一冊本）

- ・題簽：『もしほ草』、見返し：白紙、序題：『藻汐草』、目録題：『蝦夷方言』、柱書：『藻塩草』

¹ 生没年については不詳だが、最上徳内の『渡島筆記』に松前生まれという記録が残っている。

² 別海町郷土資料館（2012）の目録は、書名を『蝦夷方言 藻汐草 [写]』とし、上下を合わせて「[蝦夷語和解]」と呼ぶ。また、同綴の後半部には「根室国境区域」という地名解も収録されている。

³ 変体仮名が使用されているため、「もしほ草」とも書ける。

- ・ 成立年：寛政4(1792)年(跋文より)
- ・ 刊行年：文化元(1804)年(序文より)
- ・ 著者：通詞 上原熊次郎、支配 阿部長三郎(跋文より)
- ・ 序文：白虹斎[最上徳内]
- ・ 収録語数：約2740語
- ・ 丁数：103丁
- ・ 日本で初めての日本語・アイヌ語辞書。田中・佐々木(1985)によって、甲本(初印本)と乙本(後印本)の別があることが指摘されている⁴。

①-2『蝦夷方言藻汐草』(二冊本：乾、坤)

- ・ 題簽：『蝦夷方言藻汐草』、見返し：『蝦夷方言藻汐草 鈴驥園蔵』、序題：『藻汐草』、目録題：『蝦夷方言』、柱書：『藻塩草』
- ・ 成立年：(寛政4(1792)年、ただし跋文削除のため記載無し)
- ・ 刊行年：文化元(1804)年(序文より)
- ・ 著者：(通詞 上原熊次郎、支配 阿部長三郎、ただし跋文削除のため記載無し)
- ・ 序文：白虹斎[最上徳内]
- ・ 出版元：鈴驥園
- ・ 丁数：102丁
- ・ 『もしほ草』の再板本で、一冊本よりも残存数が多いとされている。田中・佐々木(1985)は、「流布本である二冊本は、管見の限り、系統的には甲本のながれにあるようだ」としている。

②「藻汐草[写]」(加賀家文書『蝦夷方言 藻汐草[写]』の1丁表～105丁裏)

- ・ 題簽：なし、見返し：白紙、序題：『藻汐草』、目録題：『蝦夷方言』
- ・ 成立年：寛政4年(1792)(跋文より写し)
- ・ 刊行年：文化元(1804)年(序文より写し)
- ・ 著者：同片手 加賀屋傳蔵、通詞 上原熊治郎、支配 阿部長三郎(跋文より)
- ・ 序文：白虹斎[最上徳内]
- ・ 丁数：105丁
- ・ 跋文最後に「上」とあり、これが上段部であることを意味している。田中・佐々木(1985)は、この写しについて、「乙本系統を写したものとみなし、「若干見落とした語彙もあるが、比較的しっかりしている」、「代表的な善本」と評価する。

⁴ この二種の別について、佐藤(2007)は、「「乙本」は筆者が目撃した限りではこれまでのところ北大本「旧記662」しかない。「乙本」の位置づけの確定には、乙本に属する諸本のさらなる検討が必要ではないかと思われる」と指摘する。

- ③「[蝦夷語和解]」（加賀家文書『蝦夷方言 藻汐草 [写]』の107丁表～126丁裏）
- ・序題・目録題・序文・跋文：なし
 - ・成立年：不明
 - ・著者：加賀伝蔵
 - ・収録語数：和語見出し 366、アイヌ語 429
 - ・丁数：20丁
 - ・「藻汐草 [写]」の後に続く下段部。天地部・人物部・支體部を抜粋し語義語釈を付す。
- ④金沢家文書語彙集
- ・序題・目録題・序文・跋文：なし
 - ・成立年：不明（19世紀の初めから中頃か）
 - ・著者：不明
 - ・収録語数：語彙集部分でアイヌ語が読み取れる和語見出しの数は269。
 - ・丁数：全8丁、語彙集部分（5丁）とテキスト部分（3丁）
 - ・表紙は無く、紙縫りで綴じた仮綴じの形態がとられている。紙縫りで結ばれていない側の破損が目立つが、表と裏の破損の仕方が同じところを見ると欠けている丁は無さそうに見える。
 - ・語彙集はシンプルかつコンパクトなものであり、和語見出しにアイヌ語の対訳があるだけで説明はない。構成や内容は、上原熊次郎の『藻汐草』に類似するところがある。

4. 2. 先行研究

4. 2. 1. 加賀家文書の『藻汐草』関連資料について

第3章でも触れたが、田中・佐々木（1985）は、『藻汐草』の写本のうち「代表的な善本」として加賀家文書を紹介している。

東蝦夷地の通詞加賀屋伝蔵の手になるもので、弘化二年の年記を持つ某氏本と、加賀家本の二本がある。加賀家本は上下二巻を意図したらしく『もしほ草』の写しを上とし、下に当たる部分に『もしほ草』の冒頭二十丁程までの語彙の解釈と、「根室国境区域」の地名解釈を収める。【中略】板本での欠画や誤りを修正したり、新しく語彙をつけ加えている所もある。また、伝蔵自身の書き癖によって、ツをトに、チをツに、二重母音の y 当たるイをエに直したり、長音符号を省いたりなどの訂正もなされている。

（田中・佐々木 1985 [佐々木 2013: 276]）

本章 4.1 節で述べた③の「[蝦夷語和解]」は、秋葉 (1989: 703-721) に翻刻が掲載され、別海町郷土資料館 (2005: 353-376) に「アイヌ語辞典 (和訳)」として現代語訳化が行われた。その後、深澤 (2016a) がローマ字化を試み、それぞれの単語に対して伝蔵がつけた語源解についても、何をもとにそのような解釈に至っているのかを推定した。

和解は、形態素分析に由来すると考えられるものから、単に見出しの説明であると考えられるものもある。音韻的・文法的に適切とは言えなさそうな解釈はもちろんあるが、日本語で無理やり解釈しようとしているものは比較的少なく、アイヌ語をアイヌ語の形態素で解釈している点は評価できる。例えば、「カモイフミ 雷」という項目の和解には「神の音」とある。「カモイ」(*kamuy*) が「神」、「フミ」(*hum(i)*) が「音」であり、この解釈は現在も妥当なものと考えられる。一方、「吾 クアニ」という項目の和解「弓持方 (弓ハ身ニ代也)」は、「ク」*ku* が「弓」、「アニ」*ani* が「持つ」と考えられているようだが、これはその他の人称代名詞と同列に考えると、現在は *kuani* (<*ku-an-i* 私・いる・ところ) と考えるのが一般的である (第6章も参照)。

アイヌ語の考え方に光を射すような例もある。「天 カントウ」の和解「其上ニ廻る日」は、「カン」(*kan-*) を「上の」、「トウ」(*to*) を「日」と考えたものと推測できる。筆者は、これまで *kanto* をこのように解釈したものを見たことがなく、また筆者自身も考えたこともなかった。田村 (1996: 277) では「*kan-to* < 上の・湖沼」と解釈されているが、その決定的な証拠はなく、「沼」か「日」か、あるいはどちらでもないかもしれない。このように、一旦立ち止まって考えるべき例があるという意味で、和解の内容も見過ごせないものと言える。

4. 2. 2. 金沢家文書の『藻汐草』関連資料について

本章 4.1 節で述べた④の金沢家文書「[アイヌ語語彙集 (付・シマコライヤ)]」は、岩手県宮古市の近世蝦夷地関係史料である。これは、東 (2012) 「岩手県宮古市所在・金沢家文書の蝦夷地関係史料について」において「[アイヌ語辞書・アイヌ語文書]」(No. 89) として紹介されているものと同じものであり、深澤 (2015a) によって「[アイヌ語語彙集 (付・シマコライヤ)]」のうち前半部に当たるアイヌ語語彙集の翻刻が行われた際、藻汐草の類本であることが判明した。以下では、金沢家文書に関する先行研究を概観しておく。

東 (2012) は、『北海道・東北史研究』で組まれた特集「災害史と被災地史料」のなかで、金沢家文書の蝦夷地関係史料を紹介したものである。金沢家文書は総数 259 件のコピーが宮古市史編さん室に所蔵されているが、どこの誰から収集した文書なのかを記録する慣習がなかったようで、2008 年の東氏の調査時点で原本の所在は確認できなくなっていたそうである。『宮古市史 資料目録(1)』の「凡例」では次のように説明されている。

昭和 50 年度に宮古市史編さん事業がはじまって以来、多くの方々のご協力により古文

書が編さん室に提供された。貸出を受けた資料は目録を作成し、コピーをとって所有者に返却してきた。この目録は、こうした資料収集の成果を家別にまとめたものである。
(『宮古市史 資料目録(1)』p. 1)

東 (2012: 87) は、「2008年5月9日に宮古市立図書館（岩手県宮古市）を訪れた際、同館二階の宮古市史編さん室において、金沢家文書と題された紙焼きコピー製本を見せていただき、近世蝦夷地関係史料が含まれていることを確認した【中略】筆者の手元には、同編さん室所蔵の紙焼きコピー製本からコピーさせていただいたNo. 86~116の31件の紙焼きコピーがある」と述べている。その後、筆者（深澤）が2014年の夏に宮古市史編さん室の假屋氏へ問い合わせたところ、2008年の東氏の調査後、原本を所有しているであろう持ち主らしき人が特定できたのだとおうかがいした。しかし、2011年の東日本大震災の津波でその地域は壊滅的な被害を受け、確認に行ったときには家もろとも跡形もなくなっていたそうである。よって、今後原本が見つかることは絶望的としか言いようがない。現時点では、宮古市史編さん室にある紙焼きコピーが、原本から直接コピーした資料として最良のものと言える。

東 (2012) は、金沢家文書の重要性について次のような見解を示している。

金沢家文書における蝦夷地関係史料の所在理由は、金沢三右衛門、金沢久蔵といった金沢家関係者の蝦夷地警備派遣、もしくは子モロ場所における勤務実態による、宮古金沢家への関係史料の伝来・伝存にあると考えられる。また、アイヌ語文書等の包含は、金沢家関係者が場所請負制下の「場所」における指導・監督的な役割を果たす職に就いていた可能性を示している。

宮古は、青森県下北半島の北辺、秋田県南海岸部等と並んで、江戸時代後期に蝦夷地へ「稼方」（出稼ぎ人）、あるいは「場所」の「番人」を多く輩出した地域である。しかも、子モロ場所については、幕末期の例で、出稼ぎ漁業労働者総数の半数以上が宮古を中心とした田老から墓目に至る宮古通りの村々であったとの指摘がある⁵。しかしながら、従来は宮古所在の蝦夷地関係史料の存否不明瞭により、具体的な事実の検証が困難であった。今回の金沢家文書における蝦夷地関係史料により、東北地方からの和人参出稼ぎや、子モロ場所の研究といった領域の学問的漸進が期待できる。

(東 2012: 85)

『宮古市史 資料目録(1)』には、五十音順で家々の文書に関する解題が記され、その後、やはり「家」ごとに資料目録が掲載されている。金沢家文書に関しては、次のとおりである。

⁵ 榎森進「海峡をはさむ地域史像：ひと・もの・情報」（北海道・東北史研究会（編）『北からの日本史第2集』三省堂、1990）。

19 金浜 金沢家文書

金浜は閉伊川と津軽石川の中間に位置する漁村地区である。金沢家は幕末期に肝入を務めた家であり、代官所とのやりとりを記録した書留帳、検地や役銭関係など貴重な記録が多く保存されていた。また、蝦夷地警備の資料と弘化・嘉永の百姓一揆関係の資料がまとまっているのが特徴である。

行政関係では、資料 No. 3・4 は安政3年(1856)の地震により延期となった藩主巡見である。No. 10 は南部家諸士の由緒の要約と「南部拾万石軍役定」、各郡の村数と石高が記されている。…【中略】…資料 No. 86 から 116 までの蝦夷地警備関係は、原住民に対する通達のアイヌ語訳など興味深いものも含まれている。資料 No. 121 から 138 までは三閉伊一揆関係のもので、嘉永6年(1853)のものも多く、どれも記述が詳細で概要をつかむことができる。
(『宮古市史 資料目録(1)』p. 7-8)

資料目録によると、「金沢家文書」とされる資料は 259 件 (No.1-259) であり、「蝦夷地」に分類されている No. 86 から 116 までの 31 件を見ると、年代がはっきりしているものでは、早くて文化 14 (1817) 年 7 月、遅いもので嘉永 6 (1853) 年 12 月 29 日とある。差出人(作者)や受取人(宛名)には、「子モロ」や「クン子ヘツ」、「シヘツ」などという道東の地名が見られ、金沢久蔵という人物の名が 31 件中 9 件に見つかる。金沢家文書 259 件中中で彼の名が記されているものを調べると、1832 年⁶ から 1869 年までの期間であり、真実の程はわからないが、子モロ番人という役職名を冠しているものもある。番人でアイヌ語に精通していた人といえばモンベツ場所の能登屋円吉が有名だが、金沢久蔵も職務上、必要にかられてアイヌ語を学んだ人という可能性がある。

4. 3. 部門の対応関係

本田(2013)では、秋田県にかほ市象潟に伝存する『蝦夷方言藻汐草』(「象潟藻汐草」)について上原熊次郎の『藻汐草』との比較からその特徴が論じられている。本節ではそれに倣って、まずは和語見出しの選定や部門の立て方から、それが『藻汐草』とどのような関係を持っているのかということを考える。

①上原熊次郎著の『藻汐草』に対して、加賀家文書の②「藻汐草 [写]」と③「[蝦夷語和解]」、および④金沢家文書のアイヌ語語彙の部門名や見出しのまとまりには、概ね以下のような対応関係が見出される。目次の部門名と、本文で用いられる部門名が異なる場合があるが、③や④に合わせる形で、本文で用いられている名称を記載した。

⁶ 1735 年というのが 1832 年より前にとんで一件存在するが、1832 年以降の資料がまとまっており、ひとまず除外しておくことにする。今後、実際に資料を見て照合する必要がある。

①上原熊次郎 『藻汐草』	②加賀家 「藻汐草 [写]」	③加賀家 「[蝦夷語和解]」	④金沢家 アイヌ語語彙集
天地	天地	(天地) ⁷	天地之部
人物	人物	人倫	人倫之部
支體死活	支體死活	(支體死活)	支躰之部
世事	世事		
口鼻耳目心	口鼻耳目心		
器材部	器材		
鳥獸部	鳥獸魚虫		気形之部
草木部	草木		衣食之部
品目	品目		
助語	助語		
熟語	熟語		
計 11 部門	計 11 部門	計 3 部門	計 5 部門

表 4-1 : 『藻汐草』の部門との対応関係

④金沢家文書アイヌ語語彙集の3丁裏からは部門名がついておらず、約66%⁸が①上原『藻汐草』に対応しない語彙である。そのうち対応関係の見られる和語見出しやアイヌ語の語彙は「世事部」や「口鼻耳目心」が中心であり、稀に「器材之部」や「助辞」と対応関係が見られることもある。

部門名の対応関係を見るだけでも、②加賀家「藻汐草 [写]」がしっかりと写された「写本」であることは明らかである。また、④金沢家語彙集に関しては部門名を見るだけでは藻汐草との対応関係が不明瞭であり、他からの写しの可能性も考慮に入れる必要がある。つまり、「衣食之部」や「気形之部」がある時点で、①上原『藻汐草』の「類本」相当のものから写したという可能性も疑われる（例えば、松浦武四郎の『蝦夷語』には「衣食」と「気形」の部門が確認できる）。今後の研究によっては「類本」同士の比較も必要になってくるものと考えられる。

⁷ ③加賀家「蝦夷語和解」の「天地」と「支體死活」に関しては部門名が記載されていない。ここでは便宜上、②「加賀家藻汐草 [写]」のものを使用した。

⁸ 和語見出しとアイヌ語に破損等が見られない3丁裏からの156例中、103例が『藻汐草』に記載の無いアイヌ語であった。以下で述べる第三グループの語彙に相当する。

4. 4. 語彙の対応関係

本節では、①～④で示した『藻汐草』関連資料について具体的に語彙の対応関係をみていくことにし、そのうえで写本と類本の判断基準について考察する。

4. 4. 1. 三つのグループ

ここでは語彙の対応関係を比較するにあたり、概ね三つのグループでとらえておくことにする。

第一グループ：和語見出しが一致する

- A. 和語見出し（一致）・アイヌ語（一致）
- B. 和語見出し（一致）・アイヌ語（推定形が一致）
- C. 和語見出し（一致）・アイヌ語（(推定形が)部分的に一致）

第二グループ：和語見出しが相似・類似する

- A. 和語見出し（相似）・アイヌ語（一致）
- B. 和語見出し（相似）・アイヌ語（推定形が一致）
- C. 和語見出し（相似）・アイヌ語（(推定形が)部分的に一致）

第三グループ：アイヌ語がオリジナルである

- A. 和語見出し（一致・相似）・アイヌ語（オリジナル）
- B. 和語見出し（対応関係無し）・アイヌ語（オリジナル）

「写本」と称されるものはおおそ第一グループで構成されている。当然のことながら、1-A のように見出しと語彙が完全一致するものが多いほど「写本」と呼ぶにふさわしい。これに対して、もし第三グループが多ければ、よりオリジナリティの高い語彙集ということになる。第二グループはその中間にあたるもので、この類のものが増えるに従って「写本」というよりも「類本」と言うに相応しくなってくるということは言えるだろう。

これら三つのグループは連続体をなすものであり、それぞれの例を厳密に分類していくのは難しい。2-A には 1-A の「写し」とほぼ変わらないような例があり、一方 1-C や 2-B、2-C には第三グループと同程度にオリジナリティが高いと考えたほうがよい例も多くある。

1-B に関しては執筆者のアイヌ語表記の特徴が最もよく現れる。本論文の第3章3.4節で示した伝蔵による表記の傾向も、大多数が 1-B の例からとったものである。なお、④金沢家文書語彙集の表記法として目立った特徴を以下に示す。

(4-1) 長音表記を削除する (母音で代替しない)

①上原藻汐草	④金沢家文書 語彙集	見出し	ローマ字	現代語訳
母音	無し			
レイラ	レラ	風	<i>réra</i>	風
長音符	無し			
ウーラリ	ウラリ	霧	<i>úrar</i>	霧
ユービ	ユビ	兄	<i>yúp/ yup, -í</i>	(~の)兄
シヤー	シヤ	姉	<i>sá/ sa, -há</i>	(~の)姉
ユーク	ユク	鹿	<i>yúk</i>	鹿
ヲーセカモイ	ホセカムイ	狼	<i>wósekamuy</i>	狼
シヨーヤ	ソヤ	蜂	<i>soyá</i>	蜂

(4-2) /tu/ の表記は「ツ」→「ト」へ変更 (「ド」はない)

①上原藻汐草	④金沢家文書 語彙集	見出し	ローマ字	現代語訳
ツ°	ト			
アツ° イ	アトエ	海	<i>atuy</i>	海
ツ° レシ	トレシ	妹	<i>tures, -i</i>	(~の)妹
ケウシュツ°	ケウシト	伯父	<i>kewsut, -u</i>	(~の)おじ

(4-3) 半濁点を使用しない

①上原藻汐草	④金沢家文書 語彙集	見出し	ローマ字	現代語訳
半濁点	無し			
アプト	アフト	雨	<i>apto</i>	雨
シキウタチユ ツプ	シケウタチユ フ	四月	<i>sikiwtacup</i>	旧暦の4月
カモイチカプ	カムイチカフ	ふくろ	<i>kamuycikap</i>	梟

このほか、原則的ではないが傾向として2点あげる。

(4-4) 濁点をとることがある（「濁点なし」→「濁点あり」は稀）

①上原藻汐草	④金沢家文書 語彙集	見出し	ローマ字	現代語訳
半濁点	無し			
ルアンベ	ルアンへ	雨	<i>ruanpe</i>	雨
デタチリ	テタチリ	白鳥	<i>retarcir/ tetarcir</i>	白鳥

(4-5) 「イ」→「エ」になることがある（「エ」→「イ」は無い）

①上原藻汐草	④金沢家文書 語彙集	見出し	ローマ字	現代語訳
半濁点	無し			
フンベイトリ	フンベエトロ	海月	<i>humpeetor</i>	海月
ポイナ	ホエナ	石(中)	<i>poyna</i>	石

4. 4. 2. 第一グループの語彙

第一グループは、「和語見出しが一致し、アイヌ語も対応する」という特徴をもつグループである。

第一グループ
A. 和語見出し（一致）・アイヌ語（一致）
B. 和語見出し（一致）・アイヌ語（推定形が一致）
C. 和語見出し（一致）・アイヌ語（（推定形が）部分的に一致）

表 4-2：第一グループの基準

1-A は見出しとアイヌ語がともに一致するもので、1-A が多いほど写本である可能性は高まる。1-B は一見すると「写した」ようには見えないかもしれないが、これは書き手自らのカタカナ表記法でアイヌ語を文字化したものであり、書き手が意図するアイヌ語（推定形）は同じものであると考えられる。よって、1-B は書き手のアイヌ語カタカナ表記の特徴を知る上で利便性が高い。1-C は、見出しが一致し、アイヌ語が部分的に一致を見せるものである。アイヌ語の表現形式を文法的もしくは語彙的に補完・修正しようとする力が働いた時に見られる特徴であると考えられる。以下、具体例を見ていくことにする。

(4-6) 1-A の語彙例 :

	①上原藻汐草		見出し	アイヌ語	出典
1	雲	ニシ	〃	〃	④金沢家
2	川	ベツ	〃	〃	④金沢家
3	先祖	セリマカ	〃	〃	④金沢家
4	右手	シモンテキ	〃	〃	④金沢家
5	獺	イシヤマニ	〃	〃	④金沢家
6	天	リキタ	〃	〃	②藻汐草[写]
7	雨	ウエニ	〃	〃	②藻汐草[写]
8	角力	ウエシリキハ	〃	〃	②藻汐草[写]
9	首	シヤバ	〃	〃	②藻汐草[写]
10	舌	アウ	〃	〃	②藻汐草[写]
11	雨	ルアンベ	〃	〃	③蝦夷語和解
12	霜	クルツベ	〃	〃	③蝦夷語和解
13	川尻	ベツブツ	〃	〃	③蝦夷語和解
14	閻魔王	ニツ子カモイ	〃	〃	③蝦夷語和解
15	男	ヲツカイ	〃	〃	③蝦夷語和解

④金沢家文書は、1-A に分類される語彙が加賀家文書の二件 (②と③) に比べて非常に少なく、(4-6) の No. 1~5 は、④金沢家語彙集全 20 例中の 5 例 (全体の約 13.8%) である。No. 6~10 は、②加賀家「藻汐草 [写]」で 1-A だが、③加賀家「[蝦夷語和解]」ではアイヌ語の語彙が欠けている例であって、全体的に北海道東部方言には見られないものが多い。No. 11~15 は、③加賀家「[蝦夷語和解]」で 1-A だが、②加賀家「藻汐草 [写]」では 1-B に分類されるものである。例えば、「濁点の変更や子音 /y/ の表記である「イ」が「エ」で実現しているものや、/mu/ が「モ」ではなく「ム」で実現しているものがある (詳しくは第 3 章 3.4 節を参照)。

(4-7) 1-B の語彙例 :

	①上原藻汐草		見出し	アイヌ語	出典
1	風	レイラ	〃	レラ	④金沢家
2	妹	ヅレシ	〃	トレシ	④金沢家
3	鹿	ユーク	〃	ユク	④金沢家
4	蜂	シヨーヤ	〃	ソヤ	④金沢家
5	海月	フンベイトリ	〃	フンベエトロ	④金沢家
6	雨	ペニ	〃	ベニ	②藻汐草[写]

7	月	クン子チュツ プ	〃	クン子チュフ	②藻汐草[写]
8	正月	エノミチュツ プ	〃	エノミチュツ フ	②藻汐草[写]
9	医者	イツ°、子	〃	イツ、子	②藻汐草[写]
10	其方	イチヨーカイ	〃	イチヨカエ	②藻汐草[写]
11	露	ムンベ	〃	ムンヘ	③蝦夷語和解
12	境	コタンウツ° ル	〃	コタンウトロ	③蝦夷語和解
13	郊	コタンイーバ キタ	〃	コタンエイバ ケタ	③蝦夷語和解
14	公儀	エントーカモ イ	〃	エントカム(モ) イ	③蝦夷語和解
15	腰	クツコロシ	〃	クツコロウシ	③蝦夷語和解

1-B は、それぞれの表記の特徴を調べるのに適している。(4-7) の No. 6~10 は、②加賀家「藻汐草 [写]」で 1-B だが、③加賀家「[蝦夷語和解]」ではアイヌ語の語彙が欠けている例、No. 11~15 は、③加賀家「[蝦夷語和解]」で 1-B だが、②加賀家「藻汐草 [写]」では 1-A に分類されるものを例としてあげた。

代表される推定形はそれぞれ以下の通りである：No. 1: *rera*、No. 2: *tures*, -i、No. 3: *yuk*、No. 4: *soya*、No. 5: *humpeetor*、No. 6: *peni*/ [weni?], No. 7: *kunnecup*、No. 8: *inomi cup*、No. 9: [itutune?], No. 10: *eciokay*、No. 11: *munpe*、No. 12: *kotan utur*, -u、No. 13: *kotan eepak*, -i ta、No. 14: *Ento kamuy*、No. 15: *kutkorus*。

(4-8) 1-C の語彙例：

	①上原藻汐草		見出し	アイヌ語	出典
1	地	シリカ	〃	シリカタ	④金沢家
2	月	クン子チュツ プ	〃	チュフ	④金沢家
3	寒	メイ	〃	メノエ	④金沢家
4	雲	ニシ	〃	ニシヨロ	④金沢家
5	伯母	コンナリペ	〃	ウナルヘ	④金沢家
6	晴れる	ウ、ラリイチ ヤク	〃	ウ、ラリイナ ヤク	②藻汐草[写]
7	炎(ほのほ)	イベク、	〃	アベク、	②藻汐草[写]

8	吾(われ)	カニ	〃	カ(ア)ニ	②藻汐草[写]
9	男子	ヲツカイヘカチ	〃	ヲッカエセカチ	②藻汐草[写]
10	股	ハアウレ	〃	バアウレベ	②藻汐草[写]
11	地	モシリ	〃	ペケンモシリ	③蝦夷語和解
12	西	シユム	〃	シユムレラ	③蝦夷語和解
13	滝	シヨー	〃	ベッシヨー	③蝦夷語和解
14	不近	ハンケコー	〃	シヨモハンケ	③蝦夷語和解
15	病人	シエーウタレ	〃	シエーグル	③蝦夷語和解

(4-8) の No. 6~10 は、②加賀家「藻汐草 [写]」で 1-C だが、③加賀家「[蝦夷語和解]」ではアイヌ語の語彙が欠けている例、No. 11~15 は、③加賀家「[蝦夷語和解]」で 1-C だが、②加賀家「藻汐草 [写]」では 1-A に分類されるものを例としてあげた。

この類は、見出しが一致し、アイヌ語が部分的に一致を見せるものである。例えば、No. 1 の「地」は、「～に」を表す格助詞 *ta* を加えた形式に変更されている。No. 2 の「月」は、*kunnecup* (夜の月) から *kunne* (暗い、夜) をとった形式、No. 15 の *siyeye utar* 「病人」は、*utar* 「人々」を =*kur* 「人、者」に変更した例である。

なお、No. 8 の「吾(われ)」は、書入れによって *kani* 「私 (一人称単数代名詞)」を *ani* とした例であり、これも情報の付加と考えると 1-C に含める⁹。また、1-A の基準を厳しくするために、No. 6 のように、「チ」を「ナ」と写し間違っただろうと思われるような不明確な例は 1-C に入れた。3章 3.4.9 節でも触れたが、No. 9 *okkay hekaci* の「ヘカチ」と「セカチ」についても No. 6 と同様の扱いとして 1-C に含めた。そのほかの例については以下の通りである。

No. 3: *me* 「寒さ」と *menoye* (<*me-noye* 寒さ・をねじる) 「(人が) 寒いと感じる」

No. 4: *nis* 「雲」、*nisor* (<*nis-or* 雲・のところ) 「空、天」

No. 5: *konnarpe* (<*kor-(u)narpe* ~の・おばさん) 「おばさん」、*unarpe* 「おばさん」

No. 7: 「イ」から「ア」への変更 (推定形は不明。 *apekur* 「火にあたる」か?)

No. 10: [*paraure?*] 「足の甲?」、 [*para urepet?*] 「足の指?」

No. 11: *mosir* 「国土」と *peker_mosir* 「明るい国土」

No. 12: *sum* 「西」と *sum rera* 「西風」

No. 13: *so* 「滝」と *pet so* 「川の滝」

No. 14: *hankeko* (<*hanke-ko* 近い・打消の接尾辞) 「近くない」と *somo hanke* (<*somo* 否定・*hanke* 近い) 「近くない」

⁹ *ani* という代名詞をどのように考えるべきかは一考を要するため、詳しい議論は第6章に譲る。

第一グループの1-A から1-Cに含まれる用例数(①上原『藻汐草』と対になる延べ語数)とそれぞれのパーセンテージは以下のようなになる。

	②加賀家 「藻汐草 [写]」	③加賀家 「蝦夷語和解」	④金沢家 語彙集
1-A	351/526 対 (約 66.7%)	189/457 対 (約 41.4%)	20/145 対 (約 13.8%)
1-B	143/526 対 (約 27.1%)	113/457 対 (約 24.7%)	26/145 対 (約 17.9%)
1-C	20/526 対 (約 3.8%)	76/457 対 (約 16.6%)	20/145 対 (約 13.8%)
合計	514/526 対 (約 97.7%)	378/457 対 (約 82.7%)	66/145 対 (約 45.5%)

表 4-3 : ①上原『藻汐草』に対する類似度 :
第一グループの用例数とパーセンテージ

4. 4. 3. 第二グループの語彙

第二グループの特徴は、「和語見出しが完全に一致しているわけではなく相似の関係にある」という点である。

第二グループ : 和語見出しが相似・類似する

- A. 和語見出し (相似)・アイヌ語 (一致)
- B. 和語見出し (相似)・アイヌ語 (推定形が一致)
- C. 和語見出し (相似)・アイヌ語 ((推定形が) 部分的に一致)

表 4-4 : 第二グループの基準

アイヌ語の差は、第一グループのA からCにそのまま対応している。見出しの意味は然程変わらないことも多く、アイヌ語による指示対象が同じであれば、あとは訳語や表記の問題とも言える。ただし、見出しをより適切なものに変更したのか、全く新しい見出しとして立てたのかは判別できない。ここでは見出しが完全一致するものを第一グループに含め、それ以外は第二グループにまわしている。

(4-9) 2-A の語彙例 :

	①上原藻汐草		見出し	アイヌ語	出典
1	沢	ナイ	谷	〃	④金沢家
2	丘陵	ヤベカ	岡	〃	④金沢家
3	處	コタン	村	〃	④金沢家
4	たも	ビンニ	タモ木	〃	④金沢家
5	長芋	チウリフ	蕷	〃	④金沢家
6	當年	タンバ	當歳	〃	②藻汐草[写]
7	明年	ヲヤバ	明歳	〃	②藻汐草[写]
8	去年	シヤキ子	去歳	〃	②藻汐草[写]
9	三年前	ホシケシヤキ 子イトコタ	三歳前	〃	②藻汐草[写]
10	古川	メム	古川の溜水	〃	③蝦夷語和解
11	燃る	アベセベク	火燃る	〃	③蝦夷語和解
12	船玉神	ニمام	船神	〃	③蝦夷語和解
13	疥癬	マヤイケ	ひせん	〃	③蝦夷語和解
14	くしやみ	エシウナ	クスヤミ	〃	③蝦夷語和解

(4-9) の No. 6~No. 9 は、②加賀家「藻汐草 [写]」で唯一 2-A に分類される 4 例。No. 10~No. 14 は、③加賀家「[蝦夷語和解]」で 2-A だが加賀家「藻汐草 [写]」では 1-A に分類されるものを例として示した。

④金沢家文書に関しては、No. 1 の「沢」と「谷」のように、アイヌ語の *nay* の訳語としてどちらも適切であっても日本語の語彙では指示対象のイメージが変わってしまうというものが見られる。一方、②加賀家「藻汐草 [写]」の No. 6~No. 9 に関しては、漢字表記の違いのみに留まるが、③加賀家「[蝦夷語和解]」は、No. 10 や No. 11 のように情報が付け加わったり、No. 12 のように一文字削除するなどして、より適切な見出しへと変更しようとする傾向が見られる。③加賀家「[蝦夷語和解]」が単なる「写本」ではないということを示す特徴のひとつである。

(4-10) 2-B の語彙例 :

	①上原藻汐草		見出し	アイヌ語	出典
1	石(小なるハ)	ヒニケウ	ヂヤリ	ビニケウ	④金沢家
2	醒	マウシク	叱	マウサク	④金沢家
3	甘い	ルラコル	美味	ルリコル	④金沢家
4	小鴨	コベツチャ	マ鴨	コヘチャ	④金沢家

5	龍神	レフンカモイ	鯨	レフンカムイ	④金沢家
6	近い	ハンゲ	近ハ	ハンケ	②藻汐草[写]
7	不孝もの	ヤイキマイバ	不孝物	ヤエキマエバ	②藻汐草[写]
8	霧	ウーラリ	霞	ウラリ	③蝦夷語和解
9	夕	シリヲヌマ	夕方	シリヲヌマン	③蝦夷語和解
10	浜端た	ヲダシヤム	浜端	ヲダシヤム	③蝦夷語和解
11	乏者	シルングル	貧者	シルンクル	③蝦夷語和解
12	痣	ポケシ	あざ	ポケシ	③蝦夷語和解

(4-10) の No. 6 と No. 7 は、②加賀家「藻汐草[写]」で唯一 2-B に分類される 2 例であり、No. 8～No. 12 は、③加賀家「[蝦夷語和解]」で 2-B だが、②加賀家「藻汐草[写]」では 1-A に分類されるものである。和語見出しは 2-A、アイヌ語の特徴は 1-B の傾向を兼ねたものが、この 2-B の類であるので説明は省略する。推定形はそれぞれ以下の通りである。

No. 1: *pin(i)kew*、No. 2: *mawsak*、No. 3: *rurkor*、No. 4: *kopeca*、No. 5: *repuŋ kamuy*、
 No. 6: *hanke*、No. 7: *yaykimaypa*、No. 8: *urar*、No. 9: *sir'onuman*、No. 10: *otasam*、
 No. 11: *sirunkur*、No. 12: *pokes*, -i

(4-11) 2-C の語彙例：

	①上原藻汐草		見出し	アイヌ語	出典
1	酉	シユム	西	ヲシユム	④金沢家
2	甘い	ルラ	美味	ルリコル	④金沢家
3	甘い	ルラビリカ	美味	ルリコル	④金沢家
4	粟	ムジロ	餅粟	ムンチロア マ、	④金沢家
5	茸	カルシ	舞茸	ユウカルシ	④金沢家
6	茸	カルシ	木茸	ウコニカルシ	④金沢家
7	こじやく (蛇状子)	イチヤリボ	胡着	イチヤリキナ	④金沢家
8	晴れる	ニシヨロヲカ ケアン	晴	ニシヲカケア ン	③蝦夷語和解
9	寒	メイ	寒い	メウン	③蝦夷語和解
10	夕	ヲヌマン	夕方	シリヲヌマン	③蝦夷語和解
11	魯齊亜人	フーレシシヤ ム	魯西亜人	フーレシヤム	③蝦夷語和解

12	若いもの	ヘカチ	若い者	セカチ	③蝦夷語和解
13	手の筋	テケアヤ	手筋	アヤ	③蝦夷語和解

和語見出しは2-A、アイヌ語の特徴は1-Cの傾向を兼ね備えたものがこの2-Cの類である。(4-11)のNo. 8~No. 13は、③加賀家「[蝦夷語和解]」で2-Cだが、②加賀家「藻汐草[写]」では1-Aに分類される全ての例を提示した。

具体的に見ていくと、No.1は方言差であり、①上原『藻汐草』の *sum* 「西」に対して、*osum* (< *o-sum* の尻?・西) 「西」という語形が採録されている(『方言辞典』では名寄方言として確認される)。No. 2やNo. 3は、①上原『藻汐草』の *rur* 「だし、塩気」や *rurpirka* (< *rur-pirka* だし・良い) 「美味しい」に対して、*rurkor* (< *rur-kor* だし・を持つ) 「美味しい」という *rur* 「だし」を含んだ語彙をひとつ記載している例である。No. 5とNo. 6は、①上原『藻汐草』の *karus* 「きのこ」に対して、*[yukkarus]* (< *yuk-karus* 鹿・きのこ) 「舞茸」と *uko(m)nikarus?* (< *u-komni-karus* ? 互い?・柏・きのこ) 「椎茸」のように *karus* 「きのこ」を含んだ複数の語彙が示されている例である。そのほかの例については以下の通りである。

No. 4: *munciro* 「粟」と *munciro amam* 「粟の穀物」

No. 7: *icaripo* と *icarikina* 「コジャク」(方言差)

No. 8: *nisor okake an* (< *nisor* 空・*okake* の後・*an* ある) 「晴れる(空が終わる)?」と *nisor okake an* (< *nisor* 雲・*okake* の後・*an* ある) 「晴れる(雲が終わる)」

No. 9: *me* 「寒さ」と *meun* (< *me* 寒さ・*un* につく) 「寒い」

No. 10: *onuman* 「夕方(名詞/副詞)」と *sir'onuman* 「夕方になる(0項動詞)」

No. 11: *huresisam* (< *hure* 赤い・*sisam* 隣人) と *huresam* (< *hure* 赤い・*sam(o)* 隣人(*sisam* の別称)) 「ロシア人」¹⁰

No. 12: *hekaci* 「子ども」の *he* に対する表記「へ」と「セ」(3章3.4.9節を参照)

No. 13: *tek'aya* 「手の筋」と *aya* 「手筋」

第二グループの2-Aから2-Cに含まれる用例数(①上原『藻汐草』と対になる延べ語数)とそれぞれのパーセンテージは表4-5のようになる。

¹⁰ 「フーレシヤム」は、母音の /i/ が無性化した結果であり、推定形は上原『藻汐草』と同じ *huresisam* と考えてもよいかもしれない。その場合、この項目は2-Bという扱いになる。

	②加賀家 「藻汐草 [写]」	③加賀家 「蝦夷語和解」	④金沢家 語彙集
2-A	4/526 対 (約 0.8%)	22/457 対 (約 4.8%)	9/145 対 (約 6.2%)
2-B	2/526 対 (約 0.4%)	10/457 対 (約 2.2%)	19/145 対 (約 13.1%)
2-C	0/526 対 (0%)	12/457 対 (約 3.8%)	8/145 対 (約 5.5%)
合計	6/526 対 (約 1.1%)	44/457 対 (約 9.6%)	36/145 対 (約 24.8%)

表 4-5 : ①上原『藻汐草』に対する類似度 :
第二グループの用例数とパーセンテージ

4. 4. 4. 第三グループの語彙

第三グループの特徴は、アイヌ語の語彙に見られる独自性である。

第三グループ : アイヌ語がオリジナルである

- A. 和語見出し (一致・相似)・アイヌ語 (オリジナル)
- B. 和語見出し (対応関係無し)・アイヌ語 (オリジナル)

表 4-6 : 第三グループの基準

見出し語は①上原『藻汐草』を参照している (のかもしれない) が、対応するアイヌ語が異なっている場合 (3-A) や、見出し語自体に新規性が見られる場合 (3-B) がある。このグループに属する語彙はフィールドから得られた語彙である可能性があり、従って、方言的な特徴が見込まれることもある。

(4-12) 3-A の語彙例 :

	①上原藻汐草		見出し	アイヌ語	出典
1	天	リキタ	〃	カントウ	④金沢家
		リキン			
		リイ			
2	日	ベケレチユツ	〃	シユクシ	④金沢家

		プ			
3	母	ハボ	〃	ヲン子キ	④金沢家
4	母の母	シュチ	祖母	フチ	④金沢家
5	徒弟	イリワキ	〃	ウカルカ	④金沢家
		イワクタリ			
6	津波山\ノミ	ヲハコベ	津波	ブルブルケ	④金沢家
7	午	ヒカ°タ	南	エレバシ	④金沢家
8	姉妹の聳	ヲコマダンデ	聳	コヽ	④金沢家
9	眩暈	ヌトウカリ	めまゑ	シュ\ノエ	④金沢家
10	白鳥	デタチリ	〃	ヘケレチカフ	④金沢家
		レタチリ			
11	霜	シタコレ	〃	タシクリ	②藻汐草[写]
		クルツベ			
12	坂	ツ°ー	〃	フル	②藻汐草[写]
13	谷地	ヤヂ	〃	サラ	②藻汐草[写]
		ケナシカ			
14	黒ぶし	トツコホ子	〃	トコンホ子	②藻汐草[写]
15	天	リキタ	〃	カントウ	③蝦夷語和解
		リキン			
		リイ			
16	枝川	マクンベツ	〃	テケ子ベツ	③蝦夷語和解
17	上旬	アシンノチウツブ	〃	アシケチウブ	③蝦夷語和解
18	医者	イツ°ヽ子	〃	ヘシルトノ	③蝦夷語和解
19	家来	ウタレ	〃	エヨシクル	③蝦夷語和解
20	主人	コログル	〃	アツテクル	③蝦夷語和解
21	中指	シュンケンベ	〃	ノシケベチ	③蝦夷語和解
		シンノシケナ			
		ツケンベ			
22	肌	レウケ	〃	カブカシケ	③蝦夷語和解
		ヌラム			
23	鼻汁	イトベチツカ	鼻汁(水)	イトラワッカ	③蝦夷語和解
24	日	ベケレチユツプ	日輪	レクトココモイ	③蝦夷語和解

(4-12) の No. 11～14 は、②加賀家「藻汐草 [写]」で唯一 3-A に分類される 4 例である。No. 11 と 12 は③加賀家「[蝦夷語和解]」で欠落しているが、No. 13 と No. 14 に関しては見出しとアイヌ語どちらもそのまま引き継がれている。No. 4、No. 6～9、No. 24 は和語見出しが相似し、それ以外の例は和語見出しが一致する。

フィールドから得られた語彙である可能性を考えられるものとして、例えば、No.7 の「南エレバシ」は、*erepasi* (<*e-rep-as* 頭を表す接頭辞・沖・～に～を立てる) という語構成で「沖のほうへ」という意味になると考えられる。したがって、南側に海がある地域、つまりは太平洋沿岸地域でなければこのような言い方はしないはずだという推測がたつ。

(4-13) 3-B の語彙例：

	①上原藻汐草		見出し	アイヌ語	出典
1	—	—	雪	ウバシ	④金沢家
2	—	—	穴	ブエ	④金沢家
3	—	—	涼	メマンカ	④金沢家
4	—	—	嫁	コシマチ	④金沢家
5	—	—	孝	ウヌ、カ	④金沢家
6	—	—	腹痛	トエチヌエバ	④金沢家
7	—	—	季	モマ	④金沢家
8	—	—	菖蒲	シルコクシリ	④金沢家
9	—	—	孔雀	ケシヨラツフ	④金沢家
10	—	—	大魚	ソヨマシケ	④金沢家
11	—	—	海岸通	ヤベカバイ	③蝦夷語和解
12	—	—	浜の道	ヒシタル	③蝦夷語和解
13	—	—	浅い	ヲカシテ	③蝦夷語和解
14	—	—	水深い	ベヲホイ	③蝦夷語和解
15	—	—	涎	トブセ	③蝦夷語和解
16	—	—	足の裏	ウレアサマ	③蝦夷語和解

②加賀家「藻汐草 [写]」には 3-B の例は見つからない。(4-13) の No. 11～No. 16 は、③加賀家「[蝦夷語和解]」で唯一 3-B に分類される 6 例である。この類に含まれる用例は最もオリジナリティが高く、No. 1 のように「雪」などという基礎語彙が増やされたり、No. 4 のように「贅」(むこ) があって「嫁」がないという①上原『藻汐草』のいわば手落ち部分も補完されたりしている。

	②加賀家 「藻汐草 [写]」	③加賀家 「蝦夷語和解」	④金沢家 語彙集
3-A	4/526 対 (約 0.8%)	29/457 対 (約 6.3%)	15/145 対 (約 10.3%)
3-B	0/526 対 (0%)	6/457 対 (約 1.3%)	28/145 対 (約 19.3%)
合計	4/526 対 (約 0.8%)	35/457 対 (約 7.7%)	43/145 対 (約 29.7%)

表 4-7 : ①上原『藻汐草』に対する類似度 :
第三グループの用例数とパーセンテージ

4. 4. 5. 写本と類本の判断基準に関する考察

ここまで第一グループから第三グループまでを見てきたが、これらの用例数とパーセンテージを再びまとめると表 4-8 のようになる。

	②加賀家 「藻汐草 [写]」	③加賀家 「蝦夷語和解」	④金沢家 語彙集
1-A	351/526 対 (約 66.7%)	189/457 対 (約 41.4%)	20/145 対 (約 13.8%)
1-B	143/526 対 (約 27.1%)	113/457 対 (約 24.7%)	26/145 対 (約 17.9%)
1-C	20/526 対 (約 3.8%)	76/457 対 (約 16.6%)	20/145 対 (約 13.8%)
第一 合計	514/526 対 (約 97.7 %)	378/457 対 (約 82.7%)	66/145 対 (約 45.5%)
2-A	4/526 対 (約 0.8%)	22/457 対 (約 4.8%)	9/145 対 (約 6.2%)
2-B	2/526 対 (約 0.4%)	10/457 対 (約 2.2%)	19/145 対 (約 13.1%)
2-C	0/526 対 (0%)	12/457 対 (約 3.8%)	8/145 対 (約 5.5%)
第二 合計	6/526 対 (約 1.1%)	44/457 対 (約 9.6%)	36/145 対 (約 24.8%)

3-A	4/526 対 (約 0.8%)	29/457 対 (約 6.3%)	15/145 対 (約 10.3%)
3-B	0/526 対 (0%)	6/457 対 (約 1.3%)	28/145 対 (約 19.3%)
第三 合計	4/526 対 (約 0.8%)	35/457 対 (約 7.7%)	43/145 対 (約 29.7%)

表 4-8 : ①上原『藻汐草』に対する類似度：
各グループの用例数とパーセンテージ（まとめ）

②加賀家「藻汐草 [写]」に関しては、第一グループが 97.7% と非常に高い割合を示しており、まさに「写本」という位置づけになる。和語見出しの一致基準として、漢字表記の違いなどは認めないという厳しい基準を設けているにも関わらず、このような高い割合が出ているのは注目に値する。また、和語見出しに加えてアイヌ語についても完全一致するもの (1-A) が 6 割を超えており、推定形の一致 (1-B) を含めると 9 割を超える。すなわち、原典の①上原『藻汐草』をより忠実に写し取った写本のなかの写本と言っても過言ではない。

対して、④金沢家文書語彙集については第一グループに入る語彙が半数に届かないものの、第二グループを含めると 7 割に達する。全くオリジナルの語彙集というわけではないことは確かであろう。ただし、第三グループに入るものが 3 割近く、なかでも 3-B に分類されるのは全体の 19.3% となり、加賀家文書の二件 (②と③) に比べて大きな割合を示している。これは「類本」と呼ぶにふさわしい。

最後に、③加賀家「[蝦夷語和解]」であるが、これも第一グループが約 82.7% と非常に高い割合を示している。ただし、和語見出しとアイヌ語語彙が完全一致する 1-A は半数に届かず、1-B を含めても約 66.0% と 7 割には達さないという点では、②加賀家「藻汐草 [写]」と一線を画するところである。1-C の割合が比較的高いところは特徴的であり、アイヌ語に関して部分的に修正しようとした力が働いていると言える。

ここまでは、①上原『藻汐草 [写]』に対する類似度を見てきたが、③加賀家「[蝦夷語和解]」は、②加賀家「藻汐草 [写]」の後に記載されたものであるので、ここで一度、②加賀家「藻汐草 [写]」に対する③加賀家「[蝦夷語和解]」の類似度を確認する。これまでと同じ要領で、③加賀家「[蝦夷語和解]」の語彙を三つのグループに分類すると表 4-9 のようになる。

	③加賀家 「蝦夷語和解」		③加賀家 「蝦夷語和解」		③加賀家 「蝦夷語和解」
1-A	210/457 対 (約 45.9%)	2-A	31/457 対 (約 6.8%)	3-A	27/457 対 (約 5.9%)
1-B	91/457 対 (約 19.9%)	2-B	12/457 対 (約 2.6%)	3-B	6/457 対 (約 1.3%)
1-C	67/457 対 (約 14.7%)	2-C	13/457 対 (約 2.8%)		
第一 合計	368/457 対 (約 80.5%)	第二 合計	56/457 対 (約 12.2%)	第三 合計	33/457 対 (約 7.2%)

表 4-9 : ②加賀家「藻汐草 [写]」に対する③「[蝦夷語和解]」の類似度 :
各グループの用例数とパーセンテージ (まとめ)

完全一致 (1-A) の割合が①上原『藻汐草』に対するものより若干増え、逆にオリジナリティの高い第三グループの合計は2対分減っている (上述した (4-12) 3-A の語彙例 : No. 13 と No. 14)。これは③加賀家「[蝦夷語和解]」が原典の①上原『藻汐草』ではなく、②加賀家「藻汐草 [写]」からさらに写した可能性を示唆している。1-A と 1-B の合計は 301 対 (約 65.9%) であってやはり7割に届かないけれども、高い類似度を示していることは確かである。よって、「写本」か「類本」かという判断は、付加的な情報がどれだけあるかという点に委ねられるだろう。

例えば、③加賀家「[蝦夷語和解]」には、収録語彙の多くに語源解が付けられている。先にも述べたが、3-A の No. 15 「カントウ」には、「天」という訳語とともに「其上ニ廻る日」とあり、*kan-*「上の」*to*「日」と伝蔵が考えていたと推測できる。この種の解釈は民間語源に近いものであり、もっともらしい解釈から文法的に適切とはいき切れないものまで幅広く含んでいる¹¹。例えば、3-A の No. 16 「枝川 テケ子ベツ」についている「手川」という語源解は、実際に *tek, -e*「手」・*ne*「である」・*pet*「川」として考えられるもっともらしい解釈である。一方、「氷 コンル」についている「金ニ鑄る」という語源解は、*kon*「金 (日本語)?」・*ru*「溶ける」から編みだされたものかもしれないが、現在では日本語の「こおり」からの借用である可能性が指摘されている (例えば中川 (1995: 195) など)。

このほか③加賀家「[蝦夷語和解]」は、収録語彙が限定的であるという点も考慮に入れる必要がある。例えば、①上原『藻汐草』の「雨」という項目には、「アプト」、「ルアンベ」、「ベニ」、「ウエニ」の四語が記載されており、②加賀家「藻汐草 [写]」もそれらに一致あるいは推定形が同じ四語が記載される。しかし、③加賀家「[蝦夷語和解]」には「アプト」と「ルアンベ」しかない。「ベニ」や「ウエニ」が記載されなかった背景には、根室地域で

¹¹ 詳しくは深澤 (2016a) を参照のこと。

使用されなかった方言語彙であることが推測される。このように、写すときにアイヌ語の語彙項目が削除され、対にならなくなったものがどの程度あるのかというところも、「写本」か「類本」かというのを判断する基準になってくるだろう。

4. 5. 方言的な特徴

本節では、これまで見てきた四種の資料において「父」、「母」、「星」、「寒い」という四項目にみられる語彙を取り上げ、資料に見られる方言的な特徴について検討する。

4. 5. 1. 「父」と「母」

「父」と「母」はアイヌ語のなかでも方言差が目立つ語彙であるが、興味深い点は *onneke* 「母親」というこれまでにあまり報告のない語形が金沢家文書語彙集と加賀家「[蝦夷語和解]」に確認できることである。「父」と「母」という項目に関して、それぞれの文献に記載される語彙は以下ようになる（波線部は字消しを意味し、ローマ字転写と括弧内のグループ分類は深澤による）。

①上原熊次郎『藻汐草』

父	ハンベ▲ミチ▲アチャ	<i>hampe / mici / aca</i>
母	ハボ	<i>hapo</i>

②加賀家文書「藻汐草 [写]」

父	ハンベ○ミチ○アチャ	<i>hampe (1-A) / mici (1-A) / aca (1-A)</i>
母	ハボ	<i>hapo (1-A)</i>

③加賀家文書「[蝦夷語和解]」

父	ミチ	<i>mici (1-A)</i>
	<u>アツチャ</u>	<i>aca (1-B)</i>
母	ハボ	<i>hapo (1-B)</i>
父親	アチャ	<i>aca (2-A)</i>
母親	ヲン子ケ	<i>onneke (3-A)</i>

④金沢家文書語彙集

父	ミチ	<i>mici (1-A)</i>
	アチャ	<i>aca (1-A)</i>
母	ヲン子キ	<i>onneke (3-A)</i>

ハボ

hapo (1-A)

アイヌ語の収録語彙を見ると、①②対③④という構図になっているのがわかる。これは、本章4.4節で見たように、①「原典」と②「写本」に対し、③と④が「類本」であるということに関わってくるだろう。具体的には、③と④は、「母」や「母親」の見出しに *onneke* という語彙が記載されており、「父」や「父親」の見出しには *hampe* という語彙が削除され、記載されていない。これについて、筆者は *onneke* が実用に即した語（恐らく根室周辺地域の言葉）であり、一方 *hampe* は記す必要のなかった語（例えば、他地域の方言形であるとか、日常では殆ど使用しないような言い方であった等）であるとする。この説の補強としては、*onneke* が十勝（帯広、本別）など北海道の東部方言に顕著な報告があり、*hampe* は北海道の中央部に位置する旭川と名寄以外では報告されていないということがある（澤井2001、2006、知里1975、服部・知里1960）¹²。

③と④において第三グループ相当の語形が一致するというのは、二つの資料が非常に近い地域の言葉を反映しているという地域的（方言的）関係か、一方が他方を写したというような資料的關係が見込まれる。後者である場合は、第二グループに特徴的な和語見出しが一致することや、第三グループのなかでもオリジナルの見出しである 3-B が一致することが期待される。そうでなければ、むしろ地域的な類似性を反映しているというほうが考えやすい。③と④の間には第二グループや 3-B で一致する項目は見つからないため、これらは地域的（方言的）に近い関係にあつて、*onneke* はその地域的な類似が見込まれる最たる例であると考えられる（言語地図を用いた詳細な検討は第8章を参照）。

4. 5. 2. 「星」

「星」という項目にも方言差が見られる。

①上原熊次郎『藻汐草』

星 ノチウ▲リコツプ▲ケダ *nociw / rikop / keta*

②加賀家文書「藻汐草 [写]」

星 ノチウ リコツフ ケタ *nociw (1-A) / rikop (1-B) / keta (1-B)*

③加賀家文書「〔蝦夷語和解〕」

星 ノチウ *nociw (1-A)*

④金沢家文書(No.89) 語彙集

¹² 「父」と「母」に関する言語地理学的な研究は、第8章を参照のこと。

星 リコフ

rikop (1-B)

④の金沢家文書では「星」の見出しに「リコフ」とあるが、これは服部・知里 (1960) や服部 (編) (1964) で美幌方言として記載される *rikop* に相当するものと考えられる。問題は、③の「[蝦夷語和解]」が金沢家文書と違う語形を取り上げていることであるが、釧路では *nocuy* という記録が見られる (服部・知里 1960) ので、美幌と釧路に隣接する根室では、*rikop* と *nociw* の2つの語形が共存していた可能性もある¹³。むしろ、金沢家文書が北海道の大多数の方言で用いる *nociw* ではなく *rikop* のみを提示していることは興味深く、資料の方言的な特徴として気に留めておくべきかもしれない。

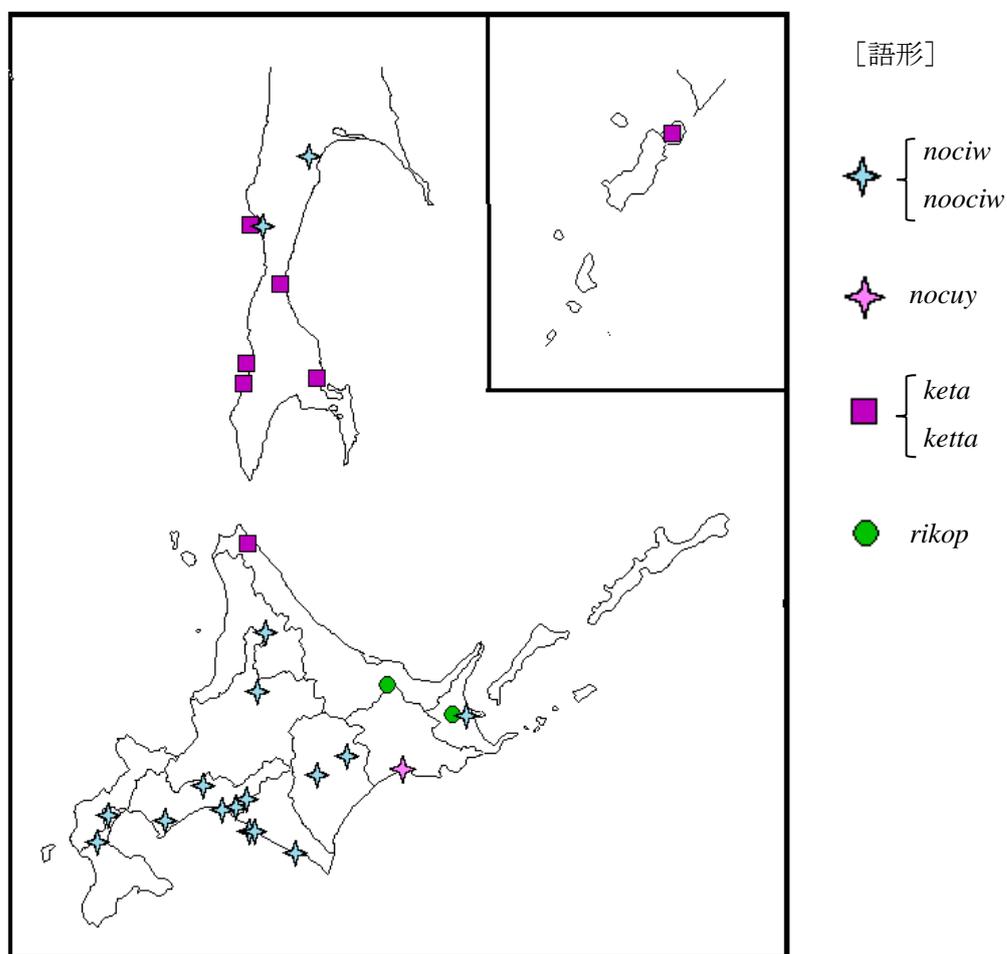


図 4-1 : 「星」

¹³ 『北海道あいぬ方言語彙集成』(p. 116) には *rikop* が釧路市春採の語彙としても記載されているが、実際に吉田巖の日記や資料で確認できていないことから、釧路にあるかどうかは一旦保留にしておくことにする。

図4-1の言語地図を見ると、*nociw* と *keta* が広域に見出される語形である一方、*rikop* という語形は非常に限られた地域で用いられているのがわかる。また、*rikop* が *rik-o-p* 「上方に・ある・もの」と分析的な解釈に立ち戻りやすい語形をしていることは、*nociw* や *keta* よりも比較的新しく出てきた語形であると考えられるだろう¹⁴。

なお、*nociw* と *keta* のどちらが古いかという点については色々と問題がある。図4-1を見ると、宗谷で *keta* という語形が用いられ、樺太の多くの方言でも *keta*、北千島も *ketta* となっている。よって *keta* が *nociw* を挟み込むような分布とみれば *keta* が古い形であると考えられるわけだが、最北端に位置する樺太の一部地域（内路や、老人語としてライチシカ）では *noociw* という語形も見出されることから、中川（1996: 10-11）は「これを重視するならば、*noociw* の方がむしろ残存形であり、樺太で *noociw* → *keta* という変化が起こったという解釈が成り立つ」と論じている。この点については、さらなる証拠が出てくることを期待したい。

4. 5. 3. 「寒い」

最後に、「寒」という見出しについて検討する。

①上原熊次郎『藻汐草』

寒 メイ *me*

②加賀家文書「藻汐草 [写]」

寒 メイ *me* (1-A)

③加賀家文書「〔蝦夷語和解〕」

寒 メウン *meun* (1-C)

④金沢家文書語彙集

寒 メノエ メアン *menoye* (1-C) / *mean* (1-C)

①や②で取り上げられている *me* というのは、田村（1996: 383）によれば「寒さ」を表す語根であって「独立の名詞としては使われない」ことが報告されている¹⁵。また、現代のア

¹⁴ 最古のアイヌ語語彙集として知られている「松前ノ言」に「里いこ」と見えるが、方言分布から見る限り、*rikop* が *nociw* や *keta* より古いとは今のところ言い難い。

¹⁵ ここで現代のアイヌ語辞典の記述を引用しているのは、便宜上、方言形式を語構成の面から説明するためにすぎず、「語根をとりあげている『藻汐草』の記述はおかしい」ということを主張するものではない。*me* が『藻汐草』の時代に、自立的な形式としてふるまっていた可能性もあるだろう。*meun*, *mean*, *menoye* が *me* を抱合した一形式、あるいは独立の二形式であったか

アイヌ語辞典（中川 1995 : 377; 田村 1996: 383）で確認すると、アイヌ語で「寒い」ということを表す時には、「気温が寒い」という 0 項動詞と「(人が) 寒いと感じる」という 1 項動詞の二形式で表現されることがわかる。④に記載される「気温が寒い」という意味の 0 項動詞 *mean* は、「*mean* < *me-an* 寒さが・ある」という語構成になっており、北海道や樺太で広く使われる語形（服部（編）1964: 225）である。

一方、図 4-2 に示されるように「(人が) 寒いと感じる」という 1 項動詞には方言差が認められる。

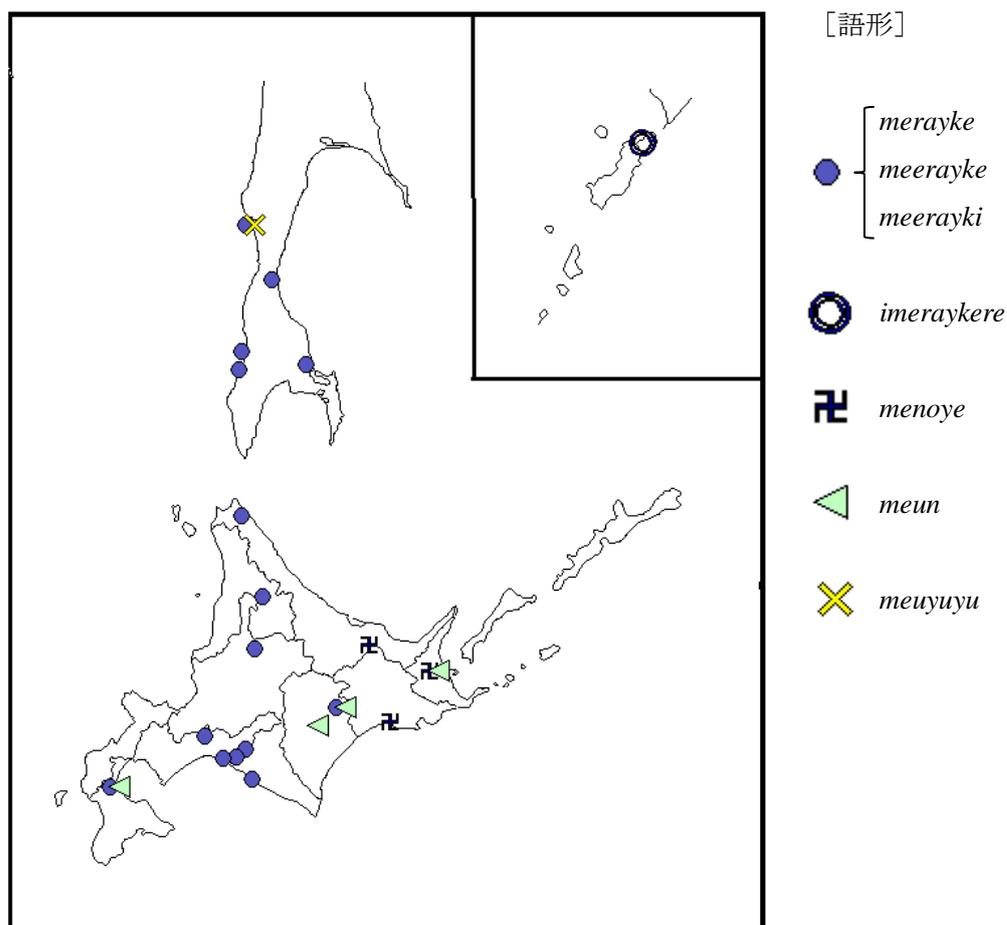


図 4-2 : 「(人が) 寒いと感じる」

服部（編）（1964: 225）によると、③に記載される *meun* は八雲と帯広で、④に記載される *menoye* は美幌で使用される。筆者が調べたところ、*meun* は旭川でも見つかっており、「気温が寒い」という 0 項動詞としても用いられるようであった¹⁶。*mean* と *meun* は音も非常

というのは、これだけでは判断できない。

¹⁶ 0 項動詞の例文としては次のとおり：*sironuma anak méun um an a* 晩は、寒いなあ。（『アイヌ民俗文化財調査報告書』1: 93）。

に似通っていることから、方言によっては混乱が生じたのかもしれない。なお、①～④のどの文献にも記載されていないが、「(人が) 寒いと感じる」という 1 項動詞のうち、北海道各地の方言(八雲、幌別、沙流、旭川、名寄)では *merayke*、樺太のライチシカでは *meerayki* という語形が確認できる(服部(編) 1964: 225)。

このように③と④で収録語彙は違うものの、④が「星」の項目と同様、美幌で報告されているものと同形の語彙が取り上げられていることが重要なことである。やはり記載されている語彙が限定的な場合には、その語彙に方言的な特徴が反映されている可能性があるということを考慮に入れるべきであろう。

4. 6. まとめ：方言資料として活用するために

本章では 4.1 節で四点の資料に関する紹介、4.2 節で先行研究をもとに資料の詳細な説明を行い、4.3 節で部門、4.4 節で語彙の対応について検討をおこなった。そして最後の 4.5 節では資料の方言的な特徴について述べた。

特に 4.4 節では写本と類本の判別方法について、原典との類似度を測る基準として三つのグループをたて、和語見出しとアイヌ語語彙のそれぞれがどのように類似し、どのような割合で一致しているかということ調べた。その結果、②加賀家「藻汐草 [写]」に関しては、和語見出しとアイヌ語語彙のどちらも一致する 1-A が 6 割を超えており、アイヌ語の表記法は異なるが推定形は一致するものを含めると 9 割を超えるという高い類似度が確認されたが、③加賀家文書「[蝦夷語和解]」や④金沢家語彙集は、それに比べると類似度が下がり、類本相当であるという結論に至った。

4.5 節では、③加賀家文書「[蝦夷語和解]」や④金沢家語彙集において、原典の①上原『藻汐草』に記載のない特徴的な語彙、あるいは③や④では写されなかった語彙に注目し、これらの資料のアイヌ語の方言的な特徴について検討した。その結果、③や④に記載されている語彙は北海道東部方言の特徴が確認でき、「根室方言」の特徴が反映された可能性があると結論づけた。

最後になるが、参考までに現在進行中の共同研究についても言及しておきたい。筆者は、統計数理研究所の小野洋平氏と共同で研究をする機会を得て、本章で用いた①～④の資料が、どの方言に最も近いかということを経験分析にかけてもらった。対象とした方言は、八雲、幌別、沙流、帯広、釧路、美幌、旭川、名寄、宗谷、千歳、静内、十勝(本別)、樺太(ライチシカ)、北千島の 14 方言である。分析にかけた語彙は、④金沢家文書語彙集の和語見出しのなかで、服部(編) (1964) 『アイヌ語方言辞典』に記載の語彙のみ抽出する形で選定した。①上原『藻汐草』では、「天地部」「人倫部」の語彙に相当する。④金沢家文書語彙集は、①と必ずしも見出し語が一致しないが、語彙数が少なく限定的であるので、①に記載のない語彙であっても『アイヌ語方言辞典』にあれば採用し、できるだけ取りこぼさないよう配慮した。

和語見出しの項目数は以下に示す 47 項目、そのうち服部・知里 (1960) の基礎語彙 200 項目と同じものは 18 項目 (☆印のもの) である。方言差がある場合はひと項目につき幾通りかの語形が見られるが、①～④の資料中に見られるアイヌ語語彙の異なり語数は 187 であった。そのうち同源・同一語根と考えられる語彙をまとめると異なり語数は 129 となる。

天、☆空、地面、☆土、☆月、☆星、☆風、☆雨、☆雲、いなびかり、☆霧、虹、☆氷、☆雪、地震、☆山、沢、自然にあいている穴、穴、陸、☆海、☆川、☆石、小石、砂利、☆砂、岩、村、波、風、天気がよい、森林、☆寒い、涼しい、☆父、☆母、祖父、祖母、兄、弟、姉、妹、おば、おじ、甥、婿、嫁

結果として、③加賀家「蝦夷語和解」と④金沢家語彙集のふたつの資料が釧路や美幌のクラスターに入ることとなり、その他のアイヌ語方言に比べて類似度が高いという結果となった。これらふたつの語彙集は根室周辺地域で執筆されていると考えられ、『藻汐草』からアイヌ語の語彙を選定しなおした類本相当資料でもある。この結果は、資料がもつ「根室方言」の特徴を示唆するものであると言える。さらに、美幌は旧行政区域において釧路国に属しており、釧路国は根室国の西部に隣接するので、根室との地理的な近さが方言的な近さとして結果に現れたとも考えられる (図 4-3)。加賀家文書はこれまで「美幌方言の片鱗がうかがえる」などと指摘されてきたが (浅井 1972)、金沢家文書にも釧路や美幌方言に近いという傾向が出ていることは特筆すべきであり、こうした類本相当資料は「根室方言」の資料として今後のアイヌ語方言研究に深みを与えることになると考えられる。

なお、この統計的な結果が支持できるかどうかについてはデータの扱いや値についても検討して頂かなければならず、共著論文として機会を改めて発表できればと考えている。

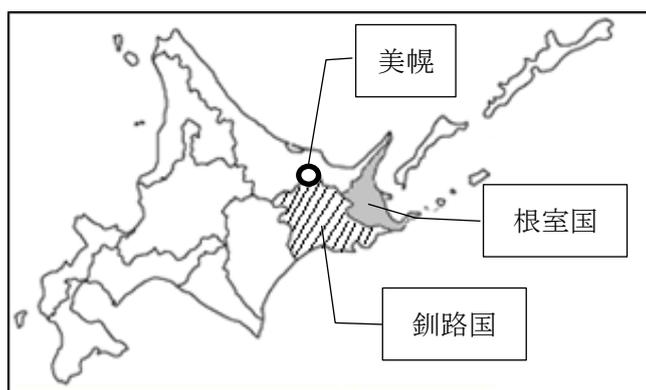


図 4-3 : 釧路国、根室国および美幌の位置

第5章 翻訳と実態

一 日本語による母語干渉と借用語・造語

本章では、蝦夷通辞が書いたアイヌ語について、実際のアイヌ語とアイヌ語翻訳するなかで生じる日本語による母語干渉を概観する。また、翻訳によって必要となったであろう借用語や造語などの状況を調べ、写本同士の比較により翻訳の過程をたどる。

5. 1. アイヌ語と日本語

まず初めに、日本語とアイヌ語の共通点・相違点を確認し、そのうえで蝦夷通辞の日本語による母語干渉について考えることにする。本節では、現代日本語（東京方言）とアイヌ語（北海道方言）について、田村（1978）の「アイヌ語と日本語」および『言語学大辞典 セレクション 日本列島の言語』（亀井他（編）1997）を参考にまとめる。なお、日本語に関しては通時的な変化に関してもよく知られており、アイヌ語は古い日本語とのほうが類似していることもあるため、本文のなかで触れることにする。

5. 1. 1. 音韻

日本語とアイヌ語の音韻体系は以下のようにまとめられる。

	アイヌ語	日本語
母音	i, e, a, o, u	i, e, a, o, u
破裂音	p, t, k	p, b , t, d , k, g
鼻音	m, n	m, n
流音	r	r
破擦音	c [tʃ, ts]	c [tʃ, ts], z
摩擦音	s, h	s, h
半母音（子音）	y [j], w	y [j], w
特殊音素モーラ	—	N, q

表 5-1：アイヌ語と日本語の音素体系

アイヌ語は日本語よりも音素が少なく、/b, d, g, z/ と特殊モーラの /N, q/ が存在しない。しかし、日本語もかつては特殊モーラが存在しなかった。また、日本語はモーラ言語であ

るが、アイヌ語はそれとは異なる。

アイヌ語にはこのほかに声門閉鎖音(*) に関する議論があり、①声門閉鎖音をたてる研究者（服部 1967, 田村 1988 [1997]）、②音声としての有無に関わらず音素として積極的には表記しない研究者（浅井 1969, 佐藤 2008b, 中川 2006）、音声的実質としても認めない研究者（Refsing 1986）がいる。服部 (1979) は、日本語にも声門閉鎖音を認めるという立場をとっており、それと同様の考え方がアイヌ語にもたらされたということを考える必要がある。音節構造と韻律特徴については表 5-2 と表 5-3 の通りである。

	アイヌ語	日本語
開音節	V, CV	V, CV, CyV
閉音節	CVC, VC	CVC (開音節+n/qのみ)

表 5-2 : アイヌ語と日本語の音節構造

もともと、日本語において、拗音、促音、撥音が音韻史的にのちの発達とされることから考えれば、アイヌ語の閉音節 (CVC および VC) が日本語にない特徴と言える。さらに、日本語の固有語は語頭に r が立たないが、「アイヌ語は r で始まる単語を動詞にも名詞にも豊富に持っている」(中川 2003 : 214) という違いもある。

	アイヌ語	日本語
高低 (ピッチ) アクセント	上り核	下げ核

表 5-3 : アイヌ語と日本語の韻律特徴

アイヌと日本語はどちらも高低 (ピッチ) アクセントであるが、上り核と下げ核が弁別的であるという点で異なる。アイヌ語の韻律特徴については、次の①～③のような規則がある。

①二音節以上の語のうち、第一音節が開音節の場合は、前から二音節目の母音にアクセントが置かれる。

例) (C)V.(C)V́(C).-

②第一音節が閉音節の場合は、その母音にアクセントが置かれる。

例) (C)V́C, (C)V́C.CV(C).-

③一音節語は助詞が後続した際、その母音にアクセントが置かれる¹。

¹ 知里 (1942: 466) のアクセントの型に関する記述で、「単音節の語。動詞 (形容詞) ・名詞 (代名詞・数名詞) ・副詞・連体詞などはアクセントの頂点を要求する。このことは助詞や接辞が付いた場合にはっきりする」と指摘されている。

ただし、樺太方言は母音の長短の対立があり、北海道東部方言（静内、様似、美幌、釧路など）は無アクセントと言われる。なお、本論文で扱っている「根室方言」も美幌や釧路方言に隣接していることから無アクセント方言である可能性がある。

以下は、アイヌ語と日本語で許されない（またはふつう現れない）音素配列である。

	アイヌ語	日本語
t(A)	ti	ti, tu
d(A)	(※d を音素とせず、 t に合流する。)	di, du
c(A)	—	ca [tsa], ce [tse], co [tso]
w(A)	wi, (wu) ²	wi, wu, we, wo
y(A)	(yi)	yi, ye

表 5-4 : アイヌ語と日本語の音素配列制限

現代日本語とアイヌ語のどちらも /ti/ という音素配列は許されず、/ci/ になる点が共通する。しかしながら、古くは日本語にも /ti/, /tu/, /di/, /du/ が認められ、それらが室町時代末において /ci/, /cu/ [tsu], /zi/, /zu/ へ変化したと考えられている（橋本 1950 など）。よって、かつての日本語と対比するなら、日本語では /ti/、アイヌ語では /ci/ [tʃi] が認められる点異なるということになる。

c(A) という音素配列に関しては、アイヌ語も [tsa], [tse], [tso] について同様の制限があるが、アイヌ語の /ca, ce, co/ の音価は、日本語の拗音の音節 /cya, (cye,) cyo/ の音価 [tʃa], [tʃe], [tʃo] に対応している。アイヌ語の /cu/ は [tsu] と [tʃu] のどちらも発音される。

w(A) や y(A) に関しても、日本語は室町時代に /e/, /we/, /ye/ が /ye/ [je] となり、/o/ と /wo/ が /wo/ [wo] となって、江戸時代において /ye/ が /e/, /wo/ が /o/ となったと考えられている（橋本 1950 など）。よって、これらの音素配列制限が本質的なアイヌ語との違いであるとは言えない。

5. 1. 2. 文法

ここでは、アイヌ語と日本語の言語体系、文法等について、特にふたつの言語の違いを中心に確認する。アイヌ語は日本語と同様に系統関係が不明な言語である。ブガエワ（2014 [2012] : 33）はアイヌ語の類型について「アイヌ語は、膠着的、複統合的、抱合的な特徴を示す。文の構成素の順番は SOV で、混合型（ただし基本的には三立型）の文法関係標示を持つ。もっぱら主要部標示型で、接尾辞よりも接頭辞を多く用いる」と説明している。

² アイヌ語の /wu/ と /yi/ に関しては、形態素間のみ生じる。

日本語に比べて、アイヌ語は接尾辞を多くても二つ程度しかつけられない。また、中川 (1992: 72) が「アイヌ語は日本語と違って統語的に非常に明瞭に「動詞価」というものを定めることができる」と述べているように、日本語とは異なり、動詞が取りうる名詞句の数がはっきりしている。

小林 (2015 : 9-13) は、結合価をもとにして接頭辞と接尾辞を分類し、①増価接頭辞および接尾辞、②減価接頭辞および接尾辞、③結合価を変更しない接頭辞および接尾辞の三つに区分した。接頭辞のうち、増価接頭辞は、充当態接頭辞 (*applicative*) と呼ばれるものであり、減価接頭辞のなかには再帰や相互を表すものなどが含まれる。結合価を変更しない接頭辞には所属形的接頭辞と副詞的接頭辞の2種類があり、所属形的接頭辞は所属先となる主語を要求する。また、接尾辞のなかでもっとも典型的なものは使役を表す増価接尾辞である。

アイヌ語は、他動詞が目的語を抱合したり、自動詞が主語を抱合したりすることができる。抱合しているかどうかというのは、(5-1a, 5-1b) のように自動詞に後接し、他動詞に前接する人称接辞 (*ci=* / *=as* あるいは *a(n)=* / *=an*) がついて初めてわかることであるので、(5-1c) のように三人称 (ゼロ接辞) のときは、どちらか判定できない (以下、例文のグロスと和訳は筆者 (深澤) による)。

- (5-1) a. *sake an=kar*
 酒 4.A=つくる:3.O 「私は酒をつくる」
- b. *sake-kar=an*
 酒-つくる=4.S 「私は酒をつくる」
- c. *sake kar / sake-kar*
 酒 つくる:3.S:3.O / 酒-つくる:3.S 「(彼/彼女が) 酒をつくる」

(『キナラブック口伝アイヌ民話全集 1』 (a) p. 278、(b) p. 214、(c) p. 351)

充当態接辞や派生接辞のない基本形の自動詞は、譲渡不可能な名詞の所属形 (被所有物) を抱合する。これは、抱合後に項を減らすことがなく、人称接辞はその所有者を表すことになる。小林 (2008: 212-213) では、(5-2a) の *kemapase=an* という例において、*kema* が動詞の外に置かれた場合は (5-2b) のような構造になると考えられるとしている。実例が見つからないため、疑問があるという意味で「??」と判定した³。(5-2c) も *ku=* が自他ともにつく人称接辞であることから抱合しているかどうか不明な例であるが、(5-2d) のように副助詞の *ka* 「も」が挟まれることがあり、それがのひつつの判定基準になることもある。

³ このような制限は、例えば、*arka* 「痛む」という「意識の主体を主語にできない」(中川 1995: 20) 自動詞にも見られる。*a(n)=teke arka* (4.A=手-POSS 痛む) とは言っても、*teke-arka=an* (手-痛む=4.S) に類似する例というのは確認できない。

類似の抱合形に (5-2e) がある。

(5-2) a. *kema-pase=an*

足:POSS.-重い=4.S

「私は足が不自由になる (年老いて足が弱る様子)」

??b. *a=kema pase*

4.A=足:POSS 重い:3.S

「私は足が不自由になる (?)」

(小林 2008: 212-213)

c. *ku=kata-u-pirka / ku=kata-u pirka*

1SG.A=姿-POSS-良い / 1SG.A=姿-POSS 良い:3.S

「私の姿が良い」

d. *ku=kata-u ka pirka*

1SG.A=姿-POSS も 良い:3.S

「私の様子も良くなる」

(『私の一代の思い出』 (c) p. 122、(d) p. 157)

e. *sampe-pirka=as*

心臓:POSS-良い=1PL.S

「私は心臓が良くなる (具合が良くなる)」

(『オイナ (神々の物語) 1』 p. 55)

佐藤 (2012b) は「アイヌ語の現状と復興」のなかで、「名詞抱合の問題が新語を作る、というような状況では非常に重要な意味を持つ」と述べている。加賀家文書に見られる語の構造も、佐藤 (2012b) が指摘するように他動詞の主語抱合や「所有者要求的名詞主語 + 自動詞」型 (上記の例で言うと (5-2b, e) の例) が稀であることを考慮に入れると、伝蔵による造語なのか否かという点について透明性が増すに違いない。

アイヌ語の基本語順については日本語と同じである。そのため田村 (1978: 203) では、「アイヌ語の一語一語を日本語に置き換えてそのままの順でつないでいくと、日本文になるといってもよいほどである」と述べている。阿蘭陀通辞にはオランダ語の文法書が必須の教材だったが、蝦夷通辞にそのようなものが見つからないのは、この語順の一致というのが大きいかもしれない。アイヌ語と日本語とで語順が逆になる構文もわずかにあって、(5-3) のように否定や禁止を表す副詞は動詞に先行する (田村 1978: 203)。しかし、これに関連するエラーは加賀家文書のなかで今のところ確認できていない。

- (5-3) a. *somo* *arpa*
 NEG 行く.SG:3.S 「彼／彼女（ら）は行かない」
- b. *iteki* *e!*
 PROH 食べる 「(決して) 食べるな！」(田村 1978: 203)

品詞に関して留意すべき点は、アイヌ語の形容詞はすべて一項動詞として分類されるということである。また、名詞に性・数・格の標示がないのは日本語と同じであるが、動詞の接尾辞や補充形、あるいは助動詞によって複数であることを標示することがある。

格の表示については、日本語と同様にアイヌ語も助詞を名詞に後置して表すことができる。ただし、アイヌ語には主格と対格を表す助詞がなく、また時に充当態接辞でそれに代える場合や、位置を表す裸の名詞を動詞の目的語のひとつにとる場合がある⁴。佐々木 (1990 [2013: 306]) では、アイヌ語を記録する際に日本語の助詞「に」を付けてしまうエラーが紹介されている。アイヌ語では、譲渡不可能な名詞の所有を表す場合に名詞が所属形になって示されるため、日本語の「の」を余分に付けてしまうというエラーもみられる(本章 5.4.5 節)。

さらに、名詞のなかには大きく普通名詞と位置名詞というふたつのカテゴリーがある。具体的な違いとして、位置名詞は場所や方向を表す格助詞を直接後続させることができるが、普通名詞はそれができない。よく知られている例で、(5-4a) の *nupuri* は「山」を表す普通名詞であるので、*en* という格助詞の前に *or* という位置名詞①を挟まなければならない。対して、(5-4b) は場所としての「山」を表す位置名詞②⁵ であるので、位置を表す格助詞の *ta* を直接後続させることができる。(5-4c) は、充当態接辞の *ko-* が格助詞の代わりに用いられ、裸の名詞を目的語にとっている例である。

- (5-4) a. *ikia nupuri or en oman*
 その 山 ところ.LOCR ALL 行く.SG:3.S
 「その山 (の ところ) に行く」

(『cuppokkuspet』 p. 66)

- b. *too kim ta oman*
 あの 山.LOCN LOC 行く.SG:3.S
 「あの山に行く」

(『虎尾ハルの伝承 鳥』 p. 98)

⁴ これについて、中川 (1992: 72) は「動詞価」によって指定された名詞句は、日本語の「文法格」におかれた名詞句と同等のものを見なすことができる」と述べている。

⁵ これは位置名詞①とは異なって名詞と格助詞の間に挟まれるようなものではないため、人称接辞をとることもない。それ自体が場所を表すことから「場所名詞」と呼ばれることもある。

c. *pon* *repun* *kotan* *ko-oman*
 小さい:3.S 沖の:3.S 村 に.APPL-行く.SG:3.A
 「小さな沖の村に行く」

(『知里真志保フィールドノート (5)』 p. 523)

普通名詞の所属形には格助詞を直接後続できたり、位置名詞が付いたり付かなかったりするような場所を表す名詞もいくつか報告されている(中川 1984)のだが、そういうことを考慮しても、加賀家文書のなかでは位置名詞が不足しているのではないかと思われるような事例がある。ただし、エラーかどうかは非常に判別がつきにくいものも多く、ここではこれ以上言及しない。

アラインメントや主要部・従属部標示の別に関しては、日本語と大きく異なる点であり、日本語母語話者にとって最も習得しにくい部分であると考えられる。動詞に示される人称の体系も、例えば一人称複数形において話し手と聞き手を含む包括形と、聞き手を含まない除外形がある点や、いわゆる「四人称」と呼ばれる形式について、日本語とは異なっている。これに関しては第6章で少し触れることにする。

5. 2. 歌詞のアイヌ語翻訳：音数を合わせる工夫

5.2節では、歌詞のアイヌ語翻訳における特徴および工夫について、日本語の母語干渉と合わせてみていくことにする。資料は、加賀家文書(資料番号 28, 31)に所収される「菊のかんざしみだれ髪」を用いる。

5. 2. 1. 「菊のかんざしみだれ髪」について

「菊のかんざしみだれ髪」は、「加賀家文書」の大部分を執筆した3代目伝蔵(1804-1874)がアイヌ語で作詞したものであり、原歌は和人の口承文芸である「お吉清三」口説と考えられる。これには三種類の写本および翻刻がある。

【資料1】『[蝦夷風俗図絵蝦夷語解説①]』(資料番号 28)

【資料2】『御手本』(資料番号 31)

【資料3】「おきつ清三戀の夜嵐」[加賀康三(1932)翻刻、底本は所在不明]

このうち【資料3】は途中で和訳が抜けている箇所があり、歌詞の終わりには囃子言葉が付記されるなど【資料1】や【資料2】とは異なる特徴を示す。さらに、最大の特徴は加賀家の6代目である加賀康三(1932)による紹介部分にある。

此の唄は、半紙四ツ切紙數綴込み拾參枚より成り、著作年月日は弘化二年巳七月新板としてある。表題は「おきつ清三戀の夜嵐」で、傍注に朱書きで「千島なまりのチヨンカラぶし」としてある。

表紙裏面には「兼て御存知の如く秋田八森の不動様奉賀帳に多少御志なし下され候御若い郎へ爲御禮左の如くの唄を愚作し夫々献上致し候間幸い御尊前サル御場所へ御下相成候由御笑ひ草金壹匁代御禮奉申上度候」と朱書してあり、末文表紙には右の歌が書添えてある。

「穴かしこ、人に見してはなほ笑い草定めなき郎の寝言なれとも」

これが一冊は柴田政吉様へ加賀屋傳藏が差上げたのは實事、唄の作者が傳藏なる事に思ひあたる。柴田政吉氏は士分で見廻り役勤番であつたらしい。以下唄の本文を一通り書く。(文中、島の圖あり、省略す)

ここにある表題や表紙裏面の朱書などは、【資料1】や【資料2】には確認できない。加賀(1932)の底本と柴田政吉に贈呈したとされる一冊は未だどこにあるのか不明だが、どちらも既に失われてしまった可能性があり、書誌学的研究は今後の調査に託されるところが大きい。

加賀家文書館に所蔵される【資料1】と【資料2】には、それほど大きな違いがない。あえて言うなら、【資料1】は訂正線を引いて書き直された箇所が非常に多い。誤り方も数行書き飛ばす等であって、ただ急いで書き写したかのようにも見える。一方の【資料2】は、アイヌ語教本として加賀家に伝わっていったと考えられるまさに「お手本」であり、とても丁寧に清書されている。アイヌ語部分は、濁点の有無による違いが時折見出されるが、これはアイヌ語に有声・無声の音韻的な区別が無いことから、表現や言い回しにおける差は無に等しい。

5. 2. 2. 「お吉清三」口説との関連

元となっている「お吉清三」口説は、「京阪を舞台とする代表的な口説」と評され、江戸の唄本や瞽女口説、音頭口説(盆踊り歌)、じょんがら節などの形式でうたい広められた口説である。この口説の流行した時代が、(やんれ節)口説が再流行した時代と同じ天保年間(1830-1844)のことだとすれば、丁度、和人芸能文化が蝦夷地に深く入り込んでいた時代、そして、伝蔵が蝦夷通辞として活躍していた時代とも一致する。伝蔵が「お吉清三」を原歌として選んだのは、そういった当時の流行も関わっていそうである。

蝦夷地における祭文語りや都都逸に関する記述は、弘化2, 3年(1845, 1846)には既に存在し、都都逸は場所の番人と支配人が「松前訛り」で歌っていたことが報告されている。

「菊のかんざしみだれ髪」も、もとはと言えば柴田政吉という人に差上げた「千島なま

りのヂヨンカラぶし」ということになっており、こうしたことがアイヌ語訳への背景に関連づけられるものと考えられる。

具体的にアイヌ語訳を見て行く前に、「菊のかんざしみだれ髪」が、「お吉清三」口説を原歌に改作したものであるということについて、ここで根拠となる事例をいくつか述べておきたい。板垣 (2009: 145) は、口説の内容は一定のパターンによって成り立っており、基本的なパターンをふまえることで口説の作品はいくらでも創ることができたと主張し、次のようなパターンを提示している。

(5-5) 口説の基本的なパターン

1. 事件の場所の提示
2. 人物の紹介 (類型的な美男美女)
3. 事件の内容 (この部分がそれぞれの個性となる)
4. 死の場面
5. 人々の同情

(板垣 2009: 145)

(5-5) の 1 と 2 に関しては「お吉清三」との強い共通性が確認できる。

	菊のかんざしみだれ髪 (『御手本』) ⁶	お吉清三 ⁷
舞台	・キヤウト コタン サンチヨ マツヤ 〔京都 三丁町 (三条) 〕	・京都 三条 ・花の都【探】
人物①	・ヨエモン ニシハ [与右衛門 旦那]	・糸屋 与 [興] 右衛門
様子	・ウセブ チウバフ シヤランベ エキリ ウサナ モムクベ ア子 エホク 〔反物、紐 (?)、絹織物などたくさん、 いろいろな小間物が売られていた〕	・店もにぎやか暮らしも繁昌 ・蔵は十一、店の間口九間、出店に出たのが七十五軒もあった【陸】
人物②	・ヲキツ [おきつ]	・お吉
年齢	・ [不明]	・ 16 歳
人物描写	・メノコ ナンカテ コエキリ シヤクベ 〔女の美しさは並ぶ者がいないもの〕 ・アブカ ホトエバ ノマンヘ コラツ	・今咲く花よ ・優し姿は花にはまさる【板】 ・なにほどの分限にもたんと出ないと いうほどの器量よし【山】

⁶ 亀甲括弧 () 内は深澤による現代日本語訳。

⁷ 引用文献は墨付き括弧 (【】) 内に略号で示したが、表現が共通するものについては割愛した。参考文献は次のとおり。板垣 (2009) 【板】、探花房 (1883) 【探】、湯浅 (1910)、三田村 (1926)、和田ほか (1929)、山本 (1981) 【山】、山香町文化連盟 (編) (1986)、北海道教育委員会 (編) (1991) 【北】。

	フッカエ エコカレ ユニンカ メノコ [雄鹿を呼ぶ雌鹿のごとく、男を巻き付けて怪我させる女] ・アマホ エブエケ モト、リ ヲトブ [あやめの花の結んだ髪の毛] ・カルバ ニイテキ エフエケ クツヨ [桜の木の枝、花の帯しめる]	・花なら蕾、花にたとえて申そうならば立てばしゃくやく座れば牡丹 【北】
人物③	・セイザ (コ) [清三 (子)]	・清三
年齢	・ [不明]	・ 20～22 歳
人物描写	・エラ、 アエカブ トノブリ コロベ [そんなことができると思えない、殿方らしき態度の者] ・カンビ ソロバン イハカシ クル子 [読み書き、ソロバンを教える者である] ・ヲベカ ケウトモ ナンカテ シシヤモ [実直な心持、美男の和人]	・男の盛り、器量良ければお吉が見染め ・諸人に愛嬌【板】 ・読んで、書かせて、筆とらせても誰にもひけをとらなかつた【山】

表 5-5: 「菊のかんざしみだれ髪」と「お吉清三」の物語前半部の比較

次に、(5-5) の 3～5 のストーリー展開についてみていく。両者に共通する内容は、

- (吉・菊 1) おきつ (お吉) と清三が恋仲になる。
- (吉・菊 2) おきつの両親 (あるいは一方) に気づかれる。
- (吉・菊 3) 清三が家を出て行かされる。

までとなっている。このあと「お吉清三」では、「心中口説」の典型的な結末「心中」を迎える。

- (吉 4) 清三はお吉を想って病気になる。
- (吉 5) お吉は清三を追って清三の家 (菊屋) に行く。
- (吉 6) そこでお吉は清三の死を知る。
- (吉 7) お吉が清三の墓参りに行く。
- (吉 8) お吉の思いによって清三の墓が二つに割れ、そこから清三が現れる。
- (吉 9) 清三は自分を思うならと、命日に香花を頼んで消え失せる。

(吉 10) お吉は清三ひとりで行かせまいと後を追うように入水する。

(吉 11) この話を聞いた人々の同情や憐れんでいる様子について描写される。

一方、「菊のかんざしみだれ髪」のストーリーは「心中」にならない。

(菊 4) 心変わりしたおきつは、両親の前でも兎のように歩いて怒り狂う。

(菊 5) それを見かねた両親は、黄金の宝を清三の家（菊屋）へ送って伝言を出す。

(菊 6) 清三を貰うと、娘のおきつと結婚させる。

(菊 7) おきつと清三は喜び、父母を大切にする。

(菊 8) 二人が所帯を持つようになると、男の子と女の子が生まれる。

(菊 9) 与右衛門は喜び目を覚ましたかのように、夫人と孫二人を抱いて可愛がる。

(菊 10) (この話を聞いた人々の描写は無し)

このように「菊のかんざしみだれ髪」は「お吉清三」口説をただ単にアイヌ語訳したものではなく、中盤からハッピーエンドの物語に改作されている。とはいえ、「菊のかんざしみだれ髪」が「お吉清三」を下敷きにして作られたものであるということは明らかであると言えよう。

なお、加賀家文書『〔蝦夷風俗図絵蝦夷語解説①〕』（資料番号 28）には、もう一編「〔西松おその〕』という口説⁸があり、それは「心中」の後で生き返るというストーリー展開になっているところに特徴が見られる。いずれもハッピーエンドにこだわる力が働いているという背景には様々な理由が考えられるが、社会的・個人的な理由が強い（例えば、役人に対するアイヌ語力の見せつけや、エンターテインメント性を高めるため）というのが深澤 (2014d) での結論である。

5. 2. 3. アイヌ語訳への音数意識

「菊のかんざしみだれ髪」は、原歌の「お吉清三」口説と同様、七七調反復の形式を保っている。音数の数え方は、アイヌ語のカナ表記を日本語の音体系（モーラ数）で読むという考え方によって成り立っており、拗音は音数に入れないが、撥音、長音、促音を一音と数える。これは口説をはじめ、俳句や短歌などの音数の数え方と同様である。また、アイヌ語は日本語とは異なり CVC のように子音終りの音節も珍しくないが、音節末の子音は語中・語末どちらにおいても一音と数える。

(5-6) 音数の数え方 （※印は、実際のアイヌ語の音節数を表す。）

⁸ 「〔西松おその〕」に関しては、下敷きになっている歌やストーリーが確認できていないが、そのストーリー展開は口説の基本的なパターンから外れている。

a. 拗音：シャハ	(2 モーラ)	※ <i>sapa</i>	(2 音節)
b. 長音：ツセー	(3 モーラ)	※ <i>cise</i>	(2 音節)
c. 促音 /t/：ウワッテ	(4 モーラ)	※ <i>uwatte</i>	(3 音節)
/k/：ヲッカイボ	(5 モーラ)	※ <i>okkaypo</i>	(3 音節)
/p/：ミツボ	(3 モーラ)	※ <i>mippo</i>	(2 音節)
d. 撥音 /n/：クン子	(3 モーラ)	※ <i>kunne</i>	(2 音節)
/m/：カンヒ	(3 モーラ)	※ <i>kampi</i>	(2 音節)
e. 音節末子音			
e-1. 語中			
/p/：アブカ	(3 モーラ)	※ <i>apka</i>	(2 音節)
/k/：モムクベ	(4 モーラ)	※ <i>momokpe</i>	(3 音節)
/r/：ヒリカノ	(4 モーラ)	※ <i>pirkano</i>	(3 音節)
/s/：ニシバ	(3 モーラ)	※ <i>nispa</i>	(2 音節)
/y/：アエ子	(3 モーラ)	※ <i>ayne</i>	(2 音節)
/w/：バウツ	(3 モーラ)	※ <i>pawci</i>	(2 音節)
e-2. 語末			
/p/：ウセブ	(3 モーラ)	※ <i>usep</i>	(2 音節)
/k/：バテキ	(3 モーラ)	※ <i>patek</i>	(2 音節)
/r/：チリ	(2 モーラ)	※ <i>cir</i>	(1 音節)
/s/：ウトマシ	(4 モーラ)	※ <i>utummas</i>	(2 音節)
/y/：ヲッカエ	(4 モーラ)	※ <i>okkay</i>	(2 音節)
/w/：該当例なし			

つまり、このテキストはアイヌ語の語形推定にも役立ち、拗音を含む場合はカタカナ二文字で「一音」を示すため、歌の音数によって「シユ」の「ユ」が拗音かどうかということも判断できる。また、音節末の子音を 1 モーラと数えていることは促音や撥音と同様の扱いだとも捉えられるが、伝蔵の母語である日本語秋田方言は「モーラ方言」ではなく「シラビーム方言」であるので、例えば、「イタク」（アイヌ語で「話す」）が「三音」と数えられているのは、アイヌ語の /i.tak/ ではなく、日本語の音節ように /i.ta.ku/ と考えていた可能性もある（ピリオドは音節境界を示す）。

さらに、「菊のかんざしみだれ髪」は口説の演唱形式をそのまま取り込んだものであると考えられる。日本の口説というのは、上記で見たようなモーラの数え方をもとに 7 音+7 音で 14 音を「一コト」と呼び、「お吉清三」口説もこの音数に合わせて歌われる。一方、「菊のかんざしみだれ髪」のアイヌ語の歌詞もこれを意識しているようで、「一コト」につき一小節がそれぞれ 3、4、4、3 音符になるよう、一小節毎にスペース（空白）が入っているような書き方になっている。

(5-7) 七七調 (3・4・4・3音)

- ・「じょんがら節 (お吉清三)」(1929)

ここに / すぎりし / そのもの / がたり
くには / きょうとで / そのなも / たかき

- ・「菊のかんざしみだれ髪」(『御手本』)

モシリ / シヤハ子ワ / キヤウト / コタン
國の / かしらに / 京都といふ / 所
サンチヨ / マツヤタ / ヨエモン / ニシハ
三丁 / 町にて / 与右衛門 / 旦那

(033 オ 01-033 オ 04)

[音素表記・グロス]

<i>mosir</i>	<i>sapa</i>	<i>ne</i>	<i>wa</i>	<i>KIYAUTO</i>	<i>kotan</i>
国	頭:POSS	COP	て	京都	集落
<i>SANCIYO</i>	<i>maciya</i>	<i>ta</i>		<i>Yemon</i>	<i>nispa</i>
三条	町	LOC		与右衛門	旦那

加賀 (1932) において翻刻されている噺子言葉に関しては、加賀家文書『[蝦夷風俗図絵 蝦夷語解説①]』(資料番号 28) の「西松おその」という口説の後に載っているものと概ね同様のものようである。それを見てみると、大体 4 モーラずつまとまってスペースが入っている。このようにアイヌ語訳に音数意識を織り込んでいるという点は、加賀家文書において注目すべき特徴である。

(5-8) 噺子言葉

○ヤーコラ / コロクル / トウ コエ / サヲトリ
網持て / 持タ者 / 向から / 浪クル / 棹突
マウカタ / コムセ / シヨノ テキ / エウシカ
風上江 / 身をこぞめ / 右網の手 / ひかゝたが
○シントク / タタ コワシ / チヨツケ / ヲビツレ
酒桶 / つだ\に いため / 下帯を / はつし
ノキタマ / トモシマ / クタサケ / チャラセワ
きんたま / ぶら\ / こぼれた酒 / 流るゝ わひ

(067 オ 01-067 オ 08)

[音素表記・グロス]

<i>ya</i>	<i>kor</i>	<i>kor=kur</i>	<i>to</i>	<i>koy</i>	<i>SAO</i>	<i>turi</i>
-----------	------------	----------------	-----------	------------	------------	-------------

網	持つ	持つ=者	向こう	浪	棹	伸ばす
<i>maw</i>	<i>ka</i>	<i>ta</i>	<i>kom-kom-se</i>		<i>simon-tek</i>	<i>eus(i)-ka</i>
風	上.LOCR	LOC	縮む-(重複)-VR		右の手	の先をつける-ACAUS
<i>sintoko</i>	<i>ta-ta</i>		<i>kowasi</i> ⁹	<i>cokki</i>	<i>opici-re</i>	
酒桶	叩く-(重複)	壊す		ふんどし	放す-caus	
<i>nok-tama</i>	<i>tom(-o)</i>	<i>osma</i>		<i>kuta</i>	<i>sake</i>	<i>cara-se</i>
鞆丸-玉	側面(-PART)	当たる	こぼす	酒	流れる-VR	DCM

5. 3. 翻訳に関わる造語・借用語について

5. 3. 1. 先行研究と調査資料

日本語からアイヌ語に入った語は、古い時代にアイヌ語として定着してしまっているものから、江戸時代以降に入って来たと考えられるものなど、様々なレベルが存在する。中川 (2005: 96) では、アイヌ語に入った時期の時代層の区分として以下のようなものを提示している。

(5-9) 日本語がアイヌ語に入った時期の時代層の区分

- ①北海道における和人との本格的接触以前
- ②接触開始期から北海道方言と樺太方言の分化開始期まで
- ③北海道方言と樺太方言の分化開始期から松前藩の成立時期まで
- ④江戸時代
- ⑤明治時代以降現代まで

(中川 2005: 96)

また、小野米一 (1999) の指摘するように「どこまでが借用であり、どの語は単に日本語を使ったに過ぎないものであるのか、その判別は難しいところがある」。本論文では「単に日本語を使ったに過ぎないもの」かもしれないものについても、アイヌ語訳のほうに出て来るものについては排除しない。また、(5-9) の時代区分に関しては、中川 (2005) などが詳細に議論を進めてきた①～③の時代区分は対象にせず、④に焦点をあてて見て行くことにする。

アイヌ語と日本語の借用関係について報告しているものは、金田一 (1933a, b, 1934, 1937, 1938b, 1954, 1956) をはじめ、知里 (1961)、Peng (1977)、田村 (1978, 1988 [1997], 1990)、池上 (1990 [2004])、中川 (1989, 2003, 2005)、鈴木俊二 (2005)、小野米一 (1999) などがある。なかでも小野米一 (1999) の「アイヌ語に取り入れられた日本語」は、日本語からアイヌ語

⁹ *koasi* 「壊す」(美幌方言)『方言辞典』。

への借用語について具体例を豊富にあげて整理されているので、これをもとに以下で先行研究等の整理を試みる。また、推定 1630-40 年成立の最古のアイヌ語彙集として知られている『松前ノ言』からは当時の借用語の痕跡として引用する。

5.3.1.1. 古い時代の借用語

以下では、古い時代の借用語として小野 (1999) が示しているものの例である。【ア】はアイヌ語、【日】は日本語であることを表す。

A. /h/ になる前に借用された語類

「単語の語頭での日本語のハ行音は、江戸時代の京都では“h”になっていたことからすれば、アイヌ語のこれらの単語は、日本語が両唇音“F”（室町時代以前奈良時代までの間）あるいは“p”を持っていた時代（奈良時代以前）の借用とされようか」（小野米一 1999: 146）

(5-10) 【ア】 /p/ < 【日】 /F/

- a. 【ア】 ピサコ *pisako*、ピサック *pisakku* 「柄杓」¹⁰
 < 【日】 ヒサゴ *Fisago*、ヒサク *Fisaku*、ヒシヤク *Fisyaku* 「柄杓」
- b. 【ア】 ピウチ *piwci* 「火打ち、火打ち石」 < 【日】 ヒウチ *Fiuci* 「火打ち」
- c. 【ア】 プサ *pusa* 「房」 < 【日】 フサ *Fusa* 「総」
- d. 【ア】 パスイ *pasuy* 「箸」 < 【日】 ハシ *Fasi* 「箸」
- e. 【ア】 パッチ *patci* 「塗り物の鉢」 < 【日】 ハチ *Faci* 「鉢」
- f. 【ア】 パタパタ *patapata* 「ハタハタ（魚）」 < 【日】 ハタハタ *FataFata* 「ハタハタ（魚）」
- g. 【ア】 ピト *pito* 「神と同等の人」 < 【日】 ヒト *Fito* 「人」
- h. 【ア】 プクル *pukuru* 「袋」 < 【日】 フクロ *Fukuro* 「袋」
- i. 【ア】 プタ *puta* 「蓋」 < 【日】 フタ *Futa* 「蓋」
- j. 【ア】 プリ *puri* 「風習」 < 【日】 フリ *Furi* 「振り」
- k. 【ア】 ポネ *pone* 「骨」 < 【日】 ホネ *Fone* 「骨」
- l. 【ア】 ポソミ *posomi* 「細身の刀」 < 【日】 ホソミ *Fosomi* 「細身」

(a, b. 池上 1990 [2004: 279]、c-l. 小野米一 1999: 146)

なお、小野米一 (1999: 147) では、語頭以外のパ行音としてアイヌ語の *sippo* をあげている。池上 (1990 [2004: 279]) は、「日本語のシホ (>シヲ>シオ 塩) と同じ語とみられるが、日本語から入ったものかもしれない。語中のホがアイヌ語で *pp* であるのは、日本語からアイヌ語に借用されたのであれば、その語の借用もその変化【平安時代中期に、少なくとも

¹⁰ 「ピサック」は、田村 (1996) より引用。

も京都方言では、母音間の無声両唇摩擦音が *w* (*u* のまえではゼロ) に変化した】以前におこなわれたことを示すこものである。」と指摘している。

B. 開音・合音になる前に借用された語類

池上 (1990 [2004: 279]) や小野米一 (1999: 147) では、室町時代末の日本語で、*au* は *ö* (開音) に *eu* は *ô* (合音) になっていたが、日本語において *au* > *ö*、*eu* > *ô* の変化の起きる以前にアイヌ語へ借用されたと考えられている。

(5-11) 【ア】 /aw/ < 【日】 /au/ (>/oo/) ; 【ア】 /ew/ < 【日】 /eu/ (>/oo/)

- a. 【ア】 アワンキ *awanki*、アフンキ *ahunki*、アプンキ *apunki*、アウンキ *aunki* 「扇」
 < 【日】 アフギ *ahugi* (>アウギ *augi* >オウギ *oogi*)
- b. 【ア】 テウナ *tewna* 「手斧」 < 【日】 テウナ *teuna* (>チョウナ *cyoona*)
- c. 【ア】 イワウ *iwaw* 「硫黄」 < 【日】 (ユワウ *yuwau* >) イワウ *iwau* (>イオウ *ioo*)
 (a, b. 池上 1990 [2004: 279]、c. 小野米一 1999: 147)

C. 甲・乙類があったときに借用された語類

アイヌ語の /uy/ に関して、日本語の上代特殊仮名遣でミの甲・乙類の違いの反映ではないかということは、Peng (1977)、池上 (1990 [2004])、小野米一 (1999) などが指摘している。

(5-12) 【ア】 /i/ < 【日】 /i₁/ (甲類) ; 【ア】 /uy/ < 【日】 /i₂/ (乙類)

- a. 【ア】 ノミ *nomi* 「祈る」 < 【日】 ノミ (甲類) *nomi₁* 「祈る」
- b. 【ア】 カムイ *kamuy* 「神」 < 【日】 カミ (乙類) *kami₂* 「神」
- c. 【ア】 ムイ *muy* 「箕」 < 【日】 ミ (乙類) *mi₂* 「箕」
- d. 【ア】 パスイ *pasuy* 「捧酒篋、箸」 < 【日】 ハシ (乙類?) *hasi₂* 「箸」

(Peng 1997: 240、池上 1990 [2004: 280]、小野米一 1999: 147 など)

(5-12b) に関しては、中川 (2005) において証拠不十分とみなされている¹¹。また、(5-12d) のパスイの例は上代特殊仮名遣でシの甲類・乙類の別は確認されていないが、乙類の反映である可能性として Peng (1977) や小野米一 (1999)、佐藤 (2006) などが提示している。

中川 (2005, 2007) は、捧酒篋を表す *ikupasuy* (< *iku-pasuy* 酒を飲む・箸) と食事のときに使用する *ipepasuy* (< *ipe-pasuy* 食事する・食べる) に関する方言分布から *pasuy* という語の起源を探ったものである。中川 (2005: 102-103) は、樺太では前者を *ikunis* (< *iku-nis* 酒を飲む・棒)、後者を *sahka* (中川によると恐らくトゥングース起源) と呼ぶことや、山

¹¹ 中川 (2005: 97) は、「日本語からアイヌ語であってその逆ではないとする根拠は、おそらく「文化は高いほうから低いほうへ流れる」という一般経験則と、「当時、和人文化のほうがアイヌ文化より高かった」という暗黙の仮説にすぎない」としている。

中で祈りを捧げるときには適当な木の枝等で間に合わせるなどから、「北海道でも捧酒籠はもともとただの棒を表す *nit* という語で示されていた」と分析する。さらに、捧酒籠自体は日本起源ではなく、アイヌより北方に住むニヴフやウィルタであったり、トゥングース系やトゥルク系の民族などと同じ起源のものであって、「*pasuy* という言葉が入る以前からアイヌ社会に存在したものではないか」(p. 103) と述べ、「分布が限定されているのは、捧酒籠あるいは箸という物とともに流入したわけではないために、樺太ではもともとそれを指している *nit* という語形に進出をはばまれた」(p. 103) という解釈を施している。時代区分としては、上述の (5-9) の③に位置付けている。

また、池上 (1990 [2004: 280]) は上代特殊仮名遣のエ段乙類として以下のケの例をあげているが、佐藤 (2012a: 209) は「もともと、田村 (1996: 598) では *sakaenamte-nima* 【筆者 (深澤) 注: 酒粕杓子】のような語の中に *sakae* という形で現れており、*sakay* という語形を基に考えを進めてよいかどうか一考を要するかもしれない」と警鐘を鳴らしており、これも色々と議論があるところである。なお、アイヌ語で酒そのものは、*sake* として記録されている。

(5-13) 【ア】 /ay/ < 【日】 e₂

【ア】 サカイ *sakay* 「酒を醸す粥」 < 【日】 サケ (乙類) *sake*₂ 「酒」

(池上 1990 [2004: 280])

D. その他の古い日本語からの借用と考えられる語類

上記を除く例を以下に記載する。和人によってもたらされた食品や食器、鉱物などの類に入るものが多い。

(5-14) 古い日本語からの借用語

a. 【ア】 プンタリ *puntari* 「酒器」

< 【日】 ホダリ *Fodari* 「酒器」 (奈良時代に使用された語) 」

b. 【ア】 カムタチ *kamtaci* 「麴」 < 【日】 カムダチ *kamudaci* 「麴」

c. 【ア】 シト *sito* 「団子、餅」 < 【日】 シトギ *sitogi* 「粢」

d. 【ア】 コンカネ/コンカニ *konkane/konkani* 「黄金」 < 【日】 コガネ *kogane* 「黄金」

e. 【ア】 シロカネ/シロカニ *sirokane/sirokani* 「銀」 < 【日】 シロカネ *sirokane* 「白金」

f. 【ア】 オッチケ *otcike* 「お膳」 < 【日】 オシキ *osiki* 「折敷」

g. 【ア】 トウキ *tuki* 「杯」 < 【日】 ツキ *tuki* 「坏」

h. 【ア】 ヌサ *nusa* 「祭壇、幣場、幣棚」 < 【日】 ヌサ *nusa* 「幣」

i. 【ア】 タクサ *takusa* 「ヨモギやササなどを束ねた魔払いの道具」

< 【日】 タクサ *takusa* 「手草」

j. 【ア】 オンカミ *onkami* 「儀礼のときの動作」 < 【日】 オガミ *ogami* 「拝む」

- k. 【ア】アタイ *atay* 「値段」 < 【日】アタイ *atai* 「値」
 l. 【ア】セツパ *seppa* 「鏝」 < 【日】セツパ *seppa* 「切羽」

(a. 池上 1990 [2004: 279-280] ; b-f. 小野米一 1999: 148 ;
 f-j. 中川 2005: 99, 100 : b, k, l. 『松前ノ言』)

5.3.1.2. 日本語北海道方言からの借用

北海道方言からの借用語もよく見られるものである。

E. 日本語北海道方言からの借用語

「ここに言う日本語北海道方言は近世以前のものであり、日本語東北方言から北海道へ持ち込まれたものが多分に含まれていると考えられる。明治以降の北海道海岸部方言に通じる特徴を有する。」(小野米一 1999: 148)

(5-15) 日本語北海道方言からの借用語

- a. 【ア】ペラ *pera* 「飯べら、しゃもじ」 < 【日】ヘラ *hera* “へら”
 b. 【ア】ホイチョ *hoyco* 「包丁」
 < 【日】ホイチョ *hoyco* “ほいちよ” (語末長音を短呼)
 c. 【ア】パッコ *pakko* 「婆あ」
 < 【日】バッコ *bakko* “婆っこ” (ババに指小辞のコを添えて)
 d. 【ア】チケナ *cikena* 「漬物」 < 【日】ツケナ *cikena* “漬け菜”
 f. 【ア】スッカケ *sukkake* 「酸っぱい」 < 【日】スツカイ *sukkay* “酸っかい”
 g. 【ア】カマ *kama* 「鉄瓶」 < 【日】カマ *kama* “かま”
 h. 【ア】ペコ *peko* 「牛」 < 【日】ベコ *beko* “べこ”
 i. 【ア】キミ *kimi* 「ともろこし」 < 【日】キミ *kimi* “きみ”
 j. 【ア】カスンペ *kasumpe* 「カジキエイ」 < 【日】カスベ *kasube* “かすべ”
 k. 【ア】アパ *apa* 「浮標」 < 【日】アバ *aba* “あば”
 l. 【ア】ピカタ *pikata* 「南風」 < 【日】ヒカタ *hikata* “ひかた”

(小野米一 1999: 147-148)

5.3.1.3. アイヌ語の音声特徴の反映

音声特徴の反映にあたる F~K に関しては、加賀家文書のアイヌ語カナ表記に見られる特徴とも通じるところがあり、用例は割愛して小野米一 (1999) の説明とパターン、および筆者 (深澤) による補足を載せる。

F. 無声化

「アイヌ語には、日本語の清音・濁音の区別がない。そのため、日本語からの借用語においては、日本語の濁音はいわゆる清音として（より精確には、有声子音が無声子音として）受け入れられる。バ行はパ行となる。」（小野米一 1999: 149）

(5-16) 【ア】無声子音 /p, t, k, c/ < 【日】有声子音 /b, d, g, z(y)/

G. /n/ の挿入

「語中で、カ・タ・パ行音の前に鼻音が挿入される。日本語では、室町時代末期までは語中のガ・ダ・バ行音の前に鼻音が挿入されることがあった。アイヌ語には、いわゆる濁音がないために、ガ・ダ・バ行音はカ・タ・パ行音となり、鼻音は撥音となって受け入れられている。」（小野米一 1999: 150）

小野米一 (1999) が指摘しているもののほか、ザ行の前に撥音の /n/（ /p/ の前は音声的に m 音となる）が挿入される。

(5-17) 【ア】無声子音 /np, nt, nk, nc/ < 【日】有声子音 /b, d, g, z(y)/

H. 日本語のツ /tu/ やズ・ヅ /zu/

「日本語でも室町時代中期まではトゥ [tu]（あるいはドゥ [du]）であったと考えられ、それをそのまま取り入れたのかもしれないが、アイヌ語にはツ [tsu] 音がないため、これに近い音としてトゥ [tu] を使っている。」（小野米一 1999: 151）

このほか、日本語のツを /cu/ [tʃu] や /ci/ [tʃi] として受け入れている例も確認できている。濁音のズ音やヅ音 /zu/ [dzu] に関しては、撥音を挿入した /ntu/ [ntu] あるいは /ci/ [tʃi] で受け入れられる。

(5-18) 【ア】 /tu/ [tu], /cu/ [tʃu], /ci/ [tʃi] < 【日】 /tu/ [tsu]

(5-19) 【ア】 /ntu/ [ntu], /ci/ [tʃi] < 【日】 /zu/ [dzu]

I. 非口蓋化と直音化

「イササマ [isasama]（医者様）、イサントノ [isantono]（医者殿）のように、シャ音がサ音になっている。もともと、実際の発音では、サかシャか、判然としない。【中略】日本語のいわゆる拗音にあたる音節がアイヌ語にはないため、サンニヨ [sanniyo]（清算・会計・勘定（する）、“算用”）【中略】のように、直音化した形で受け入れている。」

（小野米一 1999: 151）

このほか、シヨ音は、チョ音として受け入れられる例も確認されている。直音化の際、アイヌ語には /wu/ に対する音節制限があるため、—ユウ /Cyuu/ は —イウ /Ciwu/ とならず、—イウ /Ciw/ となる。

(5-20) 【ア】 /sa/ [sa, fa], /su/ [su, fu] < 【日】 /sya, syu/ [fa, fu]

(5-21) 【ア】 /so/ [so, fo], /co/ [fo] < 【日】 /syo/ [fo]

(5-22) 【日】 [Cjo:] の直音化：

例えば、【ア】 /kiyo/ [kijo] < 【日】 /kyoo/ [kjo:]

および【ア】 /riyo/ [rijo] < 【日】 /ryo/ [tjo:] など。

(5-23) 【日】 [Cju:] の直音化：

例えば、【ア】 /kiw/ < 【日】 /kyuu/

および【ア】 /siw/ [fiw] < 【日】 /syuu/ [fu:] など。

J. /t/ の挿入

小野米一 (1999) に記載はなく少数であるが、語頭以外において、シ音やチ音の前に発音 /t/ が挿入されることがある。その際、シ音は「ッチ」となる。

(5-24) 【ア】 /si/ [fi], /tci/ [tffi] < 【日】 /si/ [fi]

(5-25) 【ア】 /ci/[ffi], /tci/ [tffi] < 【日】 /ci/ [fi]

K. 母音

これもやはり小野米一 (1999) には記載がないが、日本語に受け入れられた際に母音が変わることがある。これは一部において日本語東北方言（および日本語北海道方言）からの影響が考えられる。

(5-26) 【ア】 /e/, /i/ < 【日】 /e/

(5-27) 【ア】 /i/, /e/ < 【日】 /i/

(5-28) 【ア】 /o/, /u/ < 【日】 /o/

(5-29) 【ア】 /u/, /o/, /i/¹² < 【日】 /u/

5.3.1.4. 調査資料

調査資料については、日本語や和人文化の影響が強く見られる和人の口説節、往来物などの翻訳を使用する。テキストからアイヌ語として用いられている日本語の表現を抽出し、

¹² (5-29) の【ア】 /i/ < 【日】 /u/ は、(5-18) と (5-19) 【ア】 /ci/ [fi] < 【日】 tu/ [tsu], /zu/ [dzu] のみ。

後の現代アイヌ語においてどのように反映されたかということについて調査する。

使用テキストは以下の通りである。

1. 「菊のかんざしみだれ髪」 (資料番号 31、28)

和人の口説節「お吉清三」を題材として創作された歌物語。出典略号は「菊」。

2. 囃子言葉 (資料番号 28)

「酉松おその」口説の後に付記されている。出典略号は「囃」。

3. 「学校往来夷解書上」 (資料番号 40、26、34、35、371)

正徳4年(1714)成立の堀流水軒「寺子(教訓)往来」をアイヌ語訳したもの。加賀家文書のなかには和文筆写本(資料番号38)も残される。出典略号は「学」。

4. 野狐和歌 (資料番号 26, 31)

三好清房のものに続いて記載されている伝蔵の短歌。日本語が5、7、5、7、7になっている(アイヌ語の音数は考慮されていない)。「野狐」は伝蔵のペンネームだったと考えられている。出典略号は「野」。

底本には「菊」が31番、「学」が40番を用いたが、見出しのカナ表記はその他の写本資料に見られる異綴りも含めた。

5. 3. 2. 音訳・混種借用

カナツ／クワナツ *kanaci* 【名詞】 (< *GANOZI*? 「雁の字」?) 女孫(菊)。

『久保寺辞典稿』に「雁の字」に由来すると書かれてある。菊池・田島(編)(2007: 59)によって「雁の字」に関する文献が詳しく調べられており、それによると古川古松軒(1788)の『東遊雑記』¹³には、「雁の字」が遊女の総称であって小童までを表すと説明されていることや、松浦武四郎(1863-1864?)『西蝦夷日誌』¹⁴にも「雁の字」という名づけの起源として「此者等船々え入や水夫共各々弍百の銭を投出に、其銭雁行に成し男に、其夜の情を契とかや」と記録されている。アイヌ語としても、古くは17世紀にアンジェリスの「第二蝦夷報告書」に *canachi* と記載される(H. チースリク(編)1962)。

カンビ／カンヒ *kampi* 【名詞】 (< *GANPI* 「がんび」／*KAMI* 「紙」) 1. 紙(菊)、2. 帳めん、記証文(菊)、書状(菊)、3. 学問(学)、手習事(学)、書筆(学)、よみかき(菊)、4. 字(学)。

kampi は『沙流方言辞典』に「紙、書類、手紙、読み書き、学問」の意味が記載される。語源について、『千歳方言辞典』は、「日本語「紙」を語源とするのが定説であるが、「雁

¹³ 大藤時彦(1964: 121-122)。

¹⁴ 吉田常吉(編)(1962[新版1984: 83])。

皮(がんび)」が語源である可能性も考えられる」(雁皮:樺の木の皮)という考察がなされている。

カンビ ノエブ *kampinuyep* 【名詞】 (<*kampi* 「字」-*nuye* 「書く」-*p* 「もの」) 筆(学)。

kampinuyep 「筆」という表現は、『方言辞典』によると幌別や沙流に見られる。『沙流方言辞典』では、これを「紙/書類・にものを書く・もの」と解しているようだが、伝蔵が *kampi* を「文字」という意味で用いていることから考えると、「文字・を書く・もの」という意で解することも可能となる。// ☞カンビ/カンヒ。

ケムバン *kemban* 【名詞】 (<*kem* 「血」-*BAN* 「判」) 血判(菊)。

伝蔵による造語と考えられ、*ban* 「判」に関してはその後の記録が確認できていない。

コンカニ *konkani* 【名詞】 (<*KOGANE* 「黄金」) 黄金(菊)。

konkani や *konkane* という形でアイヌ語に借用され、「金」という鉱物名として使用されるほか、「金色」という意味でも用いられる。アイヌ語の「金色」と「銀色(*sirokane/sirokani*)」は、アイヌ語の数少ない基本色彩名称(白、黒、赤、青~黄色)やと同程度に使用頻度が高く、口承文芸中で豪華絢爛さや特別さを表すのに用いられる。

kani や *kane* はアイヌ語では「金属一般」(主に「鉄」)を表すが、これは日本語の「金(かね)」に由来するものと考えられる。中川(2005: 99)は「これを日本語からの借用語と考えるのは、日本語の「金」【中略】との語形の似寄りとともに、それによって指されるもの自体が、そもそも和人社会から流入したものではないかと考えられていることによる」と述べている。

第二音節の母音の *i* と *e* は、日本語東北方言の影響で曖昧になり、どちらの形も借用されたものと考えられる。また、この語はアイヌ語のなかでも珍しい例外アクセントを持ち、第一音節が高く発音される。日本語東北方言で「かね」は尾高アクセントであるが、京都方言では無アクセントであるので、もしかするとそれがアイヌ語の第一音節のアクセントに結びついているのかもしれない。この点については、さらに検討が必要である¹⁵。

サケ *sake* 【名詞】 酒(嚙)。

中川(1989: 202)では、『方言辞典』に *tonoto* は樺太を含め全調査地点(9地点)に見られるが、*sake* は5地点にとどまることから、酒を表す語は古くは *tonoto* であり、*sake* はそれに比べて新しいと考えられている。北千島方言は、鳥居(1903)によって *tonoto* と *sake* の両形が報告されている。

¹⁵ 知里(1956b: 156)は、「外来語の中には、初高型のものがある。それらは、もとのアクセントを、いまなお保存していると見られる」とし、「古く北前船(きたまえぶね)などによって、関西方言が物とともにアイヌ語の中に持ち込まれたものであるらしい」と述べている。借用語のアクセントに注目した研究は、中川(1989)が代表的である。

サランパ *saranpa* 【間投詞】 (<SARABA「さらば」) 御暇乞ひ〔お別れ〕 (菊)。

『沙流方言辞典』によると、これは日本語の「さらば」から借用された語であって、アイヌ語としても古い言い回しであるから現代では別の言い方をすると報告されている。

シユミ *sumi* 【名詞】 (<SUMI「すみ」) 墨 (学)。

sumi は、『沙流方言辞典』に「灰、木炭」あるいは「墨」という意味で記載される。調査時に「墨」の訳語として出たということである。『方言辞典』では、樺太と帯広で *sumi*、八雲と幌別、沙流で *kunnesumi* という語形が確認できる (<*kunne-SUMI* 黒い・墨)。

消し炭を表す語は、固有語として *pas* などという言い方があり、字を書くための「墨」を表す語として入ったのが初めかもしれない。『沙流方言辞典』には *sumiyaki*「炭焼き」や *sumiyaki sisam*「炭焼きの人 (和人)」、*sumiyakine* (<*sumiyaki-ne* 炭焼き-である)「炭焼き業をする、炭を焼く」という語も記載されている。

シツリ *si(n)ciri* 【名詞】 (<SUZURI「硯」) すずり〔硯〕 (学)。

sinciri は「すずり (硯)」として『沙流方言辞典』に記載される。日本語東北方言の影響もあるかもしれないが、口蓋化の強い「しじり」という音でアイヌ語に入ったものかもしれない。*si* < *su* となる例は、*simotori* (<SUMOOTORI「相撲取り」)「すもうをとる」(『沙流方言辞典』)。*zu* < *ci* になる例は、*ancikattaro* (<AZUKAR-taro 預かる・する (日本語につく動詞化接尾辞))「預かる」。このほかに、*antuki* (<AZUKI「あずき」)「小豆」など、*zu* < *ntu* になる例も確認されている。

ソロバン *soroban* 【名詞】 (<SOROBAN「そろばん」) 算用、そろはん〔算盤〕 (菊)。

アイヌの口承文芸中に *soronpa* という形で確認できる。それで計算をするのではなく、祖父伝来の古い算盤で占いをしたという内容になっている(『キナラブック口伝アイヌ民話全集1』p. 78)。*ba* > *npa* になる例は、*saranpa* (<SARABA「さらば」)「[古] さよなら」(『沙流方言辞典』)。

タマ *tama* 【名詞】 (<TAMA「玉」) 玉 (菊)。

tama は多くのアイヌ語辞典に確認でき、複合語としてもよく使用されている。例えば、アイヌの女性が身に着ける首飾りのことを、*tamasay* (<*tama-say* 玉・円状に連なるもの) と言う。かなり早い時期に借用されている可能性がある。

チャ *ca* 【名詞】 (<CA「茶」) 茶; ウセチャ *use(y)ca* (<*usey*「湯」-CA「茶」) 湯茶 (学)。

『方言辞典』の「茶」という項目には、八雲、帯広で *oca* が記載され、樺太で *cay* が「ロシア人の持って来た磚茶」として記録される。また、北千島のシユムシユ島アイヌ語

語彙として、鳥居龍蔵 (1903: 123) が「茶」を *chā* /ca/, *chani* /cani/ として報告し、Dybowski が「čay 茶<ロシア語 чай 茶」¹⁶ としてロシア語からの借用と報告している。

トノ *tono* 【名詞】 (<*TONO* 「殿」) 役人 (菊)、ものゝふ (野)。

「野狐和歌」では、「もののふ (武士)」のアイヌ語訳に用いられているが、現代のアイヌ語辞典にはこうした意味で用いられるという報告はない。この語は使用頻度の高い借用語の一つで、現代においてもアイヌの物語や歌謡の中にも使用される。なお、『沙流方言辞典』には、「①殿様、旦那 (和人を呼ぶ敬称)、役人。②ご主人様、お得意様。③親方、(ほとんど) 神」という意味が記載され、『千歳方言辞典』に「親族名称などに敬意を込める意味でつける」とも記載される。

マナエタ／マナイタ *manayta* 【名詞】 (<*MANAITA* 「まな板」) ;カンピ マナエタ *kampi manayta* (<*kampi manayta* 学習・板) 机 (学)。

(特別な用途をもつ) 板状のものとして、*manayta* が用いられたと考えられる。『沙流方言辞典』には *manayta* で「まないた」、『千歳方言辞典』には、「イナウコツェプ *inawkotcep* などを捕った時に、儀礼を行うために乗せる木の剥り盆。日本語の「まないた」が語源だが、日常に使うイタタニ *itatani* 「まないた」とは別ものであることに注意。」とある。

モトハリ／モドタリ *moto(n)tori* 【名詞】 (<*MOTODORI* 「もとどり」) もとどり (菊)。

『松前ノ言』に「しねもととり いちわの事」とあり、類別詞としての使用が確認される (<*sine moto(n)tori* 一つ・もとどり [鶏冠])。現代のアイヌ語辞典にも『バチェラー辞典』、『萱野辞典』、『知里人間編』、『久保寺辞典稿』に記載され、借用語としての定着度が高い。

このほかにも、*motontori-kar* (<*MOTODORI* 「もとどり」-*kar* 「つくる」) 「To do the hair Japanese fashion. (髻を結う)」(『バチェラー辞典』) という表現があり、*motontori* がクマタカの老鳥 (*motontori-kor* もとどり・もつ) やウミアイサ (*e-motontori-us-cikap* 頭・もとどり・つく・鳥) を言い表す構成要素として用いられる (『知里動物編』)。

ワラツ *wara(n)ci* 【名詞】 (<*WARAZI* 「わらじ」) わらじ (菊)。

『知里動物編』に *waranci-kikir* で「ワラジムシ」とある (<*WARAZI-kikir* わらじ・虫)。幌別方言。 *waranci* は、物と一緒に借用された例であろう。

¹⁶ 村山 (1971: 150) からの引用。

5. 3. 3. 翻訳借用・造語

ウテキ ノエバ *uteknoypa* 【名詞・1項動詞】 (< *u* 「互い」 -*tek* 「手」 -*noy(e)* 「ねじる」 -*pa* (複数)) 腕押 (学)。

腕相撲のこと。『方言辞典』において、名寄で *teknopya* 「ねじ (捻) る」と見つかる。*uteknoypa* は語構成としてはあり得る形で、*utekanpa* (< *u-tek-an(i)-pa* 互いに・手・を持つ・(複数)) 「手をつなぐ、手を取り合う (自動詞) 」と類似のものである。語形の完成度の高さからしても、単なる伝蔵の造語ではないと考えられる。

エ子ケマウシベ *inekemauspe* 【名詞】 (< *ine* 「四の」 -*kema* 「脚」 -*us* 「ついている」 =*pe* 「もの」) 畜類 (学)。

kemauspe は字義どおりには「脚がついているもの」となるが、「足つきの漆器 (シントコ) 」という意味でも用いられる語である。ここでは *ine* 「四本の～」というのを語頭に付けることで「四本の脚がついているもの」>「畜類」となっているようである。文法的には問題がなさそうであるが、伝蔵による造語である可能性もある。

エバカシ/エハカシ/イハカシ/イバカシ *epakas/ ipakas* 【2項動詞/1項動詞】 (< *epakasnu* の前部要素?) 教える (菊)。

epakas/ ipakas という語は、蝦夷通辞のアイヌ語によく登場する語形であって、上原熊次郎著の『藻汐草』から広まった和人による造語の可能性もある。本論文では、*pakasnu* 【2項動詞】「～を罰する」や *epakasnu* 【3項動詞】「～を…に教える」、*ipakasnu* 【1項動詞】「教える」等という語形からつくられたものと考えている (詳しくは第10章で述べる)。

エバカシ クニ カンビ *ipakas kuni kampi* 【名詞】 (< *ipakas* 「教える」・*kuni* 「べき」・*kampi* 「書物」) 教訓書 (学)。

現代では「教科書」という訳語を当てても良いかもしれないが、現代アイヌ語における事例は未確認。// ☞ エバカシ/エハカシ/イハカシ/イバカシ。

エバカシクル/イハカシ クル *ipakaskur* 【名詞】 (< *ipakas* 「教える」=*kur* 「人」) 師 (学)、教える者 (菊)。

ipakasnikur (幌別方言) や *ipakasnokur* (八雲方言) などという言い方がある (『方言辞典』)。// ☞ エバカシ/エハカシ/イハカシ/イバカシ。

カンビ アト *kampi at, -u* 【名詞】 (< *kampi* 「紙」・*at* 「紐」) 紙緒 (菊)。

直訳すると「紙の紐」である。現代アイヌ語に用例はない。// ☞ カンビ/カンヒ。

カンビ エバカシクン ツセ／カンビ エバカシグン ツセ *kampi epakas kun cise* 【名詞】
 (<*kampi* 「学問」・*epakas* 「教える」・*kun* 「べき」・*cise* 「家」) 寺〔学校〕 (学)。

『バチェラー辞典』には音訳借用の *kakko* と、翻訳借用で「教える家」という *ipakasnu cise* にあたる二つの語形が確認できる。このほかに、「カンビ エバカシ クンヲレ子 *kampi epakas kun or ene* (<*kampi* 「学問」・*epakas* 「教える」・*kun* 「べき」・*or* 「ところ」・*ene* 「へ」) 手習所江〔手習い所へ〕 (学)」という翻訳借用も確認している。// ☞ エバカシ／エハカシ／イハカシ／イバカシ。☞ カンビ／カンヒ。

テバケリ *tepakeri* 【名詞】 (<*tepa* 「ふんどし」-*keri* 「靴」) わらじ掛 (菊)。

直訳すると「ふんどしの靴」である。現代アイヌ語に用例はない。

ノキタマ *noktama* 【名詞】 (<*nok* 「鞞丸」-*tama* 「玉」) きんたま (囃)。

nok だけで「鞞丸」という意味であるので、翻訳借用の際のエラーという扱いになるかもしれない。// ☞ タマ。

ルーヲマク／ルヲマク *Ruomak* 【名詞】 (<*ru* 「道」・*omak* 「奥?」) 陸奥 (野)。

短歌のなかで用いられている例であり「陸奥の」で5音と数えているため、陸奥は「みちのく」と読むことがわかる。恐らく「むつ」と読むようになった時代に作られており、ここで陸奥(みちのく)を元来の意味であった道奥(みちのおく)と解釈し、それをアイヌ語に翻訳借用している点が興味深い。現代アイヌ語ではこれ以降に例を見ないので、一時的な造語と考えた方がいいかもしれない。

ワナイキ モシリ *Wan(a)ik mosir* 【名詞】 (<*wan(a)ik* 「千」・*mosir* 「国」) 千島 (野)

千島列島を「千の島」と解釈し翻訳借用した例。現代アイヌ語では見つからない。

wan(a)ik については、『方言辞典』で八雲と帯広に *wanik* 「千」とあるが、これは *wan* 「十(の)」-*ik* 「百」という語構成で、乗法計算で「千」となっていると考えられる。

『方言辞典』によると、幌別、沙流、名寄、美幌方言は、「百」を *asiknehot* (<*asikne* 「五つ(の)」-*hot* 「二十」*ik*) のように二十進法で表すが、そのほかにも、美幌で *ik*、帯広で *sineik* (<*sine* 「一つ(の)」-*ik* 「百」) が「百」を表し、幌別では同じく *sineik* が「千」を表すと報告がある。すなわち、*ik* は方言によって「百」と「千」のどちらかの意味で用いられているようである。

5. 3. 4. 助詞の借用・エラー

ノ *NO* 【助詞】 (<*NO* 「の」) ~の; タマノ ニンカリ *tama NO ninkari* (<*tama NO ninkari* 玉・の・耳輪) 玉の耳かね (玉の耳輪) (菊)。

格助詞（格助辞）の「の」をそのまま取り入れた表現。ここでは「耳輪」の属性を表す。このような格助詞は不必要なもので、伝蔵が一時的に用いたものにすぎない。// ☞ タマ。

5. 4. 翻訳と推敲：直訳から意識へ

5. 4. 1. 「学校往来夷解書」について

「学校往来夷解書上」は、正徳4年(1714)成立の堀流水軒「寺子(教訓)往来」をアイヌ語訳したものである。加賀家文書のなかには和文筆写本(資料番号38)も残されている。本テキストの写しは現時点で5件(資料番号26, 34, 35, 40, 371)あることが知られており、加賀家文書内の写本数で言えばトップレベルである。5件については表5-6の通り。

No.	資料名	資料番号	作成者	年代：西暦	数量	計測値(cm)	写真枚数
1	[和文・アイヌ語解]	26	伝蔵	(安政元年～：1854-)	1冊	24.8 ×17.8	36
2	御通行蝦夷語	34	伝蔵	?	1冊	24.5 ×16.6	19
3	[シベツ名主宅蔵申口]	35	伝蔵	?	1冊	24.5 ×17	17
4	学校往来夷解書上	40	伝蔵	(万延元年～：1860-)	1冊	14.5 ×19.5	13
5	[学校往来夷解書上]	371	伝蔵	?	1冊	29 ×18.5	10

表 5-6：「学校往来夷解書」掲載資料（＝第2章、表 2-1 の抜粋）

この中で鍵となるのが、『学校往来夷解書上』（資料番号40）である。これは、宛名書きが明確に残されている唯一の資料で、伝蔵が息子の常蔵に送った正文（あるいはその写し）と推定される。送り手に「大通辞伝蔵」という署名が残されていることから、40番はこの称号が与えられた標津場所時代、つまり、1860年以降のもということで間違いなさそうである。

34、35番は、年代が特定できていない資料とされてきたが、これらの表紙表には「ノツケ伝蔵」という署名が残されていることから、1860年以前の野付通行屋時代のものであるという解釈が可能である。ただし、35番には1861年のものと考えられる資料の写しも含まれており、注意を要する。後から綴じられたものかもしれない。また、興味深いことに、26番は「(安政元年～：1854-)」と考えられてきた資料だが、余白に書入れの多い資料で、

35 番のアイヌ語から推敲されたような形跡が見られる。371 番は、26 番の書入れを本文に清書したもののようで、尚且つ 40 番よりも良質な訳出となっていることから、40 番よりも新しい可能性がある。

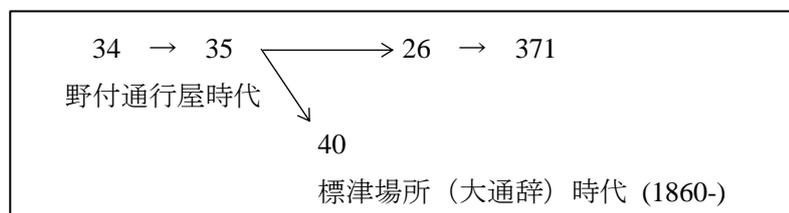


図 5-1 : 「学校往来夷解書上」のテキスト変遷¹⁷

5. 4. 2. テキスト変遷

ここでは図 5-1 の変遷を検証すべく、実際に具体例を見てみることにする。表記法については次の通り。

- ・原文和訳：ローマ数字 (I, II...) および大文字のアルファベット (A, B, C...)
- ・原文のアイヌ語カタカナ：小文字のアルファベット (a, b, c...)
- ・資料番号：テキスト後にある括弧内の数字

なお、ローマ字表記および鍵括弧内 (「」) の現代語訳は筆者 (深澤) による。

I. 木石畜類に異ならず

A. 木石畜類に

a. ニイ シユマ エ子ケマウシベ (35, 40, 26, 371)

ni suma ine-kema-us=pe

木 石 四の-脚-生える=もの.CLF (=四肢動物)

「木石や四肢動物」

b. ニエ シユマ エ子ケマウシベ (34)

ni suma ine-kema-us=pe

木 石 四の-脚-生える=もの.CLF (=四肢動物)

「木石や四肢動物」

I. 木石畜類に異ならず

B. 異ならず

¹⁷ 図中の番号は、「資料番号」を示す。

- a. ヲヤブ ソモ子ナ (34, 35, 40)

oya=p *somo* *ne* *na*
 他の=もの.CLF NEG COP DSC
 「は他の物ではないぞ」

- b. ヲヤブ シヨモ子ナ 【字消し】 (26)

oya=p *somo* *ne* *na*
 他の=もの.CLF NEG COP DSC
 「は他の物ではないぞ」 (= a)

子ハッコノ アンルエ子 【書入れ】
ne *nekkono* *an* *ru-we* *ne*
 COP のように ある.SG 跡-POSS COP
 「であるようなのだ」

- c. 子ハッコノ アンルエ子 (371)

ne *nekkono* *an* *ru-we* *ne*
 COP のように ある.SG 跡-POSS COP
 「であるようなのだ」 (= b 書入れ)

I は、「無筆之輩は盲者之名を得、木石畜類に異ならず」という和文後半部のアイヌ語訳である。IB は「(無筆の輩は) 木石や畜類のようなものだ」という意味のアイヌ語にすべきなのだが、1B (a) は「木石や畜類が他の物 [それとは異なる物] ではない」という意味になってしまっている。主語は「木石や畜類」ではなく、「無筆の輩」でなければならない。26番の段階でその誤りに気づき、修正したものと考えられる。ちなみに、IB (b) と IB (c) で使用される *nekkono an* 「に似ている」は、『アイヌ語方言辞典』を調べると美幌にしか見つからない。帯広では *nepkon an*、沙流、名寄、宗谷で *nenno an*、樺太(ライチシカ)で *neeno an* となる。

II. 手跡

- a. テキ ヲカケ (34, 35, 40)

tek-e *oka-ke*
 手-POSS 後.LOCR-PART
 「手の後」

- b. テキヲカケ イキクシケ テ テケ 【字消し】 (26)

tek-e *oka-ke* / *i-ki* *kus-ke* / *te* / *tek-e*
 手-POSS 後.LOCR-PART / それ-する 向こう側.LOCR-PART / ERROR? / 手-POSS
 「手の後」 / 「する向こう側」 / (書き誤り?) / 「手」

ノイカト【書入れ】

nuye *kat-u*
 書く 様子-POSS
 「(それ) の書き振り」

c. ノイカト (371)

nuye *kat-u*
 書く 様子-POSS
 「(それ) の書き振り」 (= b 書入れ)

II は、「徒に光陰を送り手跡執行、油断せしめ」という箇所「手跡」のアイヌ語訳である。もちろん「手跡」は、II (a) に見られるような「手の後」ではなく、II (c) の「書き振り」のような意味であって、II (b) の時点で正確な解釈に辿り着いたものと考えられる。

I と II はどちらも 371 番に近づくに従って、原文の意味を正確に捉えなおすことで、アイヌ語訳の質が高まっていく例であったが、次の IIIA は、371 番がより適切なアイヌ語訳であるとは限らない例である。

III. 早天朝起手水遣ひ

A. 早天

a. トナシ ニソロ (34, 35)

tunas *nis-or*
 早い 空-ところ.LOCR
 「早い天」

b. トナシ ニソロタ (40)

tunas *nis-or* *ta*
 早い 空-ところ.LOCR LOC
 「早い天で」

c. トナシ ニシヨロ【本文】 (26)

tunas *nis-or*
 早い 空-ところ.LOCR

「早い天」 (= a)

トエマ ニシヤツ 【余白】

tuyma nisat

遠い 明け方

「早天 (早朝)」

d. トナシ ニシヤツ (371)

tunas nisat

早い 明け方

「早い明け方」

III A の「早天」は、「早朝」や「明け方」の意味であるので、III A (a)~(c) の「早い天」というのは漢字を逐語訳したことによる誤りである。アイヌ語の用例として実際に確認できるのは、III A (c) の余白に書き入れてある「トエマ ニシヤツ」(*tuyma nisat*) である。これは久保寺 (編) (1992) の『アイヌ語・日本語辞典稿』において、

tuima nisat “遠い朝—黎明, ほのぼのと薄明るく明ける朝 = *kunne nisat* / *peken nisat* の反意語” (p. 279)

とあるので、意味も原文の日本語に合致する。これに対し、III A (d) の「トナシ ニシヤツ」(*tunas nisat*) は 371 番のアイヌ語であるが、また「早い」という漢字に引っ張られてしまっているように見える。この表現が果たして 26 番の「トエマ ニシヤツ」(*tuyma nisat*) より良質なものであるかどうかは疑問である。

III. 早天朝起手水遣ひ

B. 朝起

a. クン子ワ ホブニ (34)

kunnewa hopuni

朝に 起きる.SG

「朝に起き」

b. クン子ワノ ホブニ (35, 40, 26, 371)

kunnewa-no hopuni

朝に-ADV 起きる.SG

「朝に起き」

IIIB (a) と IIIB (b) はとても微妙な例で、「クン子ワ」(*kunnewa*) でも「クン子ワノ」(*kunnewanō*) でも文法的には問題がなかったのではないかと思われる。例えば『沙流方言辞典』では、*kunneywa* が名詞、*kunneywano* が副詞として扱われており、前者は名詞の性質をもっているが副詞的にも働くことが記されている。同辞典では、このような接尾辞の *-no* について「副詞/副詞句についてその部分をはっきりさせる。一種の強調」(p. 431) と説明されている。方言は違うが、*kunnewa* も *kunnewanō* もどちらも副詞として働くと考えられる。35 番以降から接尾辞の *-no* を用いた後者の形を採用した理由は明白ではないが、こちらが適当として改めたのだろう。尚、この「朝」という語形の方言差については第 2 章 2.4.4 節で述べた通りである。

III 早天朝起手水遣ひ

C. 手水遣ひ

- a. テキ ワッカ ユワンケ 【本文】 (35)
tek-wakka *eywanke*
 手-水 使う
 「手水を使い」

ナヌフライ 【当て字】

- nan-u* *huray*
 顔-POSS 洗う
 「顔を洗い」

- b. ナヌフライ 【本文】 (34)
nan-u *huraye*
 顔-POSS 洗う
 「顔を洗い」 (= a 当て字)

テキ ワッカ ユワンケ 【当て字】

- tek-wakka* *eywanke*
 手-水 使う
 「手水を使い」 (= a 本文)

- c. ナヌフライ 【本文】 (40)
nan-u *huraye*
 顔-POSS 洗う

「顔を洗い」 (= a 当て字、b 本文)

テキワカ ユワンケ 【当て字】

tek-wakka *eywanke*

手-水 使う

「手水を使い」 (= a 本文、b 当て字)

d. テキ ナヌ フライ 【本文】 (26)

tek-e *nan-u* *huraye*

手-POSS 顔-POSS 洗う

「手が顔を洗い」

テキ ワッカ ユワンケ 【当て字】

tek-wakka *eywanke*

手-水 使う

「手水を使い」 (= a 本文、b, c 当て字)

e. ナヌフライ (371)

nan-u *huraye*

顔-POSS 洗う

「顔を洗い」 (= a 当て字、b, c 本文)

III C (a)~(e) は、5つの資料の全てが異なる表記法になっている例で、「手水遣ひ」という和文をアイヌ語訳したものである。「手水」とは手や顔などを洗う水のこと、「テキ ワッカ(*tek-wakka*)」などは、それをアイヌ語に直訳したもののようである¹⁸。当て字に使用する表現の切り替えなどを通して、「手水を使い」から、「(手が) 顔を洗い」という意識へと変化していく過程が見えると思うが、35番が「手水～」のほうを本文にとり、34番が「顔を～」を本文にしているところで、若干の資料の新旧に矛盾が生じているように見える。

34番のほうが35番より前に書かれたという証拠としては、先ほど見た III B に加えて次のような例がある。

IV. 兄弟子

a. ユボ アキボ ウタレ (34)

¹⁸ ただし、*tek(e) wakka eywanke* 「手が水を使う」というつもりでアイヌ語訳した可能性があるため、確実に「手水」を表したアイヌ語とは言い難い部分もある。

yupo *ak(i)-po*¹⁹ *utar*
 兄さん 弟-DIM たち
 「兄さんや弟たち」

b. キアン子 クル ワノ (35, 40, 371)
kianne=kur *wa-no*
 上である=人 ABL-ADV
 「(学年の) 上の人から」

c. キアン子 クルワノ 【本文】 (26)
kianne=kur *wa-no*
 上である=人 ABL-ADV
 「(学年の) 上の人から」 (= b)

ユボ アキボ ウタレ 【当て字】
yupo *ak(i)-po* *utar*
 兄さん 弟-DIM たち
 「兄さんや弟たち」 (= a)

IV は、「兄弟子之差図を用ひず」のなかの「兄弟子」の訳語である。34 番は、その漢字のまま「兄さんや弟たち」というアイヌ語になっているが、35 番は「(学年の) 上の人」という訳を当てて「兄弟子」を表している。IV (b) の「キアン子 (*kianne*)」は、年齢のほかに身分が上である人をも表すことができる語であって、より好ましい表現になっていると言える。もともと書入れの多い資料である 26 番は、当て字として再び IV (a) の表現を用いているが、本文は変わらず IV (b) のままである。もしかすると、26 番=IV (c) は、34 番=IV (a) と 35 番=IV (b) の両方を参照しているのかもしれない。

それでは最後に図 5-1 を立証すべく、35 番を起点に 26 番と 40 番が枝分かれし、26 番の系統を引き継いで 371 番ができたという証拠になりうる例を見てみることにする。

V. 人十字写さバ

A. 人

a. シシヤモ (34)
sisam
 和人

¹⁹ 鳥居 (1903) に「akibo 弟」と見つかる。また、知里 (1975) では、*akpo* が胆振や日高の西半で「弟」を表す雅語として記録されている。

「和人」

b. モシマ シシヤモ (35)

mosma sisam

別の 和人

「他の和人」

c. モシマ ウタレ (40)

mosma utar

他の 人々

「他の人々」

d. モシマ シシヤモ【本文】 (26)

mosma sisam

別の 和人

「他の和人」 (= b)

ヲヤクル【余白】

oya=kur

他の=人

「他の人」

e. ヲヤクル (371)

oya=kur

他の=人

「他の人」 (= d 余白)

V. 人十字書き

B. 十字書き

a. ワンカンビ ノエワ子ツキ

wan kampi nuye wa ne cik(i)

10 の 字 書く て COP ば

「10字書けば」

V は、「人十字書き、己百字を学」という前半部分のアイヌ語訳である。VA (a)~(e) のアイヌ語の表現に特別不自然なものはないが、文の意味からすると VA (a) は不適當かもしれ

ない。また、10字書いたのは一人であってもよいのだから、VA (b) や VA (d)、VA (e) のアイヌ語のほうが VA (c) よりは適当であるし、「和人」に限らないとすれば VA (d) や VA (e) の「ヲヤクル」(*oyakur*) が最も好ましい訳語であると言える。VA (a)~(e) の語形を図 5-1 に合わせると図 5-2 のようになる。

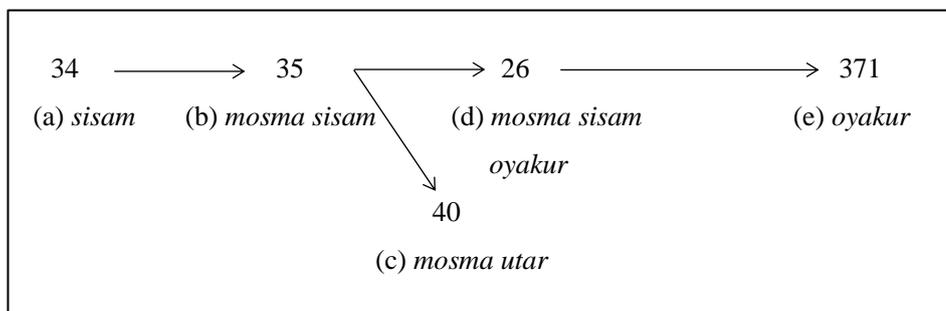


図 5-2 : 「学校往来夷解書上」のテキスト変遷

このようにアイヌ語の比較を通して資料の新旧が判断できるということは、加賀家文書のアイヌ語資料全てに言えるわけではない。しかしながら、各資料の成立年代を推定する手がかりのひとつにはなりそうだということがわかってきている。徐々に適格なアイヌ語訳へと移り変わっていく様子からも伝蔵の勤勉さというのは想像に難くはなく、それがこうした判断材料へと導く契機になっているのは非常に興味深い。

標津場所で「大通辞」という称号をもらう晩年においても、恐らくアイヌ語に対する拘りは薄れておらず、そういうことと言えば、彼のアイヌ語が野付だけではなく晩年に過ごした標津のアイヌ語に影響を受けている可能性も十分に考えられるだろう。野付以北の標津までもを視野に入れた上で、近隣の美幌方言との語彙的な類似を検討していく必要はやはりありそうである。

5. 5. まとめ

本章では、5.1 節でアイヌ語と日本語の音韻・文法を対照的な視点で概観し、そのうえで蝦夷通辞の母語干渉が現れやすいところを捉えようとした。その後、5.2 節で歌詞のアイヌ語訳における音数合わせの工夫があることを指摘し、5.3 節でどのような借用語や造語が用いられているか調査した。さらに、5.4 節では教訓書に関する 5 種の写本からアイヌ語訳が直訳から意識へと変わっていく過程と、そこから考えられるテキスト成立の順序を提示した。

これまで、蝦夷通辞のアイヌ語は、日本語をそのままアイヌ語に置き換えていただけであると考えられていた部分があった。しかしながら、アイヌ語に訳す上で「陸奥」を「道奥」と翻訳借用するなどの様々な工夫があり、さらに教訓書のアイヌ語訳においては推敲

が重ねられてよりよい訳出を目指しているように見える。つまり、蝦夷通辞・加賀伝蔵のアイヌ語は機械翻訳のようなものではなく、時には親しいアイヌの人々に助言をもらったりしながらアイヌ語訳をしていったのではないかというのが筆者の推測である。それぞれの言語の音韻・文法体系の比較によってある程度の母語干渉とエラーは判定できるので、それをいかに取り除きながらテキストを使用し、当時のアイヌ語の実態を明らかにしていくのかというのがこの先の課題である。そのためには、本章で見たように、やはりテキストの背景を知ることは欠かせないと考えている。

第6章 加賀伝蔵のアイヌ語文法観

一特に人称表現について

本章では、日本語の文法体系とは目立って異なるアイヌ語の人称表現について、蝦夷通辞・加賀伝蔵の文法観に踏み込んだ形で記述を試みる。

6. 1. はじめに

筆者自身の研究も例外ではないが、これまでの近世アイヌ語資料の研究は、語形（音声・音韻）の推定や方言的特徴、さらにテキストの翻刻や内容分析などに力が注がれることが多く、文法研究は進んでいない。もちろん、母語話者の記録ではないため、実際のアイヌ語がいかなる様相を示していたかということとは別次元のものと捉えておく必要がある。

しかしながら、蝦夷通辞はアイヌ語の専門家であり、母語話者から直接アイヌ語を聞いていたフィールドワーカーである。加賀家文書のアイヌ語はある一定の規則のもとに表記されており（第3章）、そのアイヌ語は推敲が重ねられているようでもある（第5章5.4節）。そのアイヌ語作文には、当時のアイヌ語の片鱗が現れているに違いなく、また実質的な面而言えば、加賀家文書内のアイヌ語を読解するうえで、文法を整理しておくことは重要なことである。

本章では、日本語の文法とは大きく特徴を異にするアイヌ語の人称表現を取り上げることで、母語干渉による影響を最小限にとどめ、これまで取り組まれてこなかった近世アイヌ語資料の文法研究を試みる。具体的には、蝦夷通辞・加賀伝蔵がどのような理解のうえでアイヌ語の人称表現を用いたのかということを検証する。

6. 2. 「現代アイヌ語」の人称表現

アイヌ語の人称表現は、主語と目的語が組み合わさったときに方言差が大きく観察されるが、そうでなければ概ね音韻的な違いやアクセントの異なりとなる。表6-1は、アイヌ語諸方言のなかでも根室方言と相対的に近似の性質をもっていると考えられる方言のうち、十勝（帯広）方言の人称表現の報告である。アイヌ語の人称表現は代名詞と動詞につく人称接辞（・接語¹）の二種にわかれ、接辞・接語には主語と目的語を示す二種がある。本論文では議論を簡便にするため、以下この十勝（帯広）方言の人称表現を「現代アイヌ語」

¹ 接語としての資格を持ちうるものとしては、*a(n)=*, *eci=*, *=an* がある。*a(n)=* や *eci=* は動詞についたときにアクセントを変えず、*=an* は他のものに比べて自立性が高いことが知られている。

と呼んで比較対象とする。なお、引用の際に表記法とスタイルを変更し、「系」の列は筆者（深澤）により付記した。

人称の種類	系	代名詞	接辞・接語	
			主語	目的語
1 人称単数	ku 系	<i>kuani</i>	<i>ku=</i>	<i>en=</i>
1 人称複数（除外形）	ci 系	<i>ciutari, ciokay</i>	<i>ci=, =ás</i>	<i>un=</i>
1 人称複数（包括形）	an 系	<i>anutári</i>	<i>a=, =án</i>	<i>i=</i>
2 人称単数	e 系	<i>eani</i>	<i>e=</i>	
2 人称複数	eci 系	<i>eciutári, eciokáy</i>	<i>eci=</i>	
2 人称単数（敬称）	an 系	<i>anokáy</i>	<i>a=, =án</i>	<i>i=</i>
2 人称複数（敬称）	an 系	<i>anutári</i>	<i>a=, =án</i>	<i>i=</i>
3 人称単数	ゼロ系	<i>anihi</i>	\varnothing	
3 人称複数	ゼロ系	<i>okay</i>	\varnothing	
不定人称	an 系	—	<i>a=, (=án)</i>	<i>(i=)</i>

表 6-1：十勝（帯広）方言（田村 1971: 267）

次で示す図 6-1 は、中川（1988）が提示したアイヌ語の代名詞の歴史の変遷である²。①～④の代表例はそれぞれ、①帯広方言、②幌別方言、③千歳方言、④沙流方言、⑤（三人称の部分を除いて）静内方言³ となっている。それによると、帯広方言は北海道諸方言のうちもっとも古い形を反映していることになる。

² 図 6-1 では、*anutari* や *ciutari* 等の *-utari* 型の代名詞は省略している（中川 1988: 251）。

³ Refsing (1986) では三人称代名詞の形を認めていないが、「同論文の informant である織田すての氏から聞き取りを行っている千葉大学の奥田統己氏によれば、三人称複数形の代名詞は確認できないが、単数形には *anihi* の形が認められるということである」と中川 (1998: 251-252) は報告している。そのため、「あるとすれば、この図のように *ani(hi)*、*oka* という形が期待される」（中川 1988: 247）ということである。

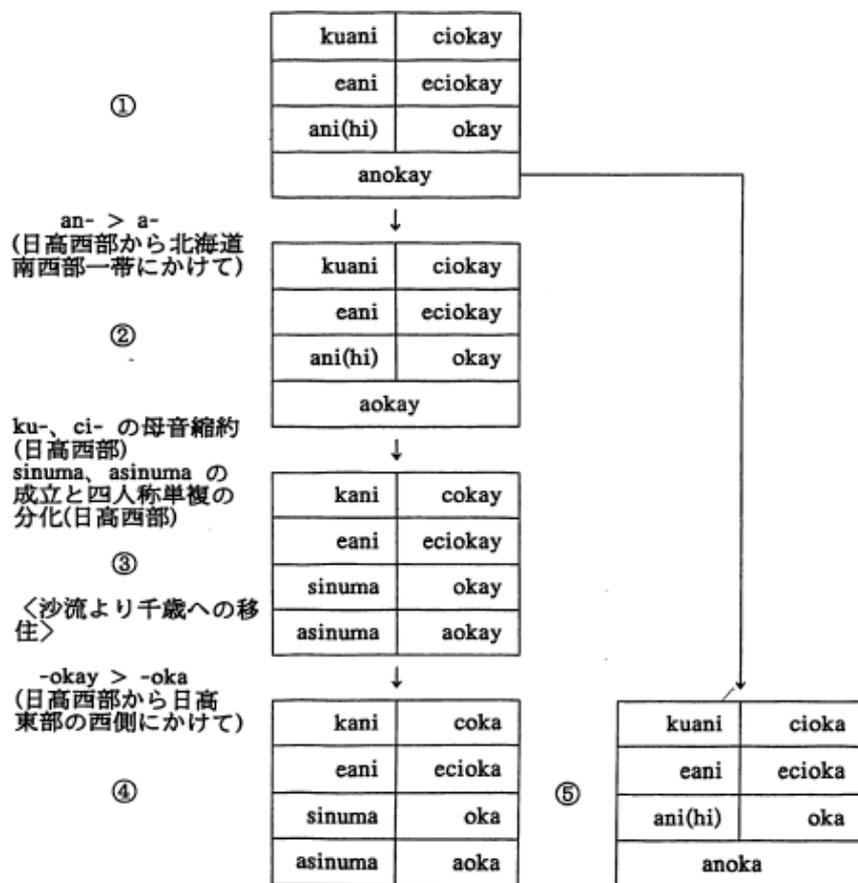


図 6-1：沙流・千歳方言を中心とした代名詞の変遷図（中川 1988: 248）

6. 3. 加賀家文書のアイヌ語語彙集における人称表現

まずはじめに、加賀家文書のアイヌ語語彙集に見られる人称表現を日本語対訳とともに表 6-2 にまとめる。使用した語彙集は以下の三種である。

- ① [アイヌ語解の歌]：加賀家文書 No.31、No.38、No.95 に記載されている⁴。アイヌ語の語彙を覚えるためにつくられたものようで、歌詞のような体裁をとっている。なお、No.31 には人称表現の記載がないため調査対象としない。略称：ア歌。
- ② 藻汐草 [写]：上原熊次郎著の『藻汐草』（一冊本）の写本。加賀家文書 No. 49。略称：藻写。

⁴ ナンバーは、別海町郷土資料館（2012, 2015a）の通し番号。No. 31 については翻刻が秋葉（1989）、現代語訳が別海町郷土資料館（2002）に紹介がある。No. 95 は別海町郷土資料館（2015a）に翻刻が掲載されている。

- ③ [蝦夷語和解]⁵：藻汐草 [写] の後に記載される藻汐草の類本。天地部、人物部、支體死活の和語見出しに選り抜きのアイヌ語対訳と語源解がついている。加賀家文書 No. 49。略称：蝦和。

人称の種類	形式	ア歌(No.38)	ア歌(No.95)	藻写(No.49)	蝦和(No.49)	系
1 人称	<i>kuani</i>	わし	わし	吾 (われ)	吾 (われ)	ku 系
	<i>ku=</i>	我し	我	吾 (われ)	—	
	<i>ciokay</i>	わたくし	私し	此方	此方	ci 系
	<i>enci=</i>	此方、拙者	此方、拙者	—	—	ku 系
? 人称	<i>ani</i>	自分	自分	吾 (われ)	—	an 系
2 人称	<i>eani</i>	手前	貴様	汝	汝	e 系
	<i>e=</i>	手前	汝	汝	—	
	<i>eror?</i>	—	—	あなた	あなた	
	<i>eciokay</i>	お前	御手前	其方	—	eci 系
	<i>eci=</i>	其方	其方	—	—	
	<i>anokay</i>	お前	御手前	其方	其方	an 系

表 6-2：加賀家文書アイヌ語語彙集における人称表現

表 6-2 において一人称と二人称の表現は和訳からも明確であるが、網掛けした an 系の「自分」という和訳については直ちに何人称の表現と特定できない。表 6-1 で見たとおり、現代アイヌ語においても an 系というのは様々な人称にわたる表現であり、中川 (1987a, 1988 など) はこれをひとつの形式として「四人称」とラベル付けをしている。次節では、これらの形式がテキスト中でどのように用いられているのかということ进行调查する。

6. 4. 加賀家文書のアイヌ語テキストにおける人称表現

本節では、以下の三種のテキストで用いられる人称表現について見ていく。

- ①チャコルベ⁶：その表題から、サコロベ (*sakorpe*) というジャンルに属するアイヌの口承文芸の記録かと推測されるが、採録された経緯や伝承経路等は不明。清書・編集の過程でアイヌ語自体が様々に変わってしまっている可能性がある。加賀家文書

⁵ 翻刻は秋葉 (1989) に、現代語訳は別海町郷土資料館 (2005) に掲載される。深澤 (2016a) によってローマ字表記化を行っている。

⁶ 浅井 (1972) によって翻刻・アイヌ語のローマ字化および現代日本語訳化がなされており、深澤 (2016b) において浅井 (1972) の再検討 (翻刻・ローマ字化・現代日本語訳化) を行った。

No. 28、No. 31 所収。略称：「チャ」。

【あらすじ】沼辺の村の旦那はオタシュンの旦那に対し、末娘が欲しければ、その娘と二人で沼の底をくぐり向こう岸に出てみなさいという求婚難題を仕掛ける。オタシュンの旦那は妨害にあって見事に失敗し、自分の村に帰って従者らに事の次第を話す。そこで従者らは夜に沼辺の村から娘をさらいだそうとするが見つかり、それが発端で二つの村は戦争になる。そこへ山中の旦那が現れて戦を鎮静化し、オタシュンの旦那は娘をもらう代わりに二千俵価値の品をやって、二つの村はめでたく仲直りをした。

②菊のかんざしみだれ髪⁷：「お吉清三」口説のアイヌ語で、伝蔵が業余で作詞したとされる。加賀家文書 No. 28、No. 31 所収。略称：「菊」。

【あらすじ】与右衛門旦那は、雇われの清三が娘のおきつと恋仲になっているのを知り、清三を家から追い出してしまふ。しかしその後、おきつの態度が急変したことで改心し、清三を呼び戻して娘と結婚させ、孫が生まれると目を覚ましたごとき喜んだという。

③学校往来夷解書⁸：堀流水軒『寺子往来』の「寺子教訓書」に対する訓読とアイヌ語訳。No. 26、No. 34、No. 35、No. 40、No. 371 所収。息子の常蔵に渡している。略称：「学」。(内容は省略する。)

これらの中で、特に人称表現に注目されるのが、加賀家文書において唯一「アイヌの口承文芸」がソースであろうと考えられる「チャコルベ」である。総数としては、64 例中、①の「チャ」が 28 例、②の「菊」が 25 例、③の「学」が 11 例となった。

なお、アイヌ語の人称接辞（・接語）は義務的なものであって、ゼロの場合は必ず三人称を表すのであるが、蝦夷通辞のアイヌ語においては単に脱落しているとしか考えられないものが多い。これは、日本語においてこのような文法項目がなく、人称表現が義務的ではないことに由来していると考えられる。つまり、ゼロが有標とはならないため、ここでは調査対象から外すことにする。

6. 4. 1. ku 系、ci 系：一人称表現

6. 4. 1. 1. ku 系：一人称単数表現

「現代アイヌ語」において ku 系は一人称単数を表し、加賀家文書の三種のテキストに

⁷ 深澤 (2013) によって翻刻・アイヌ語のローマ字化および現代日本語訳を紹介。

⁸ 深澤 (2014c) によって翻刻・アイヌ語のローマ字化および現代日本語訳を紹介。

においても基本的には同じである。ku系は決まってセリフの中で用いられる。「学」は教訓書という性格からセリフがなく、よって一人称表現のku系を用いることもない。

	チャ	菊	学
<i>kuani</i>	此方(1)	わしも(1)	—
<i>ku=</i>	我ら/我等(1) ⁹ 、此方の(1)、我(1)	わし(2)、我(2)	—
<i>en=</i>	我れに(1)	—	—
<i>enci=</i>	—	此方共(1)	—

表 6-3 : ku系 (11/64例)

kuani は「現代アイヌ語」で代名詞であり、加賀家文書中においても自立性が高い使用が見られる。対して、*ku=* は人称接辞であるので必ず動詞または名詞の直前に現れることになるが、加賀家文書中でもやはりそのようにふるまっている。

(6-1) は代名詞 *kuani* の例で、山中の旦那が二つの村の戦いを治めようとする場面のセリフ、(6-2) は人称接辞 *ku=* の例で、おきつが清三への手紙に書いた文章(セリフ)である。

(6-1) クワニ ウカシユワ アコタン トエバレクンナ
此方 加勢して 其剛勢村の者皆殺するぞ

(チャ : 053 オ 07-053 オ 08)

“*kuani* [u-kasuy] wa a=kotan tuypa-re kun na.”

1SG REC-助ける て 4.A=村 切る:PL-CAUS べき DCM

「私が加勢してあなたたちの村を皆切らせるぞ。」

(6-2) ヲキツ クエ付 ヒリカノ/ピリカノ¹⁰ エヌヤ
おきつ わしのいふ事 能聞 なされ

(菊 : 037 ウ 01-037 ウ 02)

“Okici, *ku=ye* cik(i) pirka-no i-nu ya(n).”

おきつ 1SG.A=言う れば よい-ADV それ-聞く IMP

「おきつ、わしがこれから言うことをよく聞きなさい。」

ku= が名詞の前に現れるときは譲渡不可能なものの所有者を表し、加賀家文書において *ku=* の7例中4例がそれに該当する。(6-3) は *ku=* が名詞の前に現れる例で、求婚難題に

⁹ 「我ら/我等」という訳語が与えられているが、テキストを見る限り山中の旦那が自分一人を指すのに用いている。

¹⁰ 半角スラッシュ (/) は、写本によって異なる場合に使用する。以下、同様。

失敗して末娘を嫁にもらうことができなかった理由について説明しているオタシュンの旦那のセリフである。

(6-3) クテキ コエケム クシユ
此方の手を引握るによつて

(チャ : 049 ウ 01-049 ウ 02)

“*ku=tek-e ko-ekem kusu...*”
1SG.A=手-POSS に対して.APPL-引き握る ので
「私の手を引き握ったため…」

(6-4) は、1人称目的語人称接辞 *en=* の例で、(6-3) と同じ場面のオタシュンの旦那のセリフである。

(6-4) エキヤ メノコ子 ヤッカエキ エ子シカビ コトモア子
彼の むすめ よりも 我れにほれて 居と見得て

(チャ : 049 オ 05-049 オ 08)

“*ikia menoko ne yak-ka-i-ki en=sikapi kotom an...*”
その 女 COP て-も-それ-する 1SG.O=ほれる ように ある.SG
「その娘も我に惚れていたようで…」

enci= は、現代アイヌ語において北海道の東部方言に特徴的な受動態を表す人称標示である。加賀家文書においてもやはり受動文（ただし和訳は能動文）で使用される。(6-5) は、清三が自分の娘おきつと恋仲になったことを知って、その怒りを述べた与右衛門のセリフである。動作主は清三（とおきつ）。

(6-5) エンツ ウエンテ クラシハ ルエナ

此方共 ^{かしろ}つけにしるのたな / ^{なへかしろ}みつけにしるのたな

(菊 : 039 ウ 01-039 ウ 02)

“*enci=wentekuraspa¹¹ ru-we na.*”
1SG.P=馬鹿にする? 跡-POSS DCM
「わしは馬鹿にされたのだな。」

¹¹ *wentekuraspa* は語義未詳だが、『萱野辞典』に *wenkuraspa* で「軽蔑する、馬鹿にする、蔑む」という意味があり、深澤 (2013) ではこれを採用している。

6. 4. 1. 2. ci系：一人称複数表現

「現代アイヌ語」において、ci系は一人称複数（除外形）を示す。加賀家文書においてもそれは同様であり、和訳にははっきりと表れないものの発話者は複数のなかの一人である場合が多い（ただし、(6-6)のような例外もある）。

	チャ	菊	学
<i>ciokay</i>	わたくし(1)、此方(1)、我(1)	—	—
<i>ciutari</i>	此方の(1)	—	—
<i>ci=</i>	此方(1)、某(1)、 φ (1)	—	φ (1)

表 6-4 : ci系 (8/64 例)

基本的にセリフ中に用いられ、「我々」や「私たち」などと訳すことが可能である。「菊」には ci 系の明確な例が見つからない。

(6-6) で *ciokay* は名詞句が現れる位置に用いられており、「現代アイヌ語」と同じ代名詞的な使用が確認できる。これは上記 (6-4) の例文「エキヤ メノコ子～」が続くオタシュンの旦那のセリフで、*ciokay* はオタシュンの旦那を指している。ku 系と ci 系が混用されている例である。

(6-6) イキヤ ナンカテクル チヨカイ ヲロワノ バテキ
彼美婦方へ 我より ばかりし

シカビ クニ ラムエケ エキヤ メノコ子 ヤッカエキ
ほれたと 思ふて居たか/思ふて居たが 彼の むすめ よりも

エ子シカビ コトモア子
我れにほれて 居と見得て

(チャ : 049 オ 03-049 オ 08)

“*ikia* [nankante]=kur *ciokay* or-o wa-no patek
その 美しい=人 1SG? ところ.LOCR-PART ABL-ADV ばかり

sikapi kuni ramu ike ikia menoko ne yak-ka-i-ki
ほれる COMP 思う が その 女 COP て-も-それ-する

en=sikapi kotom an...
 1SG.O=ほれる ように ある.SG

「その美人に我よりばかり惚れたものと思っていたが、その娘も我に惚れていたよ
 うで...」

代名詞の *ciutari* と *ciokay* は、加賀家文書中において名詞の直前に付き、所有者のよ
 うなふるまいを見せることがある。これは現代アイヌ語にも十勝方言で確認されていると浅
 井 (1972) で指摘されているが、あまり一般的な用法とは言えそうにない¹²。

(6-7) は沼辺の村の人々 (の一人) が、オタシュンの旦那に述べたセリフである。

(6-7) トエマ ニシバ チヨカイ ボウ子 ホンメノコ
 遠方の 村長 わたくし 子の内 末子娘

コンルシユイ コトマンツキ
 ほしゑと あらは/あらば

(チャ : 046 ウ 07-047 オ 02)

“*tuyma nispa ciokay po ne pon menoko*
 遠くに 旦那 1PL 子:POSS COP 小さい 女

kor_ rusuy kotom an cik(i)...
 持つ DESID ように ある.SG れば

「遠方の旦那が、我々の子である末娘が欲しいようならば...」

(6-8) は、沼辺の村との口論のなかでオタシュンの従者ら (の一人) が述べたセリフである。

(6-8) マシケノ ツウタレ ニシハ ラッカイ カト ヒリカ/ピリカ
 勿論 此方の 酋長 男ぶり/男ぶり よし

(チャ : 052 オ 05-052 オ 06)

“*maski-no ciutari nispa okay kat-u pirka.*”
 過分である-ADV 1PL 旦那 男 姿-POSS よい

「非常に我々の旦那は男ぶりがよい。」

人称接辞の *ci=* は 4 例中 2 例が動詞 *kor* 「～を持つ」の前に現れて後置される名詞の所

¹² 浅井 (1972: 145-146) のあげている例文は次の通りで、*poho* は「子」の所属形を表す：*ciokay poho anak sonno rametok okay ne akusu oro wano eykostek isounkur_ne* 「うちの子はほんとうに勇敢なものであったので、それからはとても運のよい狩人になった」(ローマ字表記は一部深澤によつて修正した)。

有を表している。「現代アイヌ語」においても、譲渡可能な場合には、直接名詞に付くのではなく *kor* が使われる。

(6-9) は、沼辺の旦那（村長）がオタシュンの旦那に娘はやれないと述べているところである。1人称単数の読みでも問題ないが、沼辺の村を代表して述べている表現ともとれる。

(6-9) チコロ ホンメノコ ボカシノ クシユ
此方の 小娘よりも 水れんなき 者ゆへ

(チャ : 048 ウ 05-048 ウ 08)

“*ci=kor pon menoko pokasno kusu...*”
1PL.A=持つ 小さい 女 劣る ので
「私の末娘に（泳ぎが）劣るので…」

場所（やモノ）に一人称が所属するという表現は、セリフの中でなくても例外的に *ci* 系が用いられることがあるので、(6-10) のように「学」のテキストにも見られる。

(6-10) ツコロ モシッタ エバク/イバク シ子ベサン バワノ
本朝凡九歳

(学 : 03 オ 07-053 オ 08)

ci=kor mosir_ ta epak sinepesan pa wa-no
1PL.A=持つ 国 LOC 近づく 九 年 ABL-ADV
我々の国では、それに近く九歳から

しかし、このように地の文で使用される *ci=* の例に関しては、ほとんど固有名詞化してしまっていると考えられるべきかもしれない¹³、従って、一人称表現の *ku* 系および *ci* 系は原則セリフ中に出て来るとまとめられる。

代名詞と人称接辞の区別や単複の区別もしようとしているのであろうが、*ku* 系よりは明確ではない。さらに例を見ていく必要がある。

6. 4. 2. e系、eci系：二人称表現

二人称は *e* 系、*eci* 系ともに例が少ないため、ここでは具体例を挙げるにとどめる。「学」は人称という観点での判定が難しく、またこのテキストは主として人称が *an* 系で標示される傾向にあるためここでは割愛する（本章 6.4.3.2 節を参照）。

¹³ 「チャコルベ」は、美人の末娘の住む村が「シコツ トシヤム」などと呼ばれ、「我等沼辺」などという和訳があてられている。伝蔵は *ci=kor_to sam*（我々の持つ沼辺）と解釈していたのであろう。ただし、「シコツ」は既に固有名詞のように使われており、またカタカナ表記の「シ」からは /s(i)/ が推定されることから、本論文では *ci=* として数に入れなかった。

	チャ	菊	学
<i>eani</i>	—	—	—
<i>e=</i>	—	其許の(1)	φ(1)?

表 6-5 : e 系 (2/64 例)

	チャ	菊	学
<i>eciokay</i>	—	—	—
<i>eciutari</i>	其方とも(1)	—	—
<i>eci=</i>	—	φ(1)	φ(1)?

表 6-6 : eci 系 (3/64 例)

(6-11) は清三に対する雇用者、与右衛門のセリフである（関係：目上→目下（単数））。この *e=* は譲渡不可能なものの所有者を表し、「現代アイヌ語」でも妻に対しては同様の言い方をする。

(6-11) ヲキツ エマツ子 子ニワノ コレヤ
おきつ 其許の女房に 誰が 呉だ

(菊 : 039 オ 05-039 ウ 06)

“*Okici e=maci ne nen wa-no kor-e ya?*”

おきつ 2SG.A=妻.POSS として 誰 ABL-ADV 持つ-CAUS Q

「おきつをお前の妻として誰からもらったのか（誰がお前にやったというのか）？」

(6-12) は従者らをなじるオタシュンの旦那のセリフである（関係：目上→目下（複数））。この *eciutari* は動詞や名詞の直前には来ておらず、「現代アイヌ語」と同様、代名詞としての自立性が確保されている。

(6-12) タンヘ クシユ エツウタレ 子コナ ラムルエ子ヤ
爰に おみて 其方とも 何と 思わるゝや

(チャ : 049 ウ 05-049 ウ 06)

“*tanpe kusu eciutari nekona ramu ru-we ne ya?*”

これ ために 2PL どのように 思う 跡-POSS COP Q

「これゆえに、そなたたちどう思うか？」

eci= は、「現代アイヌ語」で二人称複数を表すが、ここでは二人称単数のような例であり、単複がはっきりしない。(6-13) は娘のおきつに対する与右衛門のセリフである（関係：目

上→目下（複数?）¹⁴。

(6-13) アンベ シヨモ子ヤ エツ ヤエ バレヤ
あるか なゑか そこ 白状 しやれや

(菊 : 037 ウ 07-037 ウ 08)

“*anpe somo ne ya eci=[yay(y)epare] ya(n).*”
事実 NEG COP Q 2PL?.A=白状する IMP
「事実じゃないのかお前白状しなさい」

6. 4. 3. an系：いわゆる「四人称」形式

加賀家文書中に見られる an 系（いわゆる「四人称」形式）は、40 例中 30 例が地の文で用いられ、「現代アイヌ語」と同様、一人称、二人称、不定人称、非人称受動文のマーカ¹⁵としての機能が確認できる。本節ではこれらに加えて、前掲の表 6-2 で「自分」と訳されていた機能について検討する。

	チャ	菊	学
<i>anokay</i>	—	—	—
<i>ani</i>	—	自分の (1)、其方 (1)、自分 (1)	己 (1)、φ (2)
<i>an=</i>	我 (1)、φ (5)	φ (4)	φ (3)
<i>a=</i>	φ (2)	φ (1)	—
<i>=an</i>	φ (7)	φ (7)	φ (2)
<i>i=</i>	—	φ (2)	—

表 6-7 : an 系 (40/64 例)

なお、佐藤 (1999a) は、加賀家文書に *a=* と *an=* の両形式が存在する可能性を指摘しており、本論文でもアイヌ語のカタカナ表記に合わせて、*an=* (アノ、ア子、アン) と *a=* (ア) の両形式をたてた。「アニ」と書かれているものに関しては、「現代アイヌ語」で三人称単数人称代名詞 *ani* という形式が存在することを考慮して別にした¹⁶。

¹⁴ 深澤 (2013) では「お前達」という現代日本語訳をつけて、おきつの恋人である清三も動作主に含めたが、このセリフを言っている場面に清三はいない。二人称単数の用法と見るべきか。

¹⁵ 不定人称から非人称受動文のマーカとしての機能を区別することは、佐藤 (1995b) に依拠する。

¹⁶ 田村 (1971: 265-268) によれば、*an* という存在動詞「ある・いる」(単数形) に *-i* という名詞化辞が付いた形式が *ani* であり、例えばそれに *ku=* という人称接辞が付いたものが *kuani* という一人称の人称代名詞であることが述べられている。つまり、*ani* は三人称のゼロ接辞がつ

6. 4. 3. 1. an 系：一人称のモダリティ的機能

「現代アイヌ語」の *=an* は1項動詞の主語を表すが、加賀家文書では1項動詞につくとは限らず、なかでも一人称の読みができるものはセリフ中に現れる「アンナ」(*=an na*) という形式が圧倒的である。

	チャ	菊	学
<i>=an</i>	φ(4)	φ(4)	—

表 6-8：一人称のモダリティ的機能 (8/40 例)

表 6-9 は *=an* の前後の形式とその内訳であり、このうち *V=an na* の 9 例中、チャ 3 例と菊 4 例、*V=an akaye na* のチャ 1 例が一人称の読みが可能なものである。

	チャ	菊	学
<i>=an na</i>	φ(3)	φ(6)	—
<i>=an te</i>	φ(1)	—	—
<i>=an ko</i>	φ(1)	—	—
<i>=an ayke</i>	φ(1)	—	—
<i>=an akaye (< yak a=ye)</i>	φ(1)	—	—
<i>=an kotom</i>	—	—	φ(1)
<i>=an korka</i>	—	—	φ(1)
<i>ene hawas=an i</i>	—	φ(1)	—

表 6-9：*=an* の内訳 (16/40 例)

(6-14) はオタシュンの旦那が求婚難題に失敗して自らの村に帰り、従者らに対して文句を述べているときのセリフ、(6-15) は清三がおきつに対して最後の別れを伝えるセリフである。

(6-14) タノ ヲクラ ヤエロンノ アンナ

今 晩 自害を するぞ

(チャ：050 オ 03-050 オ 04)

“*tan [ukuran] yayronnu=an na.*”

この 夜 自害する=**AN** DCM

いて三人称人称代名詞になっていると捉えられ、本来はゼロ系として扱うべきところである。しかし、加賀家文書に見られる *ani* は *an=* 系の人称接辞(接語)の意味・機能・語形(カタカナ表記)に似通っており、本論文では *an* 系というラベルのもとで一緒に扱うことにした。

「今晚、我は自害するぞ。」

(6-15) バテキ ウヌカラ サランハ アンナ

是きりの 對めん 暇乞ひ だぞ

(菊 : 039 ウ 09-039 ウ 10)

“*patek u-nukar saranpa=an na*”

ばかり REC-見る さよなら=AN DCM

「これきりの対面でさよならだ。」

(6-16) は、おきつが清三を家から追い出してしまった両親や、神々に対する怒りをひとり呟くセリフである。

(6-16) クワニ ヨシヲシ ウノシバ アンナ

わしも 跡より 追かけ ましよ

(菊 : 043 オ 05-043 オ 06)

“*kuani [uos-uos] u-nospa=an na.*”

1SG 後から-(重複) REC-追う=AN DCM

「私は後から追いかけますよ。」

アイヌ語で人称表現が動詞に後続することは日本語文法と大きく異なる点である。伝蔵自身習得が難しかったであろうことは想像に難くない。(6-14, 6-15, 6-16) のように終助詞の *na* と共に *=an* が用いられる場合は、意志を表すモダリティの一種のように捉えていたかのようにも見える。またそうでなくとも、*=an* を人称接辞ではなく、存在動詞「ある・いる」の *an* と区別なく考えていたという可能性は十分にある(本章 6.3.3.3 節で述べる)。

6. 4. 3. 2. an 系：二人称の機能

二人称の読みが可能なものは8例で、*ani* という形式がうち4例、*an=* が3例、*a=* が1例である。「現代アイヌ語」で「四人称」は二人称敬称の機能をもつとされるが、加賀家文書の用例を見る限り目上から目下に対するものばかりで、敬称とは必ずしも言い難い。二人称単数を表す *e* 系や二人称複数を表す *eci* 系との使い分けは不明。

「学」は教訓書という性質から「あなたたち(読者)は～するものだ」という二人称の読みが可能であるが、それは同時に「人は～するものである」というような不定人称の読み、「～されるものだ」という受動態の読み、「我々は～するものである」という一人称(包括形)の読みも可能であり、判然としないところがある。本論文では、終助詞の *na* 「～よ」が多用されるという観点から聞き手(読者)指向であることを考慮して二人称の読みでカ

ウントした（全8例中5例が「学」による）。

	チャ	菊	学
<i>ani</i>	—	其方 (1)	己 (1)、φ (2)
<i>an=</i>	φ (1)	—	φ (2)
<i>a=</i>	φ (1)	—	—

表 6-10：二人称の機能（8/40 例）

(6-17) は、清三を家から追い出す場面で述べた与右衛門のセリフである（関係：目上→目下（単数））。

(6-17) アニツセ ヲレ子 カンビ シカマレ

其方 内へも 書状を 差添ひ遣ス

（菊：039 ウ 05-039 ウ 08）

“*ani cise or ene kampi sikamare.*”

4(2SG) 家 ところ,LOCR ALL 書状 納める?

「そなたの家へ書状をのちにやる。」

(6-18) は、オタシュンの旦那（と娘）に出した求婚難題に関する沼辺の旦那のセリフである（関係：（難題を出す立場として）目上→目下（複数））。

(6-18) メノコ トラノ ヲラウイワ ヲヤトベツ チヤワ アントツカ ツキ

娘と ともに 水の底くぐりて 脇沼の 端江 一双ニ出るならハ

（チャ：047 オ 05-047 オ 06）

“*menoko tura-no [orawe] wa oya to petca wa*

女 連れる-ADV くぐる て 別の 湖 岸 から

an=tuk-ka ciki...”

4.A(2PL)=突き出る-CAUS れば

「娘と一緒に沼の底をくぐって、（お前たちが）もう一方の沼岸から出れば…」

(6-19) は、ふたつの村の戦を止める際に述べた山中村の旦那のセリフである（関係：目上→目下（複数））。

(6-19) クワニ ウカシユワ アコタン トエバレクンナ

此方 加勢して 其剛勢村の者皆殺するぞ

（チャ：053 オ 07-053 オ 08）

“*kuani [u-kasuy] wa a=kotan tuypa-re kun na.*”
1SG REC-助ける て **4.A(2PL)=村** 切る:PL-CAUS べき DCM
 「私が加勢してあなたたちの村を皆切らせるぞ。」

6. 4. 3. 3. **an** 系：不定人称の機能／存在動詞

加賀家文書の三種のテキスト中において不定人称の機能をもつものは *=an* という形式のみで、全て地の文で用いられる。「現代アイヌ語」には自動詞につく *=an* だけでなく、他動詞につく *a(n)=* という形式もみられる。

	チャ	菊	学
=an	—	φ (1)	φ (2)

表 6-11：不定人称の機能 (3/40 例)

Tamura (1970) で既に指摘されているが、自動詞人称接語の *=an* が不定人称用法となる例は、存在動詞 *an* 「ある・いる」と区別がつかなくなってしまうので、全ての例は存在動詞とも考えられる。つまり、(6-20) を不定人称 *=an* として解釈した場合、「(人が) 比べ合えば」となるが、存在動詞 *an* と考えた場合、*upakte* が主語（自動詞からの転成名詞「比べ合うこと」や「比べ合い」となり、全体として「比べ合うことがあれば」と解釈できる。

(6-20) エラマ シリルエ ウハクテ/ウバクテ アンナ
 うつくしゑものに くらべて 見れば

(菊：034 ウ 07-034 ウ 08)

[*erasasiri*] *ru-we upakte=an na*
 美しい 跡-POSS 比べ合う=AN れば?
 美しいことに比べれば

6. 4. 3. 4. **an** 系：非人称受動文のマーカ―としての機能

非人称受動文のマーカ―としての機能を持つ例は、本章 6.4.3.5 節で述べる「客体的自己」の用例を認める限りにおいて、チャ 1 例以外はそれとの境界が不明瞭である。また、先に述べたように「学」の例は判定が難しく、受動文の読みでも自然なことが多い。

	チャ	菊	学
an=	φ (1)	—	—

表 6-12：非人称受動文のマーカ―としての機能 (1/40 例)

(6-21) は動作主が斜格として降格し、*oro wano* によって明示される受動態の例である。

(6-21)カモイ ヲロワノ/ヲロワ カトアンカラ ナンカテ メノコ 子—クシユ
神々 より 姿拵呉たる 美人の 娘に 候ところ

(チャ : 046 オ 07-046 オ 08)

kamuy or-o wa-no kat-u an=kar [nankante]

神 ところ.LOCR-PART ABL-ADV 姿-POSS 4.P=つくる 美しい

menoko ne kusu

女 COP ので

神々によってその姿がつくられた美しい娘であるので

6. 4. 3. 5. an 系：「客体的自己」としての機能

アイヌ語の人称接辞（・接語）は義務的なものであって、「現代アイヌ語」においてゼロの場合は必ず三人称を表す（表 6-1）。しかし、日本語にはこのような文法項目がないうえに、代名詞も義務的ではない *pro* 脱落言語であるため、単に脱落させてしまったと考えられる場合が多い。よって、伝蔵のアイヌ語はゼロが有標とはならないため、ここでは調査対象から外している。その代りと言うべきか、三人称に歩み寄るような「客体的自己 (Objective Self)」としての用例が *an* 系に見出される。

「客体的自己 (Objective Self)」というのは、日本語の代名詞「自分」に対する廣瀬 (2005, Hirose 2014 など) の用語である。それによると「客体的自己」は「主体としての話し手から切り離されて他者と同じ側におかれる自己」であり、「話し手と他者の間」に位置づくものとされている。

(6-22) 話し手¹⁷ > 客体的自己 > 他者

(廣瀬 2005: 61)

(6-23) は日本語の「自分」に対する三つの用法である。(6-23a) の話者指示的用法は引用節の内側に生じる「自分」であり、(6-23b, c) は引用節の外側に生じる「自分」である。また、(6-23b) は「自分」と同じ位置に他者を表す言葉（ここでは「彼」）が来るともできるが、(6-23c) はそれができない。

¹⁷ 廣瀬 (2005) では、話し手は私的自己と公的自己に解体して説明され、さらに「私的自己 (自分 1) > 公的自己 (ぼく・わたし) > 客体的自己 (自分 2) > 他者 (彼・彼女)」という視点階層がもたらされている。

- (6-23) a. 秋男_i は、自分が頑固だと言っている／思っている。
 (話者指示的用法)
 b. 秋男_i は、{自分／彼_i} が友達から借りた本をなくした。(視点的用法)
 c. 秋男_i は、{自分／*彼_i} を批判した。(再帰的用法)

(Hirose 2014: 101 ; 引用の際に体裁を改めた)

「客体的自己」とは、(6-23b) のような「視点的用法」の「自分」で表される自己のことを言う。廣瀬 (2005: 59) は、この視点的用法について、「それ【=「自分」】を含む節が記述する出来事をその指示対称である人の視点から話し手が記述していることを表す」ものと述べている。これに関連して、(6-23b) では、なくした本が友達から借りたものということ、秋男自身は認識していなくても良いが、話者指示的な (6-23a) では「自分」を含む節の内容（「頑固であること」）をその指示対称（「秋男」）が認識していなければならないということがある。

もうひとつ具体例を見てみたい。廣瀬 (2005: 60-61) によると、(6-24a) は「夢の中に話し手自身の分身が登場し、話し手はその自分を見てさびしがっていると思った」ということで、夢を見ている主体から切り離された「自分」である。一方、(6-24b) は、「夢を見ている主体としての話し手が夢の中でさびしいと思った」ということで、「自分」は夢を見ている主体の側にある。もし、(6-24a) で「秋男」とした場合は、「他者である秋男に客体的自己を投影することで、秋男を自分に近づけている」ということになる。

- (6-24) a. ぼくは {自分／秋男} がさびしがっている夢を見た。(視点的用法)
 b. ぼくは {自分／*秋男} がさびしかった夢を見た。(再帰的用法)

廣瀬 (2005: 65) や Hirose (2014: 101) によれば、日本語の「自分」の意味は、自己の客体化や他者化によって話者指示的な用法から視点的用法や再帰的な用法へと派生していると考えられる。表 6-2 で見たように、加賀家文書の語彙集類では *ani* に「自分」という訳語が用いられ、テキスト中においても「自分」が 2 例、「我」が 1 例見られる¹⁸。アイヌ語に話を戻すと、「現代アイヌ語」においても、*an* 系には (6-23a) のような「話者指示的用法」が報告されているが¹⁹、(6-23b, c) や (6-23a, b) のような「視点的用法」や「再帰的用法」の報告はない。しかし、加賀家文書のテキスト三種を確認すると、この「視点的用法」として解釈するのが適切だと思われる例が非常に多いのがわかる。

¹⁸ Hirose (2014) によれば、日本語でも『源氏物語』に「我」や「己」が視点的用法として扱われている例があるが、その後、現代日本語では「再帰用法」が残ったとしている。

¹⁹ 田村 (1972) の「引用の一人称」、Bugueva (2008) の“logophoric”、中川(2011) の「叙述者の一人称」がこれにあたる。

	チャ	菊	学
<i>ani</i>	—	自分 (2)	—
<i>=an</i>	φ (3)	φ (2)	—
<i>an=</i>	φ (3)、我 (1)	φ (4)	φ (1)
<i>a=</i>	φ (1)	φ (1)	—
<i>i=</i>	—	φ (2)	—

表 6-13 : 「客体自己」(視点的用法の「自分」)としての機能 (20/40 例)

「客体的自己」(視点的用法の「自分」)の読みができるものは、受動文との境が決め難いものも含めると *an* 系全 40 例中 20 例にのぼる(表 6-13)。全て地の文で用いられており、特定の人と照応関係をもつ。また、一人称や不定人称の機能で述べたような言語形式の偏りは見られない。すべて他者を表す「彼」などの言葉と置き換えが可能であるので「再帰的用法」とは言えない。

(6-25) は清三(とおきつ)が証文において約束を交わす場面であり、*ani* は清三と考えられる。

(6-25) アニレ ノエカタ ケムバン ヲマレ

自分の 名書た上サ 血判 おして

(菊 : 036 ウ 09-036 ウ 10)

ani re nuye ka ta kemban oma-re
 4(SELF) 名前:POSS 書く 上.LOCR LOC 血判 入る-CAUS
 自分の名を書いた上に血判を入れた

(6-26) は求婚難題に失敗して自分の村に帰る場面で、*an=* が示すのはオタシュンの旦那である。それとの一致と考えれば、*hosippa=an* の *=an* もオタシュンの旦那を指すことになる。

(6-26) アン コタンタ ホシツバ アンテ

我所_江 かへ りて

(チャ : 049 オ 01-049 オ 02)

an=kotan ta hosippa=an te
 4(SELF).A=村:POSS? LOC 帰る:PL=AN て
 自分の村に帰って

(6-27) は与右衛門夫妻が孫たちを抱いて可愛がる場面である。*a=* と *ani* が示すのは与右衛

門である。

(6-27)アマツ クワナツ アニ ヲッカ イボ トベニ ウシヤラエ
内室 女孫 自分 男孫 貳人 とりわけ

(菊 : 044 ウ 07-044 ウ 10)

a=maci *kanaci* *ani* *okkay-po* *tupene* *usaraye*
4(SELF).A=妻:POSS 女の子 4(SELF) 男-DIM 二人で わける
自分の妻は女の子を、自分は男の子を二人でわけて

(6-28) は、「四人称」形式が他動詞の目的語を表す場合である。動作主は与右衛門夫妻、*i=* が照応しているのは娘のおきつである。

(6-28)チウコ テンコロ イエカラ カルワ
手玉に とりて 寵愛 なさる

(菊 : 034 ウ 01-034 ウ 02)

ci-u-ko-temkor *i=ekarkar* *wa*
MID-REC-に.APPL-抱える 4(SELF).O=する て
娘を抱きかかえて

なお、この機能は「学」で 1 例しか確認できず、テキストのジャンルによって偏りが見られる²⁰。三種のテキスト全てにおいて叙述者は特定されないため²¹、物語全体が引用文であり、その叙述者と照応関係をもつ「自分」であるから「話者視点的用法」²² であるという説明も今のところ不可能である。今後は、テキストの種類・量を増やしたうえで用例を整理していくことが課題である。

6. 5. まとめ

本章では、蝦夷通辞の文法観について考察するために、日本語母語話者にとって習得が難しいものの一つであると考えられる人称表現について調査した。まず、6.2 節で「現代アイヌ語」の人称表現について確認し、そのうえで 6.3 節で加賀家文書の語彙集 3 種、6.4 節

²⁰ 「菊」11 例（照応：おきつ 5 例、与右衛門 6 例）、「チャ」8 例（照応：オタシユンの従者 4 例、オタシユンの旦那 3 例、沼辺の村の人々 1 例）、「学」1 例（照応：貴賤 1 例）である。

²¹ 「菊」の原歌「お吉清三」口説によれば叙述者は歌い手である。

²² 実際、田村 (1972: 27) は、物語全体が引用句をなしているために「引用の一人称」を用いると説明している。同様に、中川 (2011: 28) は「散文説話や英雄叙事詩の叙述者＝主人公の人称は、視点がそこにおかれているという点で二人称者でも三人称者でもないが、語り手自身ではないので、一人称者でもない。それを示すために、ク【=ku 系】ではなくア【=a 系】が用いられるのだと考えられる。これを「叙述者の一人称」と呼んでおく」と述べている。

で加賀家文書のテキスト 3 種に現れる人称表現の種類と機能について確認した。まとめると以下の表 6-14 のようになる。括弧内はテキスト中の用例数を示しており、用例数が無くても語彙集に確認できる場合は語形を示した。「?」については「未確認」であることを示す。

人称表現や その他の機能	系	代名詞	接辞・接語	
			主格	目的格
1 人称単数	ku 系 (11)	kuani (2)	ku= (7)	en= (1) 受動: enci= (1)
1 人称複数 (除外形)?	ci 系 (8)	ciutari (1), ciokay (3)	ci= (4)	?
1 人称複数 (包括形)	?	?	?	?
2 人称単数	e 系 (2)	eani (0)	e= (2)	?
2 人称複数?	eci 系 (3)	eciutari (1), eciokay (0)	eci= (2)	?
2 人称単数・複数	an 系 (40)	ani (4), anokay (0)	a(n)= (4)	?
客体的自己		ani (2)	a(n)= (11), =an (5)	i= (2)
非人称受動態マーカー			a(n)= (1)	
1 人称/モダリティ?			=an (8)	
不定人称/存在動詞		?	=an/ an (3)	?

表 6-14 : 加賀家文書における人称表現

そもそも加賀伝蔵という人の文法観を炙り出すことに何の意味があるのかと考える人も少なくないかもしれない。しかし、蝦夷通辞のアイヌ語テキストには全て和訳がついているとは限らず、それらを読み解いていくうえでも蝦夷通辞が持っていた文法観をまとめることは有用である。本節の人称表現に関して言えば、an 系において「客体的自己」のような用法が生じた背景には、日本語の「自分」という代名詞による母語干渉が関わっている可能性が考えられる。とはいえ、現代アイヌ語においても、an 系の人称表現に日本語の「自分」が訳語としてぴったり当てはまることがあり、用法として重なり合う部分があることもまた事実である。母語干渉なのか、あるいはアイヌ語の本質的な部分なのかは今後の検討課題であるが、アイヌ語の an 系 (いわゆる「四人称」) を、日本語の「自分」という代名詞と対照的に捉えること自体は、アイヌ語の人称体系を理解するうえで多分に示唆的なものであり、今後の研究につながるものと考えている。

第7章 まとめ

第1部では文献学的研究と題し、主な資料として、北海道別海町郷土資料館・加賀家文書館に保管されている加賀家文書を用い、そこに記されるアイヌ語の研究を中心に行った。第1章であげた研究課題は以下の4点であった。

- ①資料整備上の問題
- ②音素表記への取り組み
- ③テキストの内容・由来に関する調査
- ④アイヌ語の方言・歴史的研究

第2章では、「①資料整備上の問題」に関わって加賀家文書の資料的背景と先行研究、執筆者である加賀伝蔵の生い立ちや蝦夷通辞という職業などについてまとめた。第3章では、「②音素表記への取り組み」のためにアイヌ語カタカナ表記法の整理を試みた。推定される形にはいくつかの選択肢があるので、隣接する方言などの様々な情報をもとに判断した形を「推定形」と呼んだ。この章のはじめで現代のアイヌ語表記法についても触れ、アイヌ語カタカナ表記からアイヌ語の音素を推定する困難さについても論じた。

第4章では第3章で提示した推定形をもとに「④アイヌ語の方言・歴史的研究」に関連して、近世資料を方言資料として活用する方法を提案した。加賀家文書は語彙的にも明らかに北海道東部方言の特徴を有しているが、当然のことながら、ただ写しただけではなくオリジナル性が高い類本のほうが方言的特徴が反映されている。上原熊次郎が著した日本語・アイヌ語辞典『藻汐草』は、加賀家文書以外にも写本と類本が数多く残されており、そうした写本・類本の位置づけと方言資料としての活用可能性についても論じた。

第5章では、「③テキストの内容・由来に関する調査」を行い、「翻訳」という視点から、日本語の母語干渉や借用語・造語について調査し論じた。日本の口説をもとにアイヌ語訳された「菊のかんざしみだれ髪」は、もとの日本語の口説と同様の音数（モーラ数）が保たれるように工夫されている。日本の資料がもとになっている場合、アイヌ語にはない表現を用いなければならないことが多いが、日本語からの音訳借用のようなものも現代アイヌ語にまで残っているような定着度の高いものも多く、むやみやたらに借用やコードスイッチングを起こしてはいない。また、翻訳借用には「陸奥」が「道奥」として訳されたり、「千島」が「千の国」と訳されたりと、よく考えられているものが多い。日本に伝わっている教訓書のアイヌ語訳「学校往来夷解書」については、推敲されていくなかで直訳から意訳へという変化が確認され、適切なよりよいアイヌ語にしようという力が働いているのがわかる。なお、この章では述べなかったが、アイヌの口承文芸の記録「チャコルベ」は、

日本語には存在しない普通名詞と位置名詞の違いについて相対的にエラーが少ない資料である。テキスト同士の比較というのも今後必要になってくるものと思われる。

続いて第6章では、日本語母語話者にとって習得困難であると考えられるアイヌ語の人称表現について、加賀家文書の語彙集とテキストから用法の整理を行った。「学校往来夷解書」については、セリフ文がないことから使用される人称表現に制限が見られ、いわゆる「四人称」を表す *an* 系の語類に関しては、日本語の「自分」という訳語を当てていることで、一人称と三人称のあいだをとる用法（本論文では「客体的自己」という用語を採用した）を獲得していた。*an* 系は同形で様々な用法があることで知られており、他言語を母語とする話者にとってもっとも捉えにくい人称形である。「自分」という訳語が当てはまる理由には、日本語の「自分」という代名詞にも様々な用法があり、*an* 系とも重なるところが多いからだと考えられる。現代アイヌ語の研究に一石を投げ得るものだと考える。

以降の第2部の事例研究は、加賀家文書の資料に見られた方言的特徴をひとつの情報とし、言語地理学の手法をもとにしたアイヌ語の歴史的研究である。第8章では、第4章でも触れた「父」と「母」に関する語彙の地理的分布から、その歴史の変遷を考察する。さらに、加賀家文書中に見られる方言的な特徴や情報を反映しつつ、第9章では疑問詞と不定代名詞の研究、第10章では疑似的な音対応として *pa* と *ca* の方言分布に関して考察する。

第 2 部

事例研究

—加賀家文書を方言資料として活用する—

第8章 親族語彙

— 「父」と「母」

8. 1. はじめに

アイヌ語で「父」と「母」を表す語は方言差が大きく、呼称語 (address term) として使用されるか、言及語 (reference term) として使用されるかという点からも、いくつか考えるべき事柄がある。根室の資料である加賀家文書のなかでは、「母」は *hapo* と *onneke* という二つの語形が確認できるのに対し、「父」を表す語彙も *mici* と *aca* の二つの語形があり、それぞれ *hapo* と *mici*、あるいは *onneke* と *aca* のペアになって出て来る。これらは現代アイヌ語の隣接方言の報告から推測するに、前者は呼称語などとして使用され、後者は言及語（「母親」や「父親」に相当）として使用される傾向にあると考えられる。

なお、*hapo* と *mici* のペアは北海道に広く見られる分布であるが、もう一方の *onneke* と *aca* のペアについて言えば、*onneke* は北東方言のなかでも限られた地域でしか報告のない非常に稀な語形であって、*aca* は北海道の周縁部に位置する語形であるということが確認された。言語地理学の考え方では、*aca* のような周縁部に位置する語形はその内部にある語形よりも古いということが推測される。また、*onneke* のように隣接する地域に限定される語形が加賀家文書に含まれるのは、それが方言形であることを示しているとも言える。

本章では、言語地理学的手法を用いて加賀家文書に使用される語彙が、根室方言を反映しているのか、あるいは、アイヌ語のなかでもより古い語形を反映しているのかということを検討しつつ、アイヌ語全体のなかで「父」と「母」を表す語彙がたどった歴史について考察する。なお本論文では、呼称語と言及語の両方を指すか、問題にしない場合に、「父」や「母」という語を用い、区別の必要に応じて「お父さん」と「お母さん」を呼称語、「父親」と「母親」を言及語の和訳として用いる。日本語（東京方言）には、これらの語に呼称語と言及語の区別があるが、ここでの和訳はあくまで用語として使用するので、日本語の事実を反映したものではない。

8. 2. 先行研究

中川 (1996) は、アイヌ語の言語地理学的研究を初めて本格的に行った研究であり、本論文では、そこで提示されている分布の型とその歴史的解釈を基盤にしながら、アイヌ語の「父」と「母」に関する親族語彙について調査していく。中川 (1996) では、服部・知里 (1960) と服部 (編) (1964) のデータをもとに 8 枚の地図が示され、その分布パターンが次

の8タイプに分類されている。本論文でも「樺太型」を除いて具体的にとりあげているので、それぞれのパターンに関する説明は省略し、該当する章を示しておく。

1. 「東西型」 (本章および第10章)
2. 「ABA型」 (第9章)
3. 「樺太型」¹
4. 「樺太・千島型」 (第4章4.5.2節、図4-1「星」の分布)
5. 「沙流・千歳型」 (本章および第9章)
6. 「沙流・千歳・樺太型」 (第9章)
7. 「東蝦夷型」 (本章)
8. 「西蝦夷型」 (本章)

さらに、中川 (1996) では8つの分布パターン相互の歴史的な関係について、山田 (1982) のアイヌ語地名研究を参照しつつ論じている。山田 (1982) は、「東」と「西」を表す「コイカ」(*koyka*) や「コイポク」(*koypok*)² がつく地名に関して調査を行い、その分布を図8-1のように表している。

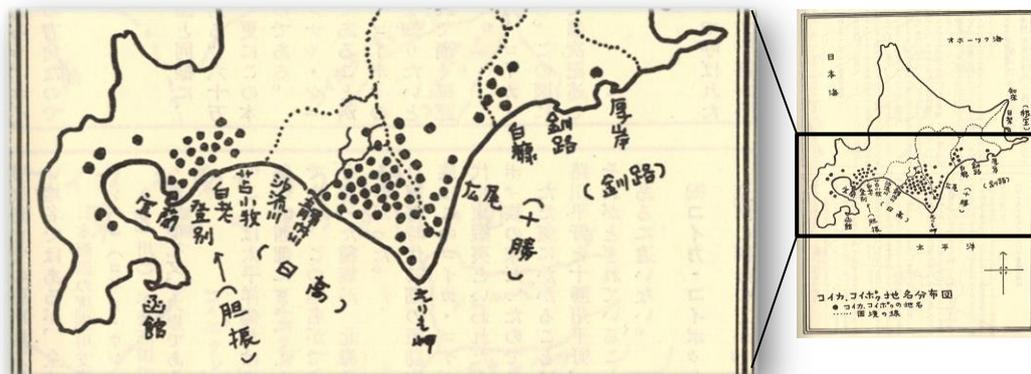


図8-1: 「コイカ」や「コイポク」がつく地名の分布 (山田 1982: 306)

山田 (1982) は、北海道の太平洋沿岸地域に住むアイヌのグループを「太平洋種族」と呼び、その太平洋種族が「コイカ」と「コイポク」を地名に使用した人々だったと考えた。また、

¹ 中川 (1996) では「樺太型」の分布例として「根っこ」という語形をとりあげ、北海道の大部分と千島で *sinrit* 類、樺太と北海道北部にのみ *cinkew* 類が用いられるとしている。

² 分析的には、「コイカ」(*koyka*) は「<koy 波・ka の上」、 「コイポク」(*koypok*) は「<koy 波・pok の下」である。山田 (1982: 305-309) は、「コイカ」が千島海流 (親潮) の海波の上の方角、「コイポク」は海波の下の方角に由来し、それぞれ「東」と「西」を指すようになったと考察している。

図 8-1 を見ると、日高西部と胆振の東端の間にある沙流川流域の地域³ が空白になっているのがはっきりとわかる。ここだけ「コイカ」や「コイポク」がつく地名が使われていない理由について山田 (1982) は、シュムンクル (*Sumunkur*) —日本語で「西の人」— という地域集団がどこからか太平洋岸に進出してきたことで、それらの地名を上書きしていったからであろうと推測している。つまり、シュムンクルは「コイカ」や「コイポク」という名付けの規則を持たない人々であったということである。中川 (1996) では、その時期に生じたのが「沙流・千歳型」であるとしている。

さらに、このシュムンクルは東側の地域グループであったメナスンクル (*Menasunkur*) —日本語で「東の人」— と拮抗する関係にあった。1669 年のシャクシャイン戦争は、そもそもこのシュムンクルとメナスンクルの対立が発端で、その境界は沙流川より東にある静内川に引ける。中川 (1996) は、この二つのグループが衝突していた時代に形成されたのが「東西型」であると言う。

しかしながら、シャクシャイン戦争が和人对アイヌという構図になっていくにつれて、シュムンクル対メナスンクルという対立もやがて緩やかなものになり、二つのグループの間に婚姻関係を結ぶようになってきた。そこで生まれたのが、本節で *mici* 「父」の分布を代表とする「東蝦夷型」であると中川 (1996) は指摘する。

「父」と「母」の語彙は中川 (1996) の「西蝦夷型」と「東蝦夷型」で説明され、その分布と歴史はかなりの部分が検討されており、それ以上の推測は困難を極めると言ってもよい。とはいえ、アイヌ語の親族語彙は、ひとつの方言のなかにも細かな使い分けがあり、実はよくわかっていないことも多い。

例えば、佐藤 (1991) はアイヌ語千歳方言における自称詞と対称詞⁴ について調べているが、父母や祖父母などの親族名称が、多くの場合、そのまま呼格的対称詞 (本章でいうところの「呼称語」相当) として用いることができることを報告している。しかし、そこには相互の年齢層によるある種の制限があり、自己より年齢が上であれば親族語彙をそのまま (所有者の人称接辞を伴わずに) 呼格的対称詞として用いることが可能だが、下の場合は不可であると指摘する⁵。目下に対しては、別な手段 (例えば、名前 (日本名)) で呼ぶことになるそうである。「兄」や「姉」は呼格的対称詞として用いることができるが、所有者を表す人称接辞をとらなければならぬ (佐藤 1991 [2001: 31-33])。

さらに、この千歳方言では、子供中心の対称詞は用いられず、夫が妻に対して *totto* 「母さん」などと呼ぶことはないと報告されている (佐藤 1991 [2001: 33])。自称詞に関して

³ 章末掲載の図 8-2 で言うと、福満 [4]、貫気別 [5]、新冠 [6]、鷓川 [17] (数字は図 8-2 の地点番号に対応している)。

⁴ 鈴木 (1973) が日本語の分析において取り入れたもので、自称詞は話し手が自分自身に言及することばの総称、対称詞は話し相手に言及することばの総称と定義される (佐藤 1991[2001: 27])。

⁵ 沙流方言ではこれが可能である。田村 (1988 [1997: 22]) では、女性から弟に呼び掛けるという文脈をもった例文で *k=ak-ih* (1SG.A=弟-POSS) 「(私の) 弟 (よ)」という例が見られる。(実際は “*akiki*” となっているが、*akih* の誤りであろう。)

は、暫定的な報告として、*ekasi*「おじいさん」、*huci*「おばあさん」、*hapo*「おとうさん」、*totto*「おかあさん」、*acapo*「おじさん」、*unape*「おばさん」などが自称詞用法を有し、「兄」や「姉」にあたる親族名称は自称詞として用いることができないとしている（佐藤 1991 [2001: 32]）。

「呼格」ではないもの（本章でいうところの「言及語」）についても報告がある。服部（編）（1964）では *ona* 「父」というのが幌別でそれを表す雅語、沙流方言で「父親」として記録され、ほかにも旭川や名寄、樺太（ライチシカ）方言でこの語形が記載されている。*ona* とペアになって用いられる *unu* 「母」も全く同様の報告があり、後に見るようにどちらの語も呼びかけには使われない。

田村（2000）にも呼称語や言及語に関わる説明がある。田村（2000）は、沙流方言での「父」と「母」を表すいろいろな語の頻度についてジャンル別に調べたものである（表 8-1）。

	日常 会話	単語 リスト	会話/ 独話 ⁶	昔話 ⁷	歌謡	神謡	叙事詩
<i>ona(ha)</i> 父親	+	1	0	135	0	0	4
<i>unu(hu)</i> 母親	+	1	0	65	0	1	1
<i>míci</i> おとうさん	+	1	0	2	0	0	0
<i>iyapo</i> おとうさん	+	3	0	0	0	0	0
<i>hápo</i> おかあさん	+	3	1	2	0	0	0
<i>aynu</i> おとうちゃん	－	0	0	0	1	0	0
<i>totto</i> おかあちゃん	－	0	0	1	0	2	0
合計		9	1	205	1	3	5

表 8-1：田村(2000) による「父」と「母」を表す語彙の頻度調査

表 8-1 の中で「日常会話」のみ田村氏が聞いた頻度（記憶）であり、「+」が「しばしば聞いた」、「－」が「聞かなかった」ということである。それ以外については、田村（編）（1984-2000）『アイヌ語音声資料』1-12 巻⁸（早稲田大学語学研究所）の用例数が示されている。表 8-1 に関する田村（2000: 57-58）の説明をまとめると、以下のようになる。

- ・ *ona(ha)* と *unu(hu)* は呼びかけには使われず、大人どうしで第三者として言及するときに使われる。ただし、昔話の中では呼びかけにも使われている。大人の言い方。それ以外の線から下の語は、すべて呼びかけにも第三者としての言及にも使われる。

⁶ 『アイヌ語音声資料』1 の「会話」と、他の間にとりどころでてくる会話の断片や独話（スピーチや言い伝えなど）（田村 2000: 56）。

⁷ *uepeker* 「散文説話」と節をつけない神謡もここに含まれている（田村 2000: 56）。

⁸ 第 10 巻は田中聖子氏と共編。

- *míci*, *iyapo*, *hápo* は親愛感を伴った言い方で、子どもは第三者の言及として言及するときでもほとんどいつもこれらを使う。昔話の用例は、すべて子どもの言葉の引用で使われている。
- *totto* は子どもの言葉で《おかあちゃん》を表すと話者から聞いていたが *aynu* については、とくに「子どもの言葉」だとは聞いていなかった。*aynu* が出てきたのは歌謡（子守唄）のくだけりである。神謡の中の *totto* の2例は、母親を狼に殺されて、おっぱいもらえず困り果てた小犬たちが天の神様に訴える場面である。

さらに、「言及語」としての性質をもつ *ona* や *unu* という語形の分布域は、報告にやや問題がある。例えば、知里 (1954 [1975]) によれば、*ona* 「父」は北海道と樺太全域に広がる語であるとされているが、澤井 (2001) は、本別や帯広の方言としてこれらの語の存在を報告していない。つまり、*ona* や *unu* という語に関しては、知里 (1954 [1975]) の報告を再度ほかの文献から検証し、実際に使用されているかどうかの確認が必要となる。ちなみに、中川 (1996) が示す「父」と「母」の語形分布は、本章でいうところの「呼称語」にあたるので、「言及語」の *ona* と *unu* は扱われていない。

以上のような先行研究の報告やその問題を踏まえ、「父」と「母」を示す語が呼称語と言及語の別を持っている場合には、それぞれに分布を見て行く必要があるという考えのもと、次節より「父」と「母」に関する調査を進めていくことにする。

8. 3. 調査方法・資料

調査方法は、後に示す調査資料をもとに文献学的に行う。呼称語と言及語の別については、テキストですべて確認することは不可能に近いため、本節では、これら二つの用語を少し広げて (8-1) のように捉えることにする。

(8-1) 呼称語と言及語の判定

呼称語：

- ①呼びかけに用いることができる。
- ②「お父さん」や「お母さん」という訳語を用いている。
- ③服部（編）(1964) において雅語や敬称などという特記事項が確認されない。
- ④言及語として報告されているものに加えて、さらに別の語形として現れている。

言及語：

- ①呼びかけに用いられない、または、主に呼びかけには用いない。
- ②「父親」や「母親」という訳語を用いている。
- ③服部（編）(1964) において雅語や敬称などという特記事項が確認される。

上記に関しては、「父」と「母」がどのようなペアで用いられるのかということも考慮する。例えば、澤井・田村 (2005: 144) では「両親」という見出し項目に (8-2) のような例をあげている (グロスは深澤による)。

(8-2) *mici-hi* *usa* *hapo-ho* *usa* *iwanke* *okay* *ya?*
 父-POSS:3.A も 母-POSS:3.A も 元気で いる PL:3.S Q
 「御両親 オ元気デスカ。」 (帯広)

アイヌ語では「両親」を表す形式について、(8-3) の5種の形式が確認できる (アイヌ語の用例は、本別方言のみ澤井 (2006)、そのほかは服部 (編) (1964) による)。(8-2) のような事例は、(8-3) の3番に分類され、このタイプは「父」と「母」のペアをよく反映していると考えられる。

(8-3) 「両親」を表す形式：

1. 「先祖・親 (たち)」という形式：*sinrit utar* (八雲、名寄)、*sinrit, -ihi* (旭川)、*epuyke utar, -i* (福満)、*ouske utar* (名寄)、*uhekota cinkew utarikehe* (ライチシカ)。
2. 「父親たち」という形式：*ona utar, -i* (福満)
3. 「父と母」という形式：*hapo acapo* (八雲)、*acaha hapoho* (宗谷)
4. 「祖父と祖母 (敬称)」という形式：*totto ekasi totto hutci* (八雲)
5. 「大きい人々」という形式：*rupne utar* (本別)

ただし、(8-2) のような例も、実際は「(〇〇さんの) お父さんもお母さんも元気ですか？」という日本語が可能のように、これだけでは言及語と呼称語のいずれなのか区別しにくいのが実情である⁹。そのうえ、田村 (2000: 58) が指摘しているように、「ジャンルによって、またさらに同じジャンルでも語る状況や聞かせる相手によっても、使われる語彙が異なることもあり、「昔話が日常語で語られていても、昔話と会話とでは、そっくり同じではない部分もあり得る」。このような様々な困難さがあるなかで、本節では服部・知里 (1960) や服部 (編) (1964) の語彙データをベースに用い、(口承文芸テキストではなく概ね語彙調査の範囲に収束するが) 話者による詳細な用法などの情報をその他の資料で補完し、できる限り広範囲に調べることにする (方言調査のための文献に関しては、第2章 2.4.4 節も参照のこと)。

本章で使用する資料と方言の対応については、表 8-2 の通りである。

⁹ 「御両親」という訳語が使われているという点を考慮すれば、どちらも言及語として考えてもいいかもしれない。

方言	資料
【北海道】長万部、貫気別、新冠 【樺太】落帆、多蘭泊、真岡、白浦、内路	服部・知里 (1960)
【北海道】八雲、幌別、美幌、名寄、宗谷 【樺太】ライチシカ	服部・知里 (1960)、服部 (編) (1964)
【北海道】旭川	服部・知里 (1960)、服部 (編) (1964)、 Asai (1974)、太田 (2005)
【北海道】釧路	服部・知里 (1960)、Asai (1974)、松本 他 (編) (2004)
【北海道】根室	加賀家文書 (1800 年代)、金沢家文書 (推定 1800 年代)
【北海道】静内	奥田 (1999)
【北海道】千歳	Asai (1974)、中川 (1995)
【北海道】帯広	服部・知里 (1960)、Asai (1974)、澤井 (2001)、澤井・田村 (2005)
【北海道】福満 (平取)	服部・知里 (1960)、服部 (編) (1964)、 田村 (1996)
【北海道】本別	澤井 (2001, 2006)
【北海道】鶴川	中川 (編) (2014-2016)
【北海道】様似	服部・知里 (1960)、小松 (編) (2004)
【北千島】シュムシュ	鳥居 (1903)、村山 (1971)

表 8-2 : アイヌ語方言調査に用いた資料

北海道の最東端に位置する根室方言に関しては、19 世紀の資料である加賀家文書に加え、同じく根室地方の資料と考えられる金沢家文書を参考にした。具体的には、本論文の第 4 章で紹介した上原熊次郎 (1972) 『藻汐草』の写本と類本を用いている。さらに、第 5 章で紹介した「菊のかんざしみだれ髪」のテキスト中での用いられ方にも注目する。

表 8-2 で示した資料のほかに、必要な場合に応じて知里 (1954 [1975]) 『分類アイヌ語辞典人間編』を参照しつつ語彙を検討する。これは Asai (1974) が基礎語彙をクラスター分析にかける際にも行っていた方法である。また、北海道教育委員会が 1982 年から年に一度刊行してきた『アイヌ民俗文化財調査報告書』(通称「青本」)も参考にした。

なお、地点と地点番号および「父」と「母」の言語地図については章末に掲載する。地名の後ろの「[14]」などの数字については、章末図 8-2 の地点番号と一致する。

8. 4. 「父」と「母」を表す親族語彙

8. 4. 1. 近世文書にみる「父」と「母」

第4章で概観したが、江戸時代の辞典・語彙集類に関しても「父」と「母」の項目には様々な語彙が記載される。以下は第4章の再掲で、日本語・アイヌ語辞典である上原熊次郎(1972)『藻汐草』とその写本(②)と類本(③、④)である(波線部は字消しを意味し、ローマ字転写は深澤による)。

(8-4)『藻汐草』とその写本と類本に記載される「父」と「母」

①上原熊次郎『藻汐草』

父	ハンベ▲ミチ▲アチャ	<i>hampe / mici / aca</i>
母	ハボ	<i>hapo</i>

②加賀家文書「藻汐草 [写]」

父	ハンベ○ミチ○アチャ	<i>hampe / mici / aca</i>
母	ハボ	<i>hapo</i>

③加賀家文書「〔蝦夷語和解〕」

父	ミチ	<i>mici</i>
	<u>アツチャ</u>	<i>aca</i>
母	ハボ	<i>hapo</i>
父親	アチャ	<i>aca</i>
母親	ヲン子ケ	<i>onneke</i>

④金沢家文書語彙集

父	ミチ	<i>mici</i>
	アチャ	<i>aca</i>
母	ヲン子キ	<i>onneke</i>
	ハボ	<i>hapo</i>

加賀家文書と金沢家文書はどちらも根室地方の資料であり、『藻汐草』の類本には方言の特徴が反映されている可能性がある(第4章を参照)。注目すべきは、「父」に関して、①と②に記載される西蝦夷の *hampe* という語彙が③と④では削除されている点、そして「母」に関して③と④で *onneke* という語彙が加えられている点である。前者は根室方言[18]では使用されず、逆に、後者は使用されていた語であると推定される。

加えて、③と④の資料に *aca* という語形が記載されたままであるという点は、「父」という語形の歴史的解釈に大きな意味を持つものである。中川 (1996: 13) は、「父」を表す *aca, acapo* 類 (*aca, haca, acapo, aapa, apaa, aaca*) は、北海道の周縁部と樺太一带に広く分布し、これが最古の語形であるという。北海道の最東端にある根室方言にも *aca* があつたとすれば、ABA の分布がよりいっそう際立つようになるだろう。

また、本章 8.2 節でも見たように *ona* は基本的に言及語として報告されている語であるのだが、加賀家文書や金沢家文書にはこの語形が確認できない。その代わりに、③を見ると、「父」の「アツチャ」というアイヌ語が字消しされ、「父親」という見出しに「アチャ」が入れられている。「アツチャ」と「アチャ」の推定形は、どちらも *aca* であると考えられる。わざわざ「父」と「父親」という二つの見出しを設けているという点を考慮すれば、*aca* と *mici* との間には区別があつたという見方が可能である。

なお、(8-5) に見るように加賀家文書「菊のかんざしみだれ髪」(資料番号 31) のテキストにおいても、*mici* と *hapo* および *acapo* と *onneke* のペアが成立しており、訳語も (8-4) の③「〔蝦夷語和解〕」と同じものが使用されている(音素表記とグロス は筆者(深澤)による)。

(8-5) a.	子ブタ	チアラケ	クハボ子	アヌワ
	何	女神	我母ニ	なる
	子ブタ	シユ\ルマ	クミツ子	アヌワ
	何	男神	我父ニ	なた

(042 ウ 01-042 ウ 04)

[音素表記・グロス]

<i>“nep</i>	<i>ta</i>	<i>ci=arke</i>	<i>ku=hapo</i>	<i>ne an</i>	<i>wa</i>
何	EMP	1PL.A=片割れ.POSS	1SG.A=母.POSS	に なる.SG	て
<i>nep</i>	<i>ta</i>	<i>susuruma</i>	<i>ku=mici</i>	<i>ne an</i>	<i>wa</i>
何	EMP	砂埃(?)	1SG.A=父.POSS	に なる	て

b.	ヲン子キ	コチャウシ	ヤエカマ	トラノ
	母親の	前通るニも	足ぶみ	高く
	アチャボ	コチャウシ	ビツツケ	トラノ
	父親の	前通るニも	けん\	として

(043 ウ 01-043 ウ 04)

[音素表記・グロス]

<i>onneke</i>	<i>kotca</i>	<i>us</i>	<i>yaykama</i>	<i>tura-no</i>
母親	前.LOCR	付く	足踏みをする(?)	ながら-ADV
<i>aca-po</i>	<i>kotca</i>	<i>us</i>	<i>[pikke?]</i>	<i>tura-no</i>

父親-DIM 前.LOCR 付く けんけんする(?) ながら-ADV

8. 4. 2. 「父」に関する呼称語と言及語

本章 8.4.1 節で確認したように、(8-4) の③「〔蝦夷語和解〕」の和語見出しから「父」を呼称語、「父親」のほうを言及語と考え、その他の方言とともに 2 枚の地図にまとめると、章末の図 8-3 と図 8-4 のようになる。数字は、図 8-2 の地点に対応しており、アイヌ語の語形が括弧内に入っている場合は、その語形は持っているが呼称語と言及語の別のために扱わなかったという意味である。

ona に関しては、本章 8.2 節で分布域の報告に問題があることを指摘したが、図 8-4 は個別の資料から確実に見つけられた地点のみをプロットしている。すると、興味深いことに *ona* と *aca* が相補分布することが確認された。服部（編）(1964) によると、樺太のライチシカ [23] に関しては、*ona* と *aaca* の両語形が確認できるが、*aaca* に「〈おとうさん〉（呼ぶときにも）」という註がついている。樺太には、落帆 [19] にも *ona* という語形が報告されているが、これら 2 地点に *ona* という語形があることをどのように考えるべきか、現在のところあまり良い解答が出ていない。ひとつには、その他の樺太方言にも、知里 (1954 [1975]) の言うように *ona* があつたと考えることもできるかもしれない。

あるいは、もし落帆 [19] やライチシカ [23] だけに点在するのが事実だとすれば、*ona* はそれぞれの話者が北海道に住んでいた時期に得た語形ということも考えられる¹⁰。この傍証になるかはわからないが、服部 (1957) は、ライチシカ方言 [23] を調査していた際に年長層と青少年層の間で語彙の差異が大きいということを見出し、「若言葉」と「年寄言葉」として報告している¹¹。そのなかで、「年寄言葉」には明らかに一層古い形を保存しているものもあれば、北海道方言に近いものもあり、Swadesh の基礎語彙（服部・知里 (1960) で調査した 200 項目）に限れば、「若言葉」のほうが北海道方言に近いものが多いということ述べている。そして、このなかで、「父」の若言葉を *aaca*、年寄言葉を *ona* と報告し、年寄言葉が北海道方言の「雅語」と同じであるということ述べている。

もし、樺太全域に *ona* という語形があつたとすれば、それは中川 (1996) の「沙流・千歳・樺太型」に「西蝦夷型」を組み合わせたような ABA の分布となり、*ona* が *aca* よりも最も古い語形である可能性が出てくる。しかし、第 9 章で述べるが、「沙流・千歳・

¹⁰ 落帆 [19] の話者である山岸兼太郎は、北海道江別市の対雁に生まれ、13 歳のときに樺太へ渡り真岡 [21] で 1 年過ごし、その後、71 歳まで落帆 [19] で生活していた。その後、北海道の稚咲内というところで調査を受ける。ライチシカ方言 [23] の話者である藤山ハルは、樺太西海岸北部の恵須取で生まれ、その後 18 歳でライチシカへ移住、48 歳までライチシカ [23] や真岡 [21] で生活したのち、北海道の常呂町に移り住む。

¹¹ ライチシカ方言以外について、「若言葉」や「年寄言葉」の区別があることは報告されていない。

樺太型」は必ずしも A が古いとは考えられないこともあるので、ここでは *ona* が古いという解釈を積極的に採用しない。

その他の語形については、中川 (1996) の分析を概ね踏襲する。中川 (1996) は、北海道の太平洋沿岸と千島に広がる *mici* を「東蝦夷型」として分類し、北海道の中央北部を中心に広がる *hampe* という語を「西蝦夷型」とした。そして、*hapo* が多くの方言で「母」を表すにも関わらず、千歳 [14] では「父」を表すことについて、中川 (1996) は、千歳周辺に広がる「父」を表す *hampe* という語形と「母」を表す *hapo* という語形との間に混乱が起こり、類音牽引によって *hapo* が「父」を表すに至ったものと論じている。それに伴い、「母」に *hapo* を使う沙流川下流域（鵠川 [17] や福満 [4]）では、同音衝突を避けるために「父」を表す *iyapo* (< *i-hapo*) という語形が作り出されたと考えられている。

以上で見てきた語形分布等から、「父」を表す語形の歴史的変遷を次のように解釈してみたい。

1. *aca* は北海道と樺太において呼称語と言及語のどちらにも用いられていた。
2. 日高、胆振、石狩の地域では *ona* が言及語になり、*aca* の使用は衰退した。
3. シヤクシャイン戦争が終わり東西の対立がゆるやかになった頃、*mici* がメナスクル (*Menasunkur*) の人々によってもたらされ、東蝦夷（太平洋岸）一帯に広がった。
4. その後、*hampe* が「父」の呼称語として西蝦夷（石狩川流域の旭川 [11]、名寄 [12] と千歳 [14]）に広がり、言及語の *ona* と対をなすようになった。北海道と樺太の一部では、*aca* が呼称語と言及語のどちらにも使われ続けた。
5. 千歳 [14] では、（中川 (1996) によれば類音牽引の影響で）*hapo* が呼称語の「父」を表すようになり、沙流川の下流域（鵠川 [17] や福満 [4]）では、*iyapo* がもたらされた。これらの地域では依然として *ona* が言及語として用いられている。

8. 4. 3. 「母」に関する呼称語と言及語

アイヌ語の「母」という語彙も複雑な分布を示し、「父」の分布とは完全に一致しない。ここでは手短かに「父」と「母」の分布の対応について見てみることにする。中川 (1996: 14) は、「母」の *hapo* が「父」の *mici* に重なる分布を見せ、「母」の *totto* は「父」の *hampe* にほぼ重なるということから、「千歳、穂別¹² という地域においても *totto* であることが知られているが、仮に、父親と母親の名称が *hampe-totto* というセットで伝播してきたのだと考えれば、千歳、穂別でも、父親に対して、*hapo* の前に *hampe* という段階があったということが推定できる」と述べている。一方、「母」の言及語 *unu* は、「父」の言及語 *ona* とペアになって用いられるが、図 8-4 と 8-6 からその分布が重なることがわかる。

ここで、根室方言で「父親」の *aca* と対になっている *onneke* 「母親」について考えてみたい。*onneke* という語形について筆者が現時点で確認できているのは澤井 (2001, 2006)

¹² 穂別は、千歳 [14] の東部と鵠川 [17] の北部の間に位置する。

と知里 (1954 [1975]) のみであり、以下、箇条書きにして引用する (隅付き括弧 (【】) 内は引用者による註であり、アイヌ語のアクセント表記は除外した)。

1. 本別方言では他方言にみられる *unu* も *totto* も用いられない。ただし、*onneke* オンネケという従来知られなかった語が存在する。

(澤井 2001: 31)

2. 「私のお母さん」という言い方について【沢井氏に】¹³ 質問した時は次のように答えている。*e=onnekehe* エオンネケへ【*e=onneke-he* 2SG.A=母-POSS】とか *e=hapoho* エハボホ【*e=hapo-ho* 2SG.A=母-POSS】とか。*ku=hapo* クハボ【*ku=hapo* 1SG.A=母.POSS】も *ku=onneke* クオンネケ【*ku=onneke* 1SG.A=母.POSS】も同じだ。

(澤井 2001: 32)

3. この語【*onneke(-he)*】は呼びかけには使わない。また、小さい子どもには難しすぎるので 15, 16 才辺りから上の年代に向けて用いられるということである。

(澤井 2001: 33)

4. 帯広の上野さん¹⁴ はこの語について「親のこと」という。人が「サダ・オンネケ」といえば「私(サダ)の親」だという。…【中略】…上野さんは当時母親と暮らしていたので、「母さんでも *onneke* っていうんでしょう」と言っていた。また、*e=onnekehe* エオンネケへ【*e=onneke-he* 2SG.A=母-POSS】も *e=kor onneke* エコロ オンネケ【*e=kor* 2SG.A=3.O 持つ、*onneke* 母】も同じだという。

(澤井 2001: 33)

5. 本別方言では、人称接辞と所属形 (*ku=onnekehe*)【*ku=onneke-he* 1SG.A=母-POSS】を用いており、沢井氏は *kor onneke*【*kor* 3.A:3.O 持つ、*onneke* 母】を「聞きにくい」と言い、後者は用いない。本別方言と帯広方言ではこの語に意味の違いがあり、所有の関係を表す形についても差異がみられる。

(澤井 2001: 33)

6. *onne-ike* [on-ne-i-ke おンネイケ]《チカブミ》親。[*onne* (親である) + *ike* (者)]。
“*toampe* ~”「あの人の親」。“~*utar*”「親たち」。

(知里 1954 [1975: 492])

¹³ 沢井トメノ氏は 1904 年生まれ、本別方言話者。

¹⁴ 上野サダ氏は 1921 年生まれ、帯広方言話者。

1~6 をまとめると、

- *onneke* (または *onneike*) という語形は、旭川 (近文)、帯広、十勝 (本別) で記録される。
- 旭川と帯広は「母親」ではなく「親」という意味で用いられる。
- 十勝方言話者である沢井氏によれば、*onneke* は呼びかけに用いない。

ということが先行研究によって知られていることである。加賀家文書では *onneke* という語の日本語訳に「母親」をあてているが、アイヌ語本別方言話者である沢井トメノ氏も *onneke* には「母親」という訳語をあてている (澤井 2006)。知里 (1954 [1975]) は *onneike* が旭川方言で「親」であるとしていることから、ひとつの仮定として、*onneike* が *onneke* という短い形になり、その意味も「親」から「母親」という意味に限定されるようになったということが考えられる。

知里 (1954 [1975]) は、*onne* の意味を「親である」としているが、*onne* というのは通常「年老いている」という意味で用いられる 1 項動詞である。また、*ike* というのは「~のほう」という意味で用いられるので、*onneike* は「年老いたほう」という意味になる。そして、もし *onneke* が *onne-ike* 「年老いた・ほう」という語構成に由来するならば、父や母の区別とは関係なしに「親」という意味で使っていたのが初めだったとも考えられる。(これは、帯広方言話者である上野サダさんが述べている上記の 4 の内容とも一致する。) ¹⁵

意味というのは歴史とともに変化する。例えば、*esikop* という語は幌別 [3] で「親」であるが (知里 1954 [1975]) ¹⁶、八雲 [1] では「母」(服部 (編) (1964)、知里 (1954 [1975]))、沙流方言では「父」(田村 1996) という意味を表す。知里 (1954 [1975: 491]) では、*esikop* が *e-*「そこから」*siko*「生れた」*-p*「者」と分析され、田村 (1996) は、「そこから生まれたもの = 父親 (子どもにわからないように言う言い方)」としている。

esikop のような事例があることも加味したうえで、筆者は、*onneke* を意味の特殊化 (上位概念から下位概念への変化) であると考え、「親」から「母親」という意味に特化したのが十勝方言、そして加賀家文書「〔蝦夷語和解〕」に所収された語なのではないかと推測する。もちろん、これは逆の推測 («母親」が「親」という意味へ拡張した) も論理上

¹⁵ ここに関して、中川 (2016 私信) で、あだ名の付け方として *pon*「小さい」+ ○○ (親の名前) というのがあり、女性の場合は○○に母親の名を、男性の場合は父親の名を用いると教えて頂いた。つまり、女の子からみた *onneke* が「母親」で、男の子からみた *onneke* は「父親」ということになるのではないかとということである。ここでの筆者 (深澤) の主張は、それが最初の用法だと考えているのだが、もしかすると十勝の報告も話者が女性であることからすると、*onneke* は単に「親」という意味なのかもしれない。しかし、加賀家文書や金沢家文書において、*onneke* が「母」のほうの意味に寄っている点は、やはり考慮に入れるべきではないかと考えている。

¹⁶ 釧路 [9] の春採では *esikep* で「親」(知里 1954 [1975]) という意味になる。「親」という意味になる地点が北海道の西と東の離れた地域にあるという点でも、「親」という意味が最初であったということが示唆される。

ありうるわけで、積極的に否定すべき根拠もない。しかし、語構成上の解釈（「年老いたほう」）を判断材料と見た場合に、前者の推測が支持できるのではないかというのが現段階における筆者の考えである。

次に、樺太と北海道にみられる *totto* という語形について見てみたい。*totto* にはもともと「乳」という意味があり、沙流川流域ではしばしばこの語が「母」の幼児語として用いられる。知里 (1954 [1975]) では、美幌 [10]、幌別 [3]、タラントマリ [20]、真岡 [21] の方言が「雅語」として *totto* や *tohto* を用いるとしている（樺太方言では、音節末の /-p, -t, -k/ が規則的に /-h/ となるので、*tohto* は *totto* と対応する語形である）。さらに、Asai (1974) では、釧路 [9] の方言として *totto* を加え、服部（編）(1964) では八雲 [1] の *tott oacapo* や *tottohapo* という *totto* を冠した語形が「父」と「母」の「敬称」として記録されている。また、旭川 [11] や名寄 [12]、千歳 [14] では「母」の呼称語として記録されている。

近世資料を確認すると、上原熊次郎 (1972) 『藻汐草』では、「姥」¹⁷ という見出しに *otto* が記載されている。「姥」には「年老いた女」という意味だけではなく「乳母」という意味もあるので、やはり元来の「乳」という意味には関連しているのだろう。つまり、幼児語や呼称語としての *totto* も、言及語（「雅語」や「敬称」）としての *totto* も、元々は「乳」という意味に由来しているのであろうが、その派生経路は、例えば幼児語から雅語へというようなものではなく、それぞれが別々にできあがったために、その用法や分布域が異なっているのではないかと筆者は考える。

図 8-6 の「母親」の分布をみると、言及語の「母」である *unu* と *onneke*、*totto* で相補分布し、呼称語は *hapo* と *totto* で相補分布をなしている。幌別 [3] では、東蝦夷一帯に広がる *hapo*（呼称語）と西蝦夷一帯に広がる *totto*（言及語）のほかに、*unu*（言及語）という三つの語形を持っており、位置的にも東蝦夷と西蝦夷の両方の影響を受けているように見える。

なお、樺太と北千島では、「母」に対して *nanna* や *nonno* という語が用いられる。中川 (1987b: 31-32) では、「千島の *nonno* を「美しいもの」という意味の *nonno*（一部の地域では、そこから派生して「花」という意味になる）等とつなげてかんがえるならば、これが千島で独自に母親の意味を持つようになったとも考えられる。そう考えれば、樺太の *nanna* も独自に発生したものであり、北海道での（さかのぼれる限り）最古の形は *hapo* ということになる」と述べられている。中川 (1987b: 31-32) は、もし樺太に *hapo* が見つかった場合は、この説がさらに補強され、アイヌ語として最も古い形が *hapo* ということになるが、樺太の /a/ に対し千島で /o/ となる例がいくつか見つかるか、北海道にも *nanna* のような語が見つければ、樺太・千島の *nanna* と *nonno* は関係があるということになり、アイヌ語として最も古い形であるという解釈になるとも述べている。この点に関して、筆者は補足的な証拠を見つけていないので、これ以上の議論はしない。

¹⁷ 残念なことに、加賀家文書『[蝦夷語和解]』ではこの見出しが欠如している。

最後に、「母」の分布から考えられる歴史的解釈を提示する。

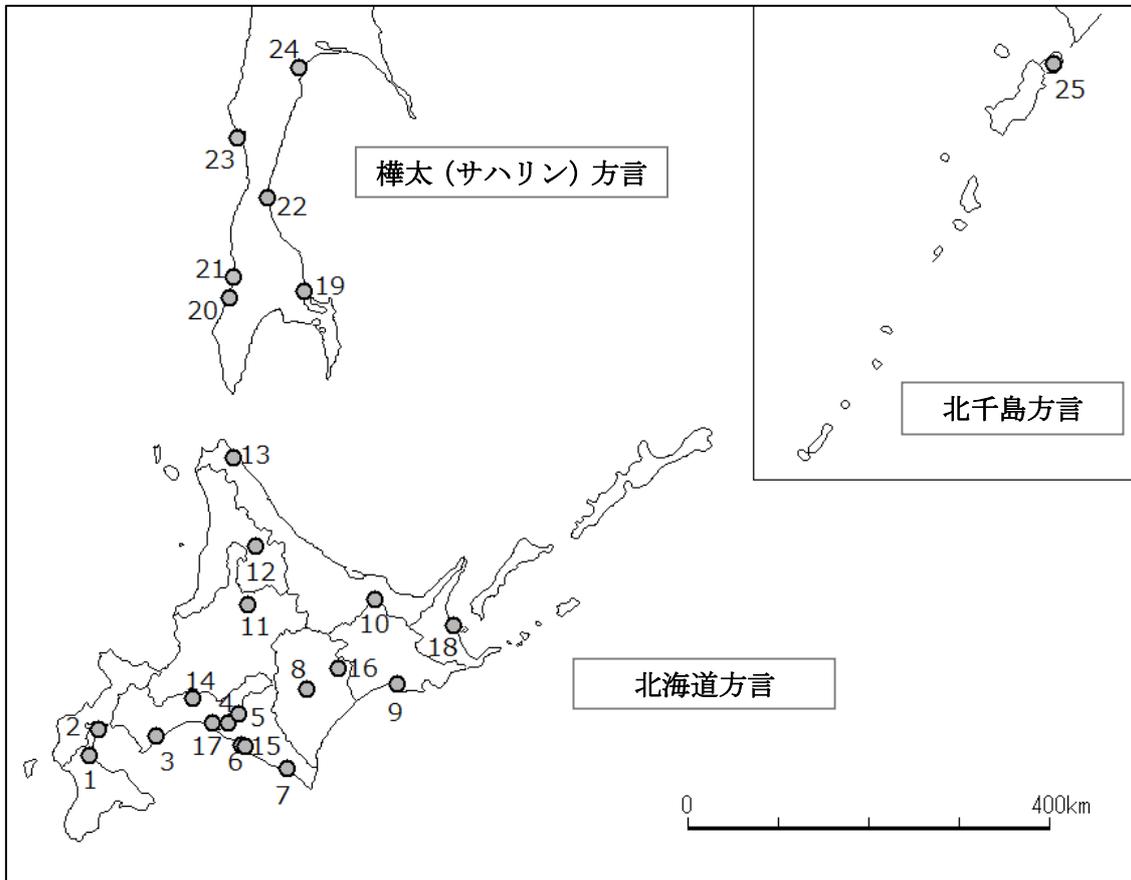
1. 樺太や千島では、*nanna* や *nonno* が「母」を表す古い語形であった（呼称語、言及語の別はなし）。
2. 樺太や千島の *nanna* や *nonno* とは別に、少なくとも北海道においては、「母」を表す *hapo* という語形が使われていた（呼称語、言及語の別はなし）。
3. 北海道の中央部に位置する方言では、「父」の言及語 *ona* と対になる「母」の言及語 *unu* が用いられるようになり、その影響もあってか *hapo* が呼称語として用いられるようになる。旭川 [11] や名寄 [12]) では、幼児語であった *totto* が「母」の呼称語となり、「父」の呼称語 *hampe* と対になる。
4. 千歳 [14] でも *totto* を「母」の呼称語として用いるようになるが、北部に隣接する方言が「父」に *hampe* を用い、東に隣接する方言が「母」に *hapo* を用いていたので、この方言では語形に混乱が生じ、*hapo* を「父」の呼称語として用いるようになった。
5. いずれの時期かわからないが、*onneike* は旭川 [11] で元来「親」という意味だったものが、音形が短縮されて帯広 [8] では *onneke* となり、さらに本別 [16]、根室 [18] においては言及語としての「母」という意味に限定される。釧路 [9] や美幌 [10] では *unu* ではなく、*totto* が「母」の言及語（雅語）として用いられるようになる。八雲 [1] では、*hapo* 「母」と *acapo* 「父」に *totto* を冠して敬称を表す *totthapo* や *tottoacapo* があるが、これは *totto* が「母」ではなく、原義の「乳」から「食べ物（乳）を与える」というような喚起がもたらされて付加されたと考えたほうが良いかもしれない。

8. 5. まとめ

本章では、アイヌ語の「父」と「母」に関する語形の地理的分布を見た。特に、呼称語と言及語に分けてその地図を作成したことで、これまでの先行研究では見られなかったような語形の分布と相関関係を確認することができた。例えば、言及語の *ona* と *unu* がその他の「父親」や「母親」を表す語形と相補分布をなしていることはひとつの発見である。これはつまり、呼称語と言及語という二つの分類がアイヌ語において意味を持つという証拠でもある。

8.3 節で述べた通り、呼称語と言及語の用法を明確に区別することは難しく、その認定に曖昧な部分があるということは否めない。また、釧路の近くの白糠方言のテキスト中には、*aca*（言及語）と *hapo*（呼称語）、*mici*（呼称語）と *totto*（言及語）というペアでの使用が見つかっているなど、まだ議論の余地があると言える。しかし、加賀家文書において「父」と「母」を表す語彙のペアがくずれないことや、それぞれのペアで訳語が区別されていることなどは示唆的である。古文献がもたらす細かな情報が現代のアイヌ語の理解を助ける事例となったのではないかと現時点では考えている。

地図



北海道

1. 八雲、2. 長万部、3. 幌別、4. 福満、5. 貫気別、6. 新冠、7. 様似、8. 帯広、
9. 釧路、10. 美幌、11. 旭川、12. 名寄、13. 宗谷、14. 千歳、15. 静内、16. 本別、
17. 鶴川、18. 根室 (野付)

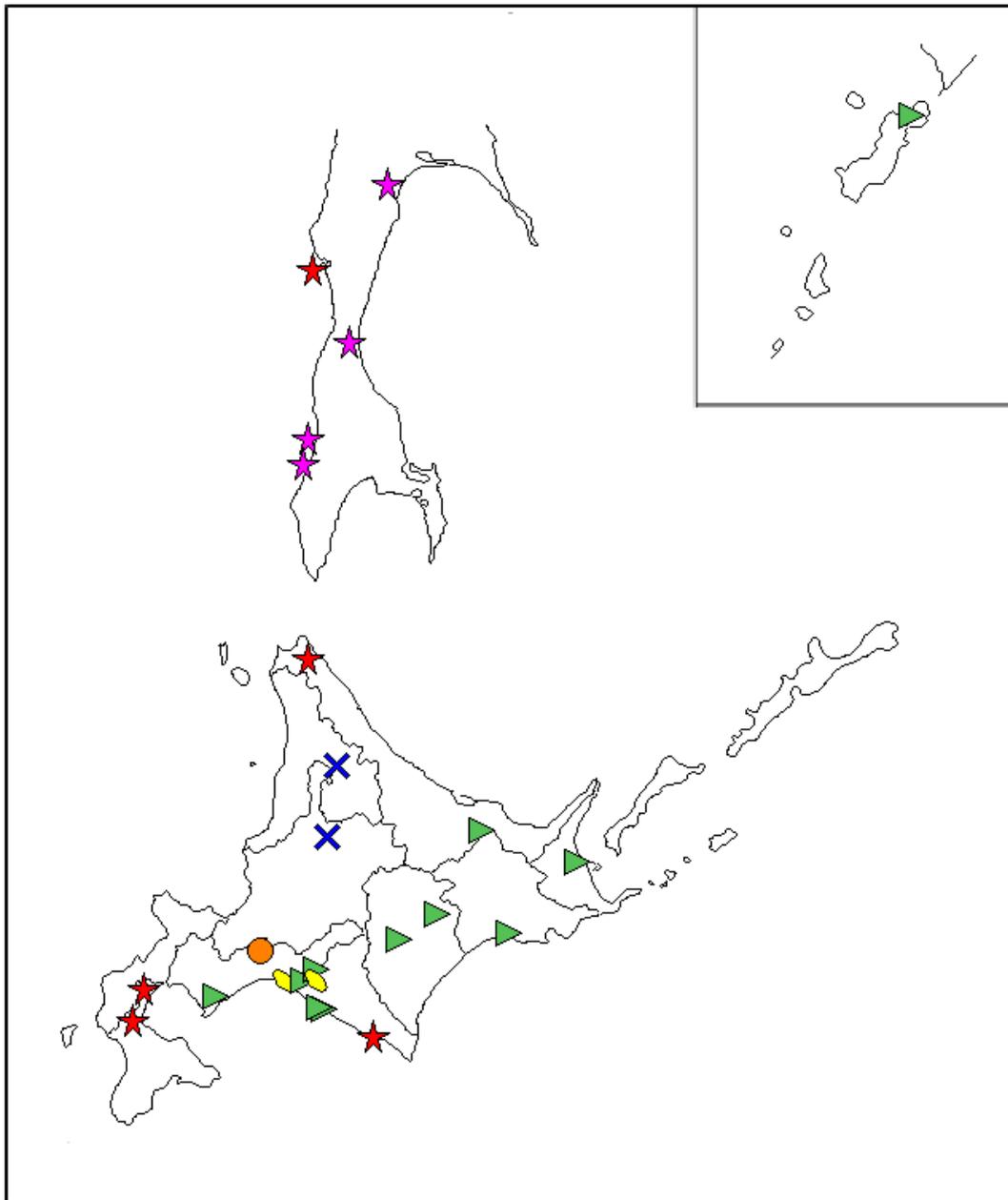
樺太

19. 落帆、20. タラントマリ、21. 真岡、22. 白浦、23. ライチシカ、24. 内路

北千島

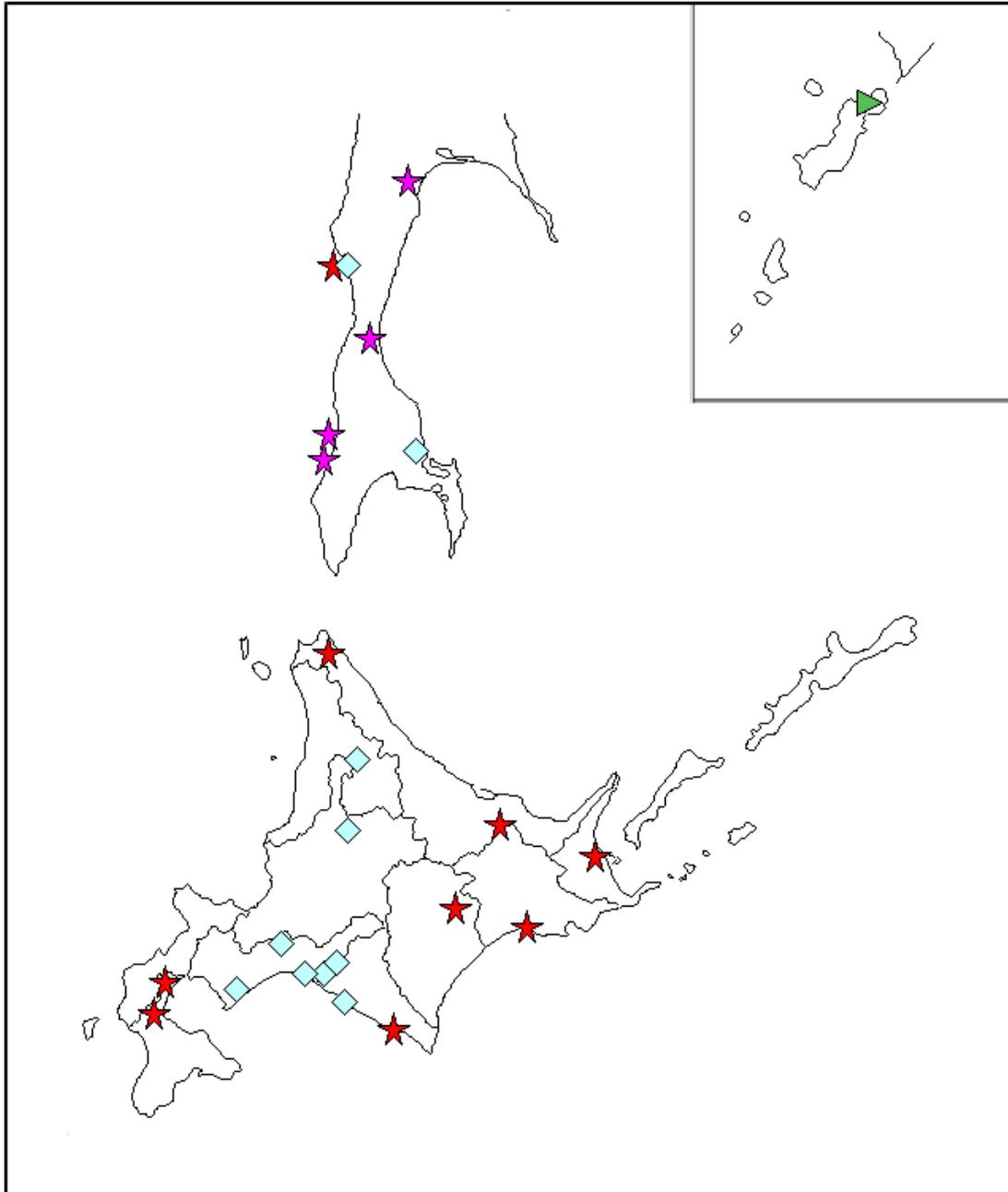
25. シュムシュ

図 8-2 : アイヌ語の方言 25 地点 (=第 2 章、図 2-3 の再掲)



- | | | |
|--|---|--|
| <p>★ <i>aca</i> 系</p> <ul style="list-style-type: none"> [<i>aca</i>: 7, 13 (, 9, 16, 18) <i>acapo</i>: 1, 2 (, 16) <i>haca</i>: 7 (, 10) <i>aaca</i>: 23 (<i>tottoacapo</i>: 1) | <p>★ <i>apa</i> 系</p> <ul style="list-style-type: none"> [<i>aapa</i>: 20-22 <i>apaa</i>: 24 | <ul style="list-style-type: none"> ▶ <i>mici</i>: 3-6, 8-10, 15, 16, 18, 25 ✕ <i>hampe</i>: 11, 12 ● <i>hapo</i>: 14 ● <i>iyapo</i>: 4, 17 |
|--|---|--|

図 8-3 : 「お父さん」



★ *aca* 系

- [*aca*: 7, 9, 13, 16, 18
- acapo*: 1, 2, 16
- haca*: 7, 10
- aaca*: 23
- (*tottoacapo*: 1)

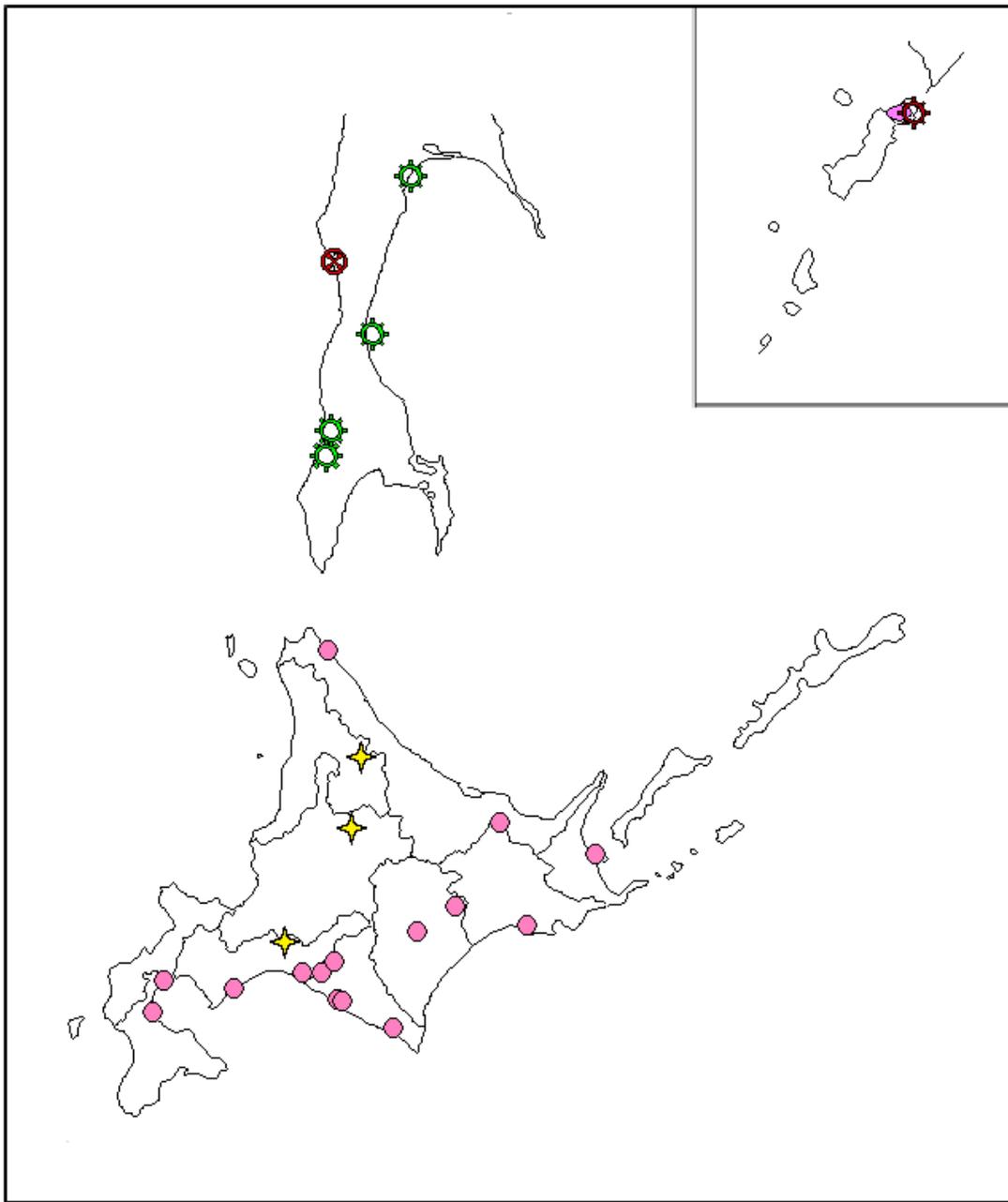
★ *apa* 系

- [*aapa*: 20-22
- apaa*: 24

▲ *mici*: 25

◆ *ona*: 3-5, 11, 12, 15, 17, 19, 23

図 8-4 : 「父親」



hapo 系

- hapo: 1-10, 13, 15-18
- aapu: 25
- (totohapo: 1)

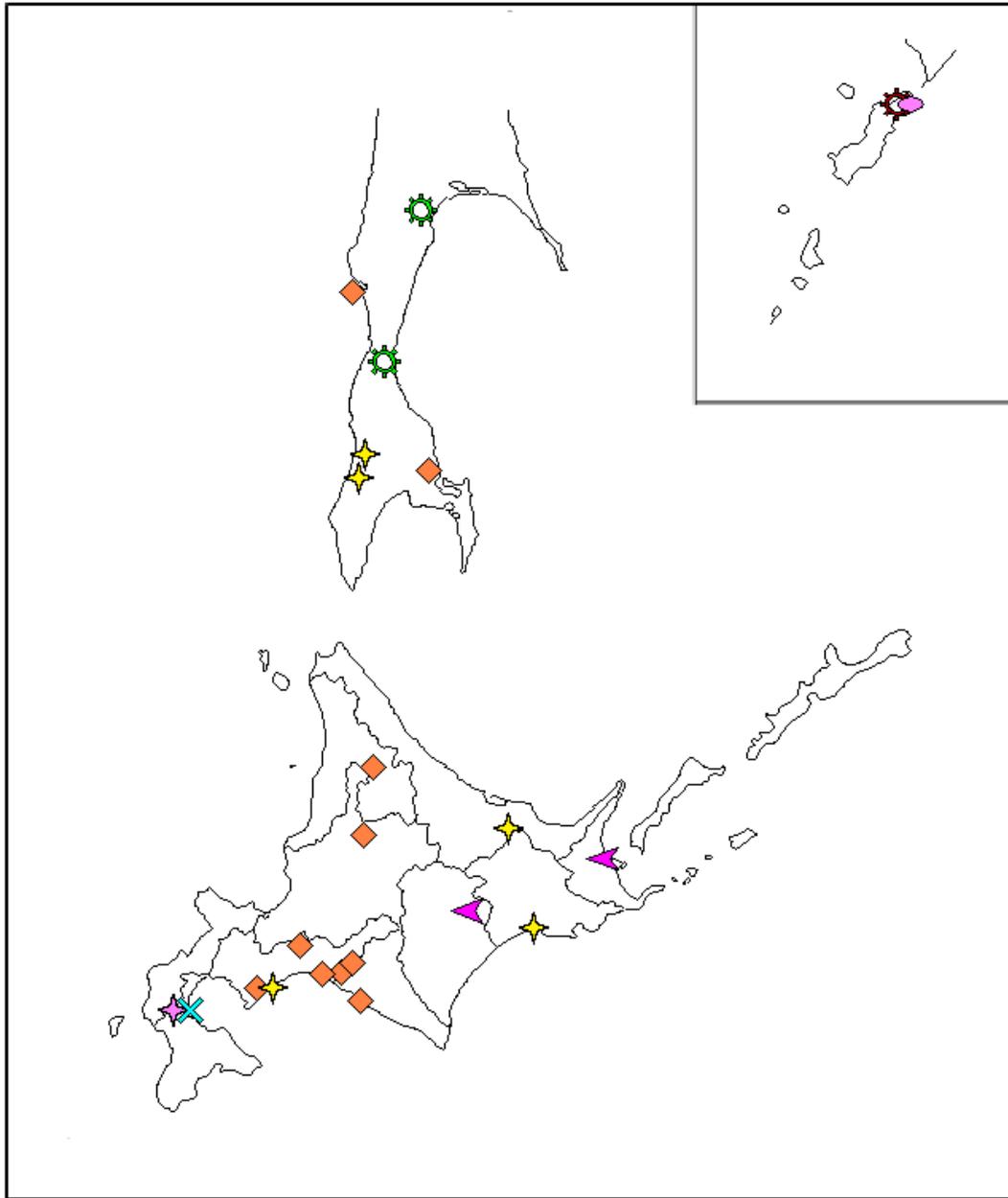
★ totto 系

- totto: 11, 12, 14 (, 3, 9, 10)
- (tohto: 20, 21)

nanna 系

- ⚙ nanna: 20-22, 24
- ⚙ nonno: 25
- ⊗ onmo: 23

図 8-5 : 「お母さん」



- | | | |
|---|--|---|
| <p>★ <i>totto</i> 系</p> <p>{ <i>totto</i>: 3, 9, 10, 11, 12, 14</p> <p>{ <i>tohto</i>: 20, 21</p> | <p><i>nanna</i> 系</p> <p>{ ⚙ <i>nanna</i>: 20-22, 24</p> <p>{ ⚙ <i>nonno</i>: 25</p> | <p><i>hapo</i> 系</p> <p>{ ★ <i>totohapo</i>: 1</p> <p>{ ○ <i>aapu</i>: 25</p> |
| <p>◇ <i>unu</i>: 3-5, 11, 12, 14, 15, 17, 19, 23</p> | <p>▲ <i>onneke</i>: 8, 16, 18</p> | <p>✕ <i>esikop</i>: 1</p> |

図 8-6 : 「母親」

第9章 疑問詞と不定代名詞

— 「何 (か)」と「誰 (か)」

9. 1. はじめに

アイヌ語の疑問詞の方言差について、アイヌ語の疑問詞および不定代名詞がもつ語根 *hVm*, *hVn*, *ne* の歴史的変遷を考察する。初めに類型論的にアイヌ語の不定代名詞を概観し、それを踏まえたうえで言語地理学的にその語根の古さを特定する。その結果、アイヌ語の不定代名詞が類型論的には「名詞ベースの不定代名詞」に分類されること、大多数の北海道方言がもつ疑問詞は不定代名詞起源であることを指摘する。なお関連することとして、*ta(p)* がもともと「焦点化」を表す副詞だったものから、「疑問」のスコープを明示する副助詞（さらには接尾辞）として発達した過程、さらに、アイヌ語の係助詞と呼ばれてきた *ta* についても論じる。

9. 2. アイヌ語の疑問詞および疑問詞疑問文について

9. 2. 1. 疑問詞の基準形

まずアイヌ語の疑問詞について Dixon (2012: 407) が提示する 8 つの基準形に合わせて整理する。アイヌ語は基準形のすべてに対して語彙カテゴリーを持つ言語であり、アイヌ語沙流方言¹ では (9-1) のようになる。

(9-1) アイヌ語の疑問詞

誰 (who)	<i>hunna</i>
何 (what)	<i>hemanta</i> (縮約形 <i>h(i)nta</i> ²)
なぜ (why)	<i>hemanta kusu</i> (縮約形 <i>h(i)nta kusu</i>)
どこ (where)	<i>hunak / hinak</i>
どれ／どの (which)	<i>inan / (h)inaan</i>
いくつ／いくら (how many/ how much)	<i>hempak</i>

¹ 田村 (1977: 157) を参考にした。

² *hnta* は *hemanta* の縮約形で、このように子音が三つ続くというのはアイヌ語の基本的な音節構造に反する。これは金田一 (1931: 13) が早くから指摘しており、「今日の口語には全く新奇な音節 *hm*、*hn* が加わっている」として「*hnta?*<*hmta*<*hemata* 「何か」という例を挙げている。

どのように (how)	<i>makanak</i> (縮約形 <i>mak / makak</i>)
いつ (when)	<i>hempara</i>

9. 2. 2. 疑問詞および疑問詞疑問文の統語的特徴

アイヌ語は SOV を基本語順とするが、V は必ず S と O の後ろでなければならないのに対して、S と O の語順制限はゆるい。かつては「疑問代名詞を用いる時は、先頭へそれを出す」(金田一 1931: 178) などと言われたこともあったが、現在はアイヌ語も日本語や中国語などと同様、「文中の該当箇所に疑問詞を入れるだけで、疑問詞が文頭に移動するというようなこともない」(田村 1988 [1997: 73]) というのが一般的な理解である。

(9-2)a. <i>eani</i>	<i>hemanta</i>	<i>e=e?</i>
2SG	何(IR)	2SG.A=3.O:食べる
「あなたは何が食べたい？」		

(沙流 ; 田村 1988 [1997: 73])

b. <i>toan=kur</i>	<i>hunna</i>	<i>an?</i>
あの=人	誰(IR)	EXIST.SG
「あの人 (は) だれですか？」		

(沙流 ; 田村 1988 [1997: 73])

アイヌ語は、「誰 (who)」と「何 (what)」、「どれ/どの (which)」のそれぞれに対応する三つの語形を持ち、用法も英語など多くの言語に類似する。例えば、*inan*「どれ/どの (which)」は、名詞を修飾できるが、名詞句の主要部にはなれない。逆に、*hunna*「誰 (who)」は名詞句の主要部として機能するが、名詞を修飾することはできない。

(9-3)a. <i>inan=pe</i>	<i>e=kor</i>	<i>rusuy?</i>
どの(IR)=もの.CLF	2SG.A=3.O:持つ	DESID
「どれがほしい？」		

(沙流 ; 田村 1988 [1997: 73])³

b. <i>hunna</i>	<i>ek?</i>
誰(IR)	3.S:来る.SG
「誰が来た？」	

(沙流 ; 田村 1988 [1997: 73])

さらにアイヌ語はやはり多くの言語と同じように「なぜ (why)」と「どのように (how)」

³ 筆者 (深澤) によってグロスを付記し、和訳も原典を尊重しつつ編集した。

にもそれぞれ対応する語形を持つ。このうち「なぜ (why)」にあたるものは、ルーマニア語やパプワのアブン語などと同様「何のために (what for)」という形式で成り立っている (Dixon 2012: 414f)⁴。

疑問詞疑問文では「稀に、コンピュータが用いられるような場合などで特別な構文をとることがある」 (Dixon 2012: 427) という記述のとおり、アイヌ語でも「コンピュータ文の場合は、通常、コンピュータ *ne* を *an* に換える」 (田村 1988 [1997: 73]) ということが指摘されている。

(9-4)a. *tan=pe* *hemanta* *an?*
 この=もの.CLF 何(IR) EXIST.SG
 「これは何ですか？」

(沙流 ; 田村 1988 [1997: 73])

b. *numan* *hunna* *ek* *ru-we* *an?*
 昨日 誰(IR) 3.S:来る.SG 跡-POSS EXIST.SG
 「昨日だれ (が) 来たのですか？」

(沙流 ; 田村 1988 [1997: 73])

9. 2. 3. 沙流グループとそれ以外にわかれる疑問詞の地理的分布

アイヌ語の疑問詞の大部分は、第8章 8.2 節で述べた中川 (1996) の8つの型のうち「沙流・千歳型」や「沙流・千歳・樺太型」⁵ を表す。この二つの型は北海道において、沙流・鶴川・千歳の地域とそれ以外にわかれるような分布を示す点で共通し、本章では、この沙流・鶴川・千歳方言を合わせて「沙流グループ」と呼ぶことにする。代表的なものとして、*mak(anak)/nekon* 「どのように (how)」がある (章末の図 9-1 を参照)。

長形の *makanak* 「どのように (how)」は、*mak* 「どのように (how)」に *anak* 「は」というトピック化の副助詞がついた形をとる。田村 (1996: 374) によれば、*mak* は「*makanak* と同義だが、より簡単に (軽く) 言う言い方」だという。沙流グループのなかでも語形の長短には方言差があり、千歳方言はどんな時でも *makanak* しか用いず、沙流と千歳の間にある鶴川方言では *makak* という特殊な縮約形を持つ (中川 1995: 368、中川 (編) 2014-1016 『アイヌ語鶴川方言日本語・アイヌ語辞典』⁶)。

同じように、「どこ (where)」を表す *hunak* と *hinak* も沙流グループ内で方言差が確認で

⁴ *hemanta kusu* 「なぜ (why)」 < *hemanta* 「何 (what)」、*kusu* 「ために (for)」。ただし、目的を問うような場合は *hemanta ne* という別形式が用いられる (田村 1988 [1997] など)。

⁵ 「沙流・千歳・樺太型」は、本章で言うところの「沙流グループ」の特有の語形が樺太にも見られるような分布 (例えば、図 9-3 のような分布) を示す。

⁶ <http://cas-chiba.net/Ainu-archives/mukawa/> (2015年5月31日閲覧)。

き、沙流川の下流から上流の間でも方言差が見られる（章末図 9-2, 9-3）⁷。なお、表 9-1 のように、疑問副詞「どこ (where)」のパラダイムは、多くの方言で位置を表す指示副詞のパラダイムに対応するが、静内や十勝（帯広、本別）方言は、*enon*「どこへ (to where)」や *onon*「どこから (from where)」という特殊な語形を持っている。

格助詞 ⁸	どこ (WHERE)	指示副詞 (DEMONSTRATIVES)			
		近称 (PROXIMAL)	中称 (MEDIAL)	非中近称 (DISTAL)	遠称 (FAR DISTAL)
<i>ta</i> に(AT)	<i>hunak ta</i> / <i>hinak ta</i>	<i>te ta</i>	<i>taan ta</i>	<i>toan ta</i>	<i>toon ta</i>
<i>un</i> へ(TO)	<i>hunak un</i> / <i>hinak un</i>	<i>te un</i>	<i>taani un</i>	<i>toani un</i>	<i>tooni un</i>
<i>wa(no)</i> から(FROM)	<i>hunak wa</i> / <i>hinak wa</i>	<i>te wano</i>	<i>taani wano</i>	<i>toani wano</i>	<i>tooni wano</i>

表 9-1: アイヌ語沙流方言「どこ (where)」のパラダイム⁹

9. 3. 疑問詞と不定表現

9. 3. 1. 疑問詞と不定表現の方言差

沙流グループは疑問詞 (IR) と不定表現 (ID)¹⁰ を表すのに別の語形をもつが、その他の方言では基本的に同じ語形を使用する。

方言	疑問詞 (IR)		不定表現 (ID)	
沙流グループ	誰 (who)	<i>hunna</i>	誰か (somebody; anybody)	<i>nen (ka)</i>
大部分の北海道方言		<i>nen</i>		<i>nen (ka(y))</i>
沙流グループ	何 (what)	<i>hemanta</i>	何か (something; anything)	<i>nep (ka)</i>
大部分の北海道方言		<i>nep</i>		<i>nep (ka(y))</i>

⁷ *hunak* は、千歳、新冠、沙流（福満）。二風谷では *hunak* と *hinak* の両形が見つまっている。

⁸ *ta* 「で (at)」、*un* 「へ (to)」、*wa(no)* 「から (from)」は、それぞれ所格、向格、奪格を示す格助詞である。

⁹ Dixon (2012: 415-417) を参考に作成。

¹⁰ 田村 (1988 [1997: 73]) などでは、前者を「質問疑問詞」、後者を「不定疑問詞」と呼ぶ。

沙流グループ	どのように	<i>mak(anak)</i>	どのようにか	<i>neun (ka)</i>
大部分の北海道方言	(how)	<i>nekon</i>	(somehow; anyhow)	<i>nekon (ka(y))</i>

表 9-2 : 疑問詞と不定表現

語形を地図上にプロットすると図 9-3, 9-4 のようになる。「何 (what)」と「何か (something; anything)」を表す語形は、(9-5) や (9-6) のように用いられる。

(9-5) 「何 (what)」

a. *hemanta e=e?*

何(IR) 2SG.A=3.O:食べる

「あなたは何を食べた？」

(沙流 ; 田村 1977: 32)

b. *nep eci=nu rusuy?*

何 2PL.A=3.O:聞く DESID

「あなたたちは何を聞きたいのですか？」

(十勝 ; 高橋 2014: 23)

(9-6) 「何か (something; anything)」

a. *nep ne yak-ka a=kar*

何(ID) COP て-も 4.A=3.O:する

「私は何でもした」

(千歳 ; 中川 1995: 309)

b. *nep ka cioypep ka isam.*

何 も 食器 も 3.S:ない

「何も食器もない」

(旭川 ; 切替 1983: 51)

c. *nep ka eci=hok wa eci=e*

何 も 2PL.A=3.O:買う て 2PL.A=3.O:食べる

ru-we he an?

跡-POSS Q EXIST.SG

「何か買って食べたか？」

(静内 ; Refsing 1986: 105)

d. *nep ka tuy hum-i an.*

何 も 3.S:降る 音-POSS EXIST.SG

「何か降っている様だ」

(幌別：知里 1981 [1937]: 46)

ka は日本語の「か」や「も」と類似の意味・機能を持つ副助詞である。疑問詞とともに用いられた時に不定を表す形式として機能するが、義務的ではない。

(9-7) *okkayo ka menoko ka poro-n-no oka.*
 男 も 女 も たくさん-EP-ADV 3.S:いる.PL
 「男も女もたくさんいる」

(沙流；田村 1996: 267)

9. 3. 2. 類型論的な不定代名詞のタイプ

類型論的にアイヌ語の不定代名詞を概観してみたい。The World Atlas of Language Structures (WALS) の Indefinite Pronouns (Haspelmath 2013) では、4タイプの不定代名詞があげられており、アイヌ語は疑問詞ベースの不定代名詞 (Interrogative-based indefinites) を持つ言語であると考えられている。しかし、沙流グループを除く大多数の北海道方言や樺太方言はそれに当てはまらないように見える。ここでは、4タイプの不定代名詞の説明に合わせてみていくことにする。

I. 疑問詞ベースの不定代名詞 (Interrogative-based indefinites) :

In the majority of cases, interrogative-based indefinites are literally “based on” interrogative pronouns in the sense that they are overtly derived from them by the addition of a bound marker.[...] This bound marker is typically related to expressions for ‘be,’ ‘want,’ ‘perhaps,’ ‘or,’ or ‘also.’

[大部分のケースで、疑問詞ベースの不定代名詞は、拘束標識 (bound marker) をつけることで疑問代名詞から明らかに派生されたものである。字義通り、疑問代名詞をベースにした不定代名詞である。この拘束標識は典型的に「～である (be)」、「～(し)たい (want)」、「たぶん (perhaps)」、「か (or)」、あるいは「も (also)」という表現に関連している。]

(Haspelmath 2013 ; 和訳は筆者 (深澤) による)

4タイプ中、このタイプに属する言語が圧倒的に多く (Ultan 1978, Moravcsik 1969, Haspelmath 2013)、ユーラシア (西部を除く)、オーストラリア、北米の head-final の言語に特徴的である (Haspelmath 1997, 2013)。現代アイヌ語は head-final であり、Haspelmath (2013) もアイヌ語をこの「疑問詞ベースの不定代名詞」タイプに入れる。

大多数のアイヌ語北海道方言は、疑問詞 *nep* 「何 (what)」、*nen* 「誰 (who)」に対し、不定

代名詞も *nep* 「何か (something)」、*nen* 「誰か (somebody)」である。また、義務的ではないが不定表現で *nep ka* のように *ka* 「も (also)」が現れるのも、このタイプの特徴と一致するように見える。

II. 総称的な名詞ベースの不定代名詞 (Generic-noun-based indefinites) :

A few languages clearly have dedicated indefinite pronouns which are based on the generic nouns ‘person’ and ‘thing.’ Instead of the noun ‘person,’ some languages make use of the numeral ‘one,’ and not uncommonly, these are accompanied by an indefinite determiner of some kind.

[少数の言語は、歴史的に、総称的な名詞である「人 (person)」や「もの (thing)」をベースとして不定代名詞がつけられたということが明白である。数詞の「一 (one)」を用いる言語もあれば、不定を表す限定詞のようなものを用いる言語も珍しくはない。]

(Haspelmath 2013 ; 和訳は筆者 (深澤) による)

このタイプは、アフリカやニューギニア、太平洋諸島の head-initial の言語に特徴的 (Haspelmath 1997, 2013)。沙流グループは、疑問詞 *hemanta* 「何 (what)」、*hunna* 「誰 (who)」に対して、不定代名詞は *nep* 「何か (something)」、*nen* 「誰か (somebody)」を用いる。*nep* と *nen* はそれぞれ、*ne* に類別詞¹¹ *=p* 「モノ (thing)」や *=n* 「人 (person)」がついて語彙化した形と解釈できるので、このタイプに属すると見ることが可能。

III. 特別な不定代名詞 (Special indefinites) :

Special indefinites are indefinite pronouns whose roots are synchronically unrelated to other roots in the language.

[特別な不定代名詞は、その言語内において不定代名詞の語根がほかの語根と共時的に関係をもたない。]

(Haspelmath 2013 ; 和訳は筆者 (深澤) による)

このタイプはユーラシア大陸のあちこちに点在し、南アジアのインドヨーロッパ語族に多く見られる (Haspelmath 2013)。例えば、通時的には疑問詞ベースの不定代名詞だが、共時的に疑問詞と繋がりが無くなってしまったと考えられるような場合はこのタイプに属し、スペイン語やオランダ語などがこれに相当する。(スペイン語 *alguien* ‘somebody’ < ラテン語 *ali-quem* [INDF-who] ; ラテン語では *ali-* という接頭辞だが、スペイン語 *alguien* は

¹¹ この類別詞は文法的にも音韻的にも接尾辞と考えるとよいかもしれないが、もとは名詞節をつくる接語だったものが語彙化したものと筆者は考えている。*=p(e)* に関しては、指示連体詞とともに用いられて指示代名詞をつくる。*tanpe* 「これ(this)」 < *tan* 「この」 *=pe* 「モノ (thing)」。

共時的にひとつの形態素と考えられる。)

IV. 混在型 (Mixed indefinites) :

This type is not particularly interesting because it subsumes diverse subtypes: the ‘somebody’ word may be generic-noun-based while the ‘something’ word is interrogative-based [...].

[混在型は別々の下位分類を含んでいるということなので、あえて興味を示すことはない。「誰か (somebody)」は総称的な名詞ベースの不定代名詞の可能性があって、「何か (something)」は疑問詞ベースであるというような場合である。]

(Haspelmath 2013 ; 和訳は筆者 (深澤) による)

このタイプの地理的パターンははっきりしない (Haspelmath 2013)。アイヌ語樺太方言において、疑問詞 *hemata* 「何 (what)」、*naata* 「誰 (who)」に対する不定表現は *neeraanpe (ka)* 「何か (something)」、*naata (ka)* 「誰か (somebody)」である。

neeraanpe 「何か (something)」の *nee* は不定語根、*ra* の語源は不明だが樺太方言では指示詞の *teera* が「あの (that)」を表すので並行に見ることはできる¹²。*an* は存在を表す1項動詞、*=pe* は類別詞「モノ (thing)」とすると、*neeraanpe* 「何か (something)」は総称的な名詞ベースの不定代名詞である。一方、*naata (ka)* 「誰か (somebody)」は疑問詞と同じ語形を使用する疑問詞ベースの不定代名詞と考えられる。以上のことから、樺太方言は混在型と言える。

9. 3. 3. 問題の所在

アイヌ語の方言が不定代名詞の様々なタイプに属することは問題にならない。WALS の地図を見ると、俗ラテン語起源の言語でも、フランス語は I、ルーマニア語は II、スペイン語は III、ポルトガル語は IV というようにタイプがわかれている。説明を要する問題は、沙流グループを除く大多数の北海道方言が、沙流グループの疑問詞をそのまま不定代名詞に使用するのではなく、不定代名詞を疑問詞として使用することである。

	疑問詞 「何 (what)」	不定代名詞 「何か (something)」	タイプ
沙流グループ	<i>hemanta</i>	<i>nep</i>	II
大多数の北海道方言	<i>nep</i>	<i>nep</i>	I

表 9-3 : 類型論のタイプと問題点

¹² Dissel (2003) は、指示詞と疑問詞が歴史的には関係ないが多くの形態・統語的特徴を共有するとし、その動機について語用論的機能の類似を指摘する。

nep の *ne* という語根が元来「疑問」を表す語根なのか「不定」を表す語根なのかによって、以下の二つの可能性が考えられる。

可能性 1：より古い時代は、沙流グループもタイプ I に属していた。

アイヌ語北海道方言では *ne* が「疑問」を表す語根であり、疑問詞 *nep* 「何 (what)」は、不定代名詞 *nep* 「何か (something)」としても用いられた。現代アイヌ語において、沙流グループに疑問代名詞 *hema(n)ta* 「何 (what)」があるのは、樺太方言の *hemata* が伝播してきたためである。

可能性 2：より古い時代は、大多数の北海道方言もタイプ II に属していた。

アイヌ語北海道方言では、*hVm, hVn*¹³ が「疑問」を表す語根、*ne* が「不定」を表す語根であった。それが後に、大多数の北海道方言は *ne* を疑問詞語根として持つようになった。そのため大多数の北海道方言は、共時的にはタイプ I に属するよう見えるが、実際にはタイプ II (「総称的な名詞ベースの不定代名詞」) であると考えられる。

Haspelmath (1997: 176) によると、どの言語においても疑問代名詞は通時的にゆっくり変化する要素であり、通常、その語根は語源を遡れないほど古いと述べられている。その上で、可能性 1 に対する問題は、「不定」を表す標識は借用されやすいが、「疑問」を表す語根は借用されにくい点である (Haspelmath 1997: 184)。例えば、印欧語において「疑問」を表す語根は音韻的・形態的に変化はあっても、それ自体は全く置き換えられていない (Haspelmath 1997: 176)。

一方、可能性 2 に対する問題は、不定代名詞から疑問詞がつくられたという明確な証拠をもつ言語が殆ど見つかっていない点にある (Haspelmath 1997: 176)。さらに、義務的ではないとはいえ、不定表現で *nep ka* のように *ka* 「も (also)」が現れるのは「疑問詞ベースの不定代名詞」である根拠となっており、可能性 2 をとるとすれば、それについても一考を要することになる。

結論から言うと、本論文は可能性 2 を支持しようとするものである。以下の節では、筆者がそのように主張する根拠を論じていく。

9. 4. 通時的考察

9. 4. 1. 疑問詞語根 *hVm, hVn*

本節では、*ne* ではなく、*hVm* や *hVn* が疑問詞語根として北海道で広く使われていたということを述べる。中川 (1996) では、*hempara/ nempara* ‘when’ の語形分布を「ABA 型」

¹³ V は母音を表す。

とし、言語地理学的な考察を行っている。

hempara を A、*nempara* を B とするならば、北海道西部、北海道東部、樺太の間で、ABA という分布になっていることがわかる。前述のように、こうした分布は他にその解釈をさまたげる要素がなければ、A が古く B が新しいと考えるわけだが、この場合も *hempara* の *hem* は「何」などの語根と同じものと考えられるのに対し、*nempara* からは *nep* 「何」、*nen* 「誰」、*nekon* 「どのように」などの対比で、*ne* という語根は導き出せるが、*m* の解釈ができない。むしろこれは *nep* や *nen* などの疑問詞からの類推で *hempara* の語頭の *h* を *n* に変えたものと考えたほうが説明がつく。したがって、形態論的な観点からも *nempara* の方が新しくできた形であるということが支持される。(中川 1996: 8)

この *hem* と *ne* の語根の分布を調べるために、Fukazawa (2013) では *hempak/ nempak* 「いくつ/いくら (how many/ how much)」の語根の分布を調査した。結果として、殆ど例外なく *hempara/ nempara* ‘when’ の分布図と重なることがわかり、北千島にも *han bokúbe* (いくつ (how many)) という疑問詞語根 *hVn* に値する *han* という語根が使用された形跡を確認した(鳥居 1903: 123) (図 9-5, 9-6)。

以上のことから考えると、中川 (1996) でも主張されているように、*hem* という語根を持った形のほうが古いという可能性は高く、これは同時に、古くは北海道方言に *hVm* という疑問詞語根があったということを示唆する。*hempara* は *hem* という疑問詞語根に *para* (1項動詞の「広い」と関係があるかもしれない) がついた形式、*hempak* は *hem* に後置副詞 *pak* 「程」がついた形式と考えられる。

北海道東部の白糠方言には、*nem ne* や *nem ta* という形式が報告されるが、本論文ではこれも /h/ が /n/ に置き換わった例であると仮定する。(9-8) は、田村雅史 (2010) が沙流方言の *hem siyeye* 「何かの病気」と対応する例として示したものである。

(9-8) *e=oman* *oka/ e=kor_* *tures-i/*
 2SG.S=行く.SG 後 / 2SG.A=3.O:持つ 妹-POSS/
u nem ta siyeye/ u ki ayne/
 EP 何 EMP 病気 / EP 3.A:3.O:する あげく/
 「お前が行った後、お前の妹(妻)はなんかの病気になって、そのあげく」

(白糠；田村雅史 2010: 42)

9. 4. 2. 疑問詞は無標か？

不定表現で *nep ka* のように *ka* 「も (also)」が現れるのは、疑問詞から不定代名詞が派生した根拠になりうるものである。しかし、疑問詞のほうが無標であるかという点と厳密には違う。本節では、疑問詞も不定代名詞と同様、選択的に副助詞でマークされることを指摘する。

Fukazawa (2013) では、「それは何 (ですか) ?」という表現形式について、沙流グループでは「何 (what)」が疑問詞語根 *hVm* を有する *hemanta* という形式で表されるのに対し、大多数の北海道方言では、*hemanta* の代わりに *nep ta* という形式が用いられることに注目した。

(9-9) a. *hemanta an?*

何(IR) EXIST.SG

‘What is it?’

(沙流グループ ; 田村 (1996: 180) など)

b. *nep ta an?*

何 EMP EXIST.SG

‘What is it?’

(大多数の北海道方言¹⁴ ; 『アイヌ民俗文化財調査報告書 7 (p. 128) など)

副詞 *ta* については次のような記述がある (【】内は引用者による)。

- ・幌別方言など (金田一・知里 1936 : 137f)¹⁵ :
願望の係となる…【中略】…*okai* を以て結ぶこともある…【中略】…今此の中に *ta* を割り込ませれば感嘆の気持ちが愈々表面に確立して「本当にまあ……なのか」「一体全体……なのか」というような気持ちを表す。…【中略】…この *ta* は副詞及び感動詞の意味を強めることが多い。
- ・樺太方言 (知里 1942: 585) :
語勢を添える。多くの場合願望の係となる。
- ・沙流方言 (田村 1961: 27) :
この方言では、その結びの助詞【*oka*】は必ずしもあるとは限らない。いずれも特にはっきりした意義素はなく、前にある形式の“意味を強める”程度のものである。

¹⁴ 本別方言では *ta* ではなく *tap* となる。

¹⁵ 引用の際は旧字体を改めた。以下、同様。

必要の場合には「つよめの (副) 助詞」と呼ぶことにする

- ・旭川方言 (浅井 1969: 792)

ta 〈こそ〉感嘆的に際立たすと見えるが、特殊な用法である。

- ・静内方言 (奥田 1997: 26f) :

ア. 疑問詞による疑問文のなかで用いられて、疑問の焦点を示したり (36)、文全体の疑問であることを明示したり (37) する。

イ. 疑問詞に直接後続して…【中略】…不定疑問の意味を明示する (38)。用例はあわせて 250 ほどである。…【中略】…

ここで記述している ta には知里 (1942) 田村 (1961) の示したような用法はない。

以下に、奥田 (1997: 27) が示す例文をあげる。

- (9-10) a. *onon arki=p ta onnotayne*
 どこから 3.S:来る.SG=もの.CLF EMP 生意気に
i-rara haw-e ene oka hi an
 それ-3.S:に悪さする 声-POSS このように 3.S:ある.PL こと EXIST.SG
 「どこから来たものかが、生意気にも悪さをするか」 (=36)
- b. *nep kus e=apkas sir-i ta an*
 何 ために 2SG.S=歩く 様子-POSS EMP EXIST.SG
 「何のためにあなたは歩いてきたのですか」 (=37)
- c. *a=kor yupo ka onon ta kamuy*
 4.A=3.O:持つ 兄 も どこから EMP 神の
menoko ek hine e-utanne
 女 3.S:来る.SG て 3.A:3.O:ついて.APPL-同族になる
 「私の兄さんも、どこからか神のような女性が来て、その人と結婚した」 (=38)

奥田 (1997) の「イ. 疑問詞に直接後続」する ta に関連して、大多数の北海道方言で見られる *nep ta* は殆ど *nepta* という形で語彙化してしまっており、副助詞の *ka* はそのさらに後ろに現れる。対して沙流グループでは *nep ta* という表現自体が見つからない。

(9-11) *nep ka ta* vs. *nep ta ka*

- a. *nep ka ta k=e-ninuy rusuy*
 何(ID) も EMP 1SG.A=3.O:について.APPL-枕にする DESID
 「何かを枕にしたい」

(沙流 ; 田村 1996: 99f)

- b. *nep ta ka moymoyke kor an kusu...*
 何 EMP も 3.S:動く ながら 3.S:いる.SG ので
 「何だか動いているので…」

(旭川 ; 砂沢 1983: 152)

- c. *hemanta ka k=erampewtek.*
 何(IR) も 1SG.A=3.O:わからない
 「何もわからない」

(沙流 ; 田村 1996: 180)

- d. *toon ta moymoyke kor an pe*
 向こう LOC 3.S:動く ながら 3.S:いる.SG もの
nep ta i-ki
 何 EMP 3.S:それ-する
 「あそこで動いているものはなんだろう」

(帯広 ; 澤井・田村 2005: 243)

- e. *to, to, hnta moymoyke kor an*
 あそこ あそこ 何か(IR) 3.S:動く ながら 3.S:いる.SG
 「ほらあそこ、あそこに何か動いている」

(沙流 ; 田村 1996: 180)

(9-11a) は不定表現 *nep ka* 「何か (something)」に副助詞 *ta* がついた形、(9-11b) は、疑問詞 *nep* に *ta* という副助詞 *ta* が後続し、さらに副助詞の *ka* が後置した形である。前述したように、この副助詞の *ta* と *ka* の順序は、疑問詞「何 (what)」に *hemanta* をもつ沙流方言と、それ以外の大多数の北海道方言で入れ替えが難しい。疑問詞として *hemanta* と *nep* の両形を保有しているような幌別方言では、沙流グループと同様のふるまい (*nep ka ta*) が確認される。

このような語彙化の背景には、ひとつに疑問詞と不定代名詞で同じ *nep* を使用することに伴う機能の差別化が考えられる。沙流グループに残る *hemanta* の *ta* からの類推もあったかもしれない。(9-11b, d) の *nep ta* という表現は、沙流グループでは (9-11c, e) *hemanta* (や縮約形 *hnta*) のように表現されると考えられる。

また、統語的・機能的類似から疑問詞 *hema(n)ta* の *ta* も、もとは疑問詞に直接後続する *ta* であるとするれば同源であるという推測がたつ¹⁶。そう考えたうえで興味深いのは、沙流グループの *hemanta* の *ta* が接尾し語彙化(化石化)したことで、その直後にさらに副助詞の *ta* をつけるという二重構造が可能になっていることである(例: *hemanta ta?* 「何?」)。

¹⁶ 金田一・知里 (1936 : 137) は、副助詞の *ta* を「本来は「そこ」を意味する中称の指示代名詞」と仮定している (cf. 表 9-1)。

Bhat (2000: 397) によれば、疑問代名詞と不定代名詞は「話し手のある特定の要素に関する知識の欠如」¹⁷を示すという点で共通の意味をもつと考え、疑問代名詞から不定代名詞への「派生」と考える必要はない（寧ろ、不定代名詞が疑問詞的に用いられる）という立場を示している。例えば、中国語（官話）では「疑問」と「不定」で同じ代名詞を用いるが、疑問を表すイントネーションによって区別している（Bhat 2000: 379）。ラコタ語も「疑問」と「不定」で同一形式の代名詞を用いるが、疑問詞疑問文では義務的に「疑問」を表す終助詞がつく（Bhat 2000: 380）。このほかにも、Bhat (2000: 381-382) によって、「疑問」を表す動詞とともに用いることでそれらを区別する言語も紹介されている。このような言語現象がある限り、大多数のアイヌ語北海道方言では不定代名詞が疑問詞に用いられるようになったと考えることも、それほど特異なことではないだろう。

なお、根室方言の資料と考えられる加賀家文書「菊のかんざしみだれ髪」においても、*nep ta* の例が確認されている。

(9-12) a.	子ブタ	チアラケ	クハボ子	アヌワ
	何	女神	我母ニ	なる
	子ブタ	シユ\ルマ	クミツ子	アヌワ
	何	男神	我父ニ	なた

(042 ウ 01-042 ウ 04)

[音素表記・グロス]

<i>“nep ta</i>	<i>ci=arke</i>	<i>ku=hapo</i>	<i>ne an wa</i>
何 EMP	1PL.A=片割れ.POSS	1SG.A=母.POSS	に なる.SG て
<i>nep ta</i>	<i>susuruma</i>	<i>ku=mici</i>	<i>ne an wa</i>
何 EMP	砂埃(?)	1SG.A=父.POSS	に なる て

9. 4. 3. 残された問題—疑問詞疑問文に見られる結びの *an* との関係—

最後に、残された問題として副助詞の *ta* と、疑問詞疑問文で見られる結びの *an* について概観する。まず初めに、北海道十勝（本別）方言で報告されている副助詞 *tap* を見てみたい。切替 (1998:348) によれば、*tap* は「疑問の強調」を表す副助詞と説明され、*sir_ tap an a* は「疑念の念を強調して表す」と述べられている。本別方言では主として疑問詞とともに用いられ、静内方言で *ta* が予測される位置に *tap* が現れる。以下は、奥田 (1997) の *ta* があげる用法と対応する本別方言 *tap* の例である。

¹⁷ Bhat はこれを “information gap” と呼ぶ。Karciski, Serge (1969 [1948]) *Sur la parataxe et la syntaxe en russe*, R. Godel ed. *A Geneva School Reader*, Bloomington: Indiana University Press. は、早くから疑問と不定を表す代名詞を “ignorative pronoun” という用語で呼んでおり (Haspelmath 1997: 175)、その後も、例えば Wierzbicka (1980) *Lingua Mentalis, The Semantics of Natural Language*. Sydney: Academic Press. などによって “ignorative” という考え方が提示されている。

- (9-13) a. *taan imi nen kor=pe tap an a?*
 この 着物 誰 3.A:3.O:持つ=もの EMP EXIST.SG Q
 「この着物は誰のものですか」
 (本別 ; 高橋 2014: 33)
- b. *sir-peker usa nep tap aw-ki ya*
 辺り-明るくなる も 何 EMP 3.S:声-する Q
 「昼になってからも、何を言うのか」
 (本別 ; 切替 1996: 147)
- c. *nen cip-ta wa e=hosipi nankor*
 誰 3.S:舟-掘る て 2SG.S=帰る.SG だろう
sir_ tap an a?
 様子 EMP EXIST.SG Q
 「誰が舟を作って、あなたは帰ることができるでしょうか」
 (本別 ; 切替 1996: 143; 切替 1998: 349)

tap という語形自体はアイヌ語に広く見られるものであり、強調を表す(副)助詞などとして説明される(金田一・知里 1936; 知里 1942; 田村 1961 など)。(9-13c)のような位置に見られる *tap* については、(9-14)のように、日本語で言う「ノダ文」相当の *ru-we/ sir-i/ haw-e/ hum-i ne* 構文でコピュラの *ne* の位置に *tap-an* という形式が用いられることとの関連を考える必要があるだろう。

- (9-14) a. *ku=kor hapo or-o-wa kampi ek*
 1SG.A=持つ:3.O 母 ところ.LOCR-PART 紙 3.S:来る.SG
ru-we tap-an.
 跡-POSS EMP-EXIST
 「私の母から手紙が来たのでございます」
 (沙流 : 田村 1961: 35)
- b. *a=en=kor-e ru-we he tap-an?*
 4.A=1SG.O=持つ-CAUS 跡-POSS Q EMP-EXIST
 「あなたは私に下さったのでございますか」
 (沙流 : 田村 1961: 35)

田村 (1961: 35) は、*tap-an* について「上品なていねいなことばで、ふだんの親しい者同志の会話では用いられない。日本語ならば「ございます調」に相当する」と説明する。加えて、*tap* は「つよめの助詞」(EMP)、*an* は疑問文や感嘆文に現れる *an* (EXIST.SG) と関係が

あることを田村 (1961: 35) は指摘する。

ちなみに、この沙流方言の *tap-an* という形式は、道東の白糠方言で *ta an* となって現れる。

(9-14)	<i>e=cis</i>	<i>aw-e</i>	<i>ta</i>	<i>an</i>	<i>na</i>
	2SG.S=泣く	声-POSS	EMP	EXIST.SG	DCM
	「お前は泣いているんだな」				

(白糠：田村雅史 2010: 288)

tap と *ta* は機能ごと、方言ごとに整理されるべきであろう。*-p* の有無についても音声上の問題として簡単に片づけられることではない。しかし、①「疑問」のスコープを表す *ta(p)* と疑問詞疑問文に用いられる *an*、②平叙文で形式名詞に後置される *ta(p)-an* は、どちらも通常コピュラの *ne* が現れる位置に *an* が現れるという点で確かに類似する。

このようなことから、②の用法は *ta(p)an* として語彙化が進んだものであって、歴史的には「副助詞の *tap* とそれに呼応する存在動詞の *an*」に遡れると本論文では仮定する。

9. 5. まとめ

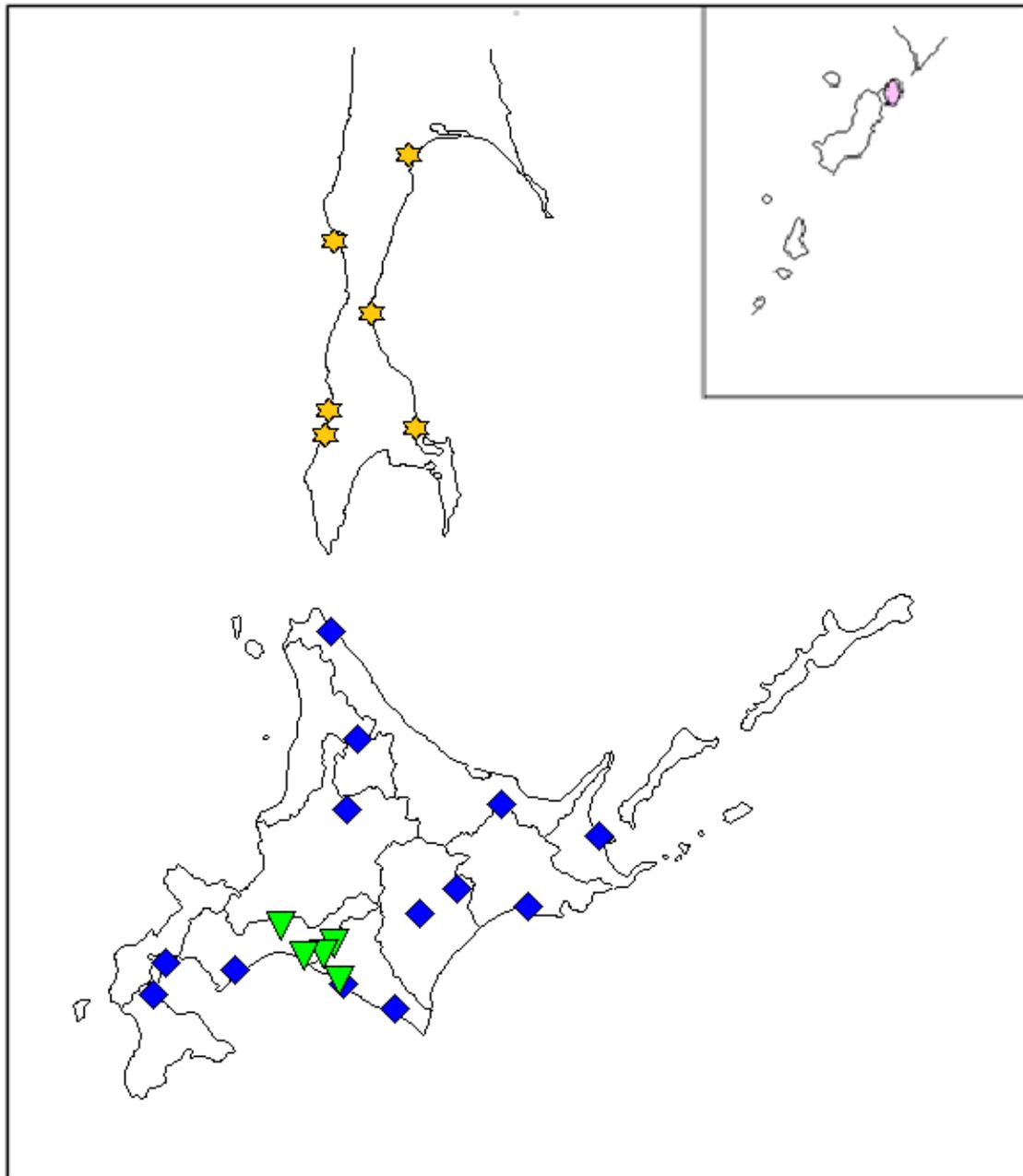
アイヌ語の疑問詞の方言差について、不定代名詞の成立という観点から以下のような可能性を提示する。

アイヌ語北海道方言では、*hVm*, *hVn* が「疑問」を表す語根、*ne* が「不定」を表す語根であった。それが後に、沙流グループを除く大多数の北海道方言は副助詞の *ta(p)* と *ka* による「疑問」と「不定」の使い分けが発達し、*ne* を疑問詞語根にも使用するようになった。

よって、不定代名詞の *nep* 「何か (something)」が疑問代名詞の意味・機能も担うようになり、まるで「疑問詞ベースの不定代名詞」であるかのようなふるまいを見せているのだが、実際は類別詞の *=p* 「モノ」や *=n* 「人」を用いる「総称的な名詞ベースの不定代名詞」であって、大多数の北海道方言がもつ疑問詞は不定代名詞起源であると考えられる。

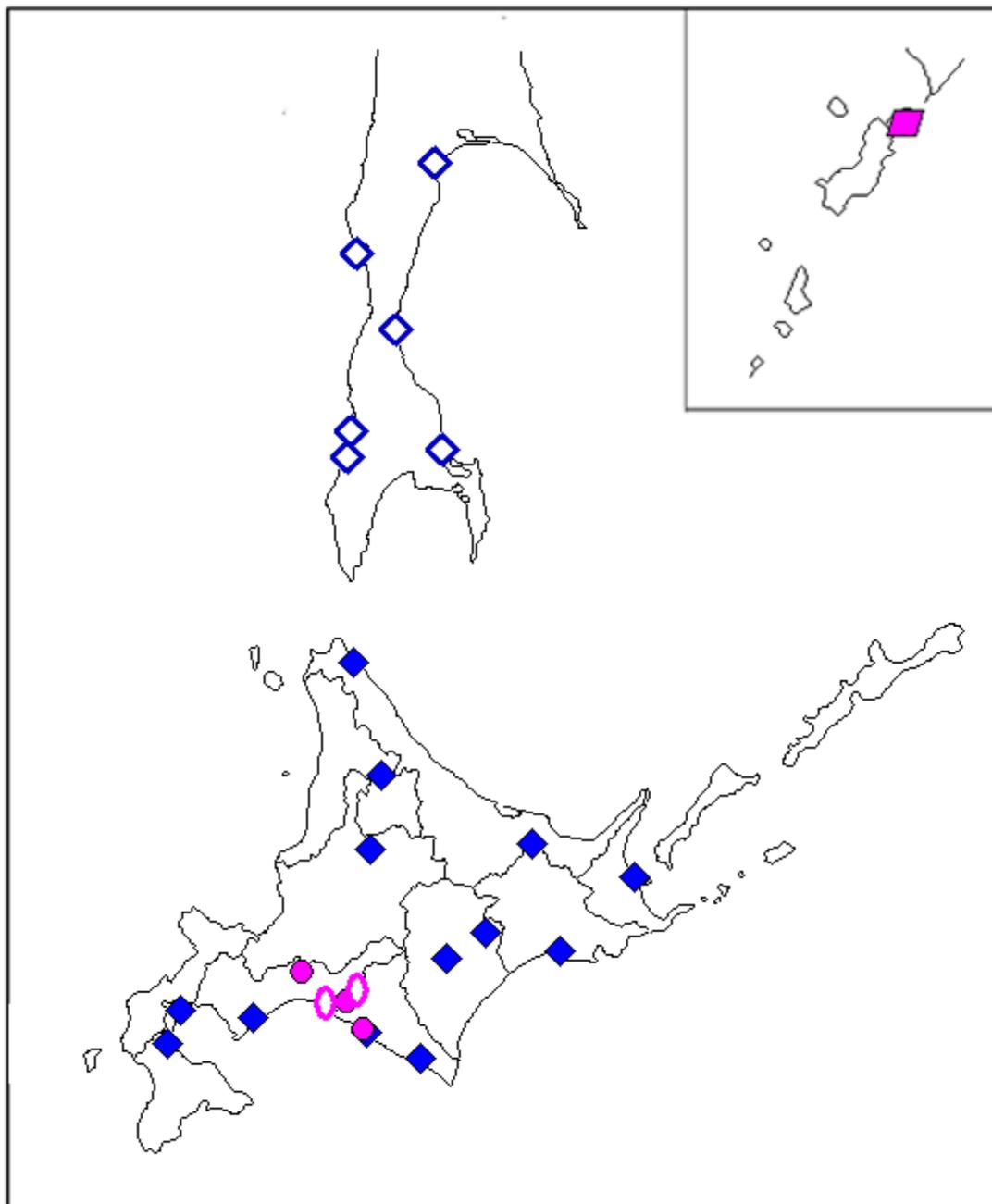
なお、今回は詳細な議論に至らなかったが、*ta(p)* がもともと「焦点化」を表す副詞だったものから、「疑問」のスコープを明示する副助詞として発達した過程については残された問題として記すにとどめておく。

地図



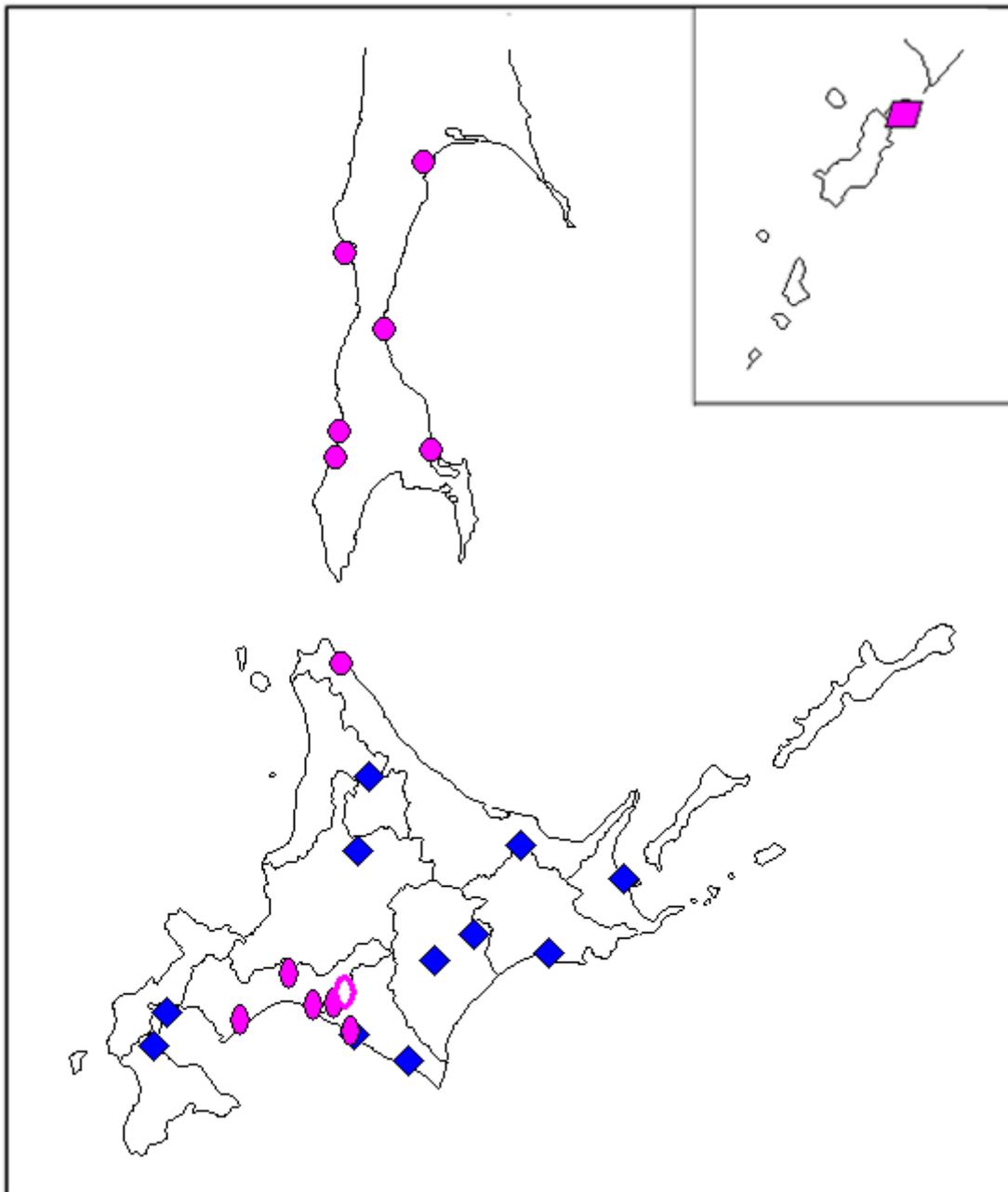
- ◆ *nekon(a)*: 1-3, 7-16, 18
- ▼ *mak(anak)*: 4-6, 14, 17
- ★ *temana*: 19-24
- *uymam*: 25

図 9-1 : 「どのように (how)」



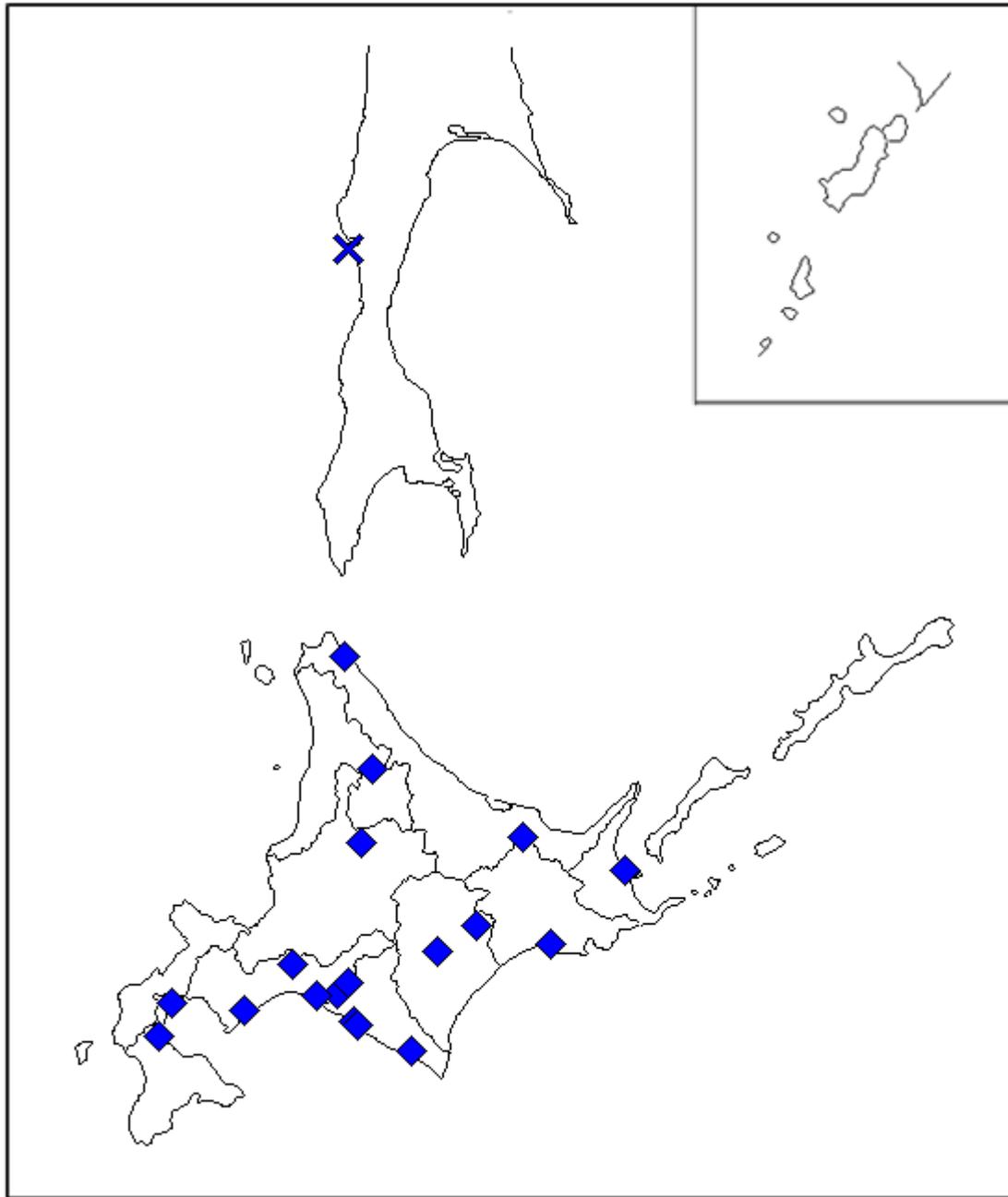
- ◆ *ney*: 1-3, 7-13, 15, 16, 18
- ◇ *nah*: 19-24
- *hunak*: 4, 6, 14
- *hinak*: 5, 17
- *(h)uy*: 25

図 9-2 : 「どこ (where)」



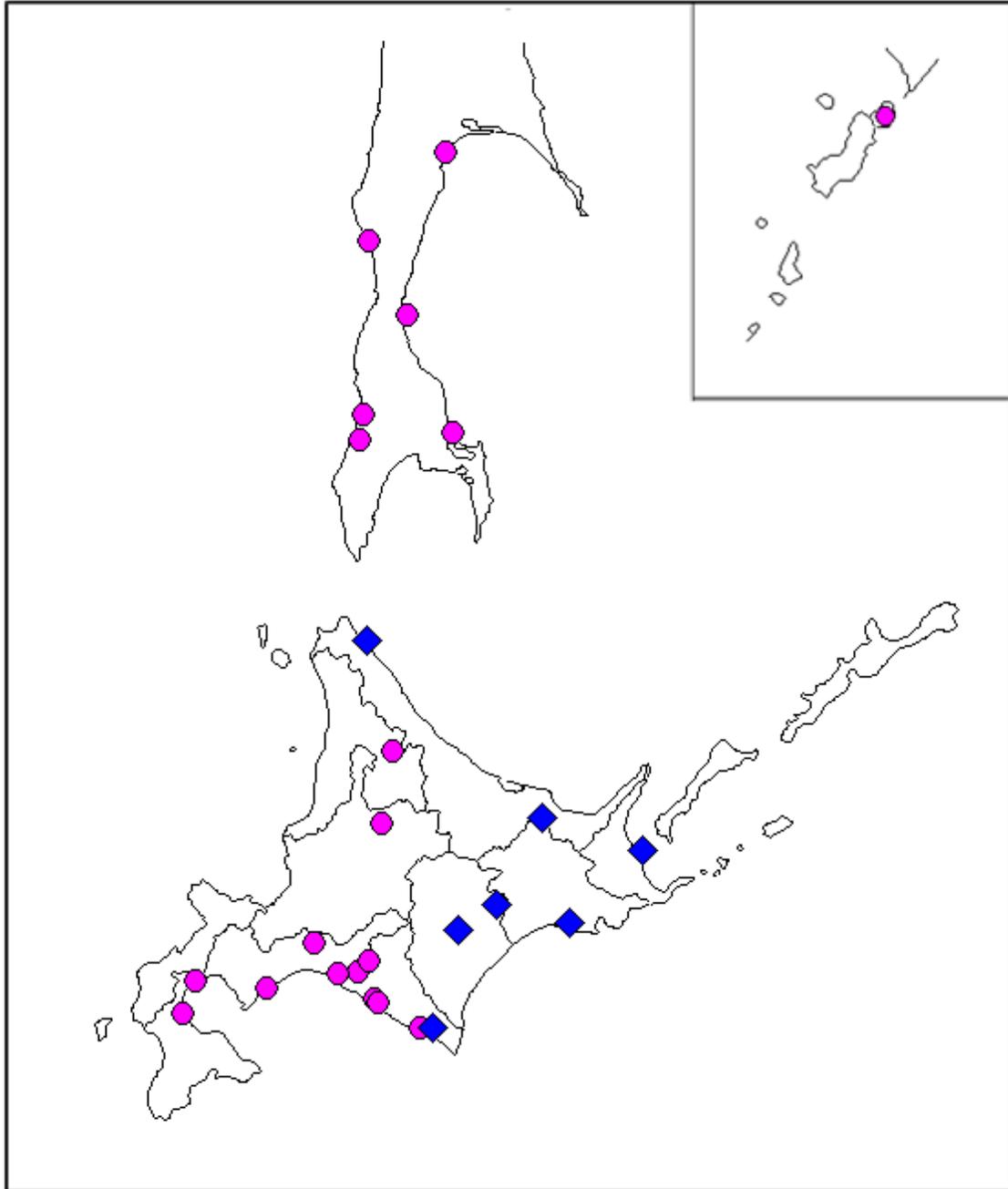
- ◆ *nep*: 1, 2, 7-12, 15, 16, 18
- *hemata*: 13, 19-24
- *hemanta*: 3, 4, 6, 14, 17
- *hinta*: 5
- *hemah?*: 25

図 9-3 : 「何 (what)」



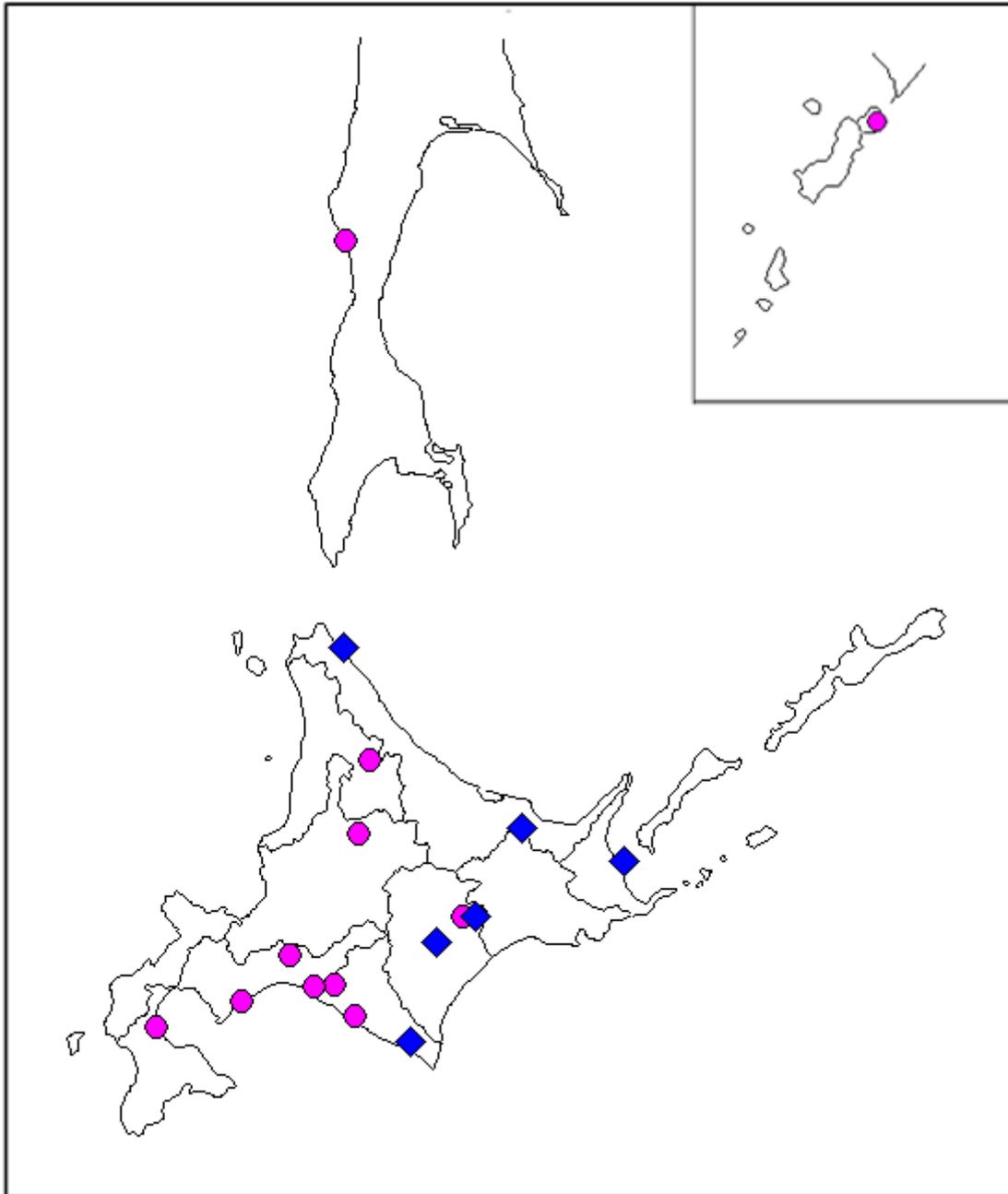
- ◆ *nep: 1-18*
- ✕ *neera an pe: 23*

図 9-4 : 「何 (something, anything)」



- ◆ *nempara*: 7-10, 13, 16, 18
- *hempara*: 1-7, 11, 12, 14, 15, 17, 19-25

図 9-5 : 「いつ (when)」



◆ *nepak*: 8, 10, 13, 16, 18

● *hepak*: 1, 3, 4, 11, 12, 14, 15-17, 23, 25

図 9-6 : 「いくつ/いくら (how many/ how much)」

第10章 疑似的な音対応

— *ca* と *pa*

10.1. はじめに

本章で取り上げる *ca* と *pa* の音対応は、金田一 (1911) の頃から樺太と北海道の方言差として述べられており、「北海道内にも往々起こる変化であるらしい」ということも指摘されている。20世紀半ばになると、服部四郎を中心に行われた大規模な方言調査によって基礎語彙の統計学的な研究が行われるようになり、北海道アイヌ語の東と西の方言差のひとつとしてより一層注目されるようになった。

方言調査の成果 (服部・知里 1960、服部 (編) 1964) は、前述の Asai (1974) の研究や言語地理学的な研究 (Kirikae 1994、中川 1996 など) をもたらすことになり、それとともに *ca* と *pa* に関する歴史的考察も20世紀初頭の金田一の研究から大きく揺れ動くものとなった。Kirikae (1994) は、この対応関係をもつ語彙等を9つのグループに分け、2つを除く7つのグループを「口」に關係する単語ないしは語構成要素とみなしている。

本章では、「口」の意味拡張と語彙の関連を整理し、古文獻の記録や地理的分布を手掛かりにこれらの音対応について再検討する。

10.2. 先行研究

10.2.1. *pa* > *ca*

金田一 (1911: 27) は、樺太アイヌ語の「音韻変化」のひとつとして、「*p* が *ch* になっていること」を指摘した。その後、金田一 (1931: 28)、金田一・知里 (1936: 14)、知里 (1942: 480) において、その扱いはやはり音韻変化の範疇にあり続け、なかでも知里 (1942) は「通時的音韻変化」の中にこれを含めている。(10-1) は、金田一や知里によって取り上げられた語彙例をリスト化したものである¹。

知里 (1942: 480) は、「北海道南部方言の*pa*で始まる若干語 (大部分は「口」を意味する *pa* からの派生又は合成語) が北海道北部方言及び樺太方言では *ča* に転化してゐる」と述べ、この時から既に「口」という意味との関連性を指摘していることは重要である。しかしな

¹ どのような語彙が取り上げられているかというのを知るのが第一の目的であるため、原文のローマ字表記から一部表記を変更して記載した。例えば、*x* は *h* に、*cha* は *ca* に変更している。また和訳の多くは知里 (1942) を参考にした。

がら、*pa > ca* という考えに対する根拠は述べられていない。

(10-1) 金田一・知里による語彙例：

アイヌ語語彙	和訳	出典
a. <i>par(o) > car(o)</i>	「口」	(金田一 1911, 1931, 金田一・知里 1936, 知里 1942)
b. <i>pa > ca</i>	「口」	(知里 1942)
c. <i>*sanpa > sanca</i>	「唇」	(金田一・知里 1936)
d. <i>papus > capus</i>	「唇」	(金田一 1931, 金田一・知里 1936, 知里 1942)
e. <i>patoy > catoy</i>	「唇」	(知里 1942)
f. <i>pawetok > cawetok</i>	「雄弁である」	(知里 1942)
g. <i>upaskuma > ucaskuma</i>	「昔語り(をす)」	(金田一・知里 1936, 知里 1942)
h. <i>kopan > kocan</i>	「～を拒む」	(金田一 1911, 金田一・知里 1936, 知里 1942)
i. <i>epakasnu > ecakasnu(kara)</i>	「～を～に教える」	(金田一 1911)
j. <i>pakasnu > cakasno</i>	「～を教える」	(知里 1942)
k. <i>panakte > canakte</i>	「～を罰する」	(知里 1942)
l. <i>pan > can</i>	「薄い」	(知里 1942)
m. <i>pas > cas</i>	「駆ける」	(金田一 1911, 知里 1942)

10. 2. 2. **Xa > ca/pa*

Naert (1958: 43-44) は、それまでに出版されたアイヌ語文献からアイヌ語の文法を記述したフランス人であり、*ca* と *pa* の音対応についても例をあげて説明している。ここでは、(10-1) に重ならない例のみ (10-2) として掲載する。なお、Naert (1958) の例の大部分は、バチエラーの『アイヌ・英・和辞典』第四版からの引用である。

金田一や知里も *ca* と *pa* は方言差であると主張していたが、Naert (1958) も *p* をもつ形がもっぱら胆振や日高に属するとし、*p* と *c* は明らかに方言的な区別であると述べている。そして *ca* と *pa* の対応例がこのように多く見出される状況から、Naert (1958) は、少なくとも子音の *p-* と *c-* が対応する限り、そのペアは同一の原型に遡ることができるとも断言している。

/c/ と */p/* のように調音点が遠く離れた子音の対応を持つ場合、祖語として一つの子音音素をたてることや、一方から他方への音韻変化と考えることは、その中間段階を説明することができない限り認めがたい。そこで Naert は、(10-2e) の *payaya* と *cayaya* に対して

koyaya も「ざらざらした；もじゃもじゃした；でこぼこの (Rough. Knobby)」という意味を持つ同一の原型からできた語形であるとし、ギリシア語にも見られるように元々は両唇軟口蓋音 (labial-velar plosive) であったことを示唆すると説明した。

これですべて解決するのであれば話は早いのだが、/k/ という子音が同時に /c/ と /p/ の両方、あるいは片方に対応している例がほかに見当たらないのが、この論の弱いところである。例えば、典型的なペアである *car:par* 「口」に対して、*kar* というのは「～をつくる」という 2 項動詞で、語源的にも別物と考えられる。また、Naert があげた *kayaya* が *payaya* と *cayaya* に対応しているかどうか、*kayaya* の用例がバチェラーの辞典を除いて殆ど確認できないことから、いささか怪しげである。

(10-2) Naert (1958: 43-44) の語彙例² :

<i>pa</i> を持つ語彙	和訳	<i>ca</i> を持つ語彙	和訳
a. <i>pakes</i>	「飲み残しのお酒、祝宴の席で客に分け与えられるお酒 (御流れ) (<i>Sake left over at a fest and divided among the guests. Dregs. Goblet remains.</i>)」	a. <i>cakes</i>	(<i>pakes</i> と同)
b. <i>pok</i>	「～の下 (<i>Under. Beneath. Underneath.</i>)」	b. <i>cok</i>	(<i>pok</i> と同)
c. <i>patarayē</i>	「～を推量する (<i>To surmise. To guess.</i>)」	c. <i>catarayē</i>	(<i>patarayē</i> と同)
d. <i>payayke</i>	「ざらざらしている；もじゃもじゃしている (Rough)」	d. <i>cayayke</i>	「(髪の毛などが) 逆立つ (<i>Standing on end (as one's hair.)</i>)」
e. <i>payaya</i>	「動物のようにその爪を立てる (<i>To hold up as an animal its claws.</i>)」	e. <i>cayaya</i>	「(髪の毛などが) もじゃもじゃしている (<i>Rough (as hair.)</i>)」、 「(爪など) を立てる (<i>To hold up (as claws.)</i>)」

服部もかつては「音韻変化により *par* 《口》と *car* 《口》が生じた」(服部・知里 1960)

² 原典を尊重してバチェラーの英訳はそのまま残し、筆者(深澤)が和訳した。(10-2d, f) については本章 10.4.3 節で論じる。

共通の祖語として一つの子音音素を立てて考えていたようだが、その後の服部（編）（1964）の序説では、まるでその部分を避けたかのように *ca* と *pa* の歴史的関係を明確に述べてはいない。この説を正当化するには、まだ状況証拠が揃っていないと言わざるを得ないのである。

10. 2. 3. *ca > pa*

中川（1996）は言語地理学をアイヌ語に適用した先駆的な研究で、*ca > pa* という金田一や知里とは逆の新たな可能性を提示している。この背景には、「口」を意味する *car* が樺太と千島といったお互いに離れた地域にまで及んでいることや、「口」の語根と考えられる *ca* が *pa* の地域³ でも見られるということがある。

(10-3) *pa* の地域で見られる *ca* を含む語形

a. <i>sanca or_ ta mina kane</i>	「口元に笑みを浮かべて」	[幌別、沙流]
b. <i>suma tum cas cas towatowato</i>	「石の中ちゃらちゃら（サケへ ⁴ ）」	[幌別]
c. <i>cancanke</i>	「湯気などが立ち上って消える」	[沙流、千歳]
d. <i>yaykocapis</i>	「つぶやく (to mutter)」	[八雲]
e. <i>apaca</i>	「庭、戸外 (yard, garden)」	[沙流]
f. <i>caranke</i>	「口論する」	[北海道全域]

(a-c: 中川 1996、d-e. Kirikae 1994、f. 田村1996)

傍証になりうるものというのは Naert の説に比べてはるかに多いうえに、実は Naert も

³ Kirikae (1994) は *car* と *par* の分布をベースに、*car* が見られる地域を 'ca-areas'、*par* が見られる地域を 'pa-areas' と呼ぶ。以下、「*ca* の地域」や「*pa* の地域」と呼ぶものは、Kirikae (1994) に則っている。

⁴ サケへとは、アイヌの神謡に出てくる繰り返しの表現（折返、リフレイン）のことを言う。中川（1996）は、知里幸恵（1923）『アイヌ神謡集』第二話「狐が自ら歌った謡「トワトワト」」からこのサケへを引用している。

和訳は知里幸恵の原典から引用したが、弟の知里真志保（1954: 167）が「石原さらさら駆け抜ける」という和訳をあて「狐が実際に日中石原【中略】を駆けずりまわるのである」と説明しているように、*cas* は「駆ける」という動作を表している。なお、十勝方言の話者である澤井トメノ氏は *cas* を「急ぎ足」と説明している（澤井 2006: 37）。

中川 (1996) を支持する大きな証拠を見つけている。それは、Furet (1860) が北海道最南端の函館方言として 43 語のアイヌ語を記載した語彙リスト "Vocabulaire aïno de Hakodaté" (函館のアイヌ語 [仏文]) に「口 (Bouche)」という意味で "Tchara" /car(a)⁵ という語を発見したことである。もしこれが本当に函館方言であれば、*par* 地帯の西側のはずれに *car* が見つかったということになる。Naert は興味深い例という意味でこれをあげているにすぎなかったが、この発見は言語地理学的に言えば、*car* が *par* という語形を挟みこむような地理的分布、つまりは「ABA 分布」を見せるということを示唆するもので、*car* が *par* よりも古いという解釈可能性をもたらす大発見なのである。

一方、この論にとって不都合となりそうな例、つまり本章 10.2.1 節で見た金田一や知里のとする説を支持する例も見つかっている。

(10-4) *ca* の地域で見られる *pa* の語形 :

- | | | |
|--|------------------------------|------------------|
| a. <i>aapa</i> | 「父親」 | [樺太] |
| b. <i>téotanpaun</i> | 「こちら側 (this side)」 | [帯広] |
| c. <i>So para pok ush nai</i> (<i>so par pok us nay</i>) | 「滝口の下にある沢 (地名)」 | [浦河] |
| d. <i>Nisei paro oma nai</i> (<i>nisey par(o) oma nay</i>) | 「崖の口に入る沢 (地名)」 | [十勝] |
| e. <i>Para etoko</i> (<i>par etoko</i>) | 「口の先 (地名)」 | [北見] |
| f. <i>Panke tuye para</i> (<i>panke tuye par</i>) | 「 <i>tuye</i> (?) 口の下流 (地名)」 | [天塩] |
| g. <i>parunpe</i> | 「舌」 | [様似、帯広、釧路、美幌、名寄] |
| h. <i>epakasnu</i> | 「～を～に教える」 | [浦河、様似] |

(a: 中川 1996、b-f: Kirikae 1994 : 括弧内の表記変更は筆者 (深澤) による、
g. 服部・知里 1960、h. 筆者 (深澤) による)

(10-4c-f) は、永田方正 (1909) 『北海道蝦夷語地名解』(再版. 北海道庁) に記載される地名について Kirikae (1994: 109) が例示したものである。地域ごとに一例ずつ取り上げたが、*ca* の地域における *par* を含む地名としては合わせて 9 例があがっている。

⁵ Furet (1860: 111-112) で "ch" の綴りは /s/ ([s], [ʃ]) を表す。例えば、"Chapa" /sapa/ 「頭 (Tête)」、"Chik" /sik/ 「目 (Oeil)」【深澤注: Oeil の誤植か】、"Nich" /nis/ 「雲 (Nuage)」、"Chouma" /suma/ 「石 (Pierre)」。「tch」の綴りは /c/ ([ts], [tʃ], [dʒ], [dz]) になり、「Tchara」は /car(a)/ ということになる。/r/ の後の [ə] は音素と考えないものであるが、非母語話者には何らかの母音として書きとられてしまうことがある。ここでも同様であり、最後の母音 *a* は音素として考えない [ə] であった可能性があるため括弧内に入れた。

このほかにも、「唇」という語形が「口」の地理的分布と完全に一致しないなどということは幾度となく言及されてきている（服部・知里 1960、服部（編）1964、Asai 1974、Kirikae 1994）。しかし、*ca* の地域と *pa* の地域の境界近くに位置するような方言（旭川や名寄、静内）に関して言えば、東西にわかれる方言語彙の両形をもっているという現象はまったく珍しくないことであるので、ここではいちいち述べないことにする。

10. 2. 4. **cal* **pa* (弁別的な「口」を意味する形態素) > *cal pa*

Kirikae (1994) は *ca* と *pa* の音韻対応について服部（編）(1964) から語彙を抽出し、それを9つのグループ (Group 1~9) に分類した。以下はそのグループと対応する語彙例である。

(10-5) Kirikae (1994) の9つのグループ⁶

- | | |
|--|---|
| Group 1. <i>car</i> and <i>par</i> | 「口 (mouth)」 |
| Group 2. <i>ca</i> and <i>pa</i> | 「口 (mouth)」 |
| Group 3. <i>caw</i> and <i>paw</i> | 「声 (a voice)」 |
| Group 4. <i>ca(k)</i> and <i>pa(k)</i> | 「教える (to teach)」や「罰する (to punish)」
に含まれる語根 |
| Group 5. <i>ca</i> and <i>pa</i> | 「縁 (edge)」 |
| Group 6. <i>can</i> and <i>pan</i> | 「薄い (to be light)」 |
| Group 7. <i>kocan</i> and <i>kopan</i> | 「嫌う、断る (to dislike it; to refuse)」 |
| Group 8. <i>cas</i> and <i>pas</i> | 「走る (to run)」 |
| Group 9. <i>ca</i> and <i>pa</i> | 「川上 (the upper reaches of a river)」 |

(10-6) 各々のグループに含まれる語彙例 (Kirikae 1994)⁷

- | | |
|---|--|
| Group 1. <i>carkar</i> & <i>parkar</i> | 「から (辛) い [唐辛子等の] (to be hot, pungent, spicy)」 |
| Group 2. <i>capus</i> 等 & <i>papus</i> 等 | 「くちびる (lips)」 |
| Group 3. <i>cawetokkor</i> 等 & <i>pawetokkor, pawasno</i> | 「りこう (伶俐) な (to be clever, bright)」 |
| Group 4. <i>(e)pakasnu</i> 等 & <i>(e)cakasnu</i> 等 | 「教える (to teach somebody; to inform; to tell)」 |
| Group 5. <i>ca(ke), cakirurke</i> 等 & <i>parur(ke)</i> 等 | |

⁶ 和訳は筆者（深澤）による。

⁷ 和訳は服部（編）(1964) から引用した。

「ふち (縁) (edge, rim, brim)」

Group 6. *ruri can, pecan* 等 & *ruri pan, pan* 等

「うすい [淡] (to be light)」

Group 7. *kocan & kopan*

「きら (嫌) う (to dislike)」、 「断わる (to refuse)」

Group 8. *cas* 等 & *pas* 等

「走る (to run)」

Group 9. *petca & petpa*

「川上 (the upper reaches [of a river], up-river)」

Kirikae (1994: 113) はグループ 8 と 9 を除いた大多数のグループが「口」という意味に関係する単語ないしは語構成要素とみなすことができると考えた。すなわち、1 から 4 までのグループを「いずれも器官としての「口」、言語活動に関連する単語ないし語構成要素」(p. 113)、5 はメタファーによる「口」からの派生、6 の「薄い」は、味覚としての「薄い」が中心的な意味であるなら、やはり「口」という意味に結び付けられると考え、7 はそれに *ko-* という充当態の接頭辞がついた形とみなしている。

よって、Kirikae (1994) は「祖語において既に意味上何らかの違いのある二つの「口」を意味する形態素 **pa* と **ca* があつた」と推定し、Naert (1958: 43-44) が主張するような単一の子音 (**Xa*) に遡るという考え方については、「音変化の考え方そのものを否定する結論である」として支持しなかった。

10. 3. 「口」の意味拡張：メタファーとメトニミー

先行研究で述べられてきた例からもわかるように、母音が /e, i, o, u/ の場合には /c/ と /p/ が対応しないため、これらは純粋な意味での音対応とは言えないことになる。そのうえ Kirikae (1994) の言うように、/ca/ と /pa/ の対応をもつ語類はメトニミーやメタファーによる意味拡張を経ていると説明できるものが殆どである。よって、筆者は通辞的な音韻変化以外で語彙の選択や置き換えが生じた結果、疑似的な音対応が生じたものとする。以下では、中川 (1996) と Kirikae (1994) の説を基盤に新たな状況証拠を追加していくなかで、/ca/ と /pa/ の対応とその成立について新たな視点を提示したい。

Kirikae (1994) の説の検証には意味の面を扱わざるをえない。/ca/ と /pa/ という対応がありながら、「口」という意味には関係がなさそうなものはあるのか。あるいは、「口」という意味に関連しそうであっても、その対応を持たないものはあるのか。こうしたことを考えるために、まずは通言語的のどのようなものが「口」からの意味拡張として捉えられているかを確認し、/ca/ と /pa/ の対応をもつ語形が「口」からの派生として難なく考えられるかどうか再検討してみることにする。

Hilpert (2007) は、Bybee et al. (1994)⁸ から 76 の言語における身体部位詞の意味拡張について調べ、「口」と「舌」からの拡張について (10-7) のようにまとめている⁹。なお Hilpert (2007) は、「口」や「舌」が通言語的に「言語」という概念へ意味的に派生すると主張する。その派生過程は、「{口、舌 (mouth, tongue)} → 発話 (speech) → {発話行為 (speech act)¹⁰、語 (word)}」(p. 88) のように連続的なものであり、派生にはメトニミー (metonymy) が大きく関与しているとも述べられている。

(10-7) 身体部位詞の意味拡張 (《》内の数字は76言語のうち当てはまる言語数)

身体部位 (BODY PART)	拡張 (EXTENSION)
口 (mouth)	発話 (speech) 《32》、開放、開始 (opening) 《19》、ふち (edge) 《11》、 発話行為 (speech act) 《9》、入口 (entrance) 《8》、くちばし (beak) 《7》
舌 (tongue)	発話 (speech) 《26》、なめる (lick) 《7》、発話行為 (speech act) 《6》、 刃 (blade) 《2》、語 (word) 《2》

(Hilpert 2007: 85 ; 和訳は深澤による)

有菌 (2005) は、日本語の「手」や「口」を含む慣用表現の意味分類を行った研究で、「行為のための道具メトニミー (INSTRUMENT FOR ACTION metonymy)」をベースに、「口」が〈摂食行為〉と〈言語行為〉の二つの行為を行う道具として用いられるとした。さらに、これに加えて、形状の類似性に基づき〈モノの出入りするところ〉というメタファーによる意味拡張をひとつ立てている。また、サイソンブーン (2008) は、日本語とタイ語の比較によって「口」の意味拡張について論じるなかで、メトニミーによる意味拡張に〈感情〉を表すための道具という考えを取り入れている。

メトニミーやメタファーは認知言語学のなかでとりわけ研究されてきたものであり、「メトニミー」と一口に言っても様々な概念による意味拡張があり、またメトニミーの定義も人によって異なる場合がある。本論文におけるこれらの定義は Lakoff and Johnson (1980 [2003: 35-36]) に従い、ある実体を用いてそれと関連づけられる別の実体に言及することを「メトニミー」とし、「全体を表す部分メトニミー (THE PART FOR THE WHOLE metonymy)¹¹」もこのなかに含まれることにする。

⁸ Bybee, J. L., Perkins, R. D. and W. Pagliuca. (1994) *The Evolution of Grammar: Tense, aspect and mood in the languages of the world*. Chicago: University of Chicago Press.

⁹ 和訳は筆者 (深澤) によるが、適訳が不明であるものもいくつかある。例えば、opening の意味については詳細がなく、訳語として何が適当であるかわからなかったものの一つである。

¹⁰ 「同意 (agreement)」、「うわさ話 (gossip)」、「誇張 (exaggeration)」など、発話 (speech) に対して付加的な意味を持つもの。

¹¹ 「シネクドキ (synecdoche)」と呼ばれることもある。

なお、本論文はアイヌ語の「口」に関する意味拡張のネットワークを確立することが目的ではないので、より詳細な分析・分類は行わない。先行研究とアイヌ語の用例を照らし合わせたうえで、次のように意味拡張の大分類をまとめる。

I. 行為のための道具 (INSTRUMENT FOR ACTION) メトニミー

《口が道具となる行為》

- ①言語行為
- ②摂食行為
- ③感情表現

II. モノは人間 (OBJECTS ARE HUMAN BEINGS) メタファー

《モノを人間とみなせば口にあたる場所》

- ①入口
- ②端、縁

このほか、*ca:pa* は口の周辺部を表す語彙の語根になっており、「唇」、「舌」、「ひげ」、「唇の色」、「口の刺青」、「くちばし」などは、*ca:pa* という語根を持つ複合語として考えられ、その多くはメタファーによる意味拡張が関わっている。例えば、(10-2a) で見た *pa-kes:ca-kes* 「飲み残しのお酒、祝宴の席で客に分け与えられるお酒（御流れ）」は、*pa:ca* に *kes* 「～の末端」という意味の位置名詞が合わさった複合語と考えられる。ここでの *pa:ca* は「食べ物や飲み物」という意味の拡張を遂げている。

10. 4. /ca/ と /pa/ の地理的分布

中川 (1996) は「口」を表す *car* と *par* を「東西型」の分布と呼び、「この語形の境界線がいわゆるスムンクルとメナスンクルのいた境界のあたりに引けるということは、こうした地域グループの成立以降に発生した変化であるという可能性が考えられる」と述べている。

スムンクル (*Sumunkur*) と メナスンクル (*Menasunkur*) というのは、1669年のシャクシャインの戦いの発端ともなった地域グループのことで、静内川のあたりを境界として西側がスムンクル (西の人)、東側がメナスンクル (東の人) と呼ばれ、いつの時期からなのかは不明だが、少なくとも1669年以前から両者は拮抗し合っており、それが表面化して大きな戦いに繋がったものと考えられる。

この「東西型」の東が *ca* の地域、西が *pa* の地域で、樺太と北千島は *ca* の地域に含まれる。10.4節では、具体的な例や地理的分布とともに検討していくことにする。

10.4.1. 「口」と「からい」

10.4.1.1. 「口」

図10-1と図10-2はそれぞれ「口」と「からい」の分布図である。図10-1の「口」には二つの形式 *car* と *par* があり、これらは「口」の概念を表す形式で「概念形」などと呼ばれる。これに対し、「～の口」という何かに所属していることを表す形は「所属形」と呼ばれる。この「所属形」は、*car-o*, *car-oho*, *par-o*, *par-oho* などという形式であり、所有者は3人称の場合を除いて (10-8) のように主格の人称接辞でマークされる。

- (10-8) a. *ku=car-o(ho)* 「私の口」
 1SG.A=口-POSS
 b. *e=car-o(ho)* 「あなたの口」
 2SG.A=口-POSS
 c. *ci=car-o(ho)* 「私たちの口」
 1PL.A=口-POSS
 d. *eci=car-o(ho)* 「あなたたちの口」
 2PL.A=口-POSS
 e. *an=car-o(ho)* 「(物語の中で) 私の口」
 4.A=口-POSS

なお、この *car* と *par* は「複合語である」(Kirikae 1994: 113) とみなされ、*ca* や *pa* は「その語根」(中川 1996: 7) と考えられてきた。その背景には、これらの語が *ca:pa* 「口」-*or* 「(～の) 中」という語構成であるという見方があるようで、この *or* というのは長形の *oro* という形式を持っており、「口」の所属形式が *caro* や *paro* という形式をとる理由にもなっている。

知里 (1952) は「アイヌ語に於ける母音調和」という論文で、[-a・-o] の例が *par-o* の一例しかなかったと述べていることから、このような母音の組み合わせはアイヌ語において例外的なものだということが分かる。つまり、*or* が複合されていると考えることは、頻度の高い *cari:pari* や *caru:paru* のような母音調和を起こさなかった理由の説明にもなるわけである。ただし、知里 (1952: 118) は樺太方言に見られる *caru* という概念形の形式を見逃さず、本来は *par* (口) — *paru* (彼の口) であったと思われると述べている。樺太方言には *cara* という概念形があることも分かっており、これらをどのように考えるべきかという問題は未だに残っているようである。

10.4.1.2. 「からい」

アイヌ語で「からい」は *carkar* や *parkar* という1項動詞で表される。これは他動詞（2項動詞）が目的語を抱合した動詞で、*car/par* 「口」 + *kar* 「～をつくる、～をする」という語構成であると考えられる。「焼酎」が *carkar-pe* や *parkar-pe* 「からい-もの」と呼ばれていたことから、*carkar* や *parkar* は焼酎のような辛さのことを指したということが考えられる。一説には「酒と言えば甘酸っぱい自家醸造の濁酒しか馴染みのない昔のアイヌにとって日本の清酒、焼酎などは辛い物であり、砂糖を入れて飲んだものと言う」（太田 2005: 153）とある。

動詞の *kar* には、ほかにも「（木や草の実）を採る」や「（雨や風）に当たる」などという同音意義の2項動詞が報告されている（田村1996: 280）。*kar* は本来、英語の *make* のような軽動詞の働きをするために、名詞の後に置かれて様々な意味をもつことがある。*carkar* の *kar* も「～に影響を与える、～を刺激する」というくらいの意味で使われているものと考えられる。

なお、この「からい」という語は空念法師が筆録したという1704年の「狄言葉」にも採録されており、少なくとも1704年からの使用が見込まれる。

(10-9) 一、口をハ	者 ^ゝ ろう ばろう	(<i>paroho</i>)
一、口ノからいと云事ハ	者類可流 はるかる	(<i>parkar</i>)

（國東（編） 2010: 198-201；佐藤 2014: 8）¹²

carkar:parkar 「からい」の地理的分布は、*car:par* 「口」とよく重なっている。このほかにも「口」を「摂食行為」のための道具として捉えられるような語彙に *car:par* を抱合した形式がよく見られる（章末の「付記」を参照）。

10.4.2. 「唇」と「舌」

10.4.2.1. 「唇」

図10-1と地図10-3のとおり、「唇」という語形の地理的分布は「口」の分布と完全に一致しない（服部・知里 1960、服部（編）1964、Asai 1974、Kirikae 1994）。この「唇」という

¹² 國東（編）（2010）の影印と三浦、佐藤の翻刻を参考に筆者（深澤）が編集し直した。

語形には二つのタイプ、Type *-pus* と Type *-toy* があり、前者は *capus* (樺太では *caapus*) と *papus*、後者は *patoy* や *catoy* という語形を含む¹³。これらは *ca/pa* 「口 (の語根)」に *-pus* 「(穀物などの) 穂」がついた形、あるいは *-toy* 「土地、畑」がついた形と分析することができ、いずれも「唇」の見た目を表すメタファーによって派生された複合語であると考えられる。

この語形の地理的な広がり、Type *-pus* を A、Type *-toy* を B とする ABA 分布のようにも見え、Type *-pus* のほうが古い語形であるという可能性もある (ただし、北千島に *catoy* という Type *-toy* の語形があり、北海道の東部を挟んで Type *-toy* が A となる分布にもなっていることから、そう簡単には解釈できないかもしれない)。

旭川と名寄は「唇」を表す *capus/papus/catoy* という三つの語形を持っているが、その区別については不明である。千歳には Type *-pus* と Type *-toy* で使い分けがあるようで、中川 (1995: 323) によると *papus* は「口の出っ張っている部分」であり、*patoy* は「唇全体」ということである。

佐藤玄六郎が執筆したと考えられている『蝦夷拾遺』(1786) に以下のような例がある。

(10-10) a.	口	ハル	
		(<i>par</i>)	
	唇	チャル	
		(<i>car</i>)	
	舌	アウ	
		(<i>aw</i>)	

(大友 [翻刻・校訂] (1943) ; 青島他 [筆写] (1807) 国立国会図書館所蔵)

b.	口	ルル	チャル
		(<i>par?</i>)	(<i>car</i>)
	唇	チャル	チャフシ
		(<i>car</i>)	(<i>capus</i>)
	舌	ハルンベ	アウ
		(<i>parunpe</i>)	(<i>aw</i>)

(筆写者不詳 (1860) 北海道大学所蔵 (旧記 0098))

『蝦夷拾遺』には多くの写本があることが知られているが、大友が翻刻・校訂した (10-10a) はよく知られているもののひとつであろう。注目すべきは、*car* と *par* それぞれに「口」

¹³ シュムシュ島 (北千島) では、*chātoi* (鳥居 1903)。

と「唇」という訳語があてられていることである。(10-10b) の筆写者は不詳であるが、(10-10a) で「ハル」となっている箇所が「ルル」と写されているのは写し間違いであろう。ca 系の語彙 (car や capus) だけが追加されていることから推測するに、ca の地域でアイヌ語を覚えた人が写した疑いがある。

繰り返すが、問題となるのは (10-10a) で「唇」が「チャル」(car) となっている点であり、pa と ca の意味の違いに関するヒントなのではないかと疑っている。もちろん、「口」の方言差 par と car を何かの手違いで「口」と「唇」という見出しに入れてしまったという可能性は十分にある。(10-11) にあげる上原熊次郎の『藻汐草』(1792) が典型例であるが、アイヌ語の古い語彙集は様々な地域で蒐集されたものを含んでいることも少なくない。

(10-11)	口	チャロ (car)	バル (par)	
	唇	チャブシ (capus)	チャモン (camon?)	ハトエ (patoy)
	舌	バルンベ (parunpe)	アウ (aw)	

(上原熊次郎 (1792) 『藻汐草』)

10.4.2.2. 「舌」

ここでは図10-4の「舌」の分布について見てみたい。「舌」の分布については、服部が早くから洞察力に富んだ見解を提示しているのので、まずはそこから話を進めていくことにする。

parunpe 《舌》(44. tongue) に関しては、par 《口》+ un 《にある》+ pe 《もの》という語源説(知里『分類辞典』p.194)が正しいと考えられるから、この形式が、《口》(42. mouth) に対して par を有する方言地域(八雲・長万部・幌別・平取・貫気別・新冠・旭川)ばかりでなく car 《口》を有する地域(様似・帯広・釧路・美幌・名寄)に分布しているのは、方言間の借用関係を意味するものであろう。カラフト方言や宗谷・名寄(知里『分類辞典』p.194によれば、美幌も)が 'aw 《舌》を有する所より見れば、アイヌ語としては《舌》を意味する単語は 'aw が古く(鳥居竜蔵『千島アイヌ』p.140によれば千島方言は auk^h) parúnpe は新しい単語で、音韻変化により par 《口》と car 《口》の差異が生じた後に、parúnpe が par の地域で作られて、car の地域にまで広まったのであろう。

(服部・知里 1960: 373)

幾分重なるが、服部は次のようにも述べている。

恐らく、アイヌ語としては《舌》は 'aw (或いはそれに近い形) であったのが、何らかの理由 (ある種のタブー?) でそれを避けて *parunpe* 《口にある物》という形が使われるようになり、それが広まったものと考えられる。

(服部 (編) 1964: 序説 p. 27)

この *aw* という語形についてであるが、/ʼaw/ 「舌」が発声を行うための器官であるとするれば、アイヌ語の祖語においては /haw/ 「声」と同じ語形であったということも考えられなくはない。例えば、印欧語について次のような指摘がある。

Deformation due to taboo likewise can create difficulties in comparative linguistics. Note for instance the word for 'tongue' in Indo-European. Being the organ of speech, the tongue was in earlier, more "primitive" times considered to be mystically identical with speech and therefore, like speech a supernatural force: Giving a name to somebody or something would give one power over that person or thing.

[比較言語学においてタブーによる変形は同様に困難を生じうるものである。例えば印欧語で《舌》を表す単語について言えば、《舌》は発話器官であるので、より初期の「原始的な」時代には、「舌」は発話やそのような超自然的力 (人やモノに命名することは、それらを超える力を与えることになりえる) と神秘的に同じものであると考えられていた。]

(Hock and Joseph 1996: 233)

アイヌ語の語頭の /h/ は、しばしば声門閉鎖音 (/ʼ/[ʔ]) と音韻対応をなすもので、方言差として知られているペアもある (例: /huraye/ 対 /uraye/ 「～を洗う」、/herikasi/ 対 /erikasi/ 「上方に」、/ham/ 対 /am/ 「爪」など)。もし「声」と「舌」がひとつの語であり、後に同音異義性を持つようになっていったと考えるなら、*parunpe* が *aw* に取って代えられることは、タブーに関わるかどうかとは別に、「過剰な同音異義性 (excessive homonymy)」(Hock and Joseph 1996: 235-236) を避けたことが理由であるとも言える。

では、何故 *carkar:parkar* 「からい」のように「舌」が *ca:pa* 対応を持たず、*parunpe* に対して *carunpe*¹⁴ という語形がないのか。ここで、少し別の角度から見てみることにする。*parunpe* と語構成がよく似ている語に *parunkur* という語がある。これは面白いことに *parunpe* と同様に *ca* の地域にも広がっていることが確認されている語形¹⁵ で、分析的に考

¹⁴ *carunpe* は『番人田吉蝦夷記』(1869-?) にのみ見つかっている。なお、成立年に関しては、藤村他 (2014: 60) が「裏表紙の記載は「渡島国津軽郡」の制定と履歴からして、圓吉が、明治 2 年 3 月、就労した紋別から松前に帰着した以降のものと思われる」と述べている。

¹⁵ *parunkur* は、静内 (奥田 1999)、新冠 (北海道教育庁生涯学習部文化課 (編) 1992)、釧路 (松本他 2004)、浦河 (知里 1975) で見つかる。また、/ca/ のタイプの語形として、*carunkur* が

えると *par-un=kur* 「口-にいる=人」と解される。この語は「雄弁な人」を指す言い方であり、ここで用いられている *par* 「口」は「発話行為」の道具という役割を果たしているものと考えられる。もし、*parunpe* と同様であれば、この語形もまた *pa* の地域でつくられた語であって、後に *ca* の地域に広がったと考えることになる。また、そうでなければ、*ca* の地域もかつては *pa* の地域であり、*parunpe* や *parunkur* はその名残りであると考えられることになるだろう。

もう一点「頭」という語との関連性で考えてみる。*ca* の地域である北海道の東部や北千島では *pake* が「頭」を指す語であり、*pa-ke* 「頭 (の語根)・の部分」と解される (図 10-5 を参照)。そのため、これらの地域では複合語で *pa* が用いられた場合にもっぱら「頭」という意味になるようである¹⁶。一方、北海道西部の *pa* の地域では、通常「頭」のことは *sapa* (<*sa-pa* 前の・頭 (の語根)) と言う。したがって、*pa* という形態素が「口」と「頭」両方の語根として解釈することが可能になってしまうために、(10-12) のように *pa* が「頭」を指しているのか「口」を指しているのか悩んでしまうような語がある。

- (10-12) a. *pa-ke + kosne* 「人のつけぐちをする (「つけごとする」)
 頭(?)-部分 + 3.S:軽い
- b. *pa-ke + sara* 「いばる、えらそうなことばかり言う」
 頭(?)-部分+ 3.S:現れる

(田村 1996: 506)

(10-12) の例は *pa* の地域である沙流方言の例である。*pake* という形をとっていることから、形式は北海道東部の「頭」と同じであるが、メトニミーによる意味拡張としては「口」からの派生でも何ら問題がない。北海道教育委員会の『アイヌ民族文化財調査報告書』シリーズや Kirikae (1994: 106) でも言及されていることだが、雄弁であることはアイヌの文化においてリーダーに必要な資質とされ、それは賢さや聡明さを象徴するものでもあったからである。そういったことが関わって、(10-12) の *pa(ke)* の解釈は「頭」と「口」とで揺れている。

因みに、Andersen (1978) は、49 の言語の傾向から、「頭」と「口」は (もしそれが名付けられているのであれば) 形態素があまり複雑ではない表現として実現されることが多いと指摘している。アイヌ語が祖語において「頭」と「口」が単一の語形 (単一の形態素) であったということは、絶対には言い切れないにせよ、確率としては低そうである。

浦河 (北海道教育庁社会教育部文化課 (編) 1985)、静内 (奥田 1999) にあり、*carkur* が釧路 (松本他 2004) に見られる。

¹⁶ 例えば、北千島のシュムシュ島では次のような語彙が見られる: *pa koni* 「頭痛」、*pačak* 「脳」、*paon* 「禿の」、*paredar* 「ブロンドの」、*pasampiy* 「頭頂」(以上、村山 (1971: 198-199) の「Dybowskii のシュムシュ島アイヌ語小辞典」、*pāarakān* 「頭をなでる」(鳥居 1903: 162)。

The categories in the present data¹⁷ that are usually given morphologically simple expression include the following: HEAD (always labeled by a basic, unanalyzable term); ARM (the one exception to this is the Finnish *kasivarsi*, or "hand handle"); LEG, if labeled; FACE; EYE; MOUTH; and EAR. Other universally labeled parts which are often but not always allotted basic terms are FINGER/TOE and FINGERNAIL/TOENAIL.

〔当該データにおいて大抵形態的にシンプルな表現になるカテゴリーは次の通りである。「頭」（いつも基本的かつ分解できない用語でラベル付けされる）、「腕」（例外はフィンランド語の *kasivarsi* 「手の柄」）、「脚」（名付けられた場合）、「顔」、「目」、「口」、「耳」。ほかに、必ずしもいつも基礎語彙とみなされるわけではないが、どの言語においても名付けられる部位で、「指」や「つま先」、「手の爪」や「足の爪」がある。〕

(Andersen 1978: 353)

話をふりだしに戻すことになるが、Kirikae (1994) の *pa* と *ca* が祖語において「口」と何か関連のある別々の形態素として存在していたという考えが成立するならば、*pa* と *ca* という語根の意味に何らかの意味の違いがあるはずなのである。『蝦夷拾遺』の (10-9a) で、*car* が「唇」、*par* が「口」の訳語として書かれているのを無視できないのは、*pa* が「頭」と「口」の語根として揺れているからでもある。また、*ca* の同音異義語には「～を切り取る」という意味の2項動詞があり、「口」や「唇」の表面上の開閉の動作を考えるとメトニミー的な派生を遂げたものと言えるかもしれない。

「複合語を構成する形態素の方が単一語としての形態素よりも古い段階を保っている」（柴田 1969: 98）というのは言語地理学においても言われていることである。もし *par* のほうが「口腔」や「頭の中」というような概念に近かったとするならば、*parunpe* が「口の中にあるもの（＝舌）」という語形で *ca* の地域に広がったのは不自然ではない。従って、「口」における /ca/ と /pa/ の方言的な差異が成立する以前に *parunpe* が広がった可能性もあるのではないか、というのが筆者の最終的な見解である。

10.4.3. 「口」という概念の外側？

本節では、「口」という概念と関係があるかどうか怪しいもの、「口」という意味に関連しそうでであっても、その対応を持たないものについて見て行く。

¹⁷ Andersen (1978) は8言語を話者から調査し、次の文献から41言語をデータとして使用している；Brown, C. H. (1960) *General principles of human anatomical paronymy and speculations on the growth of paronymic nomenclature*. In *American Ethnologist* 3.

10.4.3.1. 「薄い」

まず一つ目に取り上げるのは、*can:pan* 「薄い」の例である。前述のように、Kirikae (1994: 106-107) は *can:pan* 「薄い」は、味が薄いというのを中心義と考えるなら「口」に関連するという立場をとっている。ただし、*n* については何も説明がない。そもそも、*can:pan* はそれ以上分けるのが難しい形をとっており、無理やり考えて次の二つの可能性がある。

- ① *ca:pa* 「口」と *-n* 「1項動詞形成の接尾辞」
- ② *ca:pa* 「口」と *un* 「～にある (2項動詞)」

①について、*-n* は、*yan* (<*ya-n* 岸・1項動詞形成の接尾辞) 「岸に着く」というような語に見られる接尾辞で、田村 (1996: 402) によると「位置名詞語根に接続して、その方向へ移動することを表す自動詞をつくる」ということである。従って、*ca:pa* は位置名詞語根ではないことがまず問題となる。そして、この *-n* という接尾辞をもつ形式の複数形は *-p* となり、先ほどの *yan* ならば *yap* になるが、*can* はあっても *cap* はない点、さらに「口へ行く」ということが「薄い」という意味に派生するのかがという点も容易には説明できない。

②は、文法的な面では①に比べて問題がないように見えるが、やはり「口にある」という意味が「薄い」という意味へ派生するかどうかの問題となる¹⁸。

Kirikae (1994) では *kocan:kopan* 「～を嫌う」を充当態接頭辞の *ko-* 「～に対して」が *can:pan* についたものとして、「口」と関連付けている。確かに「口」が「感情表現」の道具とみなされ、意味拡張される場合はある (本章 10.3 節を参照)。しかしその場合は、唇の形状で感情を表すのが基本であり (例えば、「唇を突き出す (= 怒りの感情表現など)」、これに関しても検討の余地を残す¹⁹。

10.4.3.2. 「駆ける」

cas:pas 「駆ける」は、Kirikae (1994) において、「口」に結び付けて考えられないものの /*ca*/ と /*pa*/ の対応を持っているという点で例外扱いとなっており、対応の理由も「不明とせざるを得ない」

¹⁸ 2014年5月31日に国立国語研究所および北海道大学アイヌ・先住民研究センター共催「日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究」アイヌ語班平成26年度第1回研究発表会において筆者が「アイヌ語の東と西の方言差：特に /*ca*/ と /*pa*/ の地理的分布と「口」の意味拡張から」として発表した際、北海道大学アイヌ・先住民研究センターの高橋靖以先生より、①のほかにも考えられるひとつの可能性として教えていただいた。本章 10.4.3.2 節で提示した②の可能性も同様である。

¹⁹ 注意が必要なのは、中川 (1996) が *cancanke* 「湯気などが立ち上って消える」という語が *pa* の地域である千歳に見つかることを指摘していることである。*cancanke* の *-ke* がオノマトペを表す語根について1項動詞をつくる接尾辞だとすれば、*cancanke* の *can* はオノマトペと解することになる。

るをえない」(p. 113) としている。これも可能性として分析的に考えるなら、次の二つがある。

- ① *ca:pa* 「口」 + *asi* 「～を立てる (2項動詞)」
 ② *ca:pa* 「口」 + *us* 「～がつく、～が生える (2項動詞)」

①は、*asi* の最後の *i* が落ちると *as* 「立つ」という1項動詞と解釈されてしまうので、母音が脱落した理由が説明できない。②は意味拡張の面でやはり障害がある。また、(10-3b) で見たように、神謡のリフレインとしてこの語が用いられ、それが *pa* の地域に広がっていることは示唆的であり、本論文では *can:pan* 「薄い」とともに *cas:pas* 「駆ける」を *ca:pa* の音対応を持つ周辺の語として位置付けることにする。

10.4.3.3. 「そそけ立つ」、「～を逆立てる」

Naert (1958: 43-44) が出した /*ca/* と /*pa/* の対応をもつ語彙のうち、(10-2d) *cayayke:payayke* と (10-2e) *cayaya:payaya* について確認する。(10-2d) の *payayke* は、『分類アイヌ語辞典人間編』(p. 236) で「そそけだつ；ぞっとする」(幌別方言) という訳語が与えられ、*pay-ay-ke* で「ぞく・ぞく・する」と解されている。(10-2e) の *cayaya* は、『アイヌ語千歳方言辞典』(p. 262) で「*cayaya*【動2】～を逆立てる」とあり、その例に「*mesas cayaya* 「たてがみを逆立てる」」とある。

文法的には、(10-2d) の *cayayke:payayke* が、接尾辞 *-ke* 「擬音や擬態、中でも主に擬態の語根やその重複形について自動詞をつくる」(田村 1996: 292) のついた1項動詞であり、(10-2e) の *cayaya:payaya* が接尾辞 *-a* 「語根やその重複形・派生形に接尾して他動詞をつくる」(田村 1996: 2) のついた2項動詞と考えられる。

なお、(10-2e, d) に見られる語彙の語根は、*ca:pa* ではなく *cay:pay* であって、*ay* という重複の形に接尾辞がついたものである。*cay:pay* は、鳥肌が立つ様子や髪の毛が逆立つようなことを表すオノマトペであろう。また、これらの分布は *cayaya* が *pa* の地域である千歳に見られるように、*ca:pa* の分布と一致しない。また、興味深いことに、沙流川流域の話者である平賀サダモ氏によって、*cayke* と *payke* の両方を使っている例が見つかっている。

(10-13) <i>ku=wen-otop-i</i>	<i>cay-ke-cay-ke</i>	<i>pay-ke-pay-ke</i>	
1SG.A=悪い-髪-POSS	3.S:逆立つ-ACAUS-(重複)	3.S:逆立つ-ACAUSE-(重複)	
<i>kor</i>	<i>icakkere</i>	<i>wa-kusu</i>	<i>ku=sina-sina</i>
ながら	3.S:汚い	て-ので	1SG.A=3.O:縛る-(重複)

「私の汚い髪はボサボサのバサバサで汚いから縛る」

(国立大学法人千葉大学 (編) (2015) 「9-5 会話」 p.793)

10.4.3.4. 「開く」、「開ける」

Hilpert (2007) によると、「口」から "opening" という意味拡張をする言語は76言語中19言語あったという(10.3章(10-7)を参照)。従って、「開く」や「開ける」という動詞に派生することも全くありえないことではないだろうし、そのうえ、それらを表す動詞が /c/ と /m/ の対応を持っているという点が興味深い。しかし、図10-6を見ると「東西型」の分布をなしていないことは一目瞭然である。*cak* や *mak* は、田村 (1996: 41, 376) によると明るさや開放を表す語根ということであり、本論文でもオノマトペを表す語根と考えることにする。ちなみに、この語彙は次の三つのタイプに分かれる。

①Type *cak* : *cak, caka, cakke*

②Type *mak* : *maka, makke*

③Type *sara* : *sara, sarare*

	Type	2項動詞	1項動詞	-keの機能
北海道北部 (宗谷・名寄)	<i>cak</i>	<i>cak-ke</i> CAK-CAUS	<i>cak</i>	使役
北海道大部分	<i>mak</i>	<i>mak-a</i> MAK-CAUS	<i>mak-ke</i> MAK-ACAUS	逆使役
北海道西部 (鶴川・千歳)	<i>cak</i>	<i>cak-a</i> CAK-CAUS ※鶴川では以下の語形も確認される。 <i>cak-ke</i> CAK-ACAUS	<i>cak-ke</i> CAK-ACAUS	逆使役
樺太 (ライチシカ)	<i>cak</i>	<i>cah-ke</i> CAK-CAUS	<i>yay-cah-ke</i> REFL-CAK-CAUS	使役

-ke は、本章10.4.3節で見たように項をひとつ減らす逆使役の接尾辞になる場合もあるが、同形で項をひとつ増やす使役の接尾辞として働くこともある。北海道のなかでも鶴川²⁰や

²⁰ 小林 (2014) では、鶴川方言において *cakke* が1項動詞としても2項動詞としても用いられる場合があると報告され、このような自他同形のタイプについて「方言差という可能性の他に、年代差による特徴という可能性も考えられる」(p. 212) と指摘されている。なお、このタイプの

千歳では、音韻的には宗谷や名寄と同じ Type *cak* をとるが、文法的には北海道の大多数の方言に共通し、*caka* (2項動詞) / *cak-ke* (1項動詞) となる。鶴川方言および千歳方言に関して考えられる歴史的解釈としては、

- ① *maka* だったものが、北部方言の影響で /m/ が /c/ にとって代わられた。
- ② 北海道北部方言と同一形態の *cakke* (2項動詞) / *cak* (1項動詞) だったが、接尾辞の *-ke* の使用に混乱が生じて使役接尾辞が逆使役の接尾辞と解され、*cakke* は1項動詞として解釈されるようになった。それによって、2項動詞の *caka* が逆成された。

のいずれかであろうが、①の場合は近隣の旭川方言や沙流方言が同様の傾向を示していない点が問題になる。鶴川方言で自他同形の動詞として *cakke* が確認されていることも考えると、本論文では②の可能性をとりたい。

また、北海道の周辺に点々と見られる *sara* や *sara-re* (*-re* は使役を表す接尾辞) は、(10-12b) の *pake-sara* の動詞語根と同じものである。加賀家文書「土人イタツチャラルカン」(資料番号95)には、「口あけハ」に「チャロ シヤラコ」(*caro sara ko*) というアイヌ語がつけられている。

10.4.3.5. 「教える」

最後に、「口」と解釈できるかどうかはわからず、その語構成についてもはっきりしない「教える」という語について見てみる。これには以下の二つのタイプがあり、図10-7のような分布を示す。*e-* は「教える」内容を項として取れるようにする充当態の接頭辞である。

- ① Type *-(k)asnu* : (*e*)*pakasnu* (北海道西部地域、北海道北部 (名寄))
 (*e*)*cakasnu* (北海道北部 (宗谷、名寄)、樺太 (ライチシカ))
- ② Type *-(k)oko* : (*e*)*cakoko* (北海道東部地域)

名寄は、(*e*-)*pakasnu* という語形も持っているが、服部(編)(1964)によると「最近使われ出したことば」だという。名寄はもともと *car* を使う *ca* の地域でもあるので、もしかすると北海道東部地域と同様の (*e*-)*cakoko* をそのまた昔に使っていたという可能性がある。また、*ca* の地域と考えられる様似(浦河)の岡本ユミ氏や遠山サキ氏によると、*epakasnu* も *ecakoko* も使用するということである²¹。

北千島のシュムシュ島では *icaku*, *ičaku* が「示す」、*icakukur* が「先生」という意味で採

出現を確認しているのは、「アイヌ語の話者としては若い世代の言葉」(p. 213)ということであった。筆者は、これも *-ke* の使用に対する混乱の現れ方のひとつであると考え。

²¹ 遠山氏については筆者(深澤)の聞き取り調査によるが、岡本氏については中川裕先生よりご教授頂いた。

録されている²²。これは分析的に *i-cak-u* (< もの-CAK-CAUS) と推測することもできるが、(*e-*)*cakoko* や (*e-*)*cakasnu* などの動詞語根も *cak* だと考えた場合、その後ろの *oko* や *asnu* の部分がうまく解釈できない。*-asnu* については「～が優れている」という意味の1項動詞をつくる接尾辞があるが、*pakasnu:cakasnu* は2項動詞であるので動詞の結合価が合わない。

寧ろ、樺太に *caakasno* という語形があること²³ と、*pakasnu:cakasnu* や *cakoko* が例外的に第一音節にアクセントをもつことから推測すれば、*ca:pa* が語根であるというほうが考えやすいと現時点では考えている。後部要素の *-kasno* や *-kasnu* は、後置副詞の *kasuno* 「～以上に、～にもまして」(沙流：田村 1996) や「あまりに、まったく(ない)」(千歳：中川 1995) と何か関係があるかもしれないが、2項動詞になる理由が説明できないので不明と言わざるをえない。

「加賀家文書」を確認すると、「教える」という意味で *epakas(i)* を表したものと思われる「イハカシ」、「イバカシ」、「エハカシ」、「エバカシ」という語が見つかる。北海道の東部で見られるような *ecakoko* も、「イチヤコク」、「イチヤコヽ」、「エチヤコク」、「エチヤコヽ」等として見つかっているが、これらには「咎」という和訳漢字が対応し、特に「罰する」という意味合いで使われることが多い。北海道北部や樺太などで見られる *ecakas(nu)* も「エチヤカシ」、「エチヤカシノ」、「エチヤカシヌ」等として見つかるが、これらには概ね「申渡」という和訳漢字があてられる。現に、「先生」を表す時には「エバカシクル」(*epakas(i)=kur*) という言葉で表し、*ecakoko* も *ecakas(nu)* も使用されない。

現段階で確認できているものでは、上原熊次郎の『藻汐草』には、「教ゆ イバカシ」*epakas(i)* が最も早い時期の記録である。この *epakas(i)* という語は、昭和に入ってから編纂されたアイヌ語辞典や資料などには殆ど確認できず、それ以前の最後の記録と考えられるものは、バチェラーの『アイヌ・英・和辞典』第四版(1938)である。

Epakashi, エパカシ, 教訓. *n.* Teaching. Doctrine. Instruction.

Epakashnu, ムパカシヌ, 教ヘル. *v.t.* To teach. To instruct. Syn: *Eyaihannokkare*.

Epakashnure, エパカシヌレ, 教えさせる. *v.t.* To cause another to teach. (p. 122)

バチェラーの著作を遡ると、『日本アジア協会紀要』の第10巻に記載された "An Ainu Vocabulary" (1882: 220-251)²⁴ では以下のように書かれており、バチェラーが1882年から *epakasi* を「教訓」という名詞として捉えていることがわかる。

Epakashi, Doctrine; instruction.

²² 村山(1971: 161)の「Dybowskiのシムシュ島アイヌ語小辞典」に記載されている。

²³ これは前述した2014年5月31日の研究発表会において北海道大学の丹菊逸治先生よりご指摘頂いたことである。

²⁴ バチェラーが宣教師となるためにイギリスへ帰国した際に執筆した初めてのアイヌ語に関する研究報告の一つである(Refsing 1996: 9)。

Epakashi nu, To learn; lit., to hear doctrine.

Epaashi nuri, To teach; lit., to cause to hear doctrine.

(p. 225)

バチェラーはその当時、*epakasi nu* で「教訓を聞く (=学ぶ)」という1項動詞、*epakasi nure* で「教訓を聞かせる (=教える)」という2項動詞として覚えていたようである。*epakasnure* というのは *epakasnu* という3項動詞に *-re* という使役の接尾辞がついた形で、動詞の結合価は4と考えられている。しかし、この語形の実際の使用例というのは見つかっていない。

語源解釈が不明瞭なまま断言することはできないが、*epakas(i)* や *epakasnure* は奇妙な語形である。筆者はこれらが *epakasnu* からつくられた造語なのではないかと疑っており、和人からもたらされた「教育」という社会的背景が絡んでいるものと現段階では推測している。この「教える」という語形が *ca* と *pa* の対応を持っている理由には「口」という語根を持つ、あるいは、そのように再分析された結果と考えられるが、Type *-(k)oko* が道東に根強く使用されていることについては不明と言わざるをえない。

10.5. まとめ

そもそも *ca* と *pa* の対応をもつ語類は、母音が /e, i, o, u/ の場合には子音の /c/ と /p/ の対応がないという制限がある。本論文ではこれを純粹な意味での音対応とは言えないと考え、/ca/ と /pa/ を疑似的な音対応と位置づけた。これらの語類は、Kirikae (1994) の言うように、メトニミーやメタファーによる「口」からの意味拡張を経ているとして説明できるものが殆どである。アイヌ語においては、言語運用や能力に関わる「言語行為」、食欲や味・食感の知覚に関わる「摂食行為」、唇の形状に関わる「感情表現」、そしてモノを人間とみなした場合における「入口、端、縁」などへの意味拡張が観察された。

よって、本章 10.4.3 節で示したように、「口」からの意味拡張ではうまく説明がつけられないような語彙項目に関しては、*pa* の地域まで *ca* が使用されるなど境界がいくぶん曖昧になる傾向がある。そのことから、*ca* と *pa* は意味と強く結びついているとも考えられる。

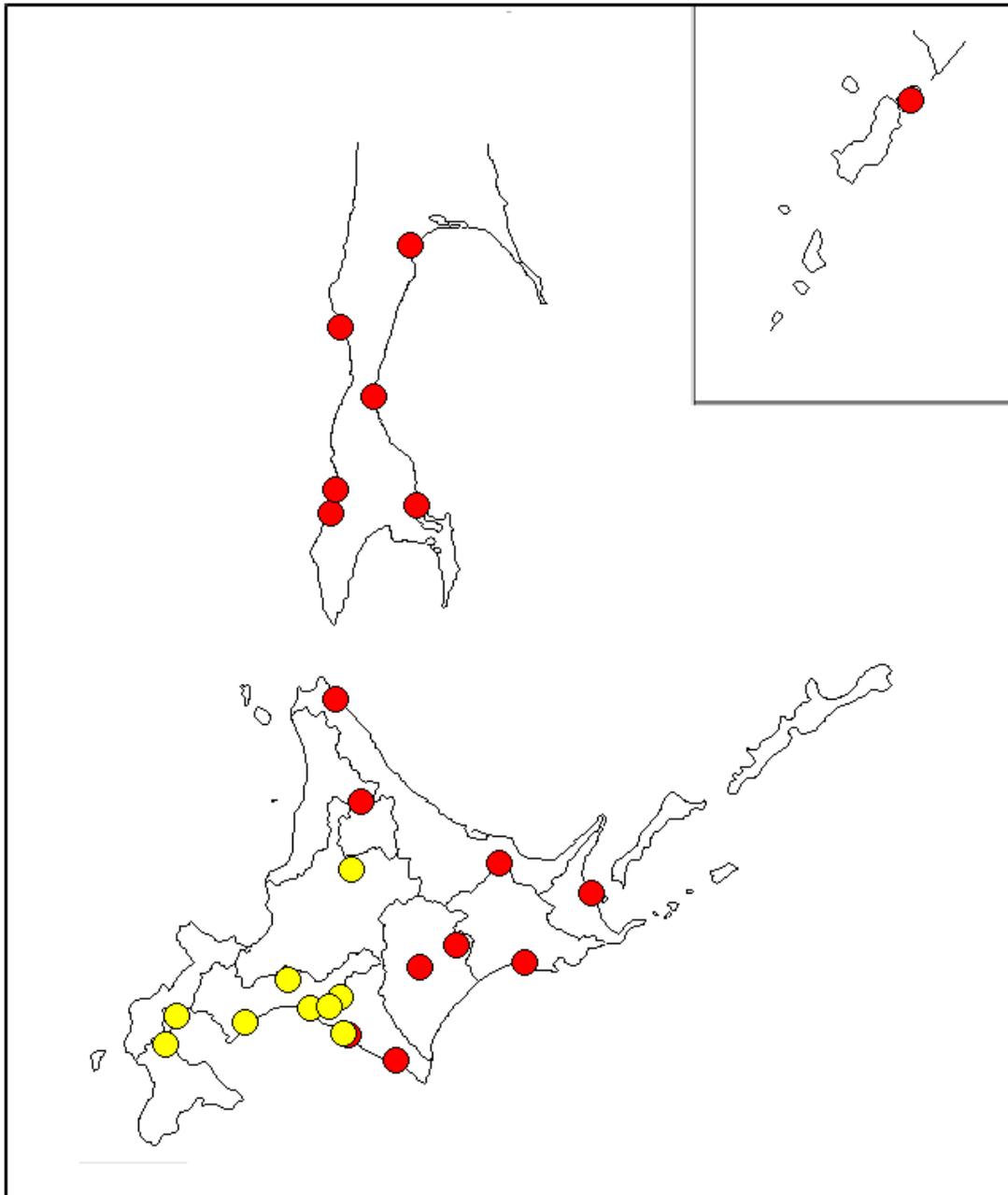
筆者は本論文において、*pa* という語根が「口」だけでなく「頭」という語根にも使用されるという点に注目し、*ca* と *pa* が元来別々の形態素として存在していたという Kirikae (1994) の説明を推し進める立場をとった。具体的な意味の違いは明確ではないが、*ca* は表面的な口の形状を表し、*pa* は、「口腔」や「頭の中」というような概念に近かったかもしれない。したがって、「舌」という語形は、服部 (編) (1964) の述べているように、地理的分布から *aw* という語形が古く、*parunpe* が *par* の地域でつくられて *car* の地域にまで広がったと従来考えられていたが、本論文では、*parunpe* 「舌」という語形が北海道東部にまで進出したのは、/ca/ と /pa/ の音韻対応ができる以前の可能性を指摘した。

なお、*ca* と *pa* が元来別々の形態素として存在していたということと、中川 (1996) の

ca から *pa* へという方向性は真っ向から対立するものではない。*pa* の地域で *ca* が用いられる語彙項目においては、*ca* のほうが古形を保っているという根拠となりえる。あくまでも、ある歴史的段階で「口」の語根に *ca* を選んだ地域集団と *pa* を選んだ地域集団が、東西に分岐したということであり、*pa* を選んだ西部地域では *ca* から *pa* へという置き換えがあったと考えられる。

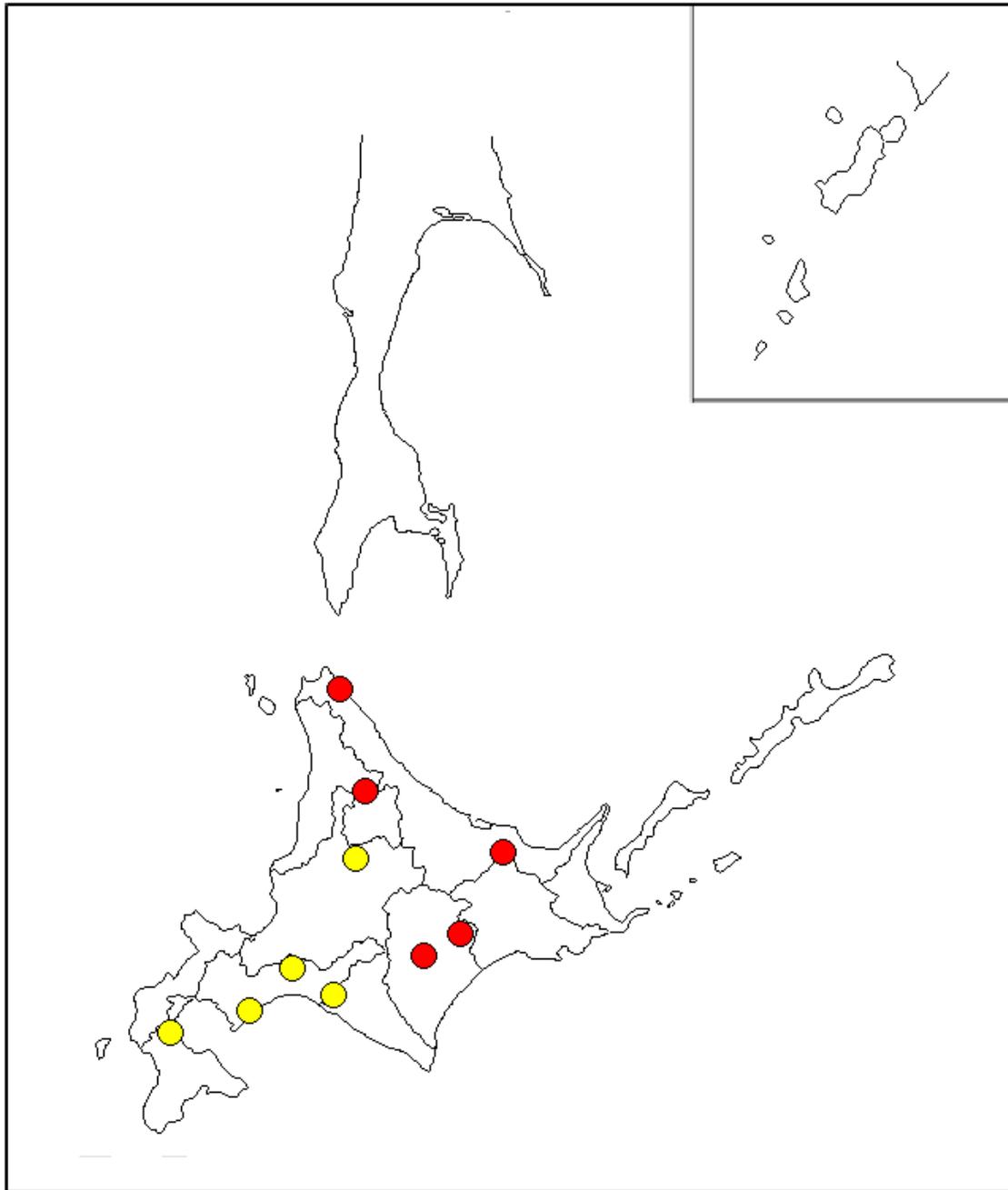
通時的な変遷を考える上で重要になりそうなのは、やはり地名である。Kirikae (1994) は、永田方正 (1909) 『北海道蝦夷語地名解』(再版、北海道庁) のなかから *ca* と *pa* の地名を取り上げて、地域別にその数を示した。以下、地名数だけを Kirikae (1994: 109-110) から引用すると図 10-8 のようになる。北見や十勝は *car* を使用する地域であるが、地名には *par* という語形が確認でき、それとは逆に、後志は *par* を使用する地域であると考えられるが、*car* も見出される。ここで注目すべきは、石狩の *par* 地名が 11、根室と釧路は *car* 地名が合わせて 13 と圧倒的な点である。もし、これら地域が後の *pa* と *ca* の東西型を形成する前段階にあったとすれば、その後、「口」という語根に対して、*ca* と *pa* の選択が地域ごとになされていったということになるだろう。

地図



- $\left\{ \begin{array}{l} \textit{car}: 7-10, 12, 13, 15, 16, 18, 25 \\ \textit{cara}: 19, 21, 22 \\ \textit{caru}: 20, 23, 24 \end{array} \right.$
- $\textit{par}: 1-6, 11, 14, 17$

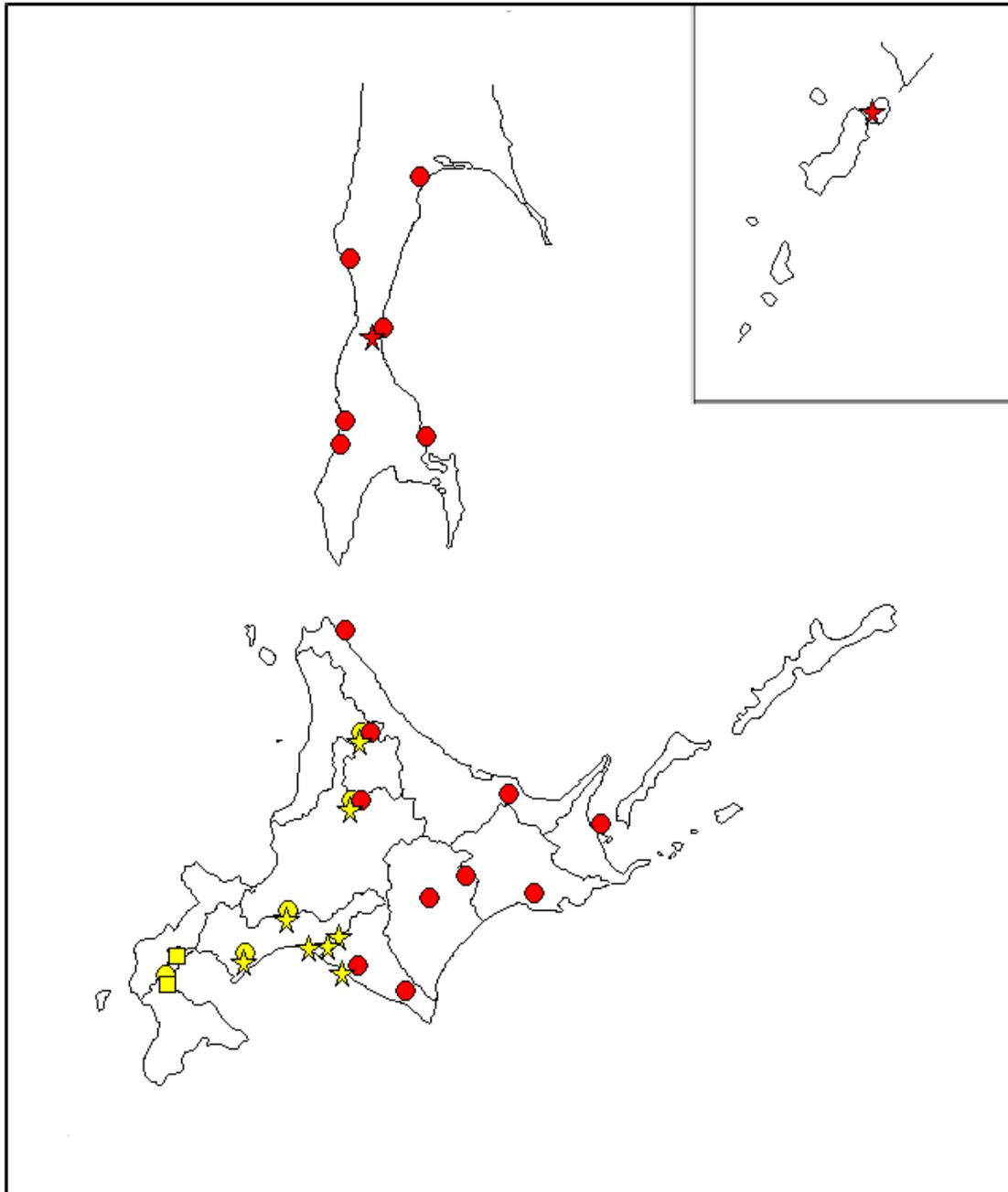
図 10-1 : 「口」



● *carkar*: 8, 10, 12, 13, 16

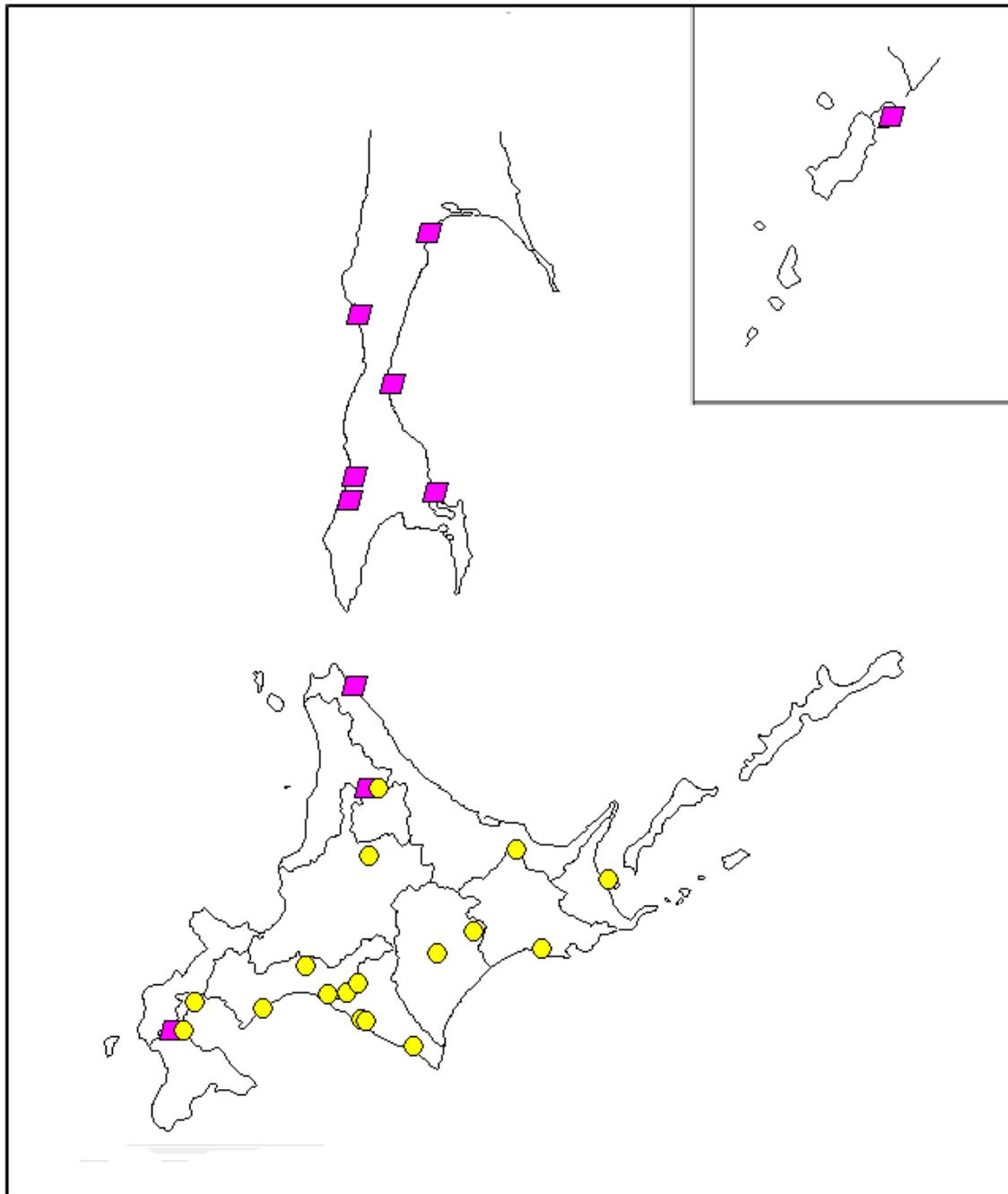
● *parkar*: 1, 3, 4, 11, 14

図 10-2 : 「からい」



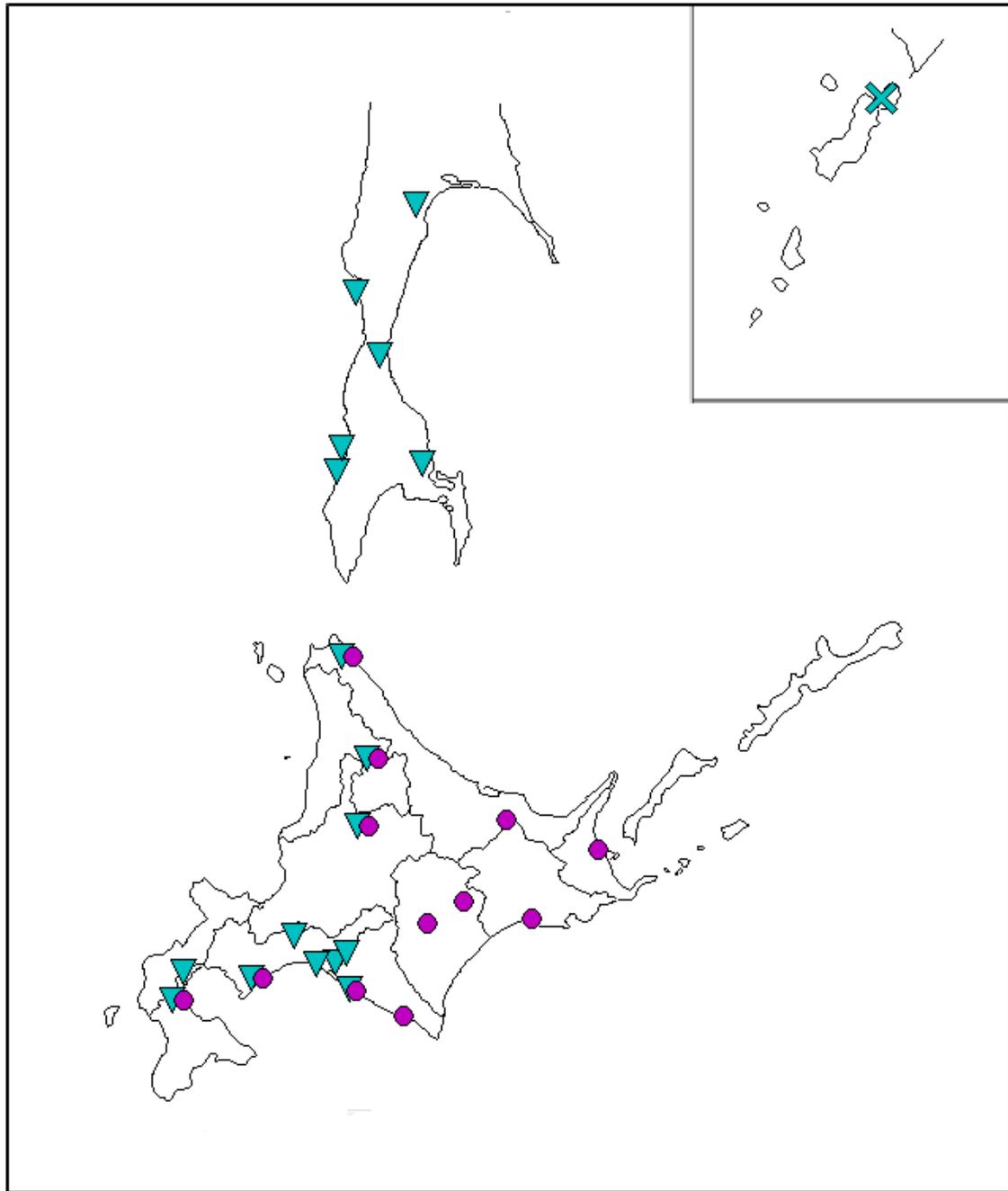
- | | | |
|--------------------|--------------------------------------|-------------------------------------|
| | ■ <i>paksar</i> : 1, 2 | |
| Type <i>-pus</i> : | ● <i>papus</i> : 1, 3, 11, 12, 14 | ● { <i>capus</i> : 8-13, 15, 16, 18 |
| | | { <i>caapus</i> : 19-24 |
| Type <i>-toy</i> : | ★ <i>patoy</i> : 3-6, 11, 12, 14, 17 | ★ <i>catoy</i> : 22, 25 |

図 10-3 : 「唇」



- *parunpe*: 1-12, 14-18
- *aw*: 1, 12, 13, 19-25

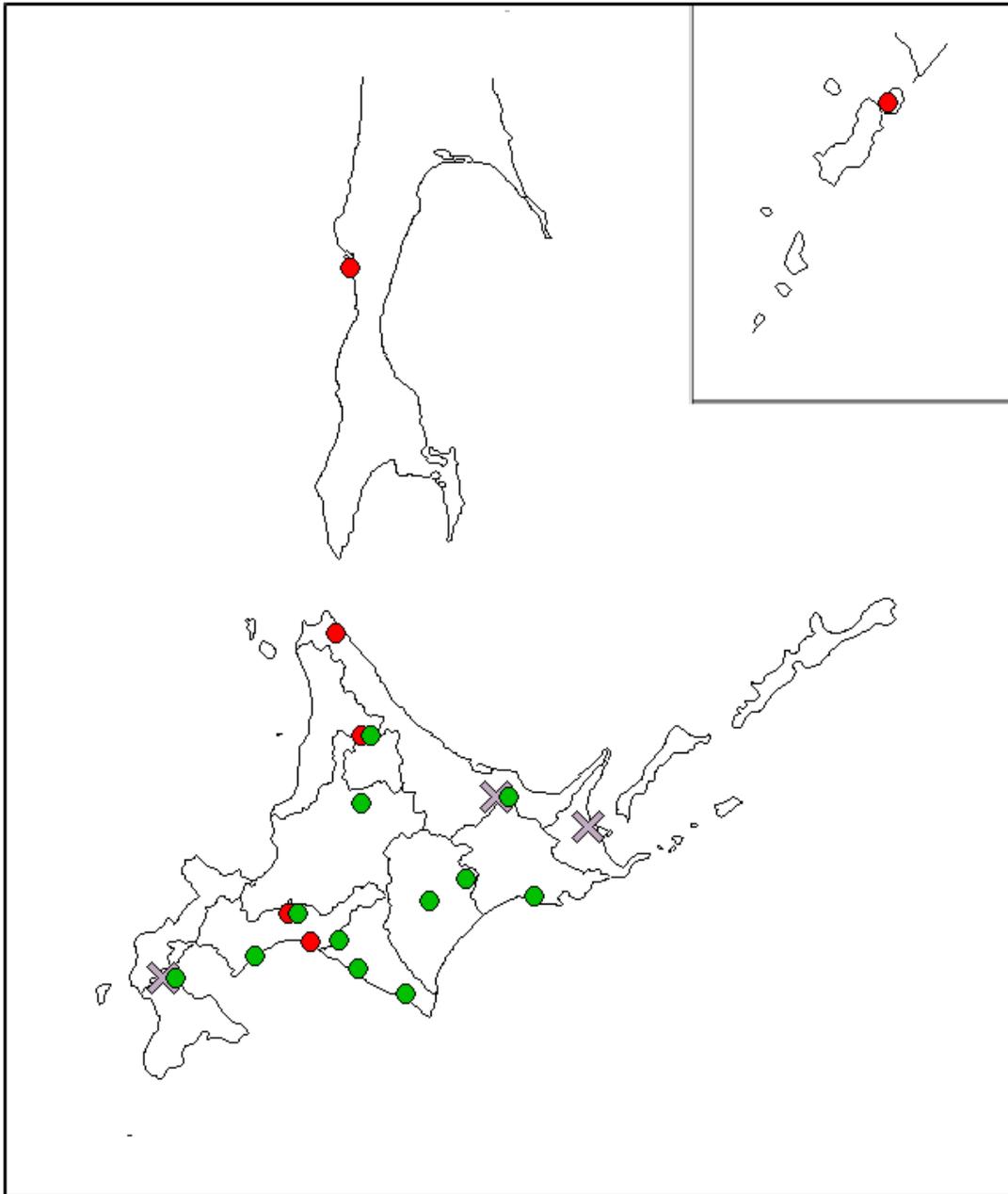
図 10-4 : 「舌」



- ▼ *sapa*: 1-6, 11-14, 17, 19-24
- *pake*: 1, 3, 7-13, 15, 16, 18
- ✕ *gpa*²⁵: 25

図 10-5 : 「頭」

²⁵ *ku=pa* (1SG.A=頭.POSS) と考えられる。



Type mak:

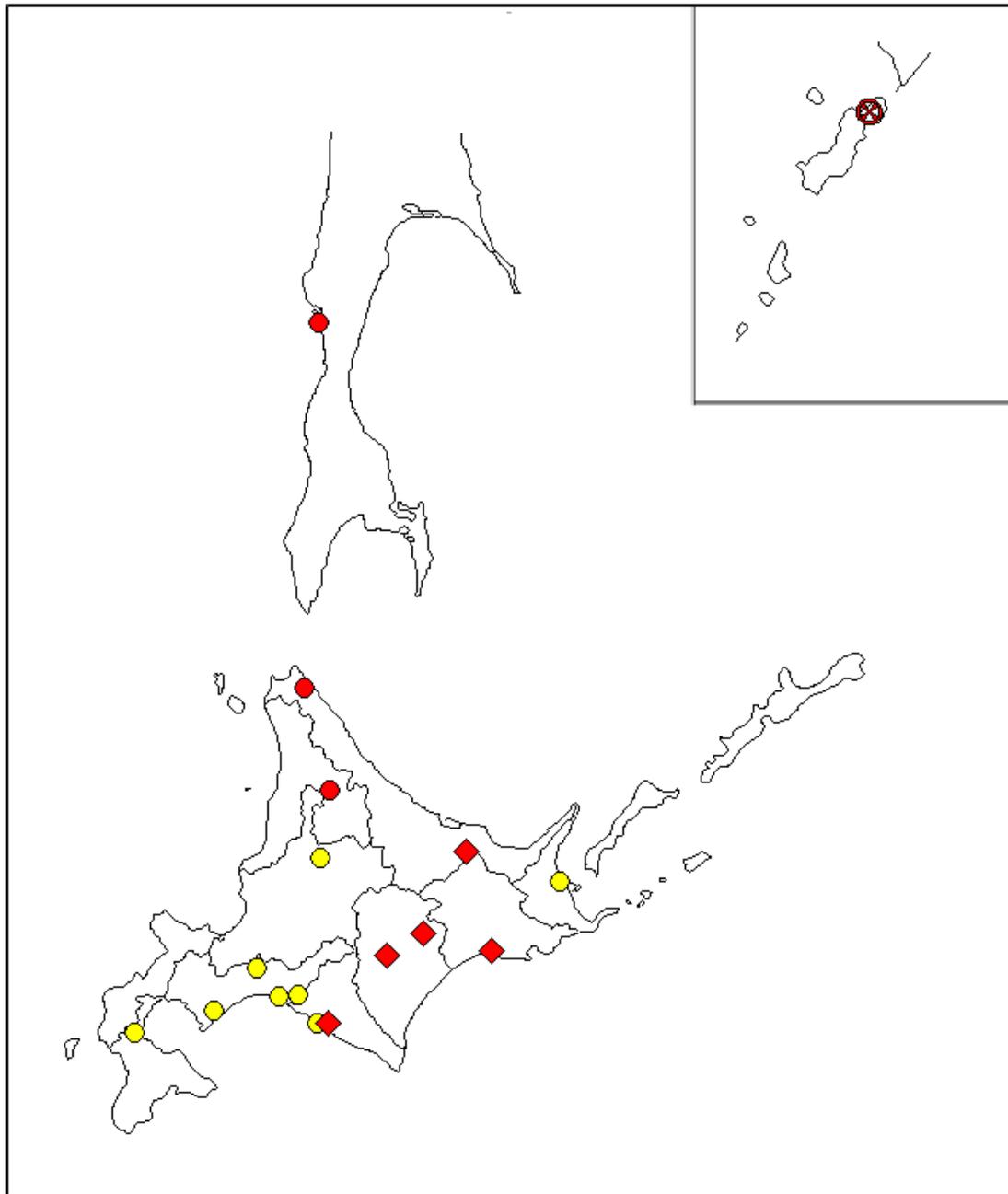
- *maka*(TR): 1, 3, 4, 7-10, 11, 12, 14-16
- *makke*(INTR): 1, 3, 4, 8, 9, 11, 14-16
- *yaymaka*(INTR): 1, 11

Type cak:

- *caka*(TR): 14, 17; *cakke*(TR): 12, 13; (*cahke*) 23
- *ecaktuy*(TR?): 25
- *cakke*(INTR): 14, 17; *cak*(INTR): 12, 13
- *yaycahke*(INTR): 23

Type sara: ✕ *sarare*(TR): 1; *sara*(INTR): 1, 10, 18

図 10-6 : 「開く、開ける」



Type -kasnu:

{

 (e-)pakasnu: 3, 4, 11, 12, 14, 15, 17

 pakasno: 1

 pakas(i): 18
 }

{

 (e-)cakasnu: 12, 13

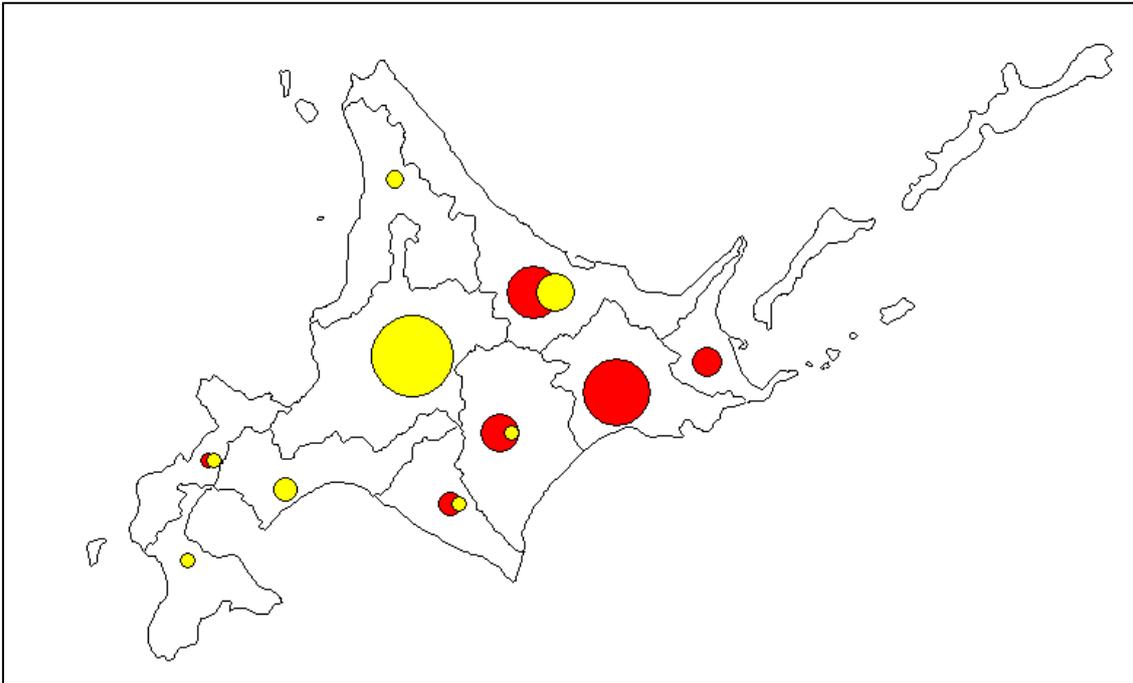
 (e-)caakasno(-kara): 23
 }

X
 caku: 25

Type -koko:

(e-)cakoko: 8-10, 15, 16, (18)

図 10-7 : 「教える」



	<i>car</i>	<i>par</i>
渡島	0	1
後志	1	1
胆振	0	3
日高東部	3	1
十勝	5	1
北見	7	5
釧路	9	0
根室	4	0
石狩	0	11
手塩	0	2

● *car*
● *par*

(※記号のサイズは地名数に応じる)

car と *par* を含む地名数

図 10-8 : *car* と *par* の地名

付記

付記1：アイヌ語の名詞抱合と意味拡張

アイヌ語の動詞に関する名詞抱合 (noun incorporation) において、「口」を抱合するものは (10-14) で示すようなバリエーションが見られる²⁶。

- | | |
|----------------------------------|-----------------|
| (10-14) a. <i>par-siratek-ka</i> | 「渋い」 |
| 口-厚くなる-CAUS | |
| b. <i>par-ko-siratek</i> | 「しぶい」 |
| 口-とともに.APPL- 厚くなる | |
| c. <i>par-o- siratek</i> | 「渋くて口がへんな感じになる」 |
| 口-POSS-厚くなる | |

(10-14) の例の動詞語根になっている *siratek* は、

田村 (1996: 648) :

- ①かたい (おかゆ。糊。こねたもの等、ドロドロのものの水分が少なくて)。
- ② (熟語) *paro siratek* パロ シラテッ (渋くて/甘くて) 口のあたりが厚くなったように変な感じになる。

太田 (2005: 119) :

- ①固い (近文)
- ② (汁の色、味が) 濃い (近文)

という意味の1項動詞である。(10-14) の例は全て *par(o)* という名詞を含んでいるが、これは「口」という意味から「舌」へメトニミーによる意味的拡張を遂げている捉えることができる。(10-14a) と (10-14b) は「口」の概念形を抱合した形式であり、苦味を持つ物体を主語にとる。一方、(10-14c) は「口」の所属形を抱合した形式であり、これらは「口」(具体的には「舌」)の所有者及び「苦味」の知覚者が主語となり、3人称を除いては主格人称接辞によってマークされる。

(10-14b) の充当態接頭辞 *ko-* には様々な機能があることが知られている。Bugueva (2010) によると、*ko-* は「目標、受け手/受益者、共同の被動作主、迷惑の出所、その他(理由/

²⁶ 語彙と訳語は田村 (1996) から引用した。

目的)」²⁷を表すとしており、「状態変化を表す動詞」、「方向性を持った移動を表す動詞」、「存在・出現を表す動詞」²⁸から充当態を派生することができると思なしている。(10-14b)で見るとようなタイプは、Bugaeva (2010)によると、"the semantic role of Co-patient"に当てはまると思われる。これは日本語で「～とともに」と訳されるようなもので、例えば *ko-onne* で「～とともに年をとる」などというのが例としてあげられている。つまり、*ko* が取り得る二つの受け手 (Co-patient) は、「渋い食べ物」(主語A)と「口(「舌」)」(目的語O)となる。(10-15)は「摂食行為」に関わる例である。

- | | |
|---|------------------------------------|
| (10-15) a. <i>par-ko-riten</i>
口-とともに.APPL-やわらかくなる | 「柔らかくて舌触りがよい」 |
| b. <i>par-ko-hayta</i>
口-に対して.APPL-足りない | 「くいしんぼうである、何でも食べたがる
(「口がいやしい」)」 |
| c. <i>par + ko-somo-mokor</i>
口-とともに.APPL-NEG-眠る | 「腹がすいて眠れない」 |
| e. <i>yay-par-o-suke</i>
REFL-口-に.APPL-料理する | 「自分の食事を自分で煮炊きする」 |

(10-15a)の *par* はやはり「舌」という意味に派生していると考えられる。それに対し、(10-15b-e)は「食欲」に関連する語で、「舌」というよりは「胃」に関連している²⁹。(10-15e)の充当態の接頭辞 *o-* は結合価を増やすことによって、その行為を行う位置や場所(ここでは、*(yay-)par* 「(自分の)口」)を項にとっている。

(10-14)も(10-15)も「口」という名詞を抱合する動詞であり、「摂食行為」の道具としての「口」いうメトニミーが介在して意味的な拡張が生じていると考えられる。

²⁷ ブガエワ (2014 [2012]: 53) より和訳を引用した。

²⁸ Shibatani (1990) はこれらの動詞を非対格自動詞としている。ブガエワ (2014 [2012]: 55) は「これらの動詞が限界性 (telicity) について非対格動詞の特徴を持つ」としながらも、「非対格性の重要な特徴である「動作主性」の程度を確認する手段がアイヌ語にないために、これらの動詞が完全に非動作主的であるとは言えないかもしれない」とも述べている。

²⁹ 語彙と訳語は、(a) 中川 (1995)、(b, e) 田村 (1996)、(c) 萱野 (2002) から引用した。

付記2. 意味拡張に関する語彙リスト

行為のための道具 (INSTRUMENT FOR ACTION) メトニミー

《言語行為》

○言語運用・言語能力

- ・発話、発話能力など

carunkur/ parunkur 「雄弁な人(O)」、*parotunas* 「口がはやい(T)」、*cawasnu/ pawasnu* 「雄弁である(CM, N)」、*cawetok/ pawetok* 「りこうな(H)」

- ・形と意味のペア (言葉、内容など)

caroruy/ paroruy 「おしゃべりだ(O, T)」、*epahekotere* 「〔人に〕 (…のことでけちをつける(T))」、*cauwante* 「噂の真相を確かめる(O)」、*paroparo* 「口をはさむ(T)」、*epawsi* 「～をねだる(T)」、*ikaspaotte* 「人に命ずる(T)」、*epapispisatte* 「～についてコソコソしゃべる(T)」、*eparkoyakoya* 「まくし立てる(K)」

- ・音 (声、歌、口笛など)

par(o) rekte/ panrekte 「口笛を吹く(H, CM)」、*paroaskay* 「歌がうまい(T)」、*caruaskay* 「声がよい(CM)」

《摂食行為》

①舌 (味や食感の知覚)

parsiratekka, parkosiratek 「しぶい(T)」、*parosiratek* 「渋くて口がへんな感じになる(T)」、*parkoriten* 「柔らかくて舌触りがよい(N)」、*parkar/ carkar* 「からい(H)」

②食欲

- ・食べ物

parkohayta 「くいしんぼうである(T)」、*euparkemkem* 「少しの物を分け合って食べる(K)」、*parkasmare* 「～を食べきれずに残す(T)」、*pakes* 「飲み残りの酒、お流れ(K)」

- ・空腹

parkosomomokor 「腹がすいて眠れない(K)」

- ・食事

yayparosuke 「自分の食事を自分で煮炊きする(T)」、*yayparihok* 「買い食いする(T)」、*paronukarnukar* 「食べ物の世話をする(K)」、*ukoparorarpa* 「何でも食べる、何でもかんでも口へ入れる(T)」、*caroyki* 「～を養う(O)」、*carosuke/ parosuke* 「～に食事を作る(O, T)」

《感情表現》

○唇

patukuku 「口を尖らして不平顔をする(CM)」、*sanca or_ ta mina kane* 「口元に笑みを浮かべて(CY)」、*paroromina* 「微笑む(H)」、*sancarkata mina* 「微笑む(H)」

モノは人間 (OBJECTS ARE HUMAN BEINGS) メタファー

《入口》

carkor 「(川などが) 口がある(Ok)」、*apaca/ apapa* 「出入口の所、表 (H, T)」、*parpok(ke)* 「～の出入口の所(T)」、*kotan parotta* 「村の入口で(H)」、*naycara* 「川口(H)」

《端・縁》

epakocirir 「少しあふれてふちからこぼれかける(T)」、*petca/ petpa* 「岸(H)」、*ca(ke)*, *cakirurke*, *caarur/ parur(ke)* 「縁(H)」、*tusaparo* 「(着物) の袖口(T)」

出典略号 : CM: 知里真志保(1975)、CY: 知里幸恵(1923)、H: 服部(編)(1964)、
K: 萱野(2002)、N: 中川(1995)、O: 奥田(1999)、T: 田村(1996)

第 1 1 章 総括

本論文は、第 1 部で近世アイヌ語資料として加賀家文書をベースに、音素表記への取り組みや整備方法、方言資料として扱うための指標などについて論じた。第 2 部の事例研究では、近世アイヌ語資料から得られたデータを手掛かりに言語地理学的な研究を行うことで、アイヌ語の歴史的発展について論じた。

アイヌ語は方言差がそれほど大きくなく、方言差が出るような語彙項目は限られている。したがって、本論文では中川裕 (1996) 「言語地理学によるアイヌ語の史的研究」で典型的な分布パターンをもつ語彙項目を取り上げ、加賀家文書やその他の近世資料、および方言資料などをもとに方言地図を作成し、ひとつひとつを詳細に検討することにした。結果として、すべての事例研究において、加賀家文書から得た方言語彙は、北海道方言のなかでも近隣方言と類似するものであった。ABA のような分布を持つものに関してはさらなる証拠を与えるに至ったが、これまでの論を覆すような語彙があったとは言い難い。言い換えれば、加賀家文書のアイヌ語は北海道の東部方言として、まさにあり得る、適当な形を示していた。インパクトの有無については否定的に捉える必要はなく、それ以上に重要なのは、加賀家文書などの近世資料が、それぞれの分析の視点や新たな可能性の拠り所になってくれたことである。

第 8 章では、第 4 章でも触れた「父」と「母」に関する語彙の地理的分布から、その歴史的変遷を考察したものである。特に、加賀家文書「[蝦夷語和解]」という語彙資料において、「母」と「父」という和語見出しに加え、「母親」と「父親」という和語見出しを増やしている点に注目し、前者のペアを「呼称語」、後者のペアを「言及語」というように分けて地図を作成した。すると、言及語の *ona* 「父親」と *unu* 「母親」は、その他の方言で「父親」や「母親」を表す語形と相補分布をなしていることがわかった。加賀家文書には、「母親」という見出しに *onneke* というこれまであまり報告のなかった語彙が記載されている。同じく根室の資料である金沢家文書にもこの語彙が記載されることから、これが根室方言のものであるということ、そして、語構成やその他の方言の報告から推察するに、「親」という意味が「母親」という意味で使用されるようになったのではないかとすることを述べた。

第 9 章では、疑問詞と不定代名詞に関する地理的分布から、その歴史的な成立背景について論じた。疑問詞の分布に関して、北海道では沙流グループとそれを取り囲むような分布を見せるが、加賀家文書の語彙は沙流グループの *hVm*, *hVn* という語形は使用されず、やはり大多数の北海道方言と同じ形をとっていた。結論としては、「アイヌ語北海道方言では、*hVm*, *hVn* が「疑問」を表す語根、*ne* が「不定」を表す語根であった。それが後に、沙流グループを除く大多数の北海道方言は副助詞の *ta(p)* と *ka* による「疑問」と「不定」の使い分けが発達し、*ne* を疑問詞語根にも使用するようになった」のではないかとすることを述

べた。加賀家文書「菊のかんざしみだれ髪」においては、副助詞の *ta* を用いた「子ブタ」(*nep ta*) という形での使用が確認されている。

第10章では疑似的な音対応として *pa* と *ca* の方言分布に関して考察した。*ca* と *pa* の対応をもつ語類は、Kirikae (1994) の言うようにメトニミーやメタファーによる「口」からの意味拡張を経たと説明できるものが殆どであり、それらを語根にもつ語類は、言語運用や能力に関わる「言語行為」、食欲や味・食感の知覚に関わる「摂食行為」、唇の形状に関わる「感情表現」、そしてモノを人間とみなした場合における「入口、端、縁」などがある。

「加賀家文書」を確認すると、根室は *ca* 系の地域であるにも関わらず、「教える」という意味をもった「イハカシ」、「イバカシ」、「エハカシ」、「エバカシ」(*epakas(i)*) という *pa* 系の語彙が見つかる。本論文では、これらは和人からもたらされた「教育」という社会的背景によって生み出された語彙であり、*pa* の地域で用いられる *epakasnu* 「～を～に教える」という動詞からつくられた造語なのではないかということ論じた。そのため、*ca* の地域で用いられる *ecakoko* や *ecakasnu* は、加賀家文書において別の意味で用いられている。

筆者は本論文において、*pa* という語根が「口」だけでなく「頭」という語根にも使用されるという点に注目し、*ca* と *pa* が元来別々の形態素として存在していたという Kirikae (1994) の説明を推し進める立場をとっている。例えば、もし *par* のほうが「口腔」や「頭の中」というような概念に近かったとすれば、*car* のほうは表面的な口の形状を示していたのではないかと考える。近世アイヌ語資料である『蝦夷拾遺』(1786) では、「口 ハル」「唇 チャル」となっており、*car* のほうが唇という表面に出た器官を指しており、*ca* の同音異義語には「～を切り取る」という意味の2項動詞があることは、「口」や「唇」の表面上の開閉の動作を考えるとメトニミー的な派生を遂げたものと捉えられるかもしれない。

以上で見てきたように、近世アイヌ語資料が分析のための有意義な情報を与えてくれ、加賀家文書は根室という地点の情報を補ってくれた。根室方言は北海道の最東端でありながら、やはり北海道内の東部方言の特徴を強く有しており、北海道とは異なるが千島とは一致するというような語彙は今のところ見つかっていない。今後は、より多くの事例を量的に見ていくことで、北海道東部方言およびアイヌ語根室方言の位置づけや、アイヌ語全体としての歴史的発展に関して議論を深めていきたい。

図版目録

図 2-1 : 伝蔵の勤務地	3
図 2-2 : 北海道、樺太、千島列島の位置	20
図 2-3 : アイヌ語の方言 25 地点	22
図 2-4 : 根室国の位置 (旧行政区分)	23
図 2-5 : 「朝」	26
図 2-6 : 「朝」の語形に関する史的変遷	28
図 4-1 : 「星」	100
図 4-2 : 「(人が) 寒いと感じる」	102
図 4-3 : 釧路国、根室国および美幌の位置	104
図 5-1 : 「学校往来夷解書上」のテキスト変遷	132
図 5-2 : 「学校往来夷解書上」のテキスト変遷	140
図 6-1 : 沙流・千歳方言を中心とした代名詞の変遷図 (中川 1988: 248)	145
図 8-1 : 「コイカ」や「コイボク」がつく地名の分布 (山田 1982: 306)	170
図 8-2 : アイヌ語の方言 25 地点 (=第 2 章、図 2-3 の再掲)	184
図 8-3 : 「お父さん」	185
図 8-4 : 「父親」	186
図 8-5 : 「お母さん」	187
図 8-6 : 「母親」	188
図 9-1 : 「どのように (how)」	205
図 9-2 : 「どこ (where)」	206
図 9-3 : 「何 (what)」	207
図 9-4 : 「何 (something, anything)」	208
図 9-5 : 「いつ (when)」	209
図 9-6 : 「いくつか/いくらか (how many/ how much)」	210
図 10-1 : 「口」	234
図 10-2 : 「からい」	235
図 10-3 : 「唇」	236
図 10-4 : 「舌」	237
図 10-5 : 「頭」	238
図 10-6 : 「開く、開ける」	239
図 10-7 : 「教える」	240
図 10-8 : <i>car</i> と <i>par</i> の地名	241

初出一覧

本論文の初出および執筆の基盤とした論文は以下のとおりである。この一覧には、出版されていない口頭発表の原稿も含めた。

- 第1章：深澤美香（2014e）「加賀家文書に残された道東のアイヌ語」『第21回環オホーツク海文化のつどい報告書2013』21: 25–38. 北のシンポジウム実行委員会.
- 第2章：深澤美香（2014a）「加賀家文書のアイヌ語と加賀伝蔵」（1節～4節）中川裕（編）『人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書274集 アイヌ語の文献学的研究（1）』21–48. 千葉大学大学院人文社会科学研究科.
- 第3章：深澤美香（2014b）「加賀家文書における表記の特徴と傾向：ローマ字表記への試み」中川裕（編）『人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書274集 アイヌ語の文献学的研究（1）』49–72. 千葉大学大学院人文社会科学研究科.
- 第4章：深澤美香（2015a）「金沢家文書のアイヌ語語彙集」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』21: 45–112. 北海道立アイヌ民族文化研究センター.
深澤美香・小野洋平（2015）「アイヌ語諸方言にみられる三種の成分」国立国語研究所「日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究」アイヌ語班平成27年度第1回研究発表会. 発表原稿. 国立国語研究所. 6月14日.
- 第5章：
- 5.2節：深澤美香（2014d）「加賀家文書「菊のかんざしみだれ髪」からの眺め：蝦夷通辞によるアイヌ語版「お吉清三」口説」『口承文芸研究』37: 100–113. オリオン出版.
- 5.3節：深澤美香（2015b）「Tunci Denzo」深澤美香・吉川佳見（編）『パルンペ』10: 19. パルンペ同好会.
- 5.4節：深澤美香（2014a）「加賀家文書のアイヌ語と加賀伝蔵」（5節：「アイヌ語からみた資料成立時期の特定」）中川裕（編）『人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書274集 アイヌ語の文献学的研究（1）』37–48. 千葉大学大学院人文社会科学研究科.
- 第6章：深澤美香（2015）「蝦夷通辞・加賀伝蔵の文法観—特にアイヌ語の人称表現について」『ひろがる北方研究の地平線～中川裕先生還暦記念シンポジウム～』発表原稿. 札幌学院大学社会連携センター. 12月19日.
- 第8章：Fukazawa, Mika (2012) The distribution and interpretation of words for parents — 'mother' and 'father' in Ainu dialects, *Papers from the First International Conference on Asian Geolinguistics*, 89–98, Tokyo: Aoyama Gakuin University.
- 第9章：深澤美香（2015）「沙流方言グループをとり囲む方言区分の再考—アイヌ語の疑問

詞を中心に―」国立国語研究所「日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究」アイヌ語班平成 27 年度第 1 回研究発表会. 発表原稿. 国立国語研究所. 6 月 13 日.

Fukazawa, Mika (2013) The distribution of interrogative or indefinite roots in Ainu: hem & ne, *Papers from the First Annual Meeting of the Asian Geolinguistic Society of Japan*, 12–21, Tokyo: Aoyama Gakuin University.

第 10 章 : 深澤美香 (2015) 「アイヌ語の東と西の方言差 : 特に /ca/ と /pa/ の地理的分布と「口」の意味拡張から」国立国語研究所「日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究」アイヌ語班平成 26 年度第 1 回研究発表会. 発表原稿. 北海道大学アイヌ・先住民研究センター. 5 月 31 日.

Fukazawa, Mika (2014) The mystery of the phonological distribution /ca/ and /pa/ in the Eastern-Western dialects of Ainu, *Papers from the Second International Conference on Asian Geolinguistics*, 1–15. Bangkok: Pathumwan Princess Hotel.

参考文献

[和文]

- アイヌ民族博物館（編）（2001）『アイヌ民族博物館伝承記録5 虎尾ハルの伝承 鳥』財団法人アイヌ民族博物館.
- 青島俊蔵他（1807）『蝦夷拾遺 [写]』国立国会図書館所蔵 (URL : <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2538284>).
- 秋葉実（編）（1989）『北方史資料集成』2. 北海道出版企画センター.
- 秋葉実（2001）「松浦武四郎往返書簡 (20)」『松浦武四郎研究会会誌』34: 7-8.
- 秋葉実（2003）「松浦武四郎往返書簡 (24)」『松浦武四郎研究会会誌』40: 6-7.
- 秋葉実（2004a）「松浦武四郎往返書簡 (26)」『松浦武四郎研究会会誌』42: 12.
- 秋葉実（2004b）「松浦武四郎往返書簡 (27)」『松浦武四郎研究会会誌』43: 8.
- 秋葉実（2005a）「松浦武四郎往返書簡 (30)」『松浦武四郎研究会会誌』46: 2.
- 秋葉実（2005b）「松浦武四郎往返書簡 (31)」『松浦武四郎研究会会誌』47: 1-2.
- 浅井亨（1969）「アイヌ語の文法：アイヌ語石狩方言文法の概略」『アイヌ民俗誌』第一法規出版.
- 浅井亨（1972）「加賀屋文書の中のチャコルベ」『北方文化研究』6: 131-162. 北海道大学.
- 旭川アイヌ語研究会（編）（2011）『アイヌ語別海地方資料集成』小樽教育地区研究会.
- 東俊佑（2012）「岩手県宮古市所在・金沢家文書の蝦夷地関係史料について」『北海道・東北史研究』8: 75-87. 北海道・東北史研究会.
- 有菌智美（2005）「身体部位（「手」、「口」）を含む慣用表現の意味分類」『日本認知言語学会論文集』5: 487-497.
- 池上二良（1969）「言語：アイヌ語の輪郭」アイヌ文化対策保存協議会（編）『アイヌ民族誌』第一法規出版。（再録：池上二郎（2004）『北方言語叢考』北海道大学図書刊行会.）
- 池上二良（1990）「日本語・北の言語の単語借用」『北海道方言研究会会報』30. 北海道方言研究会。（再録：池上二郎（2004）『北方言語叢考』北海道大学図書刊行会.）
- 板垣俊一（2009）『越後瞽女唄集』三弥井書店.
- 上原熊次郎（1792）『藻汐草』（一冊本甲）（影印：（1972）『金田一京助解説 成田修一撰 アイヌ語資料叢書 藻汐草』国書刊行会；デジタル化資料：早稲田大学古典籍総合データベース：http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ho02/ho02_05038/）
- 上原熊次郎（1792）『藻汐草』（一冊本乙）（デジタル化資料：北海道大学北方関係資料目録. 北大北方資料室. 旧記 0662 : <http://www2.lib.hokudai.ac.jp/cgi-bin/hoppodb/record.cgi?id=0A023620000000000>）
- 上原熊次郎（1804）『藻汐草』（乾、坤）鈴驥園。（デジタル化資料：函館市図書館所蔵デジタルアーカイブ：<http://archives.c.fun.ac.jp/>）

- H. チースリク（編）（1962）『北方探検記：元和年間に於ける外国人の蝦夷報告書』吉川弘文館.
- 太田満（2005）『旭川アイヌ語辞典』旭川アイヌ語研究所.
- 大塚一美（1990）『キナラブック口伝アイヌ民話全集 1』北海道出版企画センター.
- 大沼忠春・川上淳・佐々木寿雄・本田克代（2004）「長尾又六氏の業績（3）」『根室市博物館開設準備室紀要』18.
- 奥田統己（1997）「アイヌ語静内方言の副助詞と終助詞」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』3.
- 奥田統己（1998）「アイヌ語静内方言の母音間の /w/、/y/ および // について」『ユーラシア言語文化論集』1: 258. 千葉大学ユーラシア言語文化論講座.
- 奥田統己（1999）『アイヌ語静内方言文脈つき語彙集（CD-ROMつき）』札幌学院大学.
- 小野洋平（2015a）「『数量化3類クラスタリング』の有効性について」『アイヌ語研究の諸問題』61-72. 北海道出版企画センター
- 小野洋平（2015b）「服部・知里（1960）の統計科学的再考察：アイヌ語方言圏論の実証」『北方人文研究』8: 25-48.
- 小野米一（1999）「アイヌ語に取り入れられた日本語」北の生活文庫企画編集会議（編）『北の生活文庫第8巻 北海道のことば』141-151. 北海道新聞社.
- 加賀康三（1932）「『おきつ清三戀の夜嵐』について」代田茂樹（編）『蝦夷往来』8: 54-58. 尚古堂.（（1972）『蝦夷往来』復刻版. 北海道出版企画センター.）
- 片桐一男（2016）『江戸時代の通訳官：阿蘭陀通詞の語学と実務』吉川弘文館.
- 亀井孝他（編）（1997）『日本列島の言語：言語学大辞典セレクション』三省堂.
- 川上淳（1991）『加賀家文書』からみたネモロ場所『根室市博物館開設準備室紀要』5.
- 萱野茂（2002 [第一版 1996]）『萱野茂のアイヌ語辞典』三省堂.
- 菊池勇・田島佳也（編）『神奈川大学 21 世紀 COE プログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究成果報告書『日本近世生活絵引』北海道編』神奈川大学 21 世紀 COE プログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議.
- 木村謙次（1798-1999）『蝦夷日記』（翻刻：山崎栄作（編）（1986）『木村謙次集：蝦夷日記』上・下巻. 私家版.）
- 木村直樹（2012）『〈通訳〉たちの幕末維新』吉川弘文館.
- 切替英雄（1983）「ペッキタイの村長の次男の話」『アイヌの民話』1. アイヌ無形文化伝承保存会.
- 切替英雄（1996）「アイヌ語十勝方言による昔話「島を引いて泳ぐオタスの少年の物語」の辞典と文法（1）」『北海学園大学学園論集』88: 123-286.
- 切替英雄（1998）「アイヌ語十勝方言による昔話「島を引いて泳ぐオタスの少年の物語」の辞典と文法（2）」『北海学園大学学園論集』98: 315-349.
- 金田一京助（1911）「樺太アイヌ語の音韻組織」（再録：（1993）『金田一京助全集』5. 三省堂.）

- 金田一京助 (1913) 「あいぬ物語付録樺太アイヌ語大要」(金田一京助 (1993) 『金田一京助全集』 5: 79-87. 三省堂).
- 金田一京助 (1917) 「蝦夷語学の鼻祖 上原熊次郎とその著述」『芸文』(再録: (1993) 『金田一京助全集』 6: 9-39. 三省堂).
- 金田一京助 (1924) 「世界最古の蝦夷語彙: 佐々木博士所蔵の『松前の言』について」『心の花』(再録: (1960 [3版 1976]) 『金田一博士喜寿記念 アイヌ語研究 金田一京助選集 I』 483-494. 三省堂).
- 金田一京助 (1931) 「アイヌユーカラ語法摘要」『アイヌ叙事詩ユーカラの研究』 2. 東洋文庫.
- 金田一京助 (1932) 「北奥地名考: 奥羽の地名から観た本州エゾ語の研究」『金沢博士還暦記念 東洋語乃研究』三省堂. (再録: 『金田一京助全集』 6: 161-219. 三省堂.)
- 金田一京助 (1933a) 「アイヌ語と国語」『国語科学講座 IV 国語学』(再録: 『金田一京助全集』 6: 224-254. 三省堂.)
- 金田一京助 (1993b) 「トドの考」『言語研究』(再録: 『金田一京助全集』 6. pp.220-223. 三省堂.)
- 金田一京助 (1937) 「山間のアイヌ語」『山岳』 33/1. 日本山岳会. (再録: 『金田一京助全集』 6: 255-260. 三省堂.)
- 金田一京助 (1938a) 「シーボルト先生とアイヌ語學」『シーボルト研究』岩波書店. (復刻: 日独文化協会 (編) (1979) 『シーボルト研究』日独文化協会.)
- 金田一京助 (1938b) 「樺桜考」『民間伝承』 3/12. 六人社. (再録: 『金田一京助全集』 6: 287-290. 三省堂.)
- 金田一京助 (1954) 「奥州の蝦夷語」『國學院雑誌』 55/1. (再録: 『金田一京助全集』 6: 315-324. 三省堂.)
- 金田一京助 (1956) 「アイヌから来た言葉」『ことばの生い立ち』講談社. (再録: 『金田一京助全集』 6: 325-335. 三省堂.)
- 金田一京助 (1960) 「アイヌ語学講義」『金田一博士喜寿記念 アイヌ語研究 金田一京助選集』 1. (再録: (1993) 『金田一京助全集』 5. pp.133-366. 三省堂.)
- 金田一京助・知里真志保 (1936) 『アイヌ語法概説』岩波書店.
- 空念 (1704) 「狛言葉」 普門寺所蔵. (影印: 國東利行 (編) (2010) 『廻国僧正光空念師 宝永元年 (1704) 松前・蝦夷地納経記 付アイヌ語集』北海道出版企画センター.)
- 久保寺逸彦 (編) (1992) 『アイヌ語・日本語辞典稿』北海道文化財保護協会.
- 久野暲 (1978) 『談話の文法』大修館書店.
- 國東利行 (編) (2010) 三浦泰之 (翻刻) 「狛言葉」『宝永元年 松前・蝦夷地納経記 付アイヌ語集』 192-219. 北海道出版企画センター.
- 国立大学法人千葉大学 (編) (2015) 「9-5 会話」『アイヌ語の保存・継承に必要なアーカイブ化に関する調査研究事業 第2年次 (北海道沙流郡平取町) 調査研究報告書 1/3』 p.793-795. 国立大学法人千葉大学.

- 小林美紀 (2008) 「アイヌ語の名詞抱合」『千葉大学人文社会科学研究』17: 199-214.
- 小林美紀 (2014) 「アイヌ語鶴川方言の有対動詞」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』16: 199-215.
- 小林美紀 (2015) 「アイヌ語動詞の結合価と項構造」千葉大学大学院人文社会科学研究所博士後期課程学位論文.
- 小松和弘 (編) (2004) 『アイヌ語様似方言辞典〈改訂版〉』様似アイヌ語教室.
- 児玉茂昭 (2006) 「文字を持たない言語と計算機」塩原朝子・児玉茂昭 (編) 『表記の習慣のない言語の表記』303-319. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- サイソンプーン・ラダポーン (2008) 「身体部位「口」の意味拡張：日本語とタイ語の比較を中心に」『日本認知言語学会論文集』8. 12-22.
- 坂田美奈子 (2003) 『『番人円吉蝦夷記』に含まれるいくつかの論点について』『itahcara』2: 19-25. 同編集事務局.
- 佐々木利和 (1989) 「蝦夷通詞について」北方言語・文化研究会 (編) 『民族接触：北の視点から』48-60. 六興出版. (再録：(2013) 『アイヌ史の時代へ：余瀝抄』223-241. 北海道大学出版会.)
- 佐々木利和 (1990) 「アイヌイタク エラム アナ」『歴史評論』481: 28-35. (再録：(2013) 『アイヌ史の時代へ：余瀝抄』295-307. 北海道大学出版会.)
- 佐藤喜代治 (1963) 「秋田県米代川流域の言語調査報告」『日本文化研究所研究報告別巻』1 (井上史雄他 (編) (1994) 『日本列島方言叢書④：東北方言考③』ゆまに書房).
- 佐藤玄六郎 (1786) 『蝦夷拾遺』(翻刻・校訂：大友喜作 (1943) 『北門叢書』1. 北光書房；(筆写者不詳) (1860) 『蝦夷拾遺 [写]』北海道大学所蔵 (旧記：0098) (URL：<http://www2.lib.hokudai.ac.jp/cgi-bin/hoppodb/record.cgi?id=0A0070100000000000>)).
- 佐藤正彦・本田克代 (1988) 「根室地方で採録されたアイヌ語—文久二年」『根室市博物館開設準備室紀要』12. 同準備室.
- 佐藤知己 (1990) 「武四郎のアイヌ語学：嘉永三年「蝦夷語」について」松浦武四郎研究会 (編) 『北への視覚』: 148-181. 北海道出版企画センター.
- 佐藤知己 (1991) 「アイヌ語千歳方言における自称詞と対称詞について」『日本研究』5. 国際日本文化センター. (再録：(2001) 『アイヌ語考⑤』ゆまに書房.)
- 佐藤知己 (1995a) 「「蝦夷言いろは引」の研究：解説と索引」『北大言語研究室報告』8. 北海道大学文学部言語学研究室.
- 佐藤知己 (1995b) 「アイヌ語の受動文に関する一考察」『北海道大学文学部紀要』44: 1-18.
- 佐藤知己 (1998) 「天理大学附属天理図書館所蔵「松前ノ言」について」『北海道大学文学部紀要』46/3: 41-64.
- 佐藤知己 (1999a) 「「加賀家文書」について」『アイヌ民族文化研究センターだより』11: 1-2.
- 佐藤知己 (1999b) 「天理大学附属天理図書館所蔵「松前ノ言」について (2)」『北海道大学文学部紀要』47/4: 53-88.

- 佐藤知己 (2004) 『古文献によるアイヌ語諸方言の比較研究』北海道大学.
- 佐藤知己 (2005) 「「申渡」のアイヌ語訳文に関する一考察」『北海道立アイヌ民族研究センター研究紀要』第11号.
- 佐藤知己 (2006) 「日本語とアイヌ語」吉田金彦 (編) 『日本語の語源を学ぶ人のために』153-160. 世界思想社.
- 佐藤知己 (2007) 「『藻汐草』の「一冊本」について」『北大文学研究科紀要』121: 157-170. (再録: (2009b) 『古文献によるアイヌ語史の構築』2-29. 北海道大学大学院文学研究科所収).
- 佐藤知己 (2008a) 「アイヌ語古文献における言語学的諸問題」『北海道大学文学研究科紀要』124: 153-180. (再録: (2009b) 『古文献によるアイヌ語史の構築』2-29. 北海道大学大学院文学研究科).
- 佐藤知己 (2008b) 『アイヌ語文法の基礎』大学書林.
- 佐藤知己 (2009a) 「18世紀前半のいくつかのアイヌ語資料について」『北海道大学文学研究科紀要』127: 29-58.
- 佐藤知己 (2009b) 『古文献によるアイヌ語史の構築』北海道大学大学院文学研究科.
- 佐藤知己 (2012a) 「池上二良先生のアイヌ語研究」『北方人文研究』5. 北海道大学大学院文学研究科北方研究教育センター.
- 佐藤知己 (2012b) 「アイヌ語の現状と復興」『言語研究』142: 29-44.
- 佐藤知己 (2014) 「宝永元 [1704] 年空念上人筆録アイヌ語彙「狄言葉」の言語学的考察」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』20: 1-133.
- 佐藤知己 (2015) 「宝永元 [1704] 年空念上人筆録アイヌ語彙「狄言葉」の仮名・音素対応表」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』21: 1-25.
- 澤井春美 (1995) 「沢井トメノさんが語る ツップククシ ペツ "cuppokkuspet"」『北海道アイヌ民族文化研究センター研究紀要』1: 51-78.
- 澤井春美 (2001) 「アイヌ語十勝方言の親族名称について」『北海道アイヌ民族文化研究センター研究紀要』7: 21-50.
- 澤井春美 (2006) 『アイヌ語十勝方言の基礎語彙集: 本別町・沢井トメノのアイヌ語』北海道立アイヌ民族文化研究センター.
- 澤井春美・田村すず子 (2005) 『田村すず子採録 広野ハルさんの基礎語彙調査資料』札幌学院大学.
- 塩原朝子 (2006) 「表記の習慣のない言語の表記に関する課題: 本書のまとめに代えて」塩原朝子・児玉茂昭 (編) 『表記の習慣のない言語の表記』321-329. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 柴田武 (1969) 『言語地理学の方法』筑摩書房.
- 白石英才 (1998) 「アイヌ語高母音の半母音化とわたり音挿入: 最適性理論による分析」『ユーラシア言語文化論集』1: 196-221. 千葉大学ユーラシア言語文化論講座.

- 末岡外美夫 (1979) 『アイヌの星』 旭川市図書館.
- 鈴木俊二 (2005) 「借用語の理論 (3): 日本列島の歴史言語学」『国際短期大学紀要』20: 41-96.
- 鈴木孝夫 (1973) 『ことばと文化』 岩波書店.
- 砂沢クラ (1983) 『私の一代の思い出』 みやま書房.
- 高橋靖以 (2014) 『アイヌ語十勝方言例文集』 1. 北海道大学アイヌ先住民研究センター.
- 田中聖子 (1989a) 「アイヌ語の仮名表記の変遷」『日本研究: 言語と伝承』 367-383. 大野晋先生古稀記念論文集刊行会. 角川書店.
- 田中聖子 (1989b) 「『蝦夷言葉』の「義経浄瑠璃」について: 近世のアイヌ口承文芸の記録に関する一考察」『早稲田大学語学教育研究所紀要』 38. 早稲田大学語学教育研究所.
- 田中聖子・佐々木利和 (1985) 「近世アイヌ語資料について: とくに『もしほ草』をめぐる」『松前藩と松前』 24: 17-32. 松前町史編集室. (再録: 佐々木利和 (2013) 『アイヌ史の時代へ: 余瀝抄』 263-293)
- 田村 (福田) すゞ子 「アイヌ語沙流方言の副助詞と終助詞: アイヌ語の助詞についての報告その2」『言語研究』 39: 21-38.
- 田村すゞ子 (1971) 「アイヌ語沙流方言の人称代名詞」『言語研究』 59. (再録: (2001) 『アイヌ語考④』 263-276. ゆまに書房.)
- 田村すゞ子 (1972) 「アイヌ語沙流方言の人称の種類」『言語研究』 61. (再録: (2001) 『アイヌ語考④』 370-392. ゆまに書房.)
- 田村すゞ子 (1977) 「アイヌ語沙流方言の疑問表現」『アジア・アフリカ文法研究』 6.
- 田村すゞ子 (1978) 「アイヌ語と日本語」『日本語の系統と歴史』 195-226. 岩波書店.
- 田村すゞ子 (1988) 「アイヌ語」 亀井孝他 (編) 『言語学大辞典』 1. 三省堂. (再録: 亀井孝他 (編) (1997) 『日本列島の言語: 言語学大辞典セレクション』 三省堂.)
- 田村すゞ子 (1990) 「日本語とアイヌ語との関係」 崎山理 (編) 『日本語の形成』 188-211. 三省堂.
- 田村すゞ子 (1996) 『アイヌ語沙流方言辞典』 草風館.
- 田村すゞ子 (1999) 『アイヌ語音声資料 10 カタカナ版』 東京: 早稲田大学語学教育研究所.
- 田村すゞ子 (2000) 「危機言語の記録と資料提供の必要」 崎山理・遠藤史 (編) 『危機に瀕した言語について 講演集 (一)』 33-72. 大坂学院大学情報学部.
- 田村すゞ子他 (1998) 「アイヌ語北海道方言の発音」『アイヌ語北海道南部方言 基礎編』 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 田村雅史 (2010) 『アイヌ語白糠方言の文法記述』 千葉大学大学院社会文化科学研究科博士後期課程学位論文.
- 探花房 (1883) 「お吉清三くどき」『勸懲童之論』 近八郎右衛門.
- 知里真志保 (1942) 「アイヌ語法研究: 樺太方言を中心として」 (再録: (1973 [1993]) 『知里真志保著作集』 3: 455-594. 平凡社.)
- 知里真志保 (1952) 「アイヌ語における母音調和」『北海道大学文学部紀要』 1. (再録: (1974 [1993]) 『知里真志保著作集』 4. 平凡社.)

- 知里真志保 (1954) 「アイヌの神謡」『北方文化研究報告』8.
- 知里真志保 (1955) 「アイヌ AINU」『世界大百科事典』1. 平凡社. (再録: (1973) 『知里真志保著作集』3: 232-244. 平凡社.)
- 知里真志保 (1956a) 『地名アイヌ語小辞典』北海道出版企画センター.
- 知里真志保 (1956b) 『アイヌ語入門: とくに地名研究者のために』北海道出版企画センター.
- 知里真志保 (1961) 「日本語とアイヌ語の関係」『北海道新聞』2月3日朝刊. (再録: (2000) 『和人は舟を食う』203-206. 北海道出版企画センター.)
- 知里真志保 (1975) 『知里真志保著作集別巻Ⅱ: 分類アイヌ語辞典人間編』平凡社. (初出: (1954) 『分類アイヌ語辞典人間編』日本常民文化研究所.)
- 知里真志保 (1976) 『知里真志保著作集別巻Ⅰ: 分類アイヌ語辞典植物編・動物編』平凡社. (初出: (1953) 『分類アイヌ語辞典植物編』日本常民文化研究所; (1962) 『分類アイヌ語辞典動物編』日本常民文化研究所.)
- 知里真志保編 (1981) 「パナンへの築に怒陽がはいる」『アイヌ民譚集 付, えぞおぼけ列伝』岩波文庫. (初出: (1937) 『アイヌ民譚集』郷土研究社.)
- 知里幸恵 (1923) 『アイヌ神謡集』郷土研究社. (再版: (1978) 『アイヌ神謡集』岩波文庫.)
- 豊原熙司・川上淳・本田克代 (1996) 「根室地方で採録されたアイヌ語—明治時代以後」『根室市博物館開設準備室紀要』10: 91-110. 同準備室.
- 鳥居龍蔵 (1903) 『千島アイヌ』吉川弘文館.
- 中川裕 (1984) 「アイヌ語の名詞と場所表現」『東京大学言語学論集'84』149-160. 東京大学文学部言語学研究室.
- 中川裕 (1987a) 「アイヌ語の人称接辞—特に a- をめぐって」『国文学・解釈と鑑賞』52/2: 161-167. 至文堂.
- 中川裕 (1987b) 「アイヌ語史の構築に向けて (1)」『ウエネウサラ』1: 27-36. 私家版.
- 中川裕 (1988) 「アイヌ語千歳方言の人称代名詞とその歴史的位罫」『東京大学言語学論集'88』239-253. 東京大学文学部言語学研究室.
- 中川裕 (1989) 「日本語とアイヌ語との相似語彙」『邪馬台国』38: 190-205. 梓書院.
- 中川裕 (1992) 「〈北方諸語から見た〉文法格の表示法」『言語』21/3: 70-74. 大修館.
- 中川裕 (1995) 『アイヌ語千歳方言辞典』草風館.
- 中川裕 (1996) 「言語地理学によるアイヌ語の史的研究」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』2: 1-17.
- 中川裕 (2003) 「日本語とアイヌ語の史的関係」『日本語系統論の現在』209-219. 国際日本文化センター.
- 中川裕 (2005) 「アイヌ語にくわわった日本語」『国文学 解釈と鑑賞』70/1: 96-104. 至文堂.
- 中川裕 (2006) 「アイヌ人によるアイヌ語表記への取り組み」塩原朝子・児玉茂昭 (編) 『表記の習慣のない言語の表記』1-44. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

- 中川裕 (2011) 「アイヌの神謡における叙述者の人称」 北方言語ネットワーク (編) 『北方言語研究』 1: 139-156. 北海道大学大学院文学研究科.
- 中川裕 (2014) 「序文」 中川裕 (編) 『アイヌ語の文献学的研究 (1)』 千葉大学大学院人文社会科学部研究科.
- 中川裕 (編) (2014-2016) 『アイヌ語 鶴川方言 日本語-アイヌ語辞典』 千葉大学. (URL: <http://cas-chiba.net/Ainu-archives/index.html>)
- 成田修一 (1977a) 『近世の蝦夷語彙—近世に於ける蝦夷語彙集類の編纂—:《松前の言》篇』 私家版.
- 成田修一 (1977b) 『近世の蝦夷語彙—近世に於ける蝦夷語彙集類の編纂—:《もしほ草》篇』 私家版.
- 成田修一 (1985a) 「江戸時代のアイヌ語」 『言語』 14/2: 73-78. 大修館.
- 成田修一 (1985b) 『近世の蝦夷語彙—近世に於ける蝦夷語彙集類の編纂—:《蝦夷語集録》篇』 私家版.
- 成田修一 (1986) 『近世の蝦夷語彙—近世に於ける蝦夷語彙集類の編纂—:《蝦夷語》篇』 私家版.
- 成田修一 (1988a) 「江戸時代の蝦夷語彙集概観および『蝦夷語集』の表記について」 『二松舎大学人文論叢』 38 (ゆまに書房編集部 (編) (2001) 『アイヌ語考①』 230-244. ゆまに書房).
- 成田修一 (1988b) 『近世の蝦夷語彙—近世に於ける蝦夷語彙集類の編纂—:《南北蝦夷地魯西亜国話通言》篇』 私家版.
- 成田修一 (1991) 『近世の蝦夷語彙—近世に於ける蝦夷語彙集類の編纂—:《後方羊蹄於路志》篇』 私家版.
- 能登屋 (柴村) 円吉 (1869-?) 『番人円吉蝦夷記』 (影印: 成田修一撰 『アイヌ語資料叢書 番人円吉蝦夷記』 国書刊行会.)
- 橋本進吉 (1950) 『國語音韻の研究』 岩波書店.
- バッチェラー・ジョン (1938) 『アイヌ・英・和辞典』 第四版. 岩波書店.
- 服部四郎 (1957) 「アイヌ語における年長者層特殊語」 『民族学研究』 21/3. 誠文堂新光社. (再録: (2001) 『アイヌ語考③』 407-414. ゆまに書房.)
- 服部四郎 (編) (1964) 『アイヌ語方言辞典』 岩波書店.
- 服部四郎 (1967) 「アイヌ語の音韻構造とアクセント」 『音声の研究』 13: 207-223. 日本音声学会.
- 服部四郎 (1979) 『新版 音韻論と正書法』 大修館書店.
- 服部四郎 (1999) 『日本語の系統』 岩波書店.
- 服部四郎・知里真志保 (1960) 「アイヌ語諸方言の基礎語彙統計学的研究」 『民族学研究』 24/4. 日本文化人類学会.
- 林欽吾 (1973) 「色丹島のアイヌ族」 『日本常民生活資料叢書』 7: 552-505. 三一書房.

- 平山裕人 (2013) 『アイヌ語古語辞典』 明石書店.
- 廣瀬幸生 (2005) 「話者指示の領域と視点階層」『文藝言語研究 言語篇』 47: 45-67. 筑波大学文芸・言語学系.
- 深澤多市 (1931) 「アイヌ文献及遺物を観るの記」. 『蝦夷往来』 : 35. 代田茂樹 (編). 尚古堂. ((1972) 『蝦夷往来』 復刻版. 北海道出版企画センター.)
- 深澤美香 (2013) 「加賀家文書 翻刻・現代語訳 1 「菊のかんざしみだれ髪」 : 蝦夷通辞によるアイヌ語版 「お吉清三」 口説」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』 15: 295-321. 千葉大学ユーラシア言語文化論講座.
- 深澤美香 (2014a) 「加賀家文書のアイヌ語と加賀伝蔵」 中川裕 (編) 『人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書 274 集 アイヌ語の文献学的研究 (1)』 21-48. 千葉大学大学院人文社会科学研究所.
- 深澤美香 (2014b) 「加賀家文書における表記の特徴と傾向 : ローマ字表記への試み」 中川裕 (編) 『人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書 274 集 アイヌ語の文献学的研究 (1)』 49-72. 千葉大学大学院人文社会科学研究所.
- 深澤美香 (2014c) 「加賀家文書 翻刻・現代語訳 2 「学校往来夷解書」 : 蝦夷通辞によるアイヌ語版 「寺子教訓書」」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』 16: 353-391. 千葉大学ユーラシア言語文化論講座.
- 深澤美香 (2014d) 「加賀家文書 「菊のかんざしみだれ髪」 からの眺め : 蝦夷通辞によるアイヌ語版 「お吉清三」 口説」 『口承文芸研究』 37: 100-113. オリオン出版.
- 深澤美香 (2014e) 「加賀家文書に残された道東のアイヌ語」 『第 21 回環オホーツク海文化のつどい報告書 2013』 21: 5-38. 北のシンポジウム実行委員会.
- 深澤美香 (2015a) 「金沢家文書のアイヌ語語彙集」 『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』 21: 45-112. 北海道立アイヌ民族文化研究センター.
- 深澤美香 (2015b) 「Tunci Denzo」 深澤美香・吉川佳見 (編) 『パルンペ』 10: 19. パルンペ同好会.
- 深澤美香 (2016a) 「加賀家文書 「[蝦夷語和解]」 : 蝦夷通辞・加賀伝蔵による『藻汐草』の語釈本」 『人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書 298 集 アイヌ語の文献学的研究 (2)』 63-101. 千葉大学大学院人文社会科学研究所.
- 深澤美香 (2016b) 「加賀家文書 翻刻・現代語訳 3 「チャコルベ」 : 蝦夷通辞が記録したアイヌの求婚難題説話」 『千葉大学ユーラシア言語文化論集』 18. 千葉大学ユーラシア言語文化論講座.
- ブガエワ・アンナ (2014 [2012]) 「北海道南部のアイヌ語」 『早稲田大学高等研究所紀要』 6. (英文初出 : Bugaeva, Anna. 2012. Southern Hokkaido Ainu. In: Nicolas Tranter(ed.) The languages of Japan and Korea. London: Routledge, 461-509.)
- 藤村久和他 (2014) 『『番人円吉蝦夷記 全』 翻刻と解説一』 『國學院大學北海道短期大学部紀要』 31: 47-87.

- 古川古松軒（1788）『東遊雜記』（翻刻：大藤時彦（1964）『東遊雜記：奥羽・松前巡見私記』平凡社。）
- 別海町教育委員会（編）（1989）『加賀家文書』別海町教育委員会。
- 別海町郷土資料館（2001a）『別海町郷土資料館附属施設 加賀家文書館展示解説』別海町郷土資料館。
- 別海町郷土資料館（2001b, 2002-2005）『加賀家文書 現代語訳版』1-5. 別海町郷土資料館。
- 別海町郷土資料館（2012）『別海町郷土資料館所蔵資料目録第1集 加賀家文書等資料目録 I』別海町郷土資料館。
- 別海町郷土資料館（2014）『別海町郷土資料館附属施設 加賀家文書館展示解説』改訂新版。別海町郷土資料館。
- 別海町郷土資料館（2015a）『別海町郷土資料館所蔵資料目録第2集 加賀家文書等資料目録 II』別海町郷土資料館。
- 別海町郷土資料館（2015b）『加賀家文書二』別海町郷土資料館。
- 北海道ウタリ協会（1994）『アコロ イタク AKOR ITAK アイヌ語テキスト1』クルーズ。
- 北海道教育委員会（編）「歌笛越前踊り（ヤンコラセ）」『北海道の民謡：民謡緊急調査報告書』北海道教育委員会。
- 北海道教育庁社会教育部文化課（編）（1982-1988）『アイヌ民俗文化財調査報告書』1-7. 北海道教育委員会。
- 北海道教育庁社会教育部文化課（編）（1989）『アイヌ民俗文化財調査報告書』8. 北海道文化財保護協会。
- 北海道教育庁生涯学習部文化課（編）（1990-1999）『アイヌ民俗文化財調査報告書』9-18. 北海道教育委員会。
- 北海道教育庁生涯学習部文化課（編）（1990）『オイナ（神々の物語）1』北海道教育委員会。
- 北海道教育庁生涯学習部文化課（編）（2006）『知里真志保フィールドノート(5)』。北海道教育委員会。
- 北海道新聞社（1981）『北海道大百科事典』下巻。北海道新聞社。
- 本田優子（2013）「象潟に伝存する『蝦夷方言藻汐草』について」『雄波郷』7: 1-8. にかほ市教育委員会・にかほ市郷土史研究会。
- 馬瀬良雄（2002）「20世紀における日本の方言地理学研究」『方言地理学の〈課題〉』明治書院。
- 松浦武四郎（1863-1864?）『西蝦夷日誌』（吉田常吉（編）（1962 [新版 1984]））『蝦夷日誌下：西蝦夷日誌』時事新書。
- 松方冬子（2010）「通訳と「四つの口」『日本の対外関係 6 近世的世界の成熟』235-250. 吉川弘文館。
- 松本成美他（編）（2004）『アイヌ語釧路方言語彙』釧路アイヌ語の会。
- 三田村鳶魚（1926）「新板お吉清三しんちうくどき」『瓦版のはやり唄』春陽堂。

- 宮古市教育委員会（編）（2006）『宮古市史 資料目録(1)』宮古市教育委員会。
- 村山七郎（1971）『北千島アイヌ語』吉川弘文館。
- 柳田国男（1930）『蝸牛考』刀江書院。（再版：（1980）『蝸牛考』岩波書店。）
- 山香町文化連盟（編）（1986）「心中口説（お吉清三）」『やまがの盆踊り口説き集』山香町文化連盟。
- 山田秀三（1982）「アイヌ語地名の三つの東西」『アイヌ語地名の研究』1. 草風館。
- 山本明（1981）「お吉清三」『陸前伊具昔話集：宮城』岩崎美術社。
- 山本多助（1957-1965）『アイヌ・モシリ』（再録：浦田遊（編）（1998）『アイヌ・モシリ』釧路アイヌ文化懇話会）
- 湯浅条策（1910）「お吉清三くどき」『くどき五百段』春江堂。
- 吉田巖（1989）『北海道あいぬ方言語彙集成』小学館。
- 和田如月他（1929）「じょんがら節（お吉清三）」（国立国会図書館デジタル化資料）。ビクター。
- 執筆者不詳（1630-40）『松前ノ言』（金田一京助筆写本の影印：『金田一京助解説 成田修一撰 アイヌ語資料叢書 松前の言：ゑそことはの事』国書刊行会。）

[欧文]

- Andersen, Elaine. S. (1978) Lexical universals of body-part terminology. In Greenberg, Joseph. H. (ed.). *Universals of Human Language*, 3: 333-368, California: Stanford University Press.
- Asai, Tooru (1974) Classification of dialects: cluster analysis of Ainu dialects. *Bulletin of the Institute for the Study of North Eurasian Cultures*, 8: 45-136, Sapporo: Hokkaido University, the Institute for the Study of North Eurasian Cultural Studies.
- Batchelor, John (1882 [1964]) An Ainu vocabulary. *Transactions of the Asiatic Society of Japan*, 10, Yokohama: R. Meiklejohn and company. Reprinted by Tokyo: Yushodo Booksellers.
- Batchelor, John (1887) A Grammar of the Ainu Language. In Chamberlain, Basil Hall. *Language, mythology, and geographical nomenclature of Japan viewed in the light of Aino studies*. (1887), Tokyo: Tokyo Imperial University.
- Bhat, D. N. S. (2000) The Indefinite-interrogative puzzle. *Linguistic Typology*, 4: 365-400.
- Bugaeva, Anna (2010) Ainu applicatives in typological perspective. *Studies in language*, 34/4:749-801.
- Bugaeva, Anna (2008) Reported discourse and logophoricity in southern Hokkaido dialects of Ainu. *Gengo Kenkyu*, 133: 31-75.
- Dissel, Holger (2003) The Relationship between demonstratives and interrogatives. *Studies in Language*, 27/3: 635-655.
- Dixon, R.M.W. (2010) Grammatical word and phonological word. *Basic Linguistic Theory*, 2: 1-36, New York: Oxford University Press.
- Dixon, R.M.W. (2012) Questions. *Basic Linguistic Theory*, 3: 376-433, New York: Oxford

- University Press.
- Fukazawa, Mika (2012) The distribution and interpretation of words for parents — 'mother' and 'father' in Ainu dialects, *Papers from the First International Conference on Asian Geolinguistics*, 89–98, Tokyo: Aoyama Gakuin University.
- Fukazawa, Mika (2013) The distribution of interrogative or indefinite roots in Ainu: hem & ne, *Papers from the First Annual Meeting of the Asian Geolinguistic Society of Japan*, 12–21, Tokyo: Aoyama Gakuin University.
- Fukazawa, Mika (2014) The mystery of the phonological distribution /ca/ and /pa/ in the Eastern-Western dialects of Ainu, *Papers from the Second International Conference on Asian Geolinguistics*, 1–15.
- Furet, Louis. P. (1860) Vocabulaire aïno de Hakodaté. *Lettres à M. Léon de Rosny sur l'Archipel japonais et la Tartarie orientale*. [Ainu vocabulary of Hakodate. *Letters to Mr. Léon de Rosny on the Japanese Archipelago and Eastern Tartary*], 111-112, Paris: Maisonneuve. [in French]
- Hagège, Claude (1974) Les pronoms logophoriques. *Bulletin de la Société de Linguistique de Paris*, 69: 287-310. [in French]
- Haspelmath, Martin (1997) *Indefinite pronouns*. New York: Oxford University Press.
- Haspelmath, Martin (2013) Indefinite pronouns. In Dryer, Matthew S. & Haspelmath, Martin (eds.) *The World Atlas of Language Structures Online*. Leipzig: Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology. (Available online at <http://wals.info/chapter/46>, Accessed on 2015-05-26.)
- Hilpert, Martin (2007) Chained metonymies in lexicon and grammar: A cross-linguistic perspective on body part terms. In Radden, G, Köpcke, K. M, Berg, T. and P. Siemund (eds.). *Aspects of meaning construction*, 77-98, Amsterdam: John Benjamins.
- Hirose, Yukio (2014) The conceptual basis for reflexive constructions in Japanese. *Journal of Pragmatics*, 68. 99-116.
- Hock, H. H. and B. D. Joseph (1996) *Language history, language change, and language relationship*, Berlin: Mouton de Gruyter.
- Kirikae, Hideo (1994) pa/ ca correspondence between Ainu Dialects: A linguistic-geographical study. *The proceedings of the 8th international Abashiri symposium: Peoples and cultures of the boreal forest*, 8: 99-113, Abashiri: Hokkaido Museum of Northern People, Japan.
- Lakoff, George and Mark Johnson (1980 [2003]) *Metaphors we live by*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Moravcsik, Edith A. (1969) Determination. *Working Papers in Language Universals*, 1: 64-98. Stanford: Stanford University Press.
- Naert, Pierre (1958) *La situation linguistique de l'Aïnou*. [The linguistic situation of Ainu], Lund: C.W.K.Gleerup. [in French]
- Nakagawa, Hiroshi (2007) A Historical Relationship of Japanese hashi 'Chopsticks' and Ainu pasuy, Nakagawa. Hiroshi (ed.). *Study on Language Contacts among Northern Peoples to Japan*

- centering on Ainu from the Viewpoint of their Mingu*. Chiba: Chiba University.
- Nakagawa, Hiroshi & Mika Fukazawa (to be published) Hokkaido dialect of Ainu. In Bugaeva, Anna (ed.). *Handbook of Ainu Language*, Berlin: DeGruyter Mouton.
- Peng, Fred C. C. (1977). Religion: Ainu Index of Social Change in Ainu Community Life. Peng, F. C. C. and P. Geiser (eds.), *The Ainu: The Past in the Present*, 207–252. Hiroshima: Bunka Hyoron Publishing Company.
- Piłsudski, Bronisław (1912) Materials for the Study of the Ainu Language and Folklore. In Majewicz, Alfred F. (ed.). *The Collected Workes of Bronisław Piłsudski, vol. 2: Ainu Language and Folklore Materials*. (1998), Berlin: Mouton de Gruyter.
- Refsing, Kirsten (ed.) (1996) *The Ainu library collection 1. Early European writings on the Ainu language*, 1, Richmond: Curzon.
- Refsing, Kirsten (1986) *The Ainu Language*. Aarhus: Aarhus University Press, Denmark.
- Shibatani, Masayoshi (1990) *The languages of Japan*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Tamura, Suzuko (1970) Personal Affixes in the Saru Dialect of Ainu. in Jakobson, In Roman and S. Kawamoto (eds.). *Studies in General and Oriental Linguistics*, presented by Hattori Shiro, 577-611. Tokyo: TEC Company Ltd. (再録 : (2001) 『アイヌ語考④』206-240. ゆまに書房.)
- Utan, Russell (1978) Some General Characteristics of Interrogative Systems. In Greenberg, Joseph H. (eds.). *Universals of Human Laguage*, 4: 211-248, Stanford: Stanford University Press.